

NOVA

The Fleeting Grace of the Dangerous Method

ノヴァ

R18

原作沿いの一千。一巻から八十五巻くらいまでのストーリー、エピソードに沿った幻覚強めの話です。Pixivに掲載している四篇を手直しし、あらたに書き下ろした一篇を収録しています。一歩から他のキャラクター（久美さんと宮田くん）に矢印が出ていますが成立？しているカップリングとしては一千だけのつもりで書いています。

※この作品は**個人による二次創作**です。原作に描かれていない部分を著しく捏造しています。

※冒頭一話目の作品には同意のない性行為などの**性暴力の描写**がありますので、閲覧される前にご一考いただけたら幸いです。その他の話もすべて暴力表現や露骨な性表現のある成人向け作品ですのでご注意ください。

※このファイル、一部あるいは全部のテキストをコピーペーストしての**無断転載**、有償・無償にかかわらずこの作品の一部あるいは全部のページを**無断で出力したもの**を配布する行為、カップリング二次創作をご存じない原作ファンの方、**未成年者に見せる行為**はご遠慮ください。

成人向け作品のため、十八歳未満の方のダウンロード・閲覧をかく禁じます。

もくじ

1 禍福 ……初出 二〇二二年十一月

2 誓願 ……初出 二〇二二年一月

番外編① 賜物 ……初出 二〇二二年十二月

因業 ……初出 二〇二二年一月

3 新星 ……書き下ろし

番外編② 半身 ……初出 二〇二二年二月

禍 福

Absurd Encounter with Fear

十二歳の誕生日を何日か過ぎたころの、中学のあの真っ黒な制服を着るようになる前の、周りも自分も奇妙に変貌しつつある中の、乾いて暑い初夏のある日から、何度も繰り返して見る夢がある。

いつものように誰かに「助けて」と言われて飛び出していき、駆けつけた先に大嵐が吹き荒れている。嵐は暴虐で果てがなく、人間など恐れず、かといって喜んで人を食らおうとするわけでもない。だからこそ恐ろしくて仕方がない。こんなものに立ち向かえば死ぬと分かる。それなのに夢の中の自分は逃げようとはせず、狂喜しながら暴れ狂う風雨に突っかかっていく。制止する声はどこからも聞こえない。ブレーキなど元からないのだ。

そのまま死へと一直線に駆け続け、手応えも後悔も何もないまま自分がぐちゃぐちゃに潰れて霧消する。死の瞬間はむしろがゆいほど気持ちよくて、頭が弾けたようになる。そして目が覚めて全身汗だくの自分を感じた瞬間、ようやくその快楽の源が何であったかを知り、虚脱感で十分は起き上がれなくなる。そこまでがすべてひと繋がりのお出来事だ。

覚えたてのころはその夢が楽しみで仕方なかった。うすうすいけないことだと気づいてはいたが、夢の中での死はやみつきになるほど強烈な快感だった。

もちろん現実では死にたいと思ったことなんて一度もない。毎日楽しくて仕方がない、なんてことはありえなくても、祖母に守られて育った自分には死に値する不幸などひとつもなかった。

なににあんなに死の夢に魅せられていたのは、それが欲と快を伴っていたからだ。もう少しして恋の味を知るようになる前までは、夢の中での自分の死こそが衝動のような性欲を充足する唯一の手段だった。

そこから先は夢を楽しみにする気持ちこそ薄れたが、自分自身に起こる現象は変わらなかった。それどころかボクシングを知ってからはもっとひどくなった。試合前だけは、と必死に祈っても無駄だった。夢ごときに無駄打ちさせられて、減量のさなかでも大事に取っておいた体力を奪われて、あとに残ったのは何が何でも自分が「殺る」側になる、という煮え返るような怒りだけだった。

なぜ死が快楽を呼び起こすのか、いい大人になった今でも分からない。これほど誇り高く暴力を振るってきた自分が、なぜみじめに死ぬことを気持ちいいなど感じなければならぬのか。

逆ならまだ分かる。このまま殴り続けたら相手を殺してしまうかもしれない、と思ったことは何度もある。殴るのは単に人助けのためであって殺すことが目的なわけではないのだが、ついではいえもし殺してしまったら、きつとたくさんの人を不幸にするだろう。たくさんの方の人生を変えてしまうだろう。

それでも恐れはない。かといってぞくぞくするような喜びもない。事故と同じで、「当たり前」が悪かったんやな」で終わりだ。実際、人は驚くほどあっけなく死ぬ。父や母

のように。

しかし、自分自身の死はそうではない。恐怖がある。歓喜もある。思うがまま拳を振っているはずの千堂の存在意義をかき乱すほどの後ろめたい暗い欲望がある。

とはいってもただ死ぬだけのことが面白いわけではないのだ。大嵐に一人立ち向かうことにこそ意味がある。そしてこのまま抗い続けていたら死ぬかもしれない、と思ったとたん、あまりの喜びに目の前が真っ白になる。あの死の夢が単純な快楽だったころのことを思い出し、このまま死んでもいいとさえ思ってしまう。

千堂武士は幼児のころから人懐こいと同時に頑固、かつ極度に暴力的な人間で、学校でも地域でも常に問題児扱いされてきた。

「明るくて元気でええ子やねえ」とにこにこ迎えてくれていた人たちが突然豹変し、「あの子、両親がおらんのやて」「やっぱりなあ。そういうところで育ちの違えて出るもんや」と陰口を叩いているところを何度も目撃した。

普通の家庭の子ではないから、手をかけられていないおばあちゃん子だから、愛情不足だから、不幸だから、まともな人との関わりを知らないから、だからあいさつ代わりに人を殴るのだ、と。

そんな風にいつもいい加減に納得されてしまうから、なぜ手を出したのかを必死に説明しても大人たちは聞いてもくれない。正しさのありかを探そうともしてくれない。悔しくて悔しくて泣きじゃくる千堂の頭をたしなめるように撫でる祖母の小さな手をよく覚えて
いる。

他人の言うことに傷つかんでええ。けど、他人の痛みに傷つかんような人間にはな
らあかんで。それが分かるくらい強いなれ。優しい人間になれ。強さも優しさも、自分の
力で体張って見つけるんや。

体が大きくなるにつれ悔しくても悲しくても寂しくても泣けなくなって、代わりに黙る
ことが増えた。誰からも好かれた「明るくてひょうきんでおしゃべりな武士くん」はこの
ころすっかりなりをひそめ、しばらくの間戻ってこなかった。

やがてただの沈黙にも限界がきて、人前から姿を消すことを覚えた。その場にいなけれ
ば言葉を発する必要もない。学校にいたところで同級生たちと笑い合ったり悲しみ合っ
たり、同じ感動を共有したり不満をぶつけ合ったりすることに何らかの楽しみが見出せるわ
けでもなかった。千堂がコミュニケーションの道具として使える言語は暴力だけで、拳を
介したやり取りが意味をなす場にしかいらなかった。

誰かといがみ合うことそのものが好きだったわけではない。力は他人を助けるためのものだ。自分のなりの理想を示すためのものだ。祖母の言う通りに、父のようになるためのものだ。

他人に共感や寛容を表現するときでさえ、それは常に暴力で記述された。そのあたりのこと何も知らない他人が呑み込もうとすると、ただ一言「ケンカ好きのやんちゃ坊主だから」になってしまう。

腹が立つほど雑な理解だが、確かにそれはあまり「普通」ではない。何度人助けをしようと優しいと思われることだってない。ボクサーになる前もおそらく今もずっとそんな調子だから、大事な祖母を何度泣かせても呆れさせても普通の優しい男にはなれなかった。それでも全然かまわなかった。自分にとつての強さは自力で、体を張って探さねばならない。他人に怖がられることや過度に暴力的なことは教室や社会の中ではマイナスかもしれないが、リングの中ではプラスになった。あの狭いリングの中でさえ自由に生きられたらあとはもうどうでもよかった。

外野の言うことなどもう耳には入らない。暴れて暴れて暴れて暴れまくって、ようやくたどり着いた大嵐の中に飛び込んで思うがまま拳を振るうことができればそれだけでいいのだ。もがきながらも自力で嵐をねじ伏せられたら、ようやく一息つけることだろう。きつとそのときにこそ自分の生き方を肯定できる。

だが、それができなかったら？大すぎる力に打ち負かされて、立ち上がれなくなつて、暴力という言葉が使えなくなつて、完全に自分が無価値な存在になり果てたら？それを思うとぞくりとする。ただ怖いというだけではない。死への衝動をまとつた畏れだ。一度取りつかれたら頭から離れなくなつてしまうもの。夢で見た「死」そのもの。

千堂がそれを初めてリアルに想像し、自分の身に起こることとして本気で捉え始めたのは、とある映像を見たときからだつた。

トレーナーの柳岡の字で「東日本新人王決勝」と殴り書かれたテープに映っていたのは、文字通り大嵐だつた。風雨に耐えるべく作られた堅牢な建物を理不尽にも呑み込んで破壊しようとする巨大な竜巻。そんなものを見たことはなかった。今までボクサーとして対峙してきた相手は嵐どころかそよ風で、柔らかな微風の中に手を突っ込んだだけでみな倒れていった。

相手を壊したことに後悔はない。かといって喜びもない。まあしゃあない、当たり前どころが悪かつたんや、と思っただけだつた。そんな人々にとっては千堂こそが危険な嵐であり、出会ったら逃げねばならない理不尽な恐怖であり、立ち向かうなどと考へてはならないものだつたろう。

しかしビデオの中の人物は違つた。彼の拳は災厄そのものだつた。当たりどころを間違つたらと思うとぞつとする。よくて失神、悪くすると死ぬのではないか。

それを頭に思い描いたとき、あの死の夢が雷のように全身を貫いた。自分の敗北と死をありありと思い描いたのは生まれて初めてだった。知らず知らずのうちに呼吸が浅くなっている、夢の果てにある快楽を思い出しそうになって両拳をぎゅうと握って耐えた。

生々しい「死」の想像は強烈だった。空想上の恋人が血と肉を伴って目の前に現れたような、あるいはひそかに恐れていたホラー映画の怪物が急に現実世界に出現して襲いかかってきたかのような感覚で、驚きと既視感がないまぜになって恐怖と欲望を責め立ててきた。身震いを我慢するのが辛かった。ここがジムでなかったら夢を見ているときと同じように苦しくあえぎながら射精してしまっていたかもしれない。

一秒たりとも見逃すまいと凝視しているうちに試合は終わり、腫れかかったまぶたからのぞく人のよさそうな大きな目が歓喜に満ちあふれる様子が映し出された。はっとしてテロップに視線をやると、そこには試合結果とともにひとつの名前が記されていた。

フェザー級優勝・幕之内一步（鴨川ジム 東京都出身 十八歳）

どっと力が抜けてソファに沈み込み、ビデオを一時停止する。どれほど強大な災いでも人である以上名前はあつた。人格もある。その人なりの歴史もある。常に人に恐れられてきた千堂にも秘密と弱みがあるのと同じように。

幕之内一歩という名の嵐は千堂よりひとつ年下で、ボクシングになどとうてい向いていないタイプの顔立ちをしていた。小柄で、見るからに普通そうで、優しそうで、昔カツアゲに遭って泣いて千堂に助けを求めてきた同級生たちよりもさらに気弱そうな男だった。ケンカや抗争どころか、制服を着崩しもせず真面目に授業を受けている姿しか思い浮かばない。なのに彼はVHSテープの不鮮明な映像だけで、ただの一度も負けたことのない千堂に、これ以上なく凶悪な死と敗北のイメージを植えつけた。

恋する人のように目を閉じ、まぶたの裏にあの嵐を思い描く。当たりどころが悪ければ死にかねない右拳が自分の頭部を直撃するところを想像する。もちろん空想の中でもガードは上げているし、精一杯避けようと頭を振り、隙あらばから空きの右頬にがつんと重い左を食らわせる準備だっている。

こっちだって当たれば一発で倒せる拳を持っているのだ。こんな災厄と夢中で戦っているら、力加減を誤って殺してしまってもおかしくない。まあそれならそれでもいい。勝ちには変わりない。今までで一番の嵐をねじ伏せ、大歓声の中で両拳を振り上げるところを想像すると笑みさえ浮かぶ。ああ、そうだ、それが一番だ。それ以上はない。分かっている。分かっているのに、どうしても彼に打ち負かされるイメージを、その恐怖を、その暗い情欲を、その快楽を振り払えない。

かっと目を見開いてソファから立ち上がり、ブラインドを下ろして部屋の明かりを消す。

そしてテープを巻き戻してもう一度最初から再生を始める。彼の戦いぶりを見ていると、自分の勝利のイメージと死のイメージが繰り返し交互に浮かんでくる。「勝つ」と思うたびにやりと笑い、「殺される」と思うたび吐き出す息が熱くなる。試合が終わってしまうともう一回。そして同じことを十回を繰り返したころ、しびれを切らした柳岡が扉を開けて現れた。「何やっとなねん、サボっとらんで練習せえ」という呆れを含んだ声が聞こえてもなお、画面を凝視することがやめられなかった。

その日からだ。千堂武士が自分の死を、屈辱を、そのもつとも後ろ暗い欲望をただ一人の人に押しつけるようになったのは。

＊

千堂の部屋には暖房がない。以前、石油ストーブの扱いを間違って火事を起こしかけたことがあるので置かないようにしている。そこかしこに燃えそうなものが散乱していなければもう一度チャレンジしようと思ったかもしれないが、ストーブを置くただけに部屋

を片付けるのは何だか癪だからそのままにした。おかげで冬は毎日が南極である。寒ないんか、と祖母に聞かれるたびに「何ともないわい」と笑って答えていたが、本当は寒かった。あまり寒いから、自室に居るときはいつも布団にくるまって耐えていた。

プロボクサーになってからはさらに寒さが骨身に染みるようになった。減量の影響だろう。いつも体の中身がむき出しにされているような感じがして、分厚いものに覆われていないと眠れない。水分が抜けて無防備になった肉体を脳が守ろうとしているのか、単に神経が昂っているだけなのかは分からないが、試合が決まって減量が始まると夜は決まって芋虫になる。かといって終わったら真人間に戻れるというわけではなく、体重が戻っても手ごわい相手を殴り倒しても寒さだけはあまり変わらない。

それでも今までは、試合が終わればそこそこの気分にはなれた。どれほどつまらない内容でも勝ってはいたからだ。だが今は違う。満を持して全日本新人王決定戦のリングに立ち、勝ち負けの二元論すら存在しない真っ白な世界へ追いやられ、そしてむざむざ戻ってきて、様々な人に慰められ、治療を受け、帰宅して死んだように眠りこけ、記憶も感情も整理できないまま、また寒い部屋でがっちりと布団にくるまっている。

自室の冷氣の中で目を開けると、案の定下着の中がじっとり湿っていた。理由は分かっていた。正体もなく眠っている間自分が死ぬ夢を何度も見て、神経が焼き切れそうなどほど強烈な快楽を味わい続けていたせいだ。ずいぶん長く目覚めなかったようだし、きっと何

度も射精してしまったのだろう。

十二歳のころからこうだから恥じる気持ちは特になかった。それに今回は特別だ。現実世界で本当に負けて、本当に死んだ。意識をなくすことを死ぬとは言わないかもしれないが、千堂の中では自分は一度死んでも同然だった。あのビデオを見て予期し、恐れた通りのことが起きた。万全以上の状態で挑んだのに、相手は負傷を抱えていたのに、絶対に勝つつもりだったのに、やはりこうなってしまった。あの嵐に吞まれても祖母の元に戻ってこられたのはむしろ幸運だったのかもしれない。

怒りよりも恥よりも、戸惑いを強く感じていた。記憶が飛んでしまっているから、「試合のことを思い出すと悔しい」という気持ちはまだ自分のものにならない。試合中、スイッチを切り替えられたかのように目の前が真っ赤になって自分が霧消し、次にまぶたを開けたときには蛍光灯の薄暗い光と柳岡の心配そうな顔が見えた。それだけだ。わけも分からず急に死んで蘇った、という感覚だけがある。

もちろん柳岡は敗北の詳細をいっさい省略せずに話してくれた。意識がのうなっても声援に応えて手え出しとったんやで、最後までよう戦ったな千堂、と最後に絞り出すようにこぼした言葉をよく覚えてる。柳岡は負けた選手を慰めるためにお世辞を言うことなど絶対にしない。だから「よう戦った」というのは彼の本心からの感想なのだろう。誰よりも自分を知る人にそんな風に言われたのだから誇らしく思うべきなのに、実感がわかない。

負けて悔しいはずなのにはっきりと自覚がない。あるのは死の手応えだけだ。思春期に入りたてのころから夢の中で味わってきた「死」の現実を思い知った。ただそれだけ。

思った通り、幕之内一步は千堂にとって最高の相手で、そして同時に最悪に危険な存在だった。生きる実感と使命と震えるような喜びを与え、そして同時に負け知らずだった高慢な自分を地に叩き落とし、打ち負かし、屈服させ、粉々に砕いて殺した。それを幕之内本人が聞いたら真っ青になって「物騒すぎますよ」とあわてるだろう。毎日練習してきたことが実を結んだだけです、千堂さんを殺したつもりなんてありません、と。

そんな風に言えるのは、彼が普通に優しい男だからだ。自らの凶悪な拳をただの暴力装置だとは思っていないからだ。リングの外で振るう暴力の粗野な味を知ってしまったら、彼だってもう「殺すつもりはなかった」なんて思えなくなるだろう。

プロスポーツの厳格な枠で守られたボクシングだって例外ではない。当たりどころが悪ければ死にかねない。もし千堂が彼を殺してしまっても、まあしゃあない、ごつつう強い奴やったし、手加減でけへんかったんや、で終わる。

だが幕之内一步はそうではない。本当に千堂を殺していたら取り乱すだろう。峻厳な顔でジムや遺族に謝りに来るだろう。それどころかグローブを置きかねないのではないかと、思うほどに心優しい男だ。そんな「普通」の人間に、暴力を言語としていない人間に、記憶をなくすまで殴られて負けた。

失神K O、という屈辱的な言葉がそのときようやく頭に浮かんだ。

日本一になるつもりだった。ロッキー・マルシアノのごとく、引き分けなしの無敗でキャリアを終える気でいた。強い相手と殴り殴られて勝つ、を生涯続ける予定だった。なのにこんなに危険な負け方をさせられた。

やっと明確な悔しさがわき上がってきて、布団から起き上がって畳の床を拳でどん、と叩く。

いつまでぼうっとしているつもりだ。自分はあの男に負けたのだ。地元で、大勢のファンの前で、これ以上ない恥をかかされて負けた。あまりの不名誉に体の芯から震えがくる。しかし意識の片隅では激烈な死の快楽を反芻し続けている。股間が熱くなっている。打ち負かされたのに、死ぬような目に遭わされたのに、我慢できないほど興奮している。そのことが腹立たしくて仕方ない。

死の夢の中で快楽を味わったことは数えきれないほどあったが、それを思い浮かべて自慰をするのは初めてだった。自分の醜態を直視しなくていいように布団にもぐり込み、べたべたに汚れた下着に手を突っ込んでできるだけ早く済ませられるよう目を閉じる。朝の光のせいで薄い肉と血管が透けたまぶたの内側は赤黒く、命そのもののようにどくんどくんと脈打っていた。

せめて自慰の最中は何も思い出さなかったのに、やはり頭に浮かぶのはあの嵐の

ことだった。お互いに一発一発が意識を奪う重さだったから、この男とはきつとどこまでもいっても死の押しつけ合いにしかならないと確信していた。

それは千堂が十二歳のころから一番欲しかったものでもあった。暴力が自分の持つ唯一の表現手段となったときから憧れ、望み、夢見ていた。人に優しく触れることがかなわないこの手が誰かに何かを与えられるとすれば、それは痛みであり、恥辱であり、究極的には「死」になるだろう。暴力がコミュニケーションの手段であるなら、与えたものは必ず自分に返ってくる。剣呑な死のやり取りは千堂にとっての愛の睦み合いだ。だから、これも愛の行為なのだ、きつと。普通ではないだろうが、おかしいことではない。自分の変態ではない。と思う。たぶん。

声が抑えられなくて枕に顔を思い切り押しつけ、本能的に腰を揺すりながら射精する。打ちのめされるような快楽の余韻が虚無感をかき消し、しばらくの間身動きもできなかった。気持ちよかった、と素直に思った。自慰で頭が真っ白になったのは初めてだ。特別なことをしたわけでもないし、試合前にも夢を見たから溜まっていたわけでもない。もちろん性的な目で彼を見ていたわけでもない。そんなつもりは全然ない。

しかしどこまでも「普通」な幕之内一步は、自分との試合の記憶がこんなことに使われたと知ったら驚くだろう。きつと嫌な気分にもなる。千堂さんにとってボクシングってそういう……?とでもいうような軽蔑の目で見られるに違いない。それだけは絶対に嫌だっ

た。誰にどう思われても、彼にだけはボクサーとして恐れられていたかった。一目置かれていたかった。たとえ負かされても、失神させられても、殺されそうになっても。

もはや取り繕うこともできないほど汚れた下着と服を替え、窓を開けて精液くさい空気を入れ替え、じっとり湿った布団を干してから風呂に入る。シャワーなどという気の利いたものはないので浴槽に貯められたままの冷水で体を洗った。二月に。ショック死しそうなほど冷たいが、清潔になれてさっぱりした気分になりさえすれば水温などどうでもよかった。

身支度を終えて店先に姿を見せると、祖母は軽くこちらを振り向いて「腹減ったやろ」と声をかけてきた。あくまでいつも通りの、何でもない口調だった。対戦相手に気絶までさせられておめおめ家に戻ってきた孫を責める気も慰める気もないらしい。幼いころから、祖母のこういう一貫した態度に何度も救われている。

「お前が寝とる間、子供らが何度も様子見に来とったで。ロッキーはまだ起きひんのか、て」「何度も……?」ワイは何日寝とったんや」

茶漬けをかき込む手を止め、畳の上に無造作に置かれている朝刊に目をやる。日付を見てぎょっとした。あの夜から二日以上経っている。

「何で起こしてくれへんのや。二日も走りそになったわ」

「起きられへんほど疲れとんのに走るアホおるかいな。せやけど起きたんならぼおとし

とる暇ないで。早よ病院行って、結果をジムに知らせなあかんのやて。ついでに柳岡さんにもきっちり礼言うとき」

「柳岡はんも来たんか？」

「何や、おぼえてないんか。お前を連れて帰ってきて、しばらく枕元で様子見てくれはったんやで」

口元についた飯粒を親指で拭いながら必死で記憶をたどる。

まったくおぼえていない。控室で意識を取り戻したことは記憶にあるのに、どうやって家にたどり着いたのかは忘れている。

よほどダメージが深刻だったのだろう。千堂の飽くなき暴力人生の中でも、これほど深く他人を痛めつけたことはない。ほんまたいした奴やったんやなああの男は、とついこぼしそうになってあわてて顔をしかめて否定する。感心している場合ではない。いつかこの痛みを百倍にして返さないと気が済まない。あの純朴そうな顔を恐怖で歪ませ、屈辱で眠れなくしてやらなければこの先胸を張って生きられない。

「食い終わったらちよう出てくるで。ジムにも寄るさかい、先飯食うとってや」

「あんまり無理するんやないで」

祖母のため息混じりの声と同時に茶碗を持って勢いよく立ち上がる。

無理をしない方が無理だ。おめおめと負け帰ってきて無為にじっとしてなどいられない。

まだるっこしい精密検査などさっさと終えて柳岡をつかまえて一刻も早く幕之内一步に報復するプランを練らなければならない。明日にでも再戦したいがまた負けてしまうようなことがあるれば悔しさは倍以上になるだろう。これ以上の恥辱を味わわされたら最悪憤死するかもしれない。二度も負ければ逆にすべてをあきらめて人が変わってしまうだろうか。想像もつかない。もはや未知の領域だ。

飛び出すようにして家を出て、まずは近所にある病院に駆け込む。スタッフを急かしながら検査を済ませ、「異常はないがしばらくは安静にしているように」という医者がありがたいお節介を頭の片隅に追いやってよろよろ走ってジムまで行く。

情けなく息を切らせながら扉を開けるとそこにはちょうどよく柳岡がいて、ミットを持って練習生の下手くそなパンチを受けているところだった。こっちが声を発するより先にざわめきが起き、次の瞬間には「何やっとなねん千堂!」という柳岡の甲高い叱責が聞こえてきた。

「しばらく家で休んどれ言うたやないか。会長にも一ヶ月はジムに顔出すなてキツク言われたやろが!」

「すまんがおぼえとらん。せやけど検査はパスしたさかい、付き合うてや。やりたいことがあるんや」

「やりたいこと? また鴨川さんとか乗り込んで幕之内に因縁つける気いかいな?」

「アホか、そないなガキくさいことするかいな。作戦会議や。あんたがおらんとでけへんやろが」

洪々リングから下りてきた柳岡からミットを奪い取り、練習生の間を通り抜けて奥の部屋へ入って明かりをつける。

幕之内の試合映像を繰り返し見続けた部屋だ。ビデオにのめり込んでいる様子が異様だったためか誰も近寄らず、ほとんど千堂が占有していた時期もあったが、基本的には応接室兼会議室兼記録室である。柳岡は仕方なさそうにため息をつき、彼自身の字で「全本新人王決定戦」と書かれた真新しいテープを棚から取り出した。

「どうしても言うならしゃあないが、見るのは正直まだ早いと思うで」

「何でや。見るどころかワイは自分の身であいつのパンチを味わってんねんで。早いことあるかいな」

「まだ心の整理ができとらんやろ。記憶が途切れとるいうことは、これ見て初めて知ることもあることや。見るにはそういうもんを全部受け入れる覚悟が必要やで」

かっとなって顔を上げる。丸きり子供扱いで腹立たしい。

「目が覚めて色々考えとったら悔しゅうなって飛び出してきたんやろけどな、まだお前は混乱しとる状態や。焦ったらあかん。初めての負けを受け入れて立ち直るには時間がかかんねん。今日のところはおとなしゅう帰って寝た方がええと思うで」

「そんなん要らんわ」

何が、と聞かれると思っていたのに、柳岡は何も言わなかった。彼の表情から要らないもの、つまり「気遣い」と「心配」と「いたわり」がずっとが消える。そして千堂が望む通りの、いつもの冷静な策士の顔になる。柳岡のこういうところが好きだ。頭がいいから話が早い、というだけではない。彼はいつも千堂に寄り添い、力になろうとしてくれている。「すぐやりたいんか?」

「すぐの再戦は無理や。このままやったら勝てるか分からん」

「思ったよりも冷静に自分を理解しとるやないか。とりあえずは合格やな」

柳岡は少しほっとしたように笑い、テープをデッキに突っ込む。すぐに再生が始まり、大歓声とアナウンスが聞こえてくる。テレビ中継の実況と解説がそれにかぶさり、ややあって自分と幕之内がそれぞれに入場して、試合が始まる。歓声のおかげで音は聞こえないが、体感した通りに激しい打ち合いになっている。

途中までは記憶にある。ダウンもしたし、危ないと思う場面も多々あったが、これなら勝てると確信していたこともおぼえている。幕之内をマットに沈めて観衆に応える用意もできていた。だが千堂の意識を奪った側頭部への右は、こうして他人事のように映像で見ているもぞっとするほどに「死」の衝撃を感じた。両手をぎゅうと握りしめ、背を丸めて衝動をやり過ぎさなければならぬほどだった。

それでもビデオの中の自分は気を失っているとは思えないほどに的確に手を出している。大波のような歓声と、幼いころから暴力を母国語として身につけていたおかげだろう。そこまでしても死の匂いはなお濃く、幕之内をロープに追い詰めていても薄れず、コーナーで目を開けたまま失神している千堂が画面に映された瞬間、試合終了のゴングが鳴ったときに絶頂を迎える。

これほど壮絶な死はきつと映画の中にだってそうはない。改めて実感する。自分は大嵐に立ち向かって敗北して霧消し、ついに戻ってこられなかったのだ。十二歳のころから恐れ、夢見ていた通りに。

「と、まあ、こういうわけや。反省点は山ほどあるが、力負けしたわけやないと思うで。胸を張ってええ」

「……そうは思えん」

息が荒くなっていることを悟られないように唇を嚙む。あれだけ出した後なのに、人前なのに、視界が真っ赤になるほど興奮している。柳岡は千堂のその様子を別の意味で捉えたらしく、慰めるように小さくため息をついた。

「試合前からそうやったが、妙に殊勝な態度やな。そないに勝ちたかったんか。再戦したいうんも本気なんやな」

「当たり前やろが！ 地元でここまでされたんや、百倍にして返さな気が済まんわ」

「そのつもりなら時間がかかんで。相応の努力もせなあかん」

打って変わったようなその厳しい声で我に返る。

「お前はまだ原石や。これからいくらでも化けられる。そのためのプランも考えとる。あととは、お前自身の意識の問題や」

顔を上げるとビデオはすでに次の試合を映していて、観客も実況もさっきのことなどすでに忘れて新たな戦いを楽しんでいるように見えた。目を引くものなど特になく試合だ。技術の応酬が続いているだけで感動も興奮もしない。

なのに、うらやましくて仕方がなかった。

リングに立ちたい。今すぐに行きたい。幕之内一步を連れて。

ボクシングを始めるまではすべてがシンプルだった。どつきたいと思ったら直接会いに行けばいいだけだった。だがあのリングの中で人間を殴りたかったら、気が遠くなるほどの準備と練習と努力が必要になる。勝てるようになるまで何年かかるかも分からない。

それでも行きたい。面倒だとか時間がかかるとか、そんなことは知らない。全然関係ない。あの男に会いたい。ただそれだけだ。

「ヤツに勝ちたいなら死ぬほど努力せえ、いうことやな？」

軽く息をついて柳岡に視線を移す。

「誰にもの言うもんね。あんたが思う百倍やったるわ」

「ほお、ええ心がけやないか。まずは死ぬまで走らせた。覚悟せえよ。最後には必ずお前を勝たせたさかいな」

返事代わりに顎を引き、左の探り合いも点数も歓声も映像も音も意味をなさなくなった画面を強い目でにらみつける。もはやテレビは白と黒と赤の集合体にしか見えない。早くあの男を屈服させてやりたくて仕方なかった。下から突き上げてくるようなあのまっすくな目から光を奪ってやりたくて、もうそのことしか考えられない。

雪辱の色は白だ。会場のライトの白。試合後に向けられるカメラのフラッシュの白。だが屈辱は黒だ。死の色は赤。赤コーナーの赤。血の赤。千堂が一番好きな色。

*

それからすぐに春が来て、暑い夏がやってきて、ロードワーク焼けの跡が消えないうちにまた冬が来た。寒くなると減量のたびに骨がきしんだ。一度敗北を経験したせいか何人殴り倒してもいい気分にはなれなかったが、その代わり現実で「死」を味わうことはまったくなかった。

そして自室の寒さに耐えているうちに今度は春が来て、勝った実感もないままにベルトを巻くことになった。対戦相手は知りうる限り一番強く、激しく、自分に厳しく、尊敬のできるボクサーだった。名はヴォルグ・ザンギエフ。彼を上回った手応えなどなかった。気力だけで最後まで戦っていられたようなものだ。のちに柳岡にすら「ほとんど負けとったわ」と渋い顔をされた。それでも殺されるとまでは思わなかった。

だがきつとスポーツとは、「ボクシング」とは、本来こういうものなのだろう。鍛えたボクサーを殴り殺せるほどのパンチがあろうとも、相手の命を奪うことを目的にしているわけではない。その拳はむやみに振り回して威圧して屈服させるためのものではない。的確に当てて気力と体力と機動力を奪い、最短でマットに沈めるためのものだ。彼の激しさと獐猛さはそのためにある。そのひとつの目的のためだけに、極限まで収斂されている。そんな気高さに触れたのは初めてだったから感嘆しないわけはなかったが、真似できそうにはなかった。

千堂はいつも無意識に相手を殺そうとしてしまう。あるいは二度と自分に歯向かえないように壊そうとする。目を合わせることすらできないように恐れさせようとする。そうして向き合った相手から伝わってくる畏怖の感情のみを糧にして戦い続けている自分は、「スポーツマン」とはほど遠い存在だろう。たとえ殺意むき出しで殴りかかっても彼はきつと殺し返してなどくれない。最大の力で襲いかかって倒そうとするだけだ。ボクサーとして

はそうあるべきだと分かっている。けれど不可能だ。どれほどなりたいと願っても、あんなに正しくはなれない。

とはいえ、勝ったことには違いない。「九十パーセント負けている」と評されても、「地元びいきのジャッジにベルトを巻かせてもらった王者」と揶揄されても、勝利を素直に喜べないどころか今すぐにでも返上してもう一度ヴォルグとベルトを賭けて再戦したいと切に願っても、王者は千堂だ。ただベルトを巻いただけで急に周りに人が増え、ファンだと言ってくれる人も増え、周囲を嗅ぎ回る記者の数も多くなった。そのおかげで学んだこともたくさんある。

試合でダメージを抱えた千堂はまたしても自室で布団にくるまって死んだように眠っていた。二十時間寝て起きてまた二十時間寝る、を何度か繰り返し、何日か経ってからようやく起き上がった。いつもの夢は見なかったから、以前と違って心身ともに普通だった。モヤモヤした気持ちとは裏腹の、すっきりした目覚めだったと言ってもいい。なのに起き上がったとたんがやがやとした喧騒が耳に入り、思わず舌打ちをした。

店の客ではないだろう。子供の声ではない。責め立てるような調子の声が混じっているところからすると、おそらくマスコミだ。

仕方なく服を着替え、身支度を整えてから店先へ出る。ずっと眠っていたせいか視界がぼんやりしていて、そのぶん光もまぶしい。それでも狭い店先に大の男が五人も集まって

祖母を取り囲んでいるのはすぐに分かる。

「そんなんワテに言われても知らんわ。武士はまだ寝とるて何度言うたら分かんねん。毎日朝からそないに集まられたらこっちは商売上がったやで」

「せやけどあれからもう何日も経ってるんですよ。試合後も判定に関するコメントはもらえませんでしたし……。あ、チャンピオン！」

手帳を片手に持っている若い男が声を張り上げると同時に、祖母が驚いたように振り向いた。

「何や武士、もう起きてええんか？ 具合はどういや」

「ふん、眠いから寝とっただけでダメーシなんぞないわい。ワイは勝っとるんやからな。それよりも何なんや、これは。朝っぱらから人ん家押しかけよって」

まだ痛みの取れない首を動かし、威圧するようにぐると周囲を見回しても記者たちは千堂を恐れなかった。それどころか我先にと前に出てくるから積んである商品が次々に倒れる。

「千堂選手、先日のタイトルマッチについて少々お話を。ジャッジの採点基準が不明確だとの声がありますがどうです？」

「不正はあったと思いますか？」

「何か一言言ってくださいよ。答える義務があるでしょう？」

思い切りにらみをきかせてやりたかった。この手の外野には襟首をつかんで脅すのが千堂のスタイルだったはずだ。しかし王者になったばかりの自分が記者相手にそんなことをしたら、死ぬ気で奪い取ったベルトの価値に傷がつくからできない。

プロボクサーで続けたいなら責任を負え、というのは柳岡の言だ。大きな力を得た人間には、常に大きな責任が伴う。ボクサーはリングの外では暴力以外の言語で人と接しなければならぬ。

人前に立つ職業なのだから人にどう見られているかを自覚することも大事だ。こうやって不愉快な態度で詰め寄られても嫌な顔をしてはならない。毅然と応対する、あるいは胸を張って勝利を誇る、もし悔しいならそれを率直に言葉で表現する、あるいは勝者らしい態度で対戦相手の強さを称えて今後の健闘を祈る。そのどれでもいい。そのうちのどれかを実行すれば、「責任」を果たせる。

すう、と息を吸い込み、笑顔を作る。

「わざわざ来てもろてすまんけどな、取材なら明日にしてくれへんか。起きたばかりで頭ぼーっとしてるさかい、まだおもしろいこと言えへんねん。ワイがつまらんこと言うた、って新聞に載ってしもたら困るわあ。ファンが減ってまうやろ？」

わはは、と笑い声がわき上がり、場が一気にゆるんだ。千堂が少しおどけただけで記者

たちは以前からの知り合いであったがごく笑顔を見せ、「いやあ、先日はお疲れさまでしたわ」「ほんまおめでとうございますー」「ええ試合でしたよ」「連続防衛期待してまっせ」などと口々に言い始める。

いつものことだ。脅せば皆恐れてひれ伏すが、笑わせれば皆に愛され、味方が増える。おかげで記者が一人、また一人と去り始め、祖母に頭を下げて店を出ようとしていた最後の一人は、千堂が背を向けかけると突然素っ頓狂な調子で「そういえば」と漏らした。「対戦相手のヴォルグ・ザンギエフ選手ですけどね、負けが立て込んだんで、どうやらジムとの契約切られるらしいんですわ」

「……何やて？」

鋭い声に気圧されたのか、スポーツ紙の若い記者は言いづらそうに頭を掻いた。

「東京からそういう噂が伝わって来とるようです。早ければトレーナーともども今週にもロシアに帰国させられるとか」

「ちょっと待てや」

「な、何です？」

笑顔も社会的責任も処世術も何もかも投げ捨てて記者の襟首をつかもうとし、思いとどまって肩に手を乗せる。ヴォルグを思い切り殴ったその右手がぶるぶると震えていた。

「ほんまの話なんやろな、それは」

「確定情報ちゃいますよ。ただ、こういうんは助っ人外人の宿命みたいなもんですし決まったようなもんかと……」

「野球は二回負けただけでチームから放り出されへんやろが。なのに何や？　ワイらは二回負けたら死ねいうことかいな？」

記者は千堂の鬼気迫る表情に怯えて固まっていたが、やがてもつれたように口を開いた。「い、いや、そんなことないですて。それにヴォルグ・ザンギエフ選手は金で買われた外国人ですから、後ろだてのある日本人ボクサーとは違、」

「もうええわ。情報、おおきに」

強くつかんでいた左肩を放り出し、くるりと背を向けて自室へ急ぐ。

畳の床に散らばっているボクシング雑誌を開いてヴォルグが在籍しているジムの名前を確認し、その辺にあったマジックで紙片に書き写す。

千堂は漢字が苦手だ。常用外や難しい字だけでなく、小学校低学年で習うような漢字さえうまく書けない。学力が足りないのはもちろんだが、極端に短気なせいもある。音が浮かぶとすぐにでも書きたくなってしまいうから漢字を思い出すのが面倒になる。

なのでメモにはこう書いた。「おとねジム」。

ちなみに千堂は平仮名も苦手で、止めも払いもはねもうまくできないので太い油性ペン

や毛筆のような墨だまりのできやすい筆記用具で書くと、大抵「わ」が「ね」に見える。

メモと財布をポケットにしまってあわただしく階下へ戻ると、祖母があたたかい茶を用意してくれていた。

「起きたいことはすぐ病院行くんやろ？ その前に腹に何か入れとった方がええで」

「病院はまだ行かれへん。飯も途中で食うさかい、今はええ」

「ならどこ行くん？ ジムか？ 先に検査受けとちゃんと柳岡さんに怒られるで」

「分かっとるわ。柳岡はんには東京から戻ったら検査受ける言うといてや」

急いで靴を履きながらさりとそう答えると、祖母は大げさにため息をついた。

「そないにフラフラしたまま東京行くんかいな。やめとき。途中で倒れても知らんで」

「心配要らんわ。ほな！」

返事もどかしく駆け出していくと、祖母の言う通り自分が少しふらついていることに気づいた。足元が何だかふわふわしていて、体の軸がずれているかのような感覚だ。顔の腫れは眠っている間に引いたが脳や筋肉にかかった負担はまだ消えていないのだろう。だが以前幕之内と戦ったほど致命的なダメージはない。倒されるかもしれないと思ったが、殺されるとまでは思わなかった。この妙なフットワークの軽さは、そのあたりに原因があるような気がする。

記者からの不正確な情報と財布とメモ以外何も持たずに新幹線に乗り込み、自由席の片隅で眠り込んでいたらしいの間にか東京駅に着いていた。

寝起き状態のままホームに下り、ごきごきと首を鳴らしながら構内の新幹線改札を出る。そのまま在来線に乗り換えようとしたとき、ようやく大事なことに気がついた。

ヴォルグが所属しているジムの場所が分からない。家で書き写してきたのは名前だけだ。そもそも雑誌にはジムの住所など書いてなかったかもしれない。たとえ住所が分かっても東京の地図も路線図も頭に入っていないからすんなりたどり着けるかどうか分からない。

千堂は頭を抱えてうなりながらその場にしゃがみ込み、己のうかつさを呪った。あの記者にジムへの行き方を聞いておけばよかった。あるいは柳岡に聞いてから新幹線に乗ればよかった。そんな風に考えなしだからいつも行く先々で困ったことになるのだ、と祖母に言われたことを今さら思い出した。確かあれは幕之内に会いに行ったときのことだ。夜遅くになっても東京から帰らなかったから柳岡にも祖母にも心配をかけ、次の日顔に傷を作ったときに二人からきつく叱られた。

あのときも衝動的に飛び出してきたからジムへの行き方が分からずに途方に暮れていたような気がする。通行人を呼び止めまくって最後は交番に連れて行ってもらって何とかし

たが、それでは時間がかかりすぎる。

ヴォルグが解雇を言い渡されるまで猶予はほとんどないだろう。となれば、知り合いに連絡して案内してもらうのが一番早い。しかし、東京に、知り合いなんてほとんどいない。幕之内一步と鴨川ジムのボクサーたちしかない。

そこまで考えたとき、急にためらいが生まれた。幕之内はあの試合を見に来ている。きわどいジャッジで決着がついたときのヴォルグの無念そうな表情と、千堂の悔しそうな様子もその目で見ているだろう。

ある意味ヴォルグを追放した原因である自分に首を突っ込む資格などあるだろうか。もちろん千堂自身は「ある」と思っている。少なからず関わった者として、ジムに乗り込んで責任者を締め上げて脅してでもヴォルグの解雇を思いとどまらせる権利くらいはある。

だが、果たして彼はそう考えるだろうか。それが当たり前だと思ってくれるだろうか。

幕之内にどう思われるかを想像すると少しだけ怖かった。彼の前ではどこまでも恐ろしげなボクサーでいたかった。強くて威圧的で、対戦相手をどれだけ傷つけても放逐の憂き目にあわせても後悔などせず、いつでも自信満々な王者として彼の目に映っていたかった。少なくとも、もう一度ボクサーとして彼の前に立つ日まで。

「……ま、ええわ」

とりあえず幕之内に連絡して案内させるのはやめておくことにした。他の方法などいく

らでもある。

まずは駅を出て交番に駆け込み、以前と同じようにジムの名を告げて道順を教えてもらうことにする。応対してくれた制服警官は「また？ あんた前にもボクシングジムの場所を聞きに来たよねえ」とあきれたように言ったが千堂はこの警官の顔をまったく記憶していない。適当になだめすかして頼み込んでポケットにあった紙片を見せると、警官は棚から大きな台帳を取り出して名前を調べ始めた。

「おとねジム、おとねジム……ううん、ないですねえ」

「あ？ ないわけではないやろが。雑誌から写してきたんやで」

「そんなこと言われてもないんだよね。字からして子供に書かせたみたいだし、写し間違いじゃないんですか？」

「何やと!？」

思わず血管が破裂しそうになったが、ちょうどそのとき祖母と同じくらいの年の女性が入ってきたのでキレるのはやめておいた。ふん、命拾いしたのう、と心の中で言い捨てて交番を出る。

もちろん暴れるつもりなどない。プロボクサーかつ日本チャンピオンが交番でそんなことをしたら翌日には新聞に載り、テレビのワイドショーにも映り、ライセンスを剥奪されてしまうだろう。道端でのケンカなど二度とできない体になってしまった。

仕方なく外へ出て、その辺の書店に入って『ボクシングファン』の最新号を買う。家にもあるから二冊目なのだが、立ち読みなど王者のすることではないからちゃんと買う。そしていいスーツを着たビジネスマンが行き交う丸の内のだ真ん中でガラ悪くしゃがみ込み、編集部電話番号を探す。ボクシング雑誌の編集者なら各ジムの住所くらい知っているだろう。現役ボクサーである自分が聞けば行き方も快く教えてくれるはずだ。たった数日前に戦った相手のジムに行つて何をするのかと聞かれたら少し困るかもしれないが、今さら止められても止まるものではない。行くしかないしやるしかないのだ。現地に乗り込みさえすれば何とかなる。何とかしてみせる。

と、そんな風に軽く考えていたが、公衆電話で耳にした真実は想像のはるか先をいていた。

『ああ、君の対戦相手のヴォルグ選手なら、すでに解雇通知を受けて帰国が決まったよ。今日夕方のフライトで日本を発つらしい』

目の前が真っ黒になった。受話器を破壊しそうなほどに強く握りしめ、編集者相手に何か悪態をつこうとして、そんな時間すら惜しくて電話を切る。

東京駅へ向かって走り出しながら駅舎の時計を見ると、すでに午後三時半を過ぎたところだった。夕方のフライト、というからには四時から六時くらいまでの便であるはずだ。もしかしたら間に合うかもしれない。かといって何ができるわけでもない。そもそも勝者

である自分が言えることなどありはしない。顔を見せたらむしろ残酷だろう。だがそのまにはできなかった。何もできずとも、「またどつき合おうや」くらいのことは言える。千堂が彼に言いたいことはその一言だけだ。まだダメージが抜けていないのに衝動的に家を飛び出してきた理由も、ただそれだけだ。

さんざん迷いながらもどうにか成田行きに乗り、急いで下りて出発ロビーへ向かう。そしておびただしい数の出発口をしらみつぶしにするつもりで端から端まで走り抜けていく。国際線ターミナルには外国人の姿が多い。明るい髪色の男性もそこかしこで見かける。普段外国人を見慣れていないから一目見ただけで特定できる自信もない。それでも、精魂尽き果てるまで殴り合った相手を見分けられないわけではないのだ。

そのまま三十分ほどターミナルをうろうろしていたら、思わぬ人物に声をかけられた。たぶんロシア人だと思われる大男を呼び止め、『ボクシングファン』のヴォルグのページを見せて「こいつ知らんか？ 同じ国のモンならあんたと同じ飛行機とちゃうんか？」と詰め寄っていたときのことだった。男が困ったようにナインナイン、と答えているさなかに、彼は騒がしい空気を切り裂くような、しかしあくまで穏やかな声で「千堂さん？」と呼んだ。

振り向くのが怖かった。それが誰なのか、声の主が「s」の子音を発したときから分かっていた。返事をせずにいると、千堂より少し低いところにある口が「やっぱり千堂さんだ」

と独り言のような声を発した。

「……お、おう。久しぶりやな、幕之内」

さすがにもう無視し続けるわけにはいなくて、『ボクシングファン』をさっと上着の中に隠して振り返った。

そこには思った通り、幕之内一步が立っていた。

何でこの男が。何で空港なんか。

「お、お久しぶりです。ボクはこないだ一方的に見ましたけど……って、何でこんなところにいるんですか」

それはこっちのセリフや、と思ったが言わなかった。偶然などではあるまい。幕之内の目的も千堂と同じだろう。同じ時間に同じ場所にいるということは、おそらくそういうことだ。

「この間試合があったばかりなのに大阪からここまで来たんですか？　大丈夫なんですか？　まだ傷も塞がってなさそうですし、ダメージ残ってるんじゃない」

「こんなもんじゃないことないわい。それよりも何や、それは」

それ、言いながら千堂が視線を落とすと、幕之内は反射的に腕の中のものをぎゅうと強く胸に押しつけた。ぎくりとした顔だ。

「え、いや、これはその……特にお見せするようなものでは……」

「ふん、分かっとるわ。キサマもジム飛び出してきたんやろ。しっかし、いくら急いどってもグローブ持ったままっちゅうのはさすがにアホすぎるで」

ばしばしと肩を叩いても、幕之内は曖昧に笑うだけで返事をしなかった。気まずそうに黙ったまま、大事そうにグローブを抱きしめている。

それが何であるかくらい、千堂にも分かっている。それがどうして幕之内の手の中にあるのかも、だいたい察しはつく。彼の驚いたような大きな目が充血して赤くなっているし、目元にも涙の跡がある。

彼は、勝者である千堂がやりたくてもできなかったであろうことを一通りやってきた後なのだ。つまり、一人でヴォルグと別れを惜しみ、意志を継承する約束をし、涙まで流し、最後まで見送ってきた。律儀な男だと思う。グローブを渡された顛末を千堂に伝えないのもまた、彼がとことんまっすぐである証だ。

「あの、千堂さん」

「何や？」

意を決して顔を上げた幕之内は、一度下唇を噛んでから口を開いた。別れの余韻なのか、声が震えている。

「今ここにいてるってことは、千堂さんもヴォルグさんを見送りに来たんですね。全部知ってるんですね。だったら言っておかないと。実は、ヴォルグさんはもう飛行機に、」

「言わんでええわ。キサマの顔見れば分かる。最後にヴォルグをどつきそびれたいうことがな」

急いだが間に合わなかった、必死で探したが見つけれなかった、とは言わなかった。自分なりにヴォルグに別れを告げに来たなどと思われるのもごめんだった。

いま、幕之内の目には、千堂がちゃんと恐ろしく見えているだろうか。傍若無人で人の弱さや不幸など意に介さない怪物として映っているだろうか。よもや、ぎりぎりで負かした相手が不遇な目に遭ったと聞いて動揺してしまうような普通の人間だと思われてやしないだろうか。

一見自然に会話をしていても、視界はずっと真っ黒だった。頭の中もぐちゃぐちゃだった。何しろ目の前にいるのは、生まれて初めて「死」を味わわされた唯一の人間なのだ。そう思うだけでいま自分がここに理由も思考も感情も吹っ飛んでしまう。

できれば今すぐこの場で殺し返してやりたい。この男が自分の死の夢に欲情するようになるまで恐れさせてやりたい。

今まで幕之内一步に勝ちたいというだけで必死にトレーニングを重ねてきたが、王者にまでなったのだからそろそろ資格はあるはずだ。リングの上で相對するところを想像すると興奮して視界が白く赤く染まっていく。息が荒くなっていく。

「千堂さん？ 大丈夫ですか？」

そのいぶかしげな声で我に返ると、上着の下でこっそり脇に挟んでいた雑誌がぼさりと床に落ちた。拾い上げようとしてかがみ込んだとたん、傷んだままの太ももと背中が悲鳴をあげる。しかし彼にだけは絶対に悟られたくないので涼しい顔で起き上がる。

「藤井さんに電話もらってすぐ飛び出してきちゃったボクが言うことじゃないですけど、ちゃんと休んだ方がいいんじゃないでしょうか。あんなに激しい試合の後ですし、まだダメージもあるみたいですし……」

「キサマに言われんでも分かっとるわ。これから予定が詰まっとるさかい、休めるうちに休んどかなあかんからのう」

「予定って、もう防衛戦ですか？ うわあ、いつやるんですか？」

幕之内が露骨に目を輝かせたのを見てがっくりきた。

この男はいったい何なんだ。自分だって初めての敗北を経験したばかりなのに、自分が獲るはずだったタイトルを目の前で千堂にかっさらわれたというのに、まるで他人事のような態度だ。

ボクは危険な人間じゃないんです、害意はないんです、とでも言いたげな、へりくだった子犬のような目。普通すぎ、優しすぎ、祖母が幼かった千堂に望んだ人物像はきつとこんなだったのだろうと思わせるような人間。

だからこそ彼はヴォルグの悲運に本気で涙を流せるのだろう。強いライバルが去ってラッキーなどとは露ほども思わず、自分には関係ないことだからと無関心にもならず、自分のことのように憤り、悲しみ、心から同情できる。感嘆すべき人間性だ。だが、彼という人間を知れば知るほどこんな風に思うことがやめられなくなる。

自分はそんな優しく正しい男に倒され、自らの死を愛するように仕向けられ、屈辱の泥に頭まで浸けられた。

背筋がぞくりとした。怒りと羞恥と快楽に焼き焦がされそうになり、思わず唇を舌で湿す。

「……時期は、夏や。相手はまだ決まっとらん。こっちから指名したいところなんやが、初防衛戦やから謙虚にならなあかん言われてな。好きにでけへんのや」

「そうなんですか。やっぱりチャンピオンは違いますね。試合を組むにもこう、態度というか心構えというか」

「当たり前や」

余裕の笑顔で頷いてみせたが、もちろんすべて嘘だ。試合が終わってからまだジムに顔を出してもいない。防衛戦のスケジュールどころか今後のトレーニングの方針すら知らない。おそらくこれから取材が立て込むだろうからしばらくともに練習ができるかどうかも分からない。

それでも千堂の中ではもう決まっている。

幕之内はこれから再起戦なのだから、どんなに望もうと初めての防衛戦の相手が彼になることはない。再起してから数ヶ月かけてさらに調子を上げていくことになるのだらうし、実際に試合が組まれるまでは何度か防衛を挟むだろう。そのどれも必ず会心の出来にし、彼にうんと恐怖を植えつけてから戦わなければならない。

だが恐れさせても無駄になるであらうことは分かっている。一瞥しただけで誰もを委縮させる千堂が思い切りならみつけてもひるまない男だ。この普通で柔和な瞳が色のない炎となつて燃え、またまっすぐ自分に向かつてくるかと思うとぞくぞくする。今度こそ本当に彼を殺してしまうかもしれない。あるいは、殺されるかもしれない。視界がじわりと赤くなり、体が熱く、重くなり、ふたたび雑誌を床に落とす。

「あ、すみません、長話させちゃって。早く戻って休んでください」

「お、おう。そやな」

危なかった、と心の中でつぶやいた。幕之内が前にいるかと思うと頭の中が燃えたようになる。おかしい感覚を抑えられなくなる。同じことばかりをぐるぐる考えてしまうようになる。なぜなら、負けたからだ。唯一の黒星の相手だからだ。それ以外に理由はない。そのはずだ。

ひとつため息をついて「ほな、またな」と言い残し、グローブを胸に抱えた幕之内の横

を通り過ぎて一人で成田空港駅へと向かう。東京駅までは同じ方向だからおそろく同じ電車に乗ることになるのだろうが、これ以上幕之内と一緒にいたくなかった。彼を見ているだけで頭がぐちゃぐちゃになってしまふし、彼とヴォルグの話もしたくない。

心の中のこれは、他人と共有してはならないたぐいの思いだ。ともにヴォルグを国外へと追いやった同士だからこそ慰め合ってはならない。いつか彼と共感し合える日がくるとしても、もっと先のことになるだろう。

だからこのまま黙って去ろうと思っていたのに、切符を買っている間に幕之内が後ろから追いかけてきて、あろうことかこう言った。

「あの、千堂さん。さっきは偶然会ったことに驚いて言い忘れましたけど、この間の試合、おめでとうございます。二人とも本当にすごかったです。千堂さんがベルト巻いたのを見て、ボクも頑張ろうと思いました。い、いや、もちろん今のボクじゃそんな、目標とかそんなのはおこがましいんですけど……」

どうやって返事をしたのかは記憶にない。「おう」の一言かもしれないし、にやりと笑いながら「早よ再起せえ。待っとるで」と余裕を見せたかもしれない。飢えと孤独が急速に満たされ、同時にもっともっと欲しくなって渴いていく感覚だけをおぼえている。

「千堂さんがベルト巻いたのを見て、ボクも頑張ろうと思いました」。

これ以上の賛辞はない。これ以上の挑発はない。これ以上の恐怖もない。吐き出す息が

ひどく熱い。

もしかしたら、この普通すぎて優しすぎる男は、千堂という男を心底理解し、言葉でないやり方で奮い立たせ、百パーセント以上の本気を受け止めてくれる唯一の人間かもしれない。

だが「理解」なんて、そんな風に思った瞬間にすでに必要なくなる。本当に受け止められるかどうかに関係なくなる。彼がボクサーとしてそこにいて、その目を燃やして自分に向かってきてくれたなら、それだけでも何も要らない。あとに残るものがどちらかの死でも構わない。幕之内一步との二度目の戦いが終わったとき、きっと自分が生きてきた意味が分かるだろう。ここまで「死」に魅入られた理由も。そのときまでは誰より恐ろしくて強い、彼の目標でいたい。

*

二度目の敗北の翌朝は、かつて味わったような死の夢の官能的な甘さや屈辱ではなく、自分の全存在を揺るがすような激しい痛みとともに始まった。

声も出ないほどの衝撃で目を覚まし、苦痛をこらえようとして思わず体をひねるとますます痛んで、肺の奥の奥から切迫した、しかし悲しいほど弱々しい悲鳴が漏れ出す。痛すぎてすっかり意識しないと呼吸もできないのに頭の方は食欲に眠りを欲していて、少しでも気を抜くとふっと意識が途切れる。だが眠っても息苦しさと痛みで結局また目覚める。そんなサイクルを何度か繰り返したおかげで、「ヤバいかもしれん」と思ったときにはそれからもう何十分も経っていた。

こんな痛みを経験したことは一度もなかった。交通事故に遭ったことはないし、昔からやんちゃな子供ではあったがどれほど無茶なことをしても病院へ行くほどの傷は作らなかったし、風邪以外の病気もしたことがないし、ケンカどころかボクシングでも千堂にこんな大怪我を負わせた男はいなかった。千堂と対戦した相手は病院送りどころか再起不能にさえなるが、逆はなかった。

死ぬ、と思った。このままだと本当に死ぬ。一年九ヶ月前、幕之内がテンブルに放った一撃で失神させられたときのような甘美で清浄な「死」の感覚とは全然違う。こんなに痛くてはとてでもないが楽しむことなどできない。していたら本物の変態だ。

自力で病院へ行くべくどうにかして起き上がり、服を着替えようと腕を伸ばすと頭の天辺に雷が落ちたかのような激痛が走った。命の危険すら感じる痛みだった。だが、そのおかげで痛む箇所が分かった。昨日折られた肋骨だ。みなの手前、格好つけて家まで歩いて

帰ってきたが帰途でも相当に痛かった。幕之内にも記者たちにも知られたくなかったから、控室で診察を受けたときにはどこも悪くないというふりをしてやり過ごした……のがよくなかったのかもしれない。意地を張って放置したせいで大変なことになっている気がする。何度も痛みに貫かれ、そのたび情けないうめき声をあげながら、ようやく立ち上がって自室を出る。足に重りをつけ始めたときのように歩みが鈍い。

それでも歩き続けていると冷や汗が噴き出し、手足から血の気が引き、視界がどんどん狭まってくる。本格的にまずい。これはおそらく肋骨が折れているだけではないだろう。折れた骨が内臓に突き刺さったのか、それとも圧迫しているだけか、どちらにしても早く何とかしないと死にかねない。

店先には祖母がいて、いつものように振り向いて「もう起きてええんか」と言いかけて、千堂の幽鬼のごとき姿を見て絶叫した。

「武士っ!? どないしたんや? どこか痛むんか?」

「……ばあちゃん、大騒ぎせんとなってや。何ともあらへん。大丈夫や」

「どう見ても大丈夫ちゃうやろが! いま救急車呼ぶさかい、来るまでじっとしとき」

「そんな大げさやで。このまま歩いて行けるわい」

「やせ我慢もたいがいにせえ、このドアホ!」

膝に乗っていた飼猫のトラが空気を読んで走り去ると同時に、祖母は火がついたよう

に立ち上がって電話に飛びついた。

おろおろした声で救急搬送を頼み込む祖母の背後で、千堂はもうどうしても立っていらなくなつて畳に膝と手をついた。腕と膝が接地した衝撃で脇腹が悲鳴をあげ、抑えに抑えたうめきが頭蓋の中を駆け巡る。痛みが強すぎて涙が出そうだったが死んでも泣きたくないからこらえた。少し骨を折ったくらいでみっともなく苦しんだり泣いたりしている姿など誰にも見られたくない。自分でも見たくない。何しろ、自分は昨日まで王者だったのだ。王者として誰にも恥じない戦いをやってのけ、堂々と胸を張って自力で家まで返ってきた。千堂武士の物語はそれだけでじゅうぶんだった。それでおしまいでよかった。なのに試合で負った怪我が悪化して翌日救急車に運ばれたなんて格好が悪いにもほどがある。うずくまったらまま動けず、固まっているうちにけたたましいサイレンが聞こえてくる。やがて救急車が店の前で停まり、ジャングルの木の枝のごとく連なっている商品をかき分けて救急隊員が駆けつけてきた。

一通り個人情報と怪我の状態を確認されて担架に乗せられたときには、千堂の自尊心はすでにたずただった。肋骨骨折のことは柳岡にすら言っていない。だが救急車に乗せられてしまったのは、もはや世間に隠しておくことはできないだろう。記事になれば幕之内にも知られてしまう。それは困る。同情なんてされたくない。

歯を食いしばって怒りと恥辱と痛みに耐えているうちにぶつんと意識がなくなり、次に

気がついたときには病院のベッドの上だった。

ぼんやりとした視界の中に蛍光灯の暗い光に照らされた柳岡の顔があり、何や、全日本のときと同じやないかい、と何となく思っ、酸素マスクの存在を感じたときによりやく自分の状況を理解した。

「氣いついたんか、千堂」

柳岡の氣遣わしげな声が耳の奥で反響し、わんわんと響く。

「麻酔が解けたとこや、まだ体動かんやろ。無理してしゃべらんでええ。目も閉じとき」

強がって無理して口を開こうとして、ほとんど声が出ないことに気づいた。

「しゃべるな言うとるやろが。お前、かなり危ない状態やったんやで。ばあちゃんに感謝せえ。少しでも搬送が遅れとったら今ごろ会長と一緒にお前の葬式の相談しとるところや」ふう、とため息をつき、柳岡は指で眼鏡を押し上げる。視野が狭すぎてどんな表情をしているのかまでは分からない。

「医者話では、折れた肋骨が肝臓に食い込んで出血しとったからしばらく入院が必要、いうことやった。まったく、お前が妙な意地張ったせいで大変なことになったやないか」狭い視界の中に柳岡の顔を収めながら軽く頷く。淡々としてはいるが、彼の口調はあくまで優しい。

「正直、言いたいことは山ほどある。試合の後アバラの状態を素直に吐いて、すぐ病院行っ

て診てもらてたらこないなことにはなっとらん。下手すると死ぬとこや。シャレならんで。ええ格好してやせ我慢してばあちゃん泣かせてどないするんや」

やかましいわ、と返したかったのに吐息にしかならなかった。痛み止めが効いているのか痛みはないが、エネルギーを残らず抜かれてしまったかのように動けない。立ち上がることはおろか、手足も腰も首もどこもかしこも萎えていて喉にも力が入らない。

情けない、と改めて思う。千堂のような恐怖の権化がさらしていい姿ではない。だが本当に死にかけて手当までされてしまっちはもう虚勢も張れない。

弱気になると不安が忍び寄ってくる。このまま怪我が治らないと言われたら、ボクシングを辞めろと言われたらどうしたらいい？

普段の自分はこんなことを考えない。他人の言うことにだってろくに耳を貸さない。なのに、一度心のガードを解いただけでどんどん臆病になっていく。だから格好つけていたかったのだ。強い自分でいたかった。どうしても勝ちたかった相手にまた完敗しても、ベルトを失っても、大勢の期待を裏切っても、勝者に負けないほど誇り高く胸を張っていたかった。涙など出やしないが、今さら悔しくなって顔が歪む。

「そないな顔すな。何でお前がこないなるまで怪我を隠しとったんかは、ワイかて分かっとなるつもりや。試合の前も、試合でも、ゴングが鳴った後も、リングを下りてからも、最後の最後まで戦っとったんやろ。自分らしく、王者らしくあろうとしたんやろ。ほんまに

ようやくた。ほんまにプロやったと思うで。せやからもう、全部忘れて休んでええんや」

柳岡が自分を誰よりも知る人間だからこそ、最後の一言が辛かった。

ついい見放された、と思った。千堂が悔しい思いをするたび、柳岡はいま以上に強くなる方法を考えてくれた。千堂の強さを信頼し、人格を肯定し、意志を信じ、より遠くの目標に手を伸ばせるよう力強く寄り添ってくれた。どれほど千堂に困らされても絶対に折れなかった。

その柳岡が「休め」と言った。全部忘れろ、と言った。こんな状態でなければ今すぐ柳岡の胸ぐらをつかみたいくらいにショックだったが、彼は千堂の気持ちを見透かしたように低く咳払いをした。

「そないな顔すな。て、二度も言わすな。これは引退勧告ぢやう。休養命令や。お前のことやから、どうせすぐにでも再起戦やりたい言うんやろ？ それだけはだけへん。まず退院に一週間、痛んだ内臓と肋骨が完治するのに二ヶ月、ダメージ抜くの最低でも半年、万全を期すなら一年かかる。それまではこっちもお前をリングに立たせられん。誰に何言われても、や。ここで焦ったら選手生命に関わる。お前と幕之内はそれほど危険な打ち合いをした、ちゆうことや。リングでお前が何しようと思えんが、その自覚くらいはせえ」それは今までで一番厳しく、一番冷徹で、そして一番優しい声だった。

自分でも分かっているのだ。あの試合から生きて帰ってこられたのは奇跡に近い。剛腕

の自分たちがこれほど激しく打ち合えば命に危険が及ぶに決まっている。

相手を死なせるかもしれない、あるいは自分が死ぬかもしれない、という恐れなどすでに通り返していた。幕之内を絶対に殺す、そうでなければ絶対に殺される、というところまでいっていた。文字通り生きるか死ぬかの戦いで、もはや五体満足で帰ってこようなどとは思わなかった。

大嵐に一人で立ち向かい、もみくちゃにされながらもどうにか打ち負かし、勝利を喜べたらもちろん最高だ。だが幕之内に負かされ、立ち上がれなくなって、完全に自分が無価値な存在になり果てたとしても、それはそれで構わなかった。育ててくれた祖母に恩返しできなかったことだけが心残りだったが、他はどうでもよかった。

幕之内一歩という男は今まで生きてきた中で間違いなく最大の嵐だ。彼を相手に力を尽くし、尽くさせ、そうして殺されたときに、ようやく自分という存在が完成するような気さえた。

だが千堂は死ねなかった。幕之内を殺すこともできなかった。デンプシーロールに倒されて視界を死の清潔な赤に染めて気持ちよく死んでいきかけたのに、どうしてか死んではいられなかった。リングを下りた後によんど腐った生の泥濘の中でのたうち回るはめになったとしても、生きて彼の勝利を、彼の生を、このぶつかり合いの終着点を見届けたかった。どうしても。

「ま、休養せえいうてもデビューから今まで全速力で駆け抜けてきたさかい、これから毎日退屈になるやろ。その間。自分を見つめ直す機会やと思った方がええ。息抜きでもして、今までのことを反省して振り返って、その後で新しい目標を作るんや。階級上げるんでも、フェザーのままさらに遠くを目指すんでもええ。もう一度幕之内に挑んでベルト獲り返したいんなら、それでもええ。体休めとる間、ゆっくり考えるんやで」

しゅ、と小さな衣擦れの音がして柳岡が椅子から立ち上がる。行ってほしくない、とふと思った。点滴に繋がれた腕を必死に動かし、柳岡の暗い色のウールコートをつかもうとする。なぜそんなことをしたのかは分からない。彼と語り合うべきことなどもうない。聞きたいこともない。人恋しいわけでもない。ただ、このタイミングで一人になりたくないかった。何か恐ろしいことを思いついてしまいそうで怖かった。目を閉じれば追いかけてくる感情が自分を決定的に変え、二度と戻れなくなってしまうような気がした。

だが柳岡はわずかに伸ばされた手には気づかず、「治るまでおとなしゅうしとるんやで」と優しく言い残して帰っていった。暗い病室に一人になったとたん妙な予感に腹の底がざわめいたが、話を聞いていただけで疲れたのか電気のスイッチを切られたがごとくすぐに意識を失った。まぶたの裏は黒だった。その真っ黒な世界に取り残された千堂は、情けなくうめきながら汚れた泥の中で転げ回っているような苦痛をそれから何日も味わい続けた。

*

祖母と柳岡に心配をかけ続けながらもようやく退院したときは少し寒くなり始めたころで、肋骨と内臓が完治したと告げられたときはすでに真冬のさなかだった。ファイトマネーでようやく買った電気ストーブをフル稼働させてもなお自分の部屋は寒いままで、結局四六時中布団にくるまっていけないといられなかった。

ただひたすらに怪我を治しつつダメージを抜くという平穏で怠惰な毎日、覚悟を決めて始めてみるとあっという間に過ぎていった。

試合どころかロードワークすらできない日常に耐えられるのかとあれだけ不安に思っていたのに、何もしないことに慣れるとそれが当たり前になってしまふ。当たり前になると喜んでそれを繰り返すようになってしまふ。まさに無為徒食の日々。

柳岡に言われた「今までのことを反省して振り返ること」も「新しい目標を作る」こともまだできていない。それ以前に気分転換すらできない。店番の時間を増やしたり、近所の猫の世話を焼いたり、二度の敗戦の後も変わらず店を訪ねてきて騒ぐ子供たちと遊んで

やったりするだけでは気持ちが悪く切り替わらない。日々の些事に気を取られているうちにいつの間にか日が暮れていて、寒い自室に戻って布団にくるまって、考えたくないことを脳が勝手に考え始める前に眠ってしまう。それがもう何日も、何週間も続いている。

もちろん、それは逃げだ。そのくらいは自分でも分かっている。

だが「反省しろ」と言われても、幕之内とのあの試合には悔いはあっても反省点などない。「新しい目標を」と言われても、幕之内とのあの試合をもう一度やりたい以外のことなんて今は思いつかない。後悔すべき点は力及ばず負けたことだけで、その他は完璧だったのだからもうこれ以外のものなど何も欲しくない。ララパルーズと題された、あの何一つ欠けるところのないマスターピースをもう一度彼と作り上げたい。その上で次は勝ちたい。それだけだ。

それが新たな目標だと告げれば、柳岡はきっと渋い顔をするだろう。物事には文脈というものがあるのだから、また幕之内と戦えたとしても同じだけの満足が得られるわけではない。実力の拮抗した相手との試合が常に良い戦いになるわけでもない。それに彼に再々戦を申し込んだとて、三たび負けたらキャリアはどうなる？ そもそもあんな試合を続けていたら今度こそ死ぬ。ボクサーでい続けたいなら、まだ生きていたいなら、二度も勝てなかった相手に挑み続けるべきではない。

千堂の中の、いくらか成長した部分はそんな風に冷静に考えている。だが十二歳のころ

から変化のない柔らかな部分は、相変わらず最高の相手と生死をかけたスリリングな試合ができるなら何もかも捨て去って構わないと思っている。

子供のままの自分ではたかになつた自分を受け入れられず、成熟した自分はいつまでも無邪気な自分を持て余している。いつか幕之内との三度目の試合を再現して勝ちたいなどという目標は、大人になってしまった自分にはいささか単純で純粋にすぎる。

だが渴望は捨てられない。「それなり」なんて欲しくない。それを失ったら自分でなくなつてしまひそうな気がするから、どれだけ愚かだろうと欲しいものに一直線に手を伸ばすことだけはやめられない。文脈なんて関係ない。キャリアも命も関係ない。

理想はこうだ。いつか日本タイトル以上の舞台で、府立体育館や後樂園ホール以上の大観衆の中、少なくともセラウンド以上の長く激しい戦いの果てに、どちらかが倒れて終わる。敗者はぴくりとも動かず、満足そうな顔で息を引き取る。

最初は失神、二度目は肋骨骨折からの肝損傷で失血死寸前、ときたら、三度目は間違ひなくどちらかの死になるだろう。十二歳のころからあれだけ夢見た「死」だ。どこにも欠けるところがない、完璧な大団円。

その最高なはずのシチュエーションを夢想しながら浅い眠りに落ちかけていた千堂は、急に目を見開いてがばと起き上がった。最近いつもこうだ。どんなに理想を思い描いても、最後だけでも納得がいかなくなる。そうなるともはやそれが理想かどうかとも分から

ないから、気持ちよく想像に浸れなくなる。

いつの間にか死の夢を見なくなったことに気づいたのは、退院する直前のことだった。どんなに見たくないときでも定期的に見ていたあの夢は、後樂園ホールから戻ってきたとき以来いっさい顔を出さなくなった。夢を見ないから幕之内に殴り殺される想像で我を忘れて興奮することもなくなったし、死の予感だけで舌なめずりをするほどの快楽を覚えることもない。

自分が死ぬ想像で興奮する、などという危ない性癖から卒業できたことは喜ばしい。おかげでもう猥談の中で調子のいい嘘を混ぜなくてもよくなるし、幕之内を妄想の中とはいえ殺人鬼にしなくてもよくなる。しかし、なぜ急にあの夢を見なくなったのかは分からない。自分の中の何が変わってしまったのかも、いまだに分からない。

はああ、と息を吐き、頭をばりばりと掻く。このあまりに自分らしくない状態がむず痒くて仕方ない。向き合うべきことから逃げるなんて男のすることではない。逃げて避けて目をそらし続けて、何の行動もせずに無為の日々を送るなんて、千堂武士のすることでは絶対ない。だが自分で自分をいい加減に理解したくないから、安易に納得することもできない。

だったらどうする？ 肚が決まらないと先へ進めない。立ち止まったままではいられない性分だから、このままだと腐り果ててしまう。

旅にでも出るか、と思った。前を向くためには少なくとも切り替えが必要になる。悔いと混乱のさなかでは建設的な考えなど出てこない。柳岡の言う通り、自分を振り返るのも目標を作るのもしっかり息抜きができてからだ。女連れで旅でもすればきつといい気分転換になるだろう。せっかく生きている人間だけに欲情できるまともな体になったことだし、誰かが一緒なら道に迷う心配もないし。

そうと決まれば出発は明日の朝だ。必ず誘いに乗ってくれると言えるような特定の相手はいないしとえいたとしても急すぎるにもほどがあるのだが、心当たりを声をかければ一人くらいならまあ何とかなる。電話番号をメモした紙を発掘するのが面倒だから朝直接訪ねて誘おうと決めて目を閉じる。

自分の意志で何かを決めたのはあの試合以来だから清々しかった。どんな形でも前に進んでこそ人生だ。

＊

次の日の午後、どことも知れない寒空の下で独り立ち尽くしていた千堂は、小さくくしゃ

みをして周囲を見回した。

見たって分かるわけがない。だいたいここが何県何市かも分からないのだから、ヒントがあっても見つけられない。あたりには商店も交番も人家もない。人通りもない。頼りになる道連れもない。いるのはたったいま友達になった野良猫だけ。そんな完全なる一人旅で、誰もいないような場所で道に迷った。

昨晩はどうも甘く考えていたが、週の真ん中の平日の朝四時半に戸を叩いて「行き先も日程も決まっとらんのやけど旅に出えへんか」などと誘って乗ってくるようなちゃらんぽらんな遊び人は一般社会に存在しないらしかった。だったらせめて週末まで待つべきだったのに、もはやあとの祭りだ。

こうと決めたらすぐ動かないと気が済まない千堂は、荷造りもそこそこに一人で新幹線に飛び乗って終点の東京まで行き、しかしまた東京駅で下りるのは何となく癪だったから適当な在来線に乗り換えて、二時間ほど行った無人駅で下りて、そして途方に暮れていた。そこには海があって、背後に山があって、錆びた看板があって、そして人がいなかった。週の真ん中の平日の昼間だからだろう。さびれてはいるが一応は観光地のようにだし、平日は人けが少ないはずだ。

とりあえず人の姿が見えるところまでは猫に道案内させることにし、道なき道を突き進む友達についていく。しかし「ええか、腹減ったっても飯は後にせえよ。ナンパにもケン

カにも散歩にも付き合わせるんやないで。とにかく今は人間のおるところに案内するんや。頼むで」とどれほど口を酸っぱくして言い含めても、猫は自分のしたいことしかしない誇り高い生き物なので無事に人家にたどり着けるかどうかは分らない。このまま山奥に迷い込んで出られなくなってしまう行方不明者扱いになったら阿呆に過ぎる。普段から野生動物のように気ままに振舞っている千堂だが、下町育ちの都会っ子なので大自然の中での方向感覚にはあまり自信がない。

もっとも不安なのはこのまま家に帰れないことではない。いま行方不明になどなったら、「二度の敗戦のショックで蒸発した」と新聞に書かれかねないことだ。新聞に載れば幕之内も目にする。きつと心配される。ボクに負けたことがそんなに辛かったのか、と思われる。それだけは絶対に絶対に嫌だ。

もちろん、辛くなかったと言ったら嘘になる。あれだけ力を尽くして負けたのだから悔しい気持ちはない、と周囲には触れ回っているが、負けて悔しくないわけがない。同じ男に二度負けて、ベルトを奪われて、死ぬほどの大怪我を負わされたのに、「いい試合だったよ」と言われて嬉しいわけもない。

プライドが邪魔して格好つけているぶん、傷口はどんどん大きくなっていく。塞がりにくくなっていく。幕之内に刻み込まれたこの痛みと屈辱の傷が完全に消え去る日はおそらく一生こないだろう。いつかボクサーでなくなっても、年を取って手足が萎え切って、す

べてを忘れてしまっても。

自分の考えに苛立ちながら猫の後を歩いていると、どういうわけだか砂浜に出た。海水浴場というには狭く、整備も甘い、単なる海に面した浜だ。二度の敗戦のショックにたそがれるにはうってつけの。

やかましいわ、と自分に自分で突っ込み、砂の上にどかりとあぐらをかく。猫はいつの間にかどこかへ行ってしまい、相変わらず人間の姿はなく、完全なる一人きりだった。何県の何市の何町かも知らないビーチでたった一人、何海かも知らない海を見ている。こんな滑稽なことがあるうか。

以前幕之内に負けたときは旅になど出なかった。海を見ながら一人でたそがれることも当然なかったし、自分らしくもなく立ち止まったり考えたり悩んだりすることもなかった。失神で決着したぶん、殺された実感はあっても負けた実感が今ほどはっきりしていなかったせいだろう。すぐにやり返してやりたかったからすべきこともはっきりしていた。シンプルだった。

物事は単純な方が楽なのだ。生か死か、勝ちか負けか、やるかやらないか、殺るか殺られるか。その二択ではかれない泥のごとき混沌をのたうち回り続けるのは苦しい。今までそんな複雑な生き方をしたことがないから、どう切り替えてどう向き合うべきなのかも分からない。

冬らしく薄青かった空に少しずつ赤みが混じってきている。太陽は大きく傾き、水平線の向こうに沈もうとしている。

こんなときに人並みの教養があったら、太陽高度と方角から時間と場所を推測したり、海と寒さと自分の心境をネタに一句読んだりなどできたのかもしれない。

だが千堂にできることは、ただ夕焼けの赤い光にどっぷりと浸かることだけだ。猫ならばこうする。彼らは美しいものを理解せず、咀嚼もせず、身にまとうことすらせず、ただ贅沢に目の前に置く。子供のころから「猫のようだ」と評されてきた千堂も彼らのように誇り高く振舞おうとして、したいことしかないようにして、何を見ても心動かされないようにして、いつもほんの少しだけ傷ついていたのかもしれない。どんなにそうありたくても、ヒトは猫にも虎にもなれないから。

唯一の表現手段だった暴力をボクサーとなって責任を負ったときに半分失くし、幕之内に二度負けて「死」を内包する危うささえも失くしてしまった自分には、もはや不完全なヒトとしてしか生きるすべがない。急に世間に放り出された子供同然だ。

幕之内が同じ階級でなかったら、彼とまったく縁のない人生を歩んでいたら、自分のそんな愚かさや幼さにも気づかずにいられた。挫折を味わうことなく、思い悩むこともなく、一直線に日本一になって、世界一にもなって、猫どころか人語の通じない怪物として一生を終えていた。自分の弱さも強さも知らぬまま。幕之内は傷ひとつない化け物だった千堂

を人間に墮とした。おかげで知りたくなかったことを知り、考えたくなかったことを考えるようになり、こんな風に何度もつまらない堂々巡りをするはめになり、祖母に「少しは大人になった」と喜ばれるようになってしまった。

ため息をついて砂浜から立ち上がり、人家探しを再開しようとしたとき、斜め後ろから聞こえてはいけない声が聞こえてきた。

初めは幻聴かと思った。

最近はどこにいて誰と何をしていても彼のことばかりを考えていたから、幻聴が聞こえてきても不思議はない。しかしまぼろしにしてはしつこい。必死で聞こえないふりかつ他人のふりをしているのにどんどん近づいてきて何度も同じことを言う。

前もこんなことがなかったか。絶対見つかりたくないタイミングで見つかって、後ろから声をかけられて、仕方なく振り向いたことがあったような……。

「千堂さんっ!? やっぱり千堂さんだ!」

セリフまで同じだ。骨という骨が溶けてしまったのではないかと思うほど脱力し、膝に手をついたまま力なく振り返る。

「幕之内……」

何でこんなところに、と聞くには偶然が過ぎる。奇遇やなあ、などと明るく返すにはいくら何でも不自然が過ぎる。

こんなわけの分らないところでばったり出会ったからには何らかの理由があると思いたい、千堂はここが何県何市かも知らないのだ。東京駅から二時間も電車に乗ってやって来たのだから東京都内でないことは間違いない。生粋の東京者の彼が東京でないところにいるわけがない。彼は勝者なのだから傷心旅行に出ると思えない。

しかし千堂のそんな疑問と、心の準備ができていないままに再会してしまった気恥ずかしさを気にも止めず、幕之内は子犬のように砂浜を駆け寄ってきて「お久しぶりです」と頭を下げた。以前と違って少しリラックスした顔だ。

「お、おう。久しぶりやな。何でキサマがこないなところにおるんや」

「千堂さんこそ何でこんなところに？ 試合のとき骨折したって聞きましたけど、もう遠出とかしても大丈夫なんですか？」

んぐ、と情けない声が漏れた。やはり肋骨の件が伝わってしまっている。だが新聞にまで載ってしまったては隠しておくことはできないだろう。気を取り直し、平然と胸を張りながら「当然や」と返す。

「骨折いうてもたいしたことないわ。何なら今すぐキサマと戦れるで」

「は、はは……」

思い切り振るとまだ脇腹が引きつれる左拳を目の前に持ってくると、幕之内は少々うんざりしたような笑顔を浮かべた。彼は冗談を振られるといつも困った顔で笑う。

「それはともかく、どうしてここに？ やっぱり旅行ですか？」

「旅行、といえば旅行やけどな、来たくて来たんとちゃうねんで」

「というと？」

適当に電車に乗って適当に下りた駅で出会った野良猫と遊んでいたら道に迷って困っている、と素直に言えばいいのに、どうしてか言えなくて黙ってしまふ。幕之内は何か深い事情があるのだと思っただけ、急に表情を引き締めた。

「詮索してすみません。余計なこと聞きました」

「相変わらず堅苦しいやっちゃん。別にそんなんええわ。それよりキサマこそ何でここにおるんや。また山ごもりでもしとるんか？」

それにしてもトレーニングウェアを着ていない。あたたかそうなタートルネックのセーターの上に分厚いジャケットを羽織っているところを見ると、大自然の中でサバイバルをしに来ているのかもしれない。自分のファイトスタイルに野性味が足りないということに気づいた幕之内が山にこもって自らの本能を呼び起こそうと……？ などという馬鹿な妄想はそこまでだった。

「そ、それはですね……あの……実は道に迷ってしまって……」

幕之内は口を開いた瞬間に真っ赤になり、言い終わらないうちに恥ずかしそうに目をそ

らした。

「先日、車の免許を取ったので練習代わりに軽トラでその辺の一般道を走ってたんですが、道交法を守ってたはずなのになぜか後ろからクラクションを鳴らされて……それで……焦って脇道に入ってしまったらそこでもクラクションを鳴らされて……どんだん道を曲がっているうちに山に入っていて……ようやくふもとに下りたと思ったら全然知らない町に……」

「ほんで車はどないしたんや。見たところにもないで」

海岸沿いの道路にも砂浜にも軽トラらしきものは見えない。きょきょろとあたりを見回していると、幕之内はますます小さくなった。

「……走れなくなったから置いてきたんです。山道で迷ってるうちにガソリンがなくなつて、途中にガソリンスタンドもなくて、仕方なく下りて公衆電話を探してるところでして」ことの顛末を恥じてうつむいている幕之内には、あの日あのとときリングで対峙した、堂々たる強者の面影はなかった。必要以上に普通すぎ、優しすぎ、真面目すぎて損ばかりしている一人の人間だ。

こわばっていた体の力がふっと抜け、急におかしくなつて幕之内の肩をばしばしと叩く。「何や、そないなことやったんか。ほんならキサマもここがどこか分からへんのやないかい」「キサマも」ってことは、まさか、千堂さんも……?」

「そや。ワイも迷っとんねん。ここがどこ県かも知らん。駅にも戻れんようになってしもた」それを聞いたときの絶望の表情が愉快だった。

もしかしたら幕之内には、千堂がこのあたりの地理を把握していて、公衆電話どころかガソリンスタンドの位置も知っていると期待があったのかもしれない。だが偶然会った知り合いも迷子になっているとあってはもうどうしようもない。

そろそろ日が暮れようとしているし、人家はないし、人も通らない寒い砂浜で、お互いあまり頼りにならない都会っ子が二人きり。どう考えても絶望しかない状況だが、千堂は少し楽しくなっていた。非日常にはしゃぐほど子供ではないはずなのに、世界で一番会いたくなかった人間と一緒にいるのに、どうしてかわくわくした。

「じゃ、じゃあ、とりあえず一緒に電話を探しに行きませんか。この道をまっすぐ行ったらここに先に観光案内所があるみたいなので、最悪でもそこで借りられるはずですし」

「観光案内所……?」

幕之内が指さしたところには大きな看板があった。「〇〇町観光案内所 直進4km」。背後にあったのに気づかなかった。

「ほんならそこ行こか。ずっと海におってもしゃあないわな」

一足先に歩き出すと、彼は素直に小走りで後ろを追ってきた。本当に子犬みたいだ。急に千堂がまったくの見当違いの方向に歩き出しても、真冬の海に飛び込んでもあわててつ

いてきそうなところがある。

靴の中を砂だらけにしながら道路に出て、ほとんど落ちかかっている夕陽を体の片側に浴びながら、看板の示す通りに歩き始める。二車線もある道なのにすれ違う車も人もいない。屋外だというのに必然的に二人きりになり、何だか気まずい雰囲気になる。

さっきの高揚した気分はとうに引っ込んでいた。彼とは気安い沈黙を続けられるほどの仲ではない。敵同士ではあるが彼の性格上憎むことなどできないし、自分の方が年上で敬語を使われているからといって舎弟ではないし、二度も戦って負け越しても彼を「上」だと認めているわけでもない。今まで経験してきた人間関係のどれもに当てはまらない存在と、ここから先四キロも黙ったままでは辛いものがある。

とりあえず何か話題を探ろうとして口を開きかけたとき、幕之内が遠慮がちに声をかけた。

「あの、千堂さん」

「何や」

さりげなく一拍おいて振り返る。幕之内が妙に緊張した顔をしているところを見ると、どうやら碌な話ではなさそうだ。

「あの……その……お元気でしたか？ さっきも似たようなこと聞きましたけど、試合の後からずっと気になって」

「たいしたことない言うたやろが。キサマに気にされるようなことなんぞ何もないわい。余裕かましょって」

「余裕とかじゃないですよ。ボクだって、そのうち新聞とか雑誌で消息が分かればと思っ
てたんです。でもいきなり顔を合わせてしまいましたし、ここで聞かないわけには……」

語尾がフェードアウトすると同時に決まり悪そうにうつむく。

こんなところで会いたくなかったのは千堂だけではない。勝者である幕之内も同じなのだ。死闘を繰り広げて生き残ってしまった人間同士がすぐに再会するのは何だかばつが悪い。新聞記事やテレビ中継で活躍を眺めるくらいでちょうどいい。だったら徹頭徹尾知らんふりをしてくれればいいものを、態度に出さないとはいられないのは律儀な彼らしい。

千堂は不機嫌な顔を向けようとしてやめ、半歩前に出て表情を見られないようにしながら「元氣やで」と小さくつぶやいた。

「こっちは何も変わらないで。相変わらずや」

「そ、そう、ですか。よかったです。ボクも特に変わりありません。試合の後二日も寝て
ましたけど、精密検査では異常ありませんでした」

「さよか」

「あ！ それと、あの後すぐ犬を飼い始めました。真っ白な……こんな感じの子犬です」
両手で大きな丸を作り、最後に右手が円からぴょこんと飛び出したいびつな形を描く。

子犬の大きさと、尻尾の形を模しているのだろう。そのわけの分からない手の動きには飼い主特有の愛しさが感じられる。

「ほうか。毎日楽しそうやな」

「ええ、懐いてくれて可愛いですしロードワークも一緒にできるから楽しいです。まだ子供なのでたくさん遊んでやらないといけなくて大変ですけど」

皮肉に気づかれなかったことが残念でならなかった。分かってはいるのだ。いくら悔しくても、悔しさを味わわされた張本人の目前で醜い感情をあらわにするのは子供すぎる。そんなことをしたら自分を嫌いになる。それでも我慢できそうにない。

「……それで、大人になると体が大きくなる犬種なので小さいのにすぐ食べるんですよ。足もこんなに太くて、一年も経てばハチと同じくらいに……あ、ハチっていうのはもらった子犬の親でして、」

「幕之内」

「は、はい？」

早口で飼い犬の話を続けていた幕之内は、突然の鋭い声にぎくりとしたように固まった。だが空気を緩めてやる気はなかった。どうしても腹の虫が収まらなかった。

その呑気な子犬の話が千堂のプライドを刺激しない話題であることは分かっている。彼がわざわざそれを選んで続けていることも分かっている。だが、そこまでするなら、最初

から近況なんて聞いてほしくなかった。自分だって負けたことがあるはずなのに、敗者から見る景色がどんなものかくらい知っているはずなのに、手の内を明かし合って戦った仲なのだから千堂がどんな人間か知っているはずなのに。

視界が暗くなる。この善良な男に思い知らせてやりたくなる。リングの外だろうと構わない。ボクサー失格だと思われてもいい。やり返してやらなければ気が済まない。

「千堂さん？」

「あー、いやー……何でもあらへん。四キロで、なんぼ歩いたら着くんかと思てな」

ぎりぎりのところでどうにか思いとどまったが、声が硬いからごまかし切れてはいないだろう。幕之内は気落ちしたように肩を落とし、それきり口を開かなかった。千堂は彼に聞こえないように舌打ちをしてうつむく。

こういう行為を、「八つ当たり」という。手を出さなかっただけかもしれませんが、明らかに苛立った様子で彼の話を遮ったことには変わりない。勝者に気を遣わせておいてそれが気に入らないからと言って暴れているようでは、もはや敗者としてのプライドすらない。いくら何でも甘ったれすぎだ。

お互い無言のまま夜の海沿いを歩き続けていると、やがて大きな駐車場と平屋の建物が見えてきた。

「〇〇町観光案内所 売店・トイレ有 お気軽に立ち寄りください」。

しかしどこにも明かりがついていない。案内所の中も外も真っ暗だ。ガラス張りの入り口から中を覗き込むと、売店のものと思しきレジの隣に公衆電話があった。つまり、中に入らないと電話はかけられないということになる。

そばで見えていた幕之内が張り紙を指し、うわあ、と悲痛な声をあげた。

「せ、千堂さん……営業時間、十七時までって……」

「いま何時や？」

幕之内の手首についている腕時計を無理やり持ち上げて時間を確認すると、すでに十八時を過ぎていた。一時間以上オーバーしている。

「誰もおらん上に閉まっとる。電話かけられへんやないかい。どうしろちゅうねん」

「すみません。ボクの確認不足でした」

「キサマに言うとりんやない。この建物に文句言うとなんや。電話が中にあったら救急車も呼ばれへんやないか」

誰もいないならガラスを割って入ってもいいような気もするが、そんな野蛮な真似は隣にいる男が許さないだろう。ため息をついて顔を上げ、入り口をにらみつける。

「まあ、店が終わってしもてるんならしゃあないわ。別のところ探そか」

「別のところって、何か心当たりでもあるんですか？」

「おう。これや」

一枚のチラシをガラス戸から剥がし、幕之内の目の前に突きつける。暗いからそれでもよく見えないのか、幕之内は限界まで近づいてから眉間を開いた。

「……『当観光所より五分』って、車でですよ」

「せやな」

「でもここなら夜も人がいますよね。夜通し営業してるはずだし」

「そやろ」

「電話だけじゃなく地図とかも借りられるかもしれませんが。行ってみる価値はあると思います」

「そういうこっちゃ。……な？」

「は、はい？」

どきりとした様子を見せ、遠慮なく幕之内の肩に腕をかける。

「はい？ やないわい。どや。何か言うことないんか、幕之内。ワイがおって助かったやろ？」

「は、はい！ ありがとうございます、助かりました」

幕之内はあからさまにほっとした顔で勢いよく頭を下げた。彼が安堵したのは行き先が決まったからではない。さっきの気まずい雰囲気払拭されたからだ。何て素直な男なんだろうと思う。少しだけ胸が痛くなる。

*

観光案内所の入り口に貼ってあったチラシは近隣の民宿のものだった。

予約はお電話で、と書いてはあったが電話がかけられないから直接押しかけるしかない。時間はすでに七時を過ぎていたが幸運なことに営業していて、中に人もいた。

車で道に迷ってガス欠になってしまったから電話を借りたい、と幕之内が頼むと、宿の主人と思しき老人は快く承諾してくれた。しかしそれですべて解決、というわけにはいかなかった。

黒電話の受話器を耳にくっつけ、受付で借りた道路地図を片手に懸命に何かを話し合っている幕之内の様子を、千堂は宿の飼い猫と戯れながらぼうと眺めていた。電話の相手が「母さん」から「ウメザワクン」になり、これからどう帰宅するかではなく明日の朝の仕事を残った二人でどう乗り切るかという話になったときに、彼の今夜の運命を何となく察した。

幕之内は今日、家に帰ることはできない。今から車に戻って給油できたとしても暗いか

らさらに道に迷う可能性がある。だったらここで一晩明かして朝になってから帰った方がいい。

その会話を他人事のように聞き流しているうちに、ふたたび楽しい気持ち がわいてきた。予想外のことが起こるのは楽しい。幕之内と一緒にトラブルに巻き込まれるのも、何だか楽しい。わくわくする。さっきはもう一秒だって隣にいたくないと思っていたのに、不思議でならない。

「千堂さん、お待たせしました」

幕之内は小走りでロビーに戻ってきて、古びたラタンの椅子に行儀悪く座っていた千堂にまた軽く頭を下げた。

「電話終わりました。時間かかっちゃってすみません。ボクはここに泊まらせてもらって明日戻ることにします。夜道の運転慣れてませんし、暗い山道じゃまた迷いそうですし」
「その方がええやろな」

「はい。空室があって助かりました。千堂さんも、もしよかったら……」

一緒に、という言葉は何となく期待してしまい、ふっと目をそらす。

「駅まで車で送っていつてくれるそうですよ、ここの宿の方が。終電が八時ちょうどだからなので早く出ないと」

「ほうか。ほんならもう行かんとあかんわな」

気のない素振りで荷物を背負い直し、立ち上がりかけてやめ、中腰のままで少し悩む。

現在地と駅の間所が分かったのならここに残る理由は千堂の方にはない。このまま駅まで連れて行ってもらって、さっさと電車に乗ってしまえばいい。まだ旅の途中なのだから。しかし元々行き先など決まっていないうスケジュールも存在しない、たいした目的もない無為の旅だ。だったら楽しい方がいいのではないか。知らない場所をあてどなくうろつくよりこの男とともに冒険する方が楽しいような気がする。ただ民宿に泊まるだけのことを冒険とは呼ばないかもしれないが、それでもたぶん楽しい。

一緒にいればきつとまた彼の生真面目さに苛立って自分が嫌になって暴れたくなるだろうに、どうしてか立ち上がれない。

「……決めた」

「え？ 何をですか？」

空椅子状態の姿勢から思い切り伸び上がり、大股で幕之内のそばを通り過ぎて宿帳を勝手に広げて自分の名前と住所を書き、カウンターの奥にいる主人に一声かける。

「おっちゃん、ワイもここに泊まんぞ。もう一部屋用意してえな」

「ちょ、ちょっと、千堂さん？ 本気でですか？」

「何や、文句あるんか。別にええやろが。一緒に部屋に泊まるとは言うてへんやんか」

幕之内と自分はボクサー同士でライバルだが友達ではない。同じジムでもない。ましてや恋人でもなく、家族でもない。セックスもしない。そんな間柄の人間に「同じ部屋に泊まらせろ」なんて、傍若無人な千堂でもさすがに、少々、言いづらい。だから気を利かせて別々に部屋を取ってやろうと思っていたのに、幕之内がひどく言いづらそうに現実を教えてくれた。

「いや、ですから、それが無理なんですよ」

「何やそれは。無理でどういう意味や」

胸ぐらをつかみたい衝動をこらえながら聞くと、大きなため息が返ってくる。

「今夜空いてるのは一室だけなんです。となると、必然的にボクらは同室ということになってしまうわけで……」

すさまじく迷惑そうな顔で、幕之内はそう言った。言葉の内容よりもその表情の方に腹が立ち、つい頭に血が上って「何やと？」と凄んでしまう。

「そのどこがどう迷惑なんや、言うてみい！」

「め、迷惑なんて一言も言ってません。ただ、千堂さんにもこの先の予定があるでしょう？ それを無視するとボクらが同室になってしまいうって言っただけです」

「同じことやろが！ 予定なんぞなんもないわ！ だいたいな、予定予定いうんならここにキサマがおることが一番の予定外なんや！」

ひいすみません、と幕之内は悲痛に叫び、後ずさりして縮こまった。その反応のおかげで少しだけ冷静になり、少しだけ後悔した。

またやってしまった。だがさっきよりは気が楽だった。幕之内にしてもどうせ本気で怯えているわけではないのだ。二度もKOしている男にいくら吠えられても怖くなどないだろう。それもまた気に入らないが、思うがままに振舞っても傷つける心配がない相手というのはいい。

「……ふん、言うところがな、こっちかて迷惑なんや。敵のキサマと同室なんぞ気に入らん。せやけどまあ、空いとらんならしゃあないわ、我慢したる」

「えっ？ いえ、千堂さんには駅まで送ってもらって電車に乗るといふ選択肢もあるんですけど……」

「それも我慢したる言うとなんのや。予定は狂ってしもたがしゃあない」

「予定、ないんじゃないかったんですか？」

「さっきからごちゃごちゃやかましいのう！ おどれも男なら黙って我慢せえ！」

「はあ……」

不機嫌を装ってはいたが、彼のうんざりした様子を見るのは愉快で仕方なかった。どこまでも普通で優しく真面目ない子の幕之内が、敗者への気遣いも年上に対する礼儀も何もかも忘れて嫌な顔をしている。こっちの方がずっとやりやすい。ようやく彼と対等に

なった気がする。

「じゃ、じゃあ、仕方ないから行きましようか。夕飯も用意してくれるみたいなので早く食べて早く寝ましよう」

言われるがまま食事を済ませ、案内されて向かった先には何の変哲もない普通の和室があった。

狭い板の間に畳の部屋が隣接していて、奥には海を見渡せる小さなバルコニーがある。ラジオはあるが、テレビはない。風呂はあるが、シャワーはない。ちゃぶ台はあるが、座布団はない。暖かい地域なのかヒーターもなければこたつもない。

それでもまあ、不満はない。当初の予定通り女連れだったら夜中まで起きていただろうが、同伴者が幕之内なら彼の言う通りあとはただ眠るだけだ。せっかくの冒険なのに、何もやることがないというのはつまらない。ものすごく。

「景色のいい部屋ですね。これだけ近いと波の様子もよく分かるなあ」

一番風呂の権利を千堂に奪われ、遅れて入浴していた幕之内は、浴衣姿で戻ってきて窓の外の真っ暗な海を覗き込んだ。

「ここは離岸流が強いからサーフィンの人がいっぱい来そうですね。さっきの海岸と違って駐車場もお店もありますし、最初からここを目指してたらよかったのかも」

千堂は返事をしない。自宅にいるときのように布団にくるまって寝転がり、腹に猫を乗

せている。宿の飼い猫はまだ子猫といってもいいほどの若い雌猫で、人懐こいがすぐにじゃれて爪を立てる。

「あ、すみません、また一人でしゃべって。もう電気消して寝ましょうか。千堂さんも疲れてるでしょうし、ボクも明日早くに発つことになりそうですし」

何も反応せずにいると、幕之内はそれを肯定だと思ったのかいそいそと立ち上がって明かりを消した。

「じゃあ、おやすみなさい。ボクは朝、勝手に出ていくのでゆっくりしてってくださいね」
「ちょう待てや」

「は、はい？」

がぼと体を起こすと、猫が驚いて飛びのく。幕之内も驚いてのけぞる。暗い中でも彼の表情はよく分かる。

「おいこら、幕之内。おんどれほんまにこのまま寝るつもりかいな。まだ九時前やで」

「……さっきそう言いませんでしたっけ。千堂さんも疲れてるでしょうし、ボクも明日早
いし、と」

「舐めとんのか。この程度で疲れるかいな。こっちはおのれと最終ラウンドまで戦えるスタミナ持ってんねんで」

宿の浴衣のたもとに手を突っ込みつつひとにらみする。セリフに巻き舌まで入れた本気

の恫喝スタイルだが、明かりがないせいあまり怖がられていない。

「そ、そうですか。そうですね。でもボクは運転に神経遣ってけっこう疲れたので寝たいんですけど……」

「疲れるのは堅っ苦しい運転しとるからやろが。なんぼケツ叩かれても堂々としとったええんや。いちいち脇道逃げとったら舐められんで」

「ずいぶん詳しいんですね。千堂さん、車の運転お得意なんですか？」

少し疑っているような調子でそう言われ、思わず黙ってしまう。偉そうに説教しておいて免許すら持っていないとは言えない。

「もちろんボクも堂々としてたいと思っはいるんですが、胸を張れる自信がないんです。後ろからクラクション鳴らされると、何でみんなと同じようにできないんだって責められてる気がして。たとえ法定速度だろうと周りに合わせないと迷惑だってことくらいは分かってるつもりなんですけどね」

一呼吸おき、幕之内はごまかすように愛想笑いをして頬を掻いた。

「あ、またボクばかり話しちゃってすみません。帰りはできるだけ周りに合わせられるように頑張ってみるつもりです。千堂さんも……そういえば何の用事で遠出されてるのかは知りませんが、明日も楽しい旅をしてください。それじゃ、今度こそおやすみなさい」
「勝手に終わらすな。まだ何も済んどらん」

腕を伸ばして掛け布団を奪い取り、背後の板の間に放り投げる。そこまでされるとは思っていないかったのか、幕之内は珍しく色めきだって中腰になった。

「ちよつ、返してくださいよ！　ここ、暖房ないから掛け布団がないと寒くて寝られそうにないんです」

「寝とる場合とちやうで。せっかくおのれと顔合わせたちゅうのに決着つけへんわけにはいかんやろが」

にやつと笑いながらそう言くと、唾を呑み込むかすかな音が聞こえてきた。

「決着ってまさか、ここでやり合う気ですか？　グローブもリングもないのに？」

「何をブルっとんねん。ワイに二度も勝った男が」

立ち上がって明かりをつけ、脇に片付けられたちゃぶ台と座布団を持ち上げて真ん中に持ってくる。幕之内は顔じゅうに「？」を浮かべながらちゃぶ台の前に座る千堂を黙って眺めていた。

「ぼおっとすな。キサマも早よそこ座らんかい」

「ええと、まったく話が見えないんですが……」

「さっきから言うとするやろが。決着つけようという話や。せやけどここはどつき合うには狭すぎるやろ。ほんで、外はもう暗いやろ。せやったら、別のやり方で勝負するしかあらへん」

どん、と音をさせて両拳をテーブルに叩きつけ、身を乗り出して幕之内に迫る。

「決着、つけないといけないんですか？」

「当たり前やろが！ 偶然とはいえキサマとワイが顔を合わすちゅうことはな、つまりな、決闘や。修羅場や。決着つかんうちはここから帰さへんで。覚悟せえ」

「そんな無茶な！ だいたいボクシング以外でどんな勝負しようっていうんですか!？」

またしても黙ってしまう。そこまでは考えていなかった。腕相撲はこの男が相手だと部屋が破壊されるか肉体が破壊されるかのどちらかになりそうだからできないし、じゃんけんはいくら何でも馬鹿馬鹿しすぎる。となれば平和なテーブルゲームしかないがランプなど持ってきていけない。そもそもランプのルールなど何一つおぼえていないからあっても意味がない。

幕之内は考え込んでいる千堂をちらと見てため息をつき、おずおずちゃぶ台の前にやってきて向かい側に座った。

「そういうことでしたら、よかったら、しりとりでもしませんか。『ん』で終わった人の負けということ……」

「アホらしいわ。ガキちゃうで」

「伝言ゲームとか……」

「二人で伝言回してどないすんねん」

「でしたらもう早く寝ついた人の勝ちってことにして寝ましょう！ 負けませんよ！」

引きつった笑顔を浮かべながら敷布団にダイブする幕之内を完全に無視し、なおも考え続ける。もちろん勝負なんて建前だ。この夜をただ楽しく過ごしたかっただけの口実に過ぎない。

しかし青春時代をすべて暴力で塗り固めていた千堂には「遊び」の引き出しがほとんどない。修学旅行にも臨海学校にも行ったことがないし、個人的に旅行に行ったこともなければ女以外の他人の家に泊まったこともないし、周りにいたのは敵か舎弟か助けるべき他人ばかりだったから対等な友人と遊んだ経験も小学生で最後だ。こういうとき何をしたらいいのか分からない。

だったらいっそ、碌に知りもしない退屈なゲームに興じるより外へ出て思う存分殴り合った方が楽しい思い出になるのではないか？

その剣呑な空気を敏感に察知したらしい幕之内は、布団から顔を上げて「それはやめましょう」と簡潔につぶやいた。

「本当にやめましょう。ボクたちプロボクサーなんですよ。しかもこないだ試合したばかりなんですよ。新聞に載っちゃいますよ。変な見出しつけられて」

「分かっとるわい」

不満げに鼻から息を吐き出してそう答えると、ほっとしたようなため息が返ってくる。

「それにしても、その、さっきから言いたかったんですが……ええと、こういうこと言うの失礼かもしれないんですが……」

「何や。はっきり言わんかい」

「じゃあ言います。もしかしたら千堂さん、まだ寝たくないだけなんじゃないんですか？」
返事代わりに鋭い視線を向けると、幕之内はひいっと小さく悲鳴をあげた。

「す、すみません。不躰すぎました。でも、気持ちには分かるなあとと思って。こういうアクシデントってちょっとわくわくしますよね。色んな意味で」

どきりとしたことを悟られないように表情を抑え、目線をそらす。分かってくれた。分かってくれると思っていた。「普通」の人にはきつと当たり前で、くだらないことなのだろうが、分かってくれたことが少しだけうれしかった。

「いや本当……分かるんですけど、ボクは疲れてて眠いので寝たいです」

「我慢せえ。ワイらがここで偶然会ったことも含めてアクシデントちゃうやつやで」

「はは、そうですね。確かにそうです」

目の下に浮かんだ隈を指で擦りながら、幕之内は力なく笑った。

「じゃあせっかくですし、もう少しだけ何かして遊びましょうか。ただ、ボクはジムの合宿でランプか花火したくらいしかこういいう思い出がなくて、何も知らないんです」

「ほうかいな」

「ええ。修学旅行とか宿泊学習とかも仲間外れになってましたし、合宿以外では旅行もしたことはないですよ。だからこういうとき何するのかよく分からなくて」

幕之内は照れ笑いを浮かべながら頬を掻いてる。大きな目が赤くなっている。ただそれだけだ。「知られるくらいなら死ぬ」と思うことなど決してなさそうな、飾り気のない顔。他者を常に畏怖させて生きてきた千堂のような人間には、こんな風に自分の弱点をたいしたてらしいもなく話せることが信じられない。

彼には自分を大きく、恐ろしく見せようという気持ちなどないのだろう。だからいつも不必要なほど実直で律儀なのだ。だから人の思いに百パーセント以上の全力で応えられ続けるのだ。だから自分を二度も打ち負かすことができたのだ。

幕之内に対する敬意がじわじわとわき上がり、同じだけ炎のごとき悔しさがフラッシュバックする。あの試合で嫌というほど思い知ったはずの相反する感情を、本人の前でまた味わわされている。

目の前でそんなことが起きているとも知らない幕之内は、呑気な口調で「千堂さんは？」と聞いてきた。

「こういうときに何かやって楽しかったこととかないんですか？ 顔広そうですし、いつも楽しそうですし、色々経験あるんじゃないんですか」

「……ない」

厳密に言う和一応あるのだが、こんな生真面目な男に猥談など振れないから黙っておいた。一晚中セックスしたことが楽しかった、などと正直に答えようものなら狼狽される。

彼はたぶん女を知らないだろう。この四角四面な性格では欲望の前に責任を考えてしまいそうだし、自分の志向や嗜好と真剣に向き合ったことがあるのかどうかも怪しい。他人に対して一線引きすぎるところを見ると、もしかしたら生身の人間に欲情できない奴かもしれない。人に言えない性癖の持ち主かもしれない。二ヶ月前までの自分のように。

久しぶりにあの面妖な感覚を思い出してしまつてぞくりとし、ぐっと拳を握りしめる。そういうえば、夢や妄想の中で自分を殺していたのはいつもこの男だった。彼をどうにかねじ伏せようとして、彼の力に死ぬ気で耐えて、全力であらがつて、それでも最後には殺された。その瞬間は何も考えられなくなるほど気持ちよくて、自分という存在が拡散してなくなつてしまふまで絶頂を味わされ続けた。

空想とはいえ、何度も快楽を与えてくれた男が目の前にいる。しかも夜に、リラックスした状態で、二人きりになっている。今さらそんなことに気づいて冷や汗が浮かんだ。

「あれ」はもう卒業したのだから何の問題もないはずだ。恥じるようなことではない。必死にそう自分に言い聞かせていても、腹の底が徐々にざわざわと騒がしくなっていく。

「あもう、千堂さん、大丈夫ですか？」

呆れたような声が聞こえ、ぎこちなく顔を上げる。

「もしかして眠くなったんじゃ？　うちの犬もそうなんですよ。真夜中に遊びたくなって大暴れするのに、こっちが今日は徹夜で付き合おうと思つて遊び道具を用意してるとばたっと寝ていて……って！　す、すみません！　眠すぎて口が滑つて失礼なこと言っちゃいました。ボクはもう寝ます。千堂さんも眠いなら我慢せずもう寝てください」

さあどうぞ、と両手で勢いよく布団の方向を指し示される。その手は荒れ放題で、ささくれとあかざれと擦り傷とタコの跡でいっぱいだった。手は大きくないが指は太く、爪は丸く、手のひらのしわが遠くからでも分かるくらいにくっきりと刻まれていた。

こんな素朴な手で殺されたのだ。二度も。想像を含めれば数えきれない。

忘れていたはずの欲望が目覚め始める。目の前がじわと赤くなる。暴れたくて仕方がなくなる。ちゃぶ台を飛び越えて襲いかかって殴りつけ、殺らなければ死ぬ、と彼に思わせるまで痛めつけたい。そしてこの手で殴り返されてあらがって、またやり返されて、めちゃくちゃにし、同じだけめちゃくちゃにされてしまいたい。今度は失神や肋骨骨折ごときでは済まないくらいにしてほしい。どんな姿になろうとやめたくないし、やめてほしくもない。お互い原形もとどめなくらいにぐちゃぐちゃになって、最後にはあの真っ赤な世界に行きたい。

息が荒くなつていく。ごまかしようもないほど興奮している。名声もプライドも責任も

新しい目標も、畏敬の念も親近感も楽しさも分かり合える可能性も、もう何もかもがどうでもいい。命だって要らない。三度目を実現する機会など待ってられない。

「具合悪いんですか？ 誰か呼びましょうか」

「いらん」

「でも辛そうですし、せめて水でも飲んでください。今コップに水くんで持ってきてますから」
ちゃぶ台に肘をついて顔を伏せている千堂のすぐそばを幕之内が小走りで駆けていく。
触れる距離にいると思うとよけいに興奮する。

まさかこんなことになるとは思っていなかった。この感覚をしばらく忘れていたから油断していた。あの夢は、あの欲望は、なくなっただけでなごいかなかったのだ。まともな人間に戻れたわけでもなかった。幕之内に本物の痛みと苦しみを思い知らされて、一時的に遠くへ追いやられていただけだ。

蛇口を閉める音がし、ぱたぱたと足音がし、すぐにガラスのコップが目の前に置かれる。礼を言うべきなのに言えない。口を開きたくない。片腕で顔を隠し、限界まで背を丸めていると、熱くて分厚いものがそっと背中に触れた。それが幕之内の手だということに気づいたとき、危うく声が漏れそうになった。

「大丈夫ですか？ すごく汗かいてますよ。どこか痛むなら痛み止めもらってきますけど」
力を振り絞って首を横に振る。殴りかかりたいのを我慢しているだけだなんてとても言

えない。

「じゃあ横になりました。テーブルはボクが片付けておきますから、布団に行ってください」

「幕之内、」

「気にしないでください。誰にも言いませんし、見なかったことにしますから。ボクの方こそ無理させてすみません。全部忘れて寝てください」

秘密をささやくような声で耳打ちし、幕之内は一度だけそっと背筋を撫でてすぐに立ち上がった。

誰にも言いませんし、見なかったことにしますから。

その言葉に貫かれて死にそうだった。

彼がこのことに気づいているわけがない。それほど察しのいい男ではない。ライバルに体調を崩したところを見られてプライドが傷ついているだろう、くらいにしか思っていないはずだ。

なのに動けないほど動揺して、視界がぐらぐら揺れている。犬のようにあはあと荒く呼吸をし続けているせいで、伏せている顔が蒸気で湿っていく。姿勢を変えられないほど

に性器が大きく、硬くなっている。灼熱の塊が体じゅうを駆け巡る。この欲望を早く霧消させてしまいたくてたまらなくなる。

もう彼にすべてを明かしてしまおうか。したくないことにはそれなりに耐えられるが、したいことを我慢するのは苦手だ。悩むのも嫌いだ。

幕之内は乱れ放題だった布団と枕を整え、猫が通れるだけの隙間があいていた扉を完全に閉めて戻ってきて、ふたたび千堂のそばにかがみ込む。心配そうな空気が伝わってくる。「立てますか？　もしよかったら運びますけど……」

もし本当に具合が悪かったとしても、幕之内にそんなことをされたら情けなくて憤死する。彼自身もそれをすぐに察してあわてて弁明した。

「あ、すみません。持ち上げられるとか嫌ですよね。布団はすぐそこにありますから、ご自分でどうぞ。その間ボクはちょっと、その、ロビーに行ってます。でも宿の人に相談するとか葉もらうとか救急車呼ぶとかそういうのじゃないですから。家に電話するだけですから気にしないでください。それでは」

「幕之内」

顔の下にあった腕を突き出し、この場から逃げるように立ち上がりとしていた幕之内の肩を思い切りつかむ。瞬時に筋肉がこわばり、ぎょっとしたような反応が返ってくる。

「な、何ですか？ 何かまた失礼なこと言っちゃったならすみません」

「さっきから何やねんそれは。氣い遣っとるつもりなんか」

「そりゃ、遣いますよ。だって千堂さん体調悪そうだし、お腹のあたりが痛そうな感じだし。もし脇腹が痛むなら、それはボクのせいかもしれないですし……」

「ええ加減にせえよ。二回勝った程度で舐めおって」

反動もつけず、猫のように一気に伸び上がり、驚いている幕之内を後ろに倒して馬乗りになる。幕之内は驚きを通り越して無表情になっていたが、一瞬ののちによりやく「うわあ!」と声をあげた。

「やっ、やめてください！ こういうのまずいですってば！ 部屋が壊れます！ 弁償とかになったら本当に明日の新聞に載っちゃいますよ?」

「そら載るやろな。警察も来るやろ。ワイら二人とも逮捕や」

「分かってるならやめましようよ！ ライセンス剥奪とかになったらどうするんですか!」青くなって騒ぎ立てる幕之内の襟首を両手でつかみ、上半身ごと畳から浮かせる。

口では常識的なことを言っているけど、このまま上から一方的に殴りつけられさすがに頭に血が上るだろう。しかしケンカ慣れしていないからマウンツの返し方も知らないだろうし、股間を膝蹴りされる可能性など考えたこともないだろうから一時的には優位に立てる。それでも相手は幕之内一歩だ。千堂を二度も負かした男だ。ケンカであつてもただで済む

わけがない。きっと無茶苦茶に殴られて、死を覚悟しなければならぬほど痛めつけられる。やがて潰し合いになり、あのときのように意地でも引けない戦いになり、最終的には殺し合いになる。

ぞくぞくする。最高だ。もう一生これだけやって生きていきたいとすら思う。だが千堂の体の下にいる男はそんなことを考えもせず、もがきながら見当違いの説得を続けていた。「あれからたいして日も経ってないのにこんなところで顔を合わせてしまつて、混乱するのは分かります。ボクだってそうです。これから先、自分にまたあんなことができると思えないくらいに全力を出し切れた試合でしたけど、きっと千堂さんもそうだと勝手に思っていますけど、それでも勝負ですから、勝ちと負けがついちゃいますから、簡単に呑み込んだり納得したりできない気持ちに分かるつもりです。自分で自分のしたことを納得できない状態が辛いのもよく分かっています。ボクだって負けたことがありますから。でも、だからって、今までしてきたことをフイにするのはだめですよ」

必死だ、と思った。大きな黒い目を見開き、頬を紅潮させ、額に汗を浮かべ、自分を殴ろうと持ち上がりかけている千堂の腕をごつごつした手で懸命に抑えている。

「だから本当に、やめましょうよ。どうしても寝たくないなら他のことをしまませんか。何かこう、楽しいことを。遊びになら付き合います。外に散歩しに行くのもいいと思います。真夜中ですけど、寒いですけど、この狭い部屋の中でボくら二人だとやっぱりあの試

合を思い出して危険な雰囲気になってしまおうと思うので……」

ふ、と力を抜き、右腕を幕之内の両手に預ける。安堵のため息と同時に彼の手もだらりと落ち、姿勢を保つために幕之内の頭の横に手をつかなければならなくなる。

マウントというより組み敷いている感じだ。短く息を吐きながら呆然とその顔を見下ろしている、ほとんど声にもなっていない声で「よかったあ」とつぶやいているのが聞こえた。

よほどほっとしたのだろう。表情からは緊張が消え、脱力してあごを上げたせいで噴き出た汗が髪の毛の生え際に向かって流れている。こんもりと筋肉のついた首から飛び出た喉仏がまるで死を誘うようにひこひこ上下している。

幕之内は勘違いをしている。

千堂は負けた悔しさを紛らわすために暴れたがっているわけではない。混乱しているから襲いかかったわけでもない。アクシデントに興奮して眠れないから戯れに爪を立てているわけでもない。

この欲望は彼に出会う前から頭の中にあつた。彼に出会って初めて形を持った。彼に一度殺されて確固たるものとなり、二度殺されてもう戻れないところに来てしまった。

おそらく自分はこのために生まれてきた。このために一人残され、このために暴力にまみれた子供時代を送り、このためにボクサーになった。この善良孤独でおかしな大嵐に自

ら飛び込んでねじ伏せようとあらがうため。簡単に人を殺せるこの暴虐な力を純粹に自分たちのためだけに振るい、振るわせるため。そして喜んで死の淵で踊り狂って、最後には足を踏み外して、悔いなく生を終わらせるため。それだけのために生きている。

この拳以外には何ひとつよすがのない世界で、誰から何を守っても救われなかった世界で、幕之内一歩だけが本気で、全力で千堂を殺しに來てくれた。すべてを捨ててがむしやらになれる理由をくれた。それを彼自身に伝えたいだけだ。感動を表したいだけだ。もっとしよう、もっと遠くまで行こう、と言いたいだけだ。だが言葉では表現できない。千堂が操れる言語は長らく暴力だけだったから、こんなに頭に血が上った状態では一言だって出てこない。

それでも、彼のおかげで殴ってはいけないということだけは分かった。だったら首を絞めるのも蹴り上げるのもだめなのだろう。

仕方なく頭を下げ、額を鎖骨にぎりぎり擦りつける。幕之内の太ももに腰を下ろすと頭の位置も下がり、今度は胸にくっつく。さんざん暴れたせいで浴衣がはだけていて、汗ばんだ分厚い胸筋があらわになっている。

「……あ、あの……千堂さん？ どうしたんですか？」

ひたすら体に額を押しつけてくる謎の行動に困惑したのか、幕之内がうろたえたような声でそう言った。

「頭でも痛いんですか？ それともボク、何か匂いますか？」

言葉が出ないから返事はしない。代わりにみぞおちに鼻を押し当てる。

「もしかしてとは思うんですが……ウチの犬もよくやるんですけど……ボクは生きた人間なので、どんなに匂いかいでも食べられないのですが……」

何を想像しているのか、冷や汗が噴き出ている。飼犬に執拗に匂いをかがれた挙句甘噛みされた経験でもあるのだろうか。

その筋違いな想像がおかしくて顔を上げ、口角を上げて笑いかける。できるだけ穏やかな笑顔を作ったつもりだったのに、幕之内はひいっと声をあげて千堂の腕から逃がれようとした。

いかにもケンカ慣れしていない人間の逃げ方だ。馬乗りにされているときは前後左右には逃げられない。体を思い切り反らせて相手を跳ね返すしかない。

そのまま力を込めて肩を押さえ、おとなしくさせてからふたたび頭を下げる。今度は首すじに顔を埋め、強めに額を押しつける。だがだんだんそれだけでは足りなくなってきた、口を大きく開いて丸い喉仏に噛みつく。もちろん命を奪うほどの力ではない。血も出ない。噛み跡くらいは残るだろうが、傷にはならない。なのに幕之内は今まで以上に驚いて怯え、金切り声をあげて暴れた。

「な、何するんですか！ 言ったじゃないですか、ボクは食べられないって！ お腹すい

たなら宿の人に頼んでくださいよ！」

しつこく犬扱いしてくることが腹立たしかったが、文句を言う余裕はなかった。

右肩とあごをそれぞれ固定し、柔らかな喉元をむき出しにしてからもう一度噛みつく。このまま上下のあごに力を入れれば幕之内を殺せる。百パーセント以上の力で戦っても勝てなかった相手の息の根を造作もなく止められる。

そう思うと頭の芯が甘くしびれ、呼吸が苦しくなってくる。股間が一気に窮屈になり、じっとしているのが辛くなる。

もし幕之内に知れたら勘違いされそうだな。これではセックスしていると思われる。ある意味そうかもしれないが、微妙に違う。自分たちは暴力を介さないと本当の意味で繋がれない。そのためだけに何ヶ月も努力し続け、お互いしか見えなくなつて、限界を超えて、超えさせて、生死をかけて睦み合わないと言っている」とは言わない。

喉仏を心ゆくまで弄んでから解放し、今度は頸動脈に標的を移す。見事に鍛えられた首の筋肉が血管を守っているから、歯を立てて吸いついてもそれらしい感触はない。だが脈動だけは力強く伝わってくる。ここを食い破ったら血が勢いよく噴き出すだろう。千堂の顔も体も壁も畳も血まみれになり、やがて彼が命を落とす。

力を入れたら死にかねない急所に歯を立てられていることに幕之内自身も気づいているだろうに、彼は妙におとなしくしている。喉に噛みつきながらでは表情は見えないが、息

をひそめてじっとしていることは分かる。

賢いやり方だ。ネコ科の獣は背中を向けて逃げるものを獲物だとみなして追いかける。かといって挑発されると興奮して襲いかかってくるし、もがき苦しむ瀕死の獲物を弄ぶ習性もある。もし牙まで立てられたら、じっとしているうちに飽きがきて去ってくれるのを待つしかない。案の定千堂は頸動脈を噛みしめ続けるのに飽き、口を離してさらに下に向かった。

浴衣を無理やりはだけさせて鎖骨、肩、腕にも強めの噛み跡をつけ、ついに手に移る。人差し指と親指の間の比較的大きな箇所には歯を立てると、あかぎれだらけのざらざらした皮膚に包まれた筋肉がびくりと動いた。

幕之内の拳を口で味わっているとおかしくなりそうだった。人を傷つけることが好き、などとはみじんも思っていない人間の持つ拳。何人もの男をマットに沈め、ときには壊し、千堂を二度も殺しかけた凶悪な武器。そんなものをまるで慰撫するように、奉仕するように、媚びるようにねぶっている。そんな自分が情けなくて急激に怒りが募ってくる。悔しまぎれに身を乗り出して体ごとぎゅうぎゅうに押さえつけると、腹のあたりに何か違和感があった。

最初は浴衣の紐の結び目かと思った。だが紐にしては大きすぎ、弾力がありすぎる。

思わず幕之内の顔を見ると、彼は自由になっっている方の手で口元を覆っていた。顔が真っ

赤だ。目が充血し、汗までかいている。

「すっ……すみません……。その……こんなつもりでは全然なくて……」

幕之内は哀れなほどおびえた声でつぶやきながら、手で必死に股間を隠そうとしていた。「で、でもこれはボクだけのせいじゃないというか、疲れて眠いところにこんなわけの分からないことされたら仕方ないというか、とにかく忘れてください。というか、もうやめてください。本当に。何のつもりなのか分かりませんがこれ以上されるとお互い変なことになっちゃいますから」

お互い、という言葉に妙な遠慮があった。千堂の股間も彼の太ももに当たっている。こっちは隠すつもりもごまかすつもりもないから急いで体を離すようなことはしない。だが幕之内はあわてふためいて逃がれようとし、こともあろうに姿勢を変えて背中を見せようとした。

ネコ科の獣は逃げるものを追いかける習性がある。虎が出そうなジャングルに入るときは、常に後頭部にお面をつけていないといけないそうだ。

千堂はうつぶせになろうとする幕之内の腰を押さえつけてがっちり固定し、浴衣を押し上げている性器らしきものに鼻を寄せ、かぶりと噛みついた。もちろん力は少しも入っていない。しかも服の上からだから歯の硬さを感じて戦慄する程度で済むだろう。なのに幕之内は情けない悲鳴をあげて体を硬直させ、「だめですってば!」と叫んでいる。

彼のそれはヒトの男性器とは思えないくらいに太くて大きかった。何か仕込んであるんじゃないかと思っただけくらいだ。だが感触は人体のものだし、歯の先で軽く先端を擦るとびくびくと反応する。

幕之内は何かされるたび「だめです」を連呼する。すぐにでもこの危険な遊びをやめさせたいだろうが、こんなところに歯を立てられていては暴れることもできない。そのくせ少しも萎えないところを見ると、彼も本気で「変なこと」になりかけているのだろう。

無表情な瞳で幕之内の必死な顔を見上げながら、歯と唇を使って浴衣の裾と下着をはだける。勢いよく飛び出してきた大きな性器は服の中に溜め込んでいた湿度と独特の匂いを周囲にまき散らし、怯えたように痙攣しながら千堂の目の前で屹立していた。

「本当にもうやめてください、こんなことしちゃだめですよ。おかしいです」

とぎれとぎれの不安定な声が頭上から聞こえてくる。

それは快楽への期待からくる震えではない。恐れだ。体に跡がつくほど歯を立てるような異常な人間の前で、ヒトとしての最大の弱点をさらしている怖さ。

まともに人とセックスができるのか分からないほどの大きさの性器に口づけ、限界まで口を開けて上から呑み込んでいく。幕之内はいつ歯を立てられるかと不安そうにしていたが、舌を使ってたどたどしく愛撫し始めると腰を震わせてあえいだ。

「いい、いやもう、だめですってば、千堂さん、こんなの、」

もう日本語にもなっていない。それでもあらがわれないといられないのか、片膝を立てて腰を引こうとして、先端に吸いつかれてびたんと大きく背中が跳ねる。

「……こ、こういうの、ボク、初めてなんです。彼女とかもいたことないですし、何の経験もなくて、だから、こういうことは恋人同士がするもので、ボくらがしちゃいけないことなんじゃないんですか？ やめましょうよ、お願いですから」

ほとんど呂律も回っていないくせに、彼はどこまでも真面目にそんなことを言う。

確かに、自分たちは恋愛関係にはない。元より繊細な感情が介在する間柄ではないし、これからもきつとそうはならない。

それでも幕之内一步は千堂の恋人だ。柳岡の字で「東日本新人王決勝」と書かれたあのビデオテープを手にとったときからそうだった。彼が唯一、この後ろ暗く退廃的な欲望を充足させてくれる存在だった。幕之内にとっての自分はその拳で打ち倒してきたたくさんの男たちの一人でしかなくとも、少なくとも千堂にとっての彼は、ただ一人の運命の人だった。命を奪われても構わないと思える、世界で一人だけの相手。

とはいえ、自分以外の男性器を愛撫した経験などないからその恋情を伝えるうまいやり方を知らない。体積が大きすぎて気をつけていても歯が当たってしまうし、吸いつく強さが適切かどうかとも分らない。どうにか射精に導こうとする懸命さだけで愛撫を続けている。拳のとき以上に熱心に彼を慰め、奉仕し、媚びるためにねぶっているのに、不思議と

屈辱感がわいてこない。

幕之内はしつこく体をひねって抵抗し続けていたが、やがてせっぱつまった声であえいで右手を千堂の頭の上に乘せた。くせの強い髪をおぼつかない手つきでかき回し、遠慮がちに腰を浮かせて快楽を享受し始める。犬のように頭を撫でられながら上目遣いに幕之内を見る。彼もこっちを見ていたのか一発で視線が合ってしまったて恥ずかしそうに目をそらされる。顔も首すじも胸元も限界まで紅潮していて、そこかしこから大粒の汗が滴っている。まるで傷が痛むかのような苦悶の表情だが、その顔には浅ましい欲望も一緒に浮かんでいる。止めようとしてももう止まれまい。同性だから分かる。ここまできてしまったら射精しないと終われない。

いよいよ限界なのか、頭に添えられている手が両手になり、中途半端に体を起こして背を丸め、腰が本能的にかくかくと動き始める。凶悪な大きさのものに喉の奥を突かれて苦しい。だが頭をゆるやかに固定されているせいで逃げられない。硬い性器がますます硬くなり、膨らんだ先端から塩辛い粘液があふれ、腰がさらに暴れ始めると、幕之内は嗚咽にも似た声で「だめです」と叫んだ。

「も、う、だめです。せん、どうさん、離れてください。じゃないと大変なことに、」

頭を押さえていた手が今度は顔を剥がしにかかってきたせいで、離れるまいとして思わず強く吸ってしまう。その瞬間うあ、と鋭い悲鳴があがって、全身の筋肉にぴんと力が入っ

た。

幕之内は背中を激しくバウンドさせながら声もなく精を放った。頭を押さえつけられながら口の中に出されたから、まるで犯されているような気分になった。そう思うとふつつと腹が立ち、同時に興奮した。

どうせなら本気で暴力を振るってほしい。普通や優しさなどをかなぐり捨てて、暴力という言語で苛立ちや戸惑いや親密さを表現してほしい。もはや言葉を持たぬ自分のように。「すみ、ません。大丈夫ですか」

ぜえぜえと荒く呼吸をしながら、幕之内は力なく、しかしぞんざいに千堂の頭をまたぐらから押しのけた。青くさい精液を下腹部に吐き出し、姿勢を保っていられなくてそのまま幕之内の体に覆いかぶさる。

しばらく二人とも呼吸を整えるだけのけだるい沈黙を貫いていたが、やがて幕之内が口を開いてぼつりと言った。

「何でこんなこと、するんですか。やめてくださいって言ったのに」

あきれを通り越してどこか怒りを感じさせる声だった。

いくら温厚な幕之内でも怒るだろう。さんざん彼を振り回した挙句、力任せに組み敷いて嫌がられても拒否されても構わずに無理に射精させた。

殴ったり蹴ったりするのは種類こそ違うが、これも間違いなく「暴力」と言える。

「いつもこんなことしないじゃないですか。初めて会ったときは千堂さんのことちょっと怖い感じに思ってたけど、話してみたらさっぱりしてて正直な人だったから顔を合わせるのもリングの上で会うのもすごく楽しみでした。でもこんなことされたら、もう普通の顔ではいられません」

「普通、て何や」

久しぶりに人間の言葉を発した自分の声は、ひどく冷たくてかすれていて固かった。

「キサマの普通、通いうんは、何や。そんなもんはワイには分からん」

「分からないはず不是吗。千堂さんはいつも普通に接してくれてたじゃないですか。試合の前はお互いピリピリしてましたけど、普通に素直な気持ちを話してくれたから、余計にやる気が出ました。すごく頑張ろうって思えました。試合の後だって。あれは一生忘れられません。本当に嬉しい一言だったから感動したんです。この人はなんて気持ちのいい人なんだろうって……。なのに、急に何でこんなこと」

言い終わらないうちに腕を伸ばして幕之内の後頭部を強くつかみ、勢いよく唇を合わせる。んん、と不服そうな声がし、頭を左右に振って逃れようとして千堂の手に止められる。たぶん、彼にとっては初めてのキスだ。

きっとこんなつもりではなかっただろう。夕陽の海や美しい夜景の中で、じゅうぶんに気持ちを通じ合った相手とときどきしながらするはずのものだっただろう。

それなのに飢えた獣のごとき男に無理やり唇を奪われて強く噛まれながら吸われて自分の血と精液を味わわされている。一瞬哀れに思ったが、やめる気はなかった。

誰かにそう言われたことは初めてではなかった。

どうして急にこんなことしたの？ 明るくて人懐こくていい子だと思っていたのに。これから頑張っていこうって話したばかりだったのに。

その理由をどうしても想像できない他人は、千堂が両親を亡くしているから、おばあちゃん子で愛情不足だから、つまりは不幸だから簡単に人を殴るのだ、といい加減に納得した。どこかおかしいのはその通りだ。暴力は、自分が不幸でないこと、愛されていること、善良であることを証明するための手段だった。それらを体現するために手を伸ばすことが、それが強さで、この世に自分の居場所がある証だった。

そんなわけの分からない個人的なことを理解などしなくていい。一秒だって耳に入れる必要もない。ただ受け止めてほしい。その体ひとつで、命を惜しまず、怒っても嫌っても疎んじても殺そうとしたって構わないから、壁なんて作らないで、遠ざけないで、ただ受け入れてほしい。どこまでも普通にそれをしてくれるのは、これまでもこの先も、きっとこの男だけだろうなのだろうから。

あごをつかんで口を開けさせ、歯と歯の間に舌をねじ込むと軽く噛まれた。挑発したらよけいに興奮させることくらい分かっているだろう。それでも噛んだということは、千堂

の呼吸を受け入れたということだ。嫌々ながらも乗る、と言っているのだ。

唇を離して至近距離で幕之内の顔をまじまじと見ると、彼は怒ったように目を見開いて千堂をにらみつけてきた。そして言葉もなく首すじに噛みつかれて軽く吸われる。歯を立てられていないから痛みはない。粘膜のあたたかさだけを感じる。くすぐったくてわずかに体をよじると苛立たしげに腕をつかまれる。

さっきつけた噛み跡が残っている手が、その分厚くて小さな優しい手が、他人を拘束するために使われている。

一瞬ぞくりとしたがされるがままにはなっていられない性分だから、幕之内の体を思い切り突き飛ばしてふたたび押し倒す。彼もまた倒されたままにはなっていられず、すぐに身を起こして千堂の両肩をつかんで布団の上に引き倒す。

力を込めて組み敷いてこようとする幕之内の腕を押し返し、低く唸りながらひっくり返そうとするがうまくいかない。腕力だけなら負けていないはずなのにどうしても姿勢を変えられない。惚れ惚れするほどのボディバランスだ。性格の方とはともかく、彼の肉体は確実に暴力に向いている。

幕之内の目にはすでに怒りはなく、無機質な衝動だけがあった。

彼と同じ性だからこそ見分けられる、見覚えのあるその色。

一度火がついてしまったらもう感情は介在しない。互いが壊れても砕けても欲望をぶつ

け合うだけだ。どうにかして上になろうと揉み合っているうちに、前歯をぶつけるようにして唇を押し当ててくる。

それはもはやキスではなかった。愛の行為ではなかった。いたわりや優しさ、分かり合いたいと願う気持ちすらもなかった。押しつけ、引きつけ、貪り食らうだけの、似ても似つかぬ種類の、二匹の獣の凶悪なじゃれ合い。

興奮しすぎて下半身の感覚がなくなりかけている。背すじはぞくぞくを通り越してずきずきと痛む。二度と戻れないほど彼を壊したくてたまらない。嵐の中に引きずり込んでめちゃくちゃにしてやりたい。

口元と粘膜を傷だらけにしながら血と唾液を強くすり合い、浴衣の紐を千切らんばかりにほどき合って乱暴に素肌に触れる。両手で強くつかまれた背中が汗でぬめっているのが分かる。しとどに濡れた胸と首すじを不器用に唇で愛撫していた幕之内の短い髪を引っ張って中断させ、耳に噛みつく。彼は不服そうに首をよじってそれを振り払い、一瞬ためらってから下着の中に手を入れて下腹部に触れた。

指先がかすめただけなのに電撃が走ったかのような衝撃を感じ、うく、と小さくうめいてしまう。千堂が少しだけおとなしくなったことに気をよくしたのか、その太くて短い子供のような指はおずおずと、しかし迷いなく性器を弄り回してきた。

腰が抜けそうなほどの快感だった。同性同士だから見当違いなやり方でこそないが、技

巧があるわけではないしさほど熱意がこもっているわけでもないのに、先走りを巻き込んだ手のひらが敏感な場所を滑るたびに声をあげてのけぞる。快楽に畳みかけられ、ねじ伏せられ、涙すら流しそうになっている。

この感覚には覚えがある。死の夢を見たときに必ず味わう、あの強烈な悦楽だ。心地よさや焦燥だけではなく、恐怖と不安が混じった喜び。全力であらがっているのに敵わず、翻弄されて屈辱にまみれたまま死ぬときの、己が霧消するかのような忘我。

殺されたい、と切に思った。死が欲しい。それは「死にたい」のとは少し違う。死ぬほど我を忘れさせてほしい。彼がリングの上でそうしたように、ねじ伏せて打ち負かして、やがて立てなくなった自分を、最後にはあの驚いたような大きな目で見てほしい。

完全に幕之内の腕に身を預け、不規則にあえぎ続け、足で執拗に畳を搔きながら全身で絶頂を味わう。頭の中は真っ白で、いま自分がどこにいるのかも分からなくなるほど無我夢中だった。

その最中、いきなり手で口をふさがれた。何も考えられなくなっているところだったから、その指を何本か口の中に引き込んでこれでもかと吸ってしまふ。だが指では太さも長さも期待外れに感じて、猫のように喉を鳴らして「不満」を告げる。射精が終わってしまふと指をくわえていることもできなくなり、唾液まみれのそれを吐き出してぐったりと布団に倒れ込んだ。

「……もう、そんな大きい声出すと他のお客さんに迷惑になっちゃいますよ」

精液のかかった顔や体を手の甲で拭いながら、幕之内は上ずった声でそう言った。

相変わらず困惑した顔だが、その目にははつきりとした欲望がある。半端に覆いかぶさったままの姿勢で千堂の太ももに股間を当てているところを見ると、彼もまだ正気には戻っていないのだろう。

しかし何をどうしたらいいものか分からないから先に進めないでいる。このままゆるやかな自慰を続けさせて射精するところを眺めるのもいいが、その程度では絶対に物足りなくなる。もっと剣呑に爪を立て合いたい。消えない傷をつけ合いたい。

のろのろと起き上がって幕之内の頬に歯を立てて吸いつき、血と唾液の匂いのする唇をもう一度味わうと、幕之内は遠慮のない手つきで千堂の顔を押しのけ、耳や頬、首すじに優しく口づけてきた。そのまま仰向けに押し倒され、胸に顔をうずめられる。匂いでもいいでいるのかと思うほど熱心に肌に鼻を押し当てられているうちに、やがて唇が右の脇腹に下りてくる。

彼が何を考えているのかは分かっていた。手術の痕がないかどうかを確かめているのだろう。頭にくるほど心優しい男だ。

身をよじってそのまま両肩に手をかけ、体重を乗せて後ろに体を倒そうとすると、幕之内はあわてたように抵抗してきた。勘のいいことだ、と思った。まだ何をするとも言って

いないし、何かをしにかけているわけでもない。

「だ、だめですよ。その……そんなことしたら、痛くさせちゃいますから」

痛く「させる」、という言い方のおかげで、彼が何を望んでいるかを察した。

「さっきも言いましたけど、ボク女の人とも男の人ともしたことはないんです。やり方も力加減も分かりませんし、何より治療中の体に負担かけられません」

千堂はにやと笑い、限界近くまで勃起している巨大なものを手でつかむ。どうやら氣を抜くとすぐに腰が引けてしまうらしい幕之内は、「だめですってば!」とわめいて悶えた。「本当にだめです。な、何というか……これって人体に入れていいものじゃないと思いますし……いやもちろん子供の作り方くらいは知ってますけど、相手が女性でも男性でも軽率にしちゃいけないことだと思えますし……それにまた蒸し返すようですけど、そもそもボクからそういう関係でもないですし……」

そのとき、彼の声を掻き消すように、扉の外の廊下から猫の鳴き声が聞こえた。

宿の飼った猫だろう。不必要に大きく長い声だから幕之内は逃げ口上も忘れてぎょっとしていたが、何も不思議なことはない。

冬のさなか、徐々に日が長くなり始めるちょうど今ごろに猫の発情期が始まる。性的成熟に達した雌は夜ごとに大声で鳴き、雄を呼び寄せる。あの雌猫はまだ一歳にも達していないが猫の世界ではもうじゅうぶんに大人だ。さっきも落ち着きなく千堂の体に頭を擦り

ついたり爪を立てたりなどしてすでに発情の兆候があった。本格的な成熟に至れば、あとは相手を選んで迎え入れるだけ。たったそれだけの本能的で儀式的な衝動に言い訳は必要ない。

元々は女連れで旅する気でいたから荷物の中にコンドームがあったのが幸いした。取り出したとたん彼の顔にかすかな安堵が浮かんだのを千堂は見逃さなかった。こっちにも男とした経験はないからここからどうしたらいいものかは分からないが、とりあえず袋を破ってコンドームを幕之内の膨らんだ性器に装着することにする。

着けることすら初めてなのか、彼はいちいち指の隙間から覗き込んで「うわ」「ひええ」と声をあげていたが、肩を乱暴に突き飛ばすと熱に浮かされたように腕を伸ばしてきた。「あ、あの」

その声は、どうかしているんじゃないかと思うほどかすれていて聞き取りづらかった。「すごく厚かましいですけど、何言ってるんだって思うでしょうけど、もしよかったら……上にもなっていていいですか」

熱い手で腰を思い切りつかまれながらそう言われ、思わず強くにらみつける。

「い、いえ、ち、違うんです、千堂さんに任せておいたらまたタガが外れたみたいになっ
て無茶苦茶されるかもしれないなんて思ってた……いいいっ!」

その間抜けな悲鳴はおそらく扉の外にまで響き渡ったことだろう。猫の声に負けていな

い。力を入れて腰を下ろし、少しずつ自分の中に挿入していく。幕之内を黙らせるために一気に収めてしまいたかったが、これではとても無理だ。それどころかどんなに頑張っても根元までは入らない気がする。

正直言って、苦しい。痛い。頭や腹を殴られるのとはまったく違う、嫌な種類の衝撃が体の内側から襲ってくる。折られた肋骨が内臓に食い込んだときと似た痛みだ。こんなものに杭打ちされたら死ぬ。確実に。

こっちは限界まで青ざめながら必死で腰を落としているのに、幕之内は明らかに快楽を味わっている様子で身悶えしていた。

自分だけ気持ちよさそうにあえぎながら「だめだって言ったのに」だの「こんなことしちゃいけませんよ」だのと言われても怒りしかわかない。

人生で初めてのセックスがこんな暴行まがいの血なまぐさい代物でかわいそうに、ともはや思わない。

欲望のままに両手で腰を押さえて下から遠慮なく突き上げ、これ以上はもう入らないぎりぎりのラインを軽々破って無理やり奥までねじ込んでくる男に同情心など持てない。

腹立たしくてたまらない。今すぐ同じ目に遭わせて死ぬ思いを味わわせてやりたいのに、何もかも忘れてセックスに夢中になっている幕之内を見ているとどうしてかやめられなかった。

それでも痛みと苦しみと衝撃は容赦なく積み重なり、だんだん力が入らなくなってくる。千堂が動きを止めてしまつて物足りないのか、幕之内はさりげなく体を起こして主体的に腰を動かそうとする。そういうことをされるとよけいに苦しくて動けない。動けないとますます欲しがって奥をえぐろうとしてくる。

苦痛のせいでうめいているのにそれを快楽のあえぎだとも思つたのか、幕之内はなぜだか感激したようにがばと身を起こして唇を合わせてきた。繋がったまま向かい合わせの格好になると角度が変わつてよけいに苦しさが増し、もう歯を食いしばって耐えることすらできなくなる。

声が抑えられない。もしマウスピースをくわえていたらとくに吐き出している。裂けたり出血したりしている感触こそないが、常に限界まで押し広げられているから冷や汗が止まらない。試合でもないのに、耐えたからといって何かいいことがあるわけでもないのに、なぜこんなに我慢しなければならぬのか。

うああああ、とやかましくうめきながら無我夢中で背中に爪を立てて耐えていると、やがて鼻に抜ける切なげ声が聞こえてきて、ああ、やっと終わる、と思った。

幕之内は射精を予告する余裕すらないらしかった。そもそも経験がないから、そんなものが必要だと思つてもいなかったのかもしれない。彼は尻をつかんで自分より重い千堂の体を軽々と持ち上げ、腰を浮かせて馴れ馴れしく恥骨を擦りつけながら一人で果てた。

彼が絶頂を味わっているときの顔にはどこか苛立ちがあり、わけもなく怒りをぶつけられているようにも感じた。幕之内が怒っているところなど見たことがない。だからこそぞつとした。ずっと辛くて仕方なかったのに、解放するのが少しだけ惜しくなってしまう。

互いの荒い呼吸を間近で感じている。胸と胸がくっついているから、横隔膜がせわしく上下するところもよく分かる。下半身はまだ繋がったままで、二度も射精したくせにどういうわけか硬さが失われていないからいまだに苦しさが続いている。

幕之内の体を突き飛ばして離れようにも、腰をがちりとつかまれたままでは簡単にできそうにはない。耳元で吐かれていた気だるげな息がだんだん熱くなっている。手と腕と肩の筋肉に力が入ってくる。

嫌な予感しかない。

自分で襲っておいで文句を言うのもなんだが、この男はセックスの相手にするには容赦がなさすぎるから何度もするのはなかなか辛い。振り回しすぎたせいで多少乱暴にしてもいい相手だと認識されてしまったようだし、このあたりで我に返らせて逃げておく方がいいかもしれない。

「あー……、幕之内」

興奮し始めてからほとんど言葉を発していなかったためか、久しぶりに聞く自分の声か何だか弱々しく聞こえた。幕之内は返事の代わりに明らかに正気でない目を向けてくる。

「ほな、アレや。夜中にいつまでもぐずぐずしとつてもあかんやろ。そろそろ寝よや。キサマも朝早いんやろが。寝不足やと明日も帰れへんで」

興奮して寝たくなくて暴れたくてごねていたのはこっちだというのに、あまりにも白々しい言い分だった。ただの言い逃れにしても苦しいが、幕之内にはこういう常識的な意見が一番効くはずだ。こう言えば彼はすぐに顔を赤らめ、「そ、そうでした。すみません。もう寝ましょう」と言って手を放してくれる。

そのはずだった。そうに決まっていた。のに、腰をつかむ手は少しも緩まない。

「おいこら、離さんかい。早よ寝かせえ。キサマに付き合っとったせいでワイも眠いねん。イカくさくなつてしもたし風呂にも、」

「いい加減にしてくださいよ」

「あ？」

据わりきったその目を見てぎょっとした。ヤバい、と本能が言っている。

「嫌だって何度も言ったのに無理やりしたのはそちらですよね？ 千堂さんはただじゃれついただけのつもりだったのかもしれないけど、残念ながらボクは虎じゃなくて人間なので牙を立てられたらただじゃ済まないんです。それに、本当に初めてだったんですよ、ボクは。初めてはこの人になつたらいいなつてうっすら考えてた女の子もいるんです。勇

気なくてまだ告白もできてませんけど、ずっと前から好きな人なんです。なのいきなりこんなことまでされて、明日どんな顔で母さんと梅沢くんに会ったらいかが分らないくらい顔も体も歯形とあざだらけにされて、さんさん好きに弄ばれて、飽きたからってぽいと放り出されて……」

「全部ワイのせいにするな！ 途中からはキサマもノリノリやったやろが！」

とはいえ、悪いのは間違いないこっちだ。嫌がっている人間の体に触るのは暴力なのだから言い逃れのしようもない。警察に突き出されても仕方ない。どう抗弁しようか迷っているうちに幕之内はますます目を鋭く光らせ、強すぎるくらい力の力で両肩をつかんできた。「安心してください。ボクは別に怒ってません。これからはもう、千堂さんを犬だと思うことにしましたから。もちろん千堂さんが『浪速の虎』と呼ばれていることは知ってますけどトラなんて動物園でしか見たことないですし、うちには犬がいるのでその方がイメージしやすく。でもきつと似たようなものですよね？」

何が、と聞きたかったが声にならなかった。

「子犬をもらったときにしつけのことを色々調べたんです。犬の問題行動を直すにはしてほしくないことをしたときに叱るだけじゃなく、ちゃんと我慢できたときに褒めてあげるのがいらいですよ。うちでも実践してるんですが、今のところなかなかうまくいきません。だから、千堂さんにも同じようにしてあげます。どれだけ嫌だって言っても分から

ないならそうするしかないですし」

「……舐めとんのかキサマ？　ワイを犬やと？」

目の前が屈辱で黒く濁り、思わず幕之内の首を絞めようと……したが、挿入されたままの性器がぐ、と奥に入ってきたせいで動きが止まった。

ずいぶん長く会話していた気がするのになんか萎えていない。彼は苛立ちで興奮するタイプなのかもしれない。これだけの大きさのものに中を穿ってこられると、まともにものを考えることすらできなくなる。

「あ、今、ボクに手を出そうとしたのを我慢しましたね。えらいですよ。おやつとか持っていないので言葉でしか褒められなくて申し訳ないですけど」

「黙っ、とれ」

相変わらず苦しくてたまらないが、大きさと形に慣らされたのか少しだけスムーズに上下できるようになる。さっさと射精させて体を離して拳で分らせてやりたい。そうしないと気が済まない。しかし体重をかけてさかんに腰を振ろうとしても、別の角度から中をえぐられる形になるのが辛くて姿勢を戻さざるをえなくなる。

「今のも、ちゃんと我慢しておとなしくできててえらいと思います。やればできるじゃないですか。その調子ですよ千堂さん！」

彼は千堂を煽っているわけでもからかっているわけでも意地悪を言っているわけでもな

い。純粹に成長を喜んでいるのだ。もはや怒る気力もなかった。誇り高き虎を子犬扱い。自業自得とはいえ、挿入を許したのが間違いだった。何もできずただなすがままにされている自分が情けなくて仕方がない。

下から突き上げて揺らしているだけの刺激では我慢できなくなったのか、幕之内はもたもたした手つきで自分のものを千堂の体内から引き抜き、仰向けにして組み敷いてきた。

無慈悲に中を押し広げていたものがなくなるとようやく息がつけるようになる。だが同時に何となく物足りなくなる。空気を窺うように足先を幕之内の太ももに触れさせると、彼は何の躊躇もなく片脚を抱えて腰を進めてきた。あぐ、という苦しい声とともに、ふたたび冷たい汗が噴き出てくる。

態勢と角度が変わって堪えきれなくなったのか、幕之内は眉根を寄せながら短くあえいで三度目の射精をした。

「……？」

今度こそ終わるかと思ったのに終わらない。脚を持ち上げられたみっともない姿勢のまま、相変わらず硬さを保っているものに容赦なくえぐられ続けている。「よう続くもんやな」と軽口を叩いてみせても終わらせてはくれない。自分の男としての自信とかプライドとか、そういうものにヒビが入りそうになる。

「痛く、ないですか？」

だんだんセックスに慣れてきたらしい幕之内は、切なげにあえぎながらそうつぶやいた。はつきり言って数十分前からずっと痛いのがこっちにもライバルとしての意地があるから言えない。だが痛くないから好きにしているなどと言ったらさらに大変なことになりそうだから嘘もつけない。

「あの……実はさっきから気になってたんですが、もしかしてこれ、ボクのが痛くてこうなっちゃってるんじゃないですか？　ずっと元気だったのに、何だかすみません」

完全に萎えきっている性器を利き手でつかまれ、腰がびくと震える。謝られても困るし触られても困る。こんなに苦しくて辛いのに、体はさっき彼に気持ちよく射精させられたことをおぼえているから無邪気に反応する。手の中のそれが膨らみかけていることに気づいたのか、幕之内は照れたように笑って「よかった」とつぶやいた。

「いやほんと、よかったです。ボクだけ気持ちいいんじゃないと申し訳ないですから」「調子乗りよって」

それでも触られていると強い異物感がまぎれるのは事実だ。じんとしびれる快感が全身に広がって、深くうがたれている奥まで甘く重くなっていく気がする。気持ちいいとまではまだ言えないが、とりあえずもう不快ではない。

「おとなしくできてえらいですよ。ずっとそうしてくれたらいいんですけど」

本気で殺してやろうかと思った。しかし足を広げさせられてのしかかられて犯されてい

る状態では結局何もできない。

「でも、千堂さんはやっぱり自分の好きに振舞うのがいいんじゃないかと思うんです。ポクに限らず、巻き込まれた人はただじゃ済まないのでゾワゾワしますけど、かといって普通になってしまふというところが失われるような気がしますし、そうなるとボクも寂しいです。千堂さんのそういうところ、本当はちょっとワクワクしながら見てましたから」

三度も射精したからか、やけに余裕がある。 からかってやりたかったがこっちは余裕がない。遠慮なくしごかれ続けている性器が限界まで張りつめ、先端から涙をこぼしている。これ以上奥まで行けないところまでねじ込まれたものを離したくなくて締めつけてしまう。

殺してやりたい。しかしそれ以上の力で殺されたい。今もじゅうぶんひどい目に遭っているが、それだけではなくて、もっと無茶苦茶に「死」を味わわせてほしい。

幕之内は腰を動かしながらなおもわけの分からないうことを話し続けていたが、千堂がセックスに集中し始めたのを見ると急に口を閉じて苦悶の表情を浮かべ、全身の筋肉に力をみなぎらせながらまた絶頂した。

これで終わらないことは薄々分かっていた。信じがたいことだが、まだ硬い。たいした休憩も入れずにまた腰を打ちつけ始め、犬のようにははっと息を吐きながらだらしない表情で見下ろしてくる。

「あ、あの、」

返事の代わりに中を締めつけると、幕之内は背中と腰をびくと震わせ、んあ、と可憐にあえいだ。

「……し、よかったら、後ろ向いてもらえませんか。ずっと膝でを脇腹圧迫してると危険だと思えますし」

遠慮がちにそう言いながら折りたたまれていた片脚を浮かせ、負傷箇所への負担をゆるめる。氣遣ってくれるのは結構だがこれでやめるという選択肢はないらしいのが可笑しかった。いや笑っている場合ではまったくくない。この調子だと一晩じゅう犯され続けるかもしれない。

いったん抜かれ、今までよりもさらにぞんざいな手つきでうつぶせにされて尻だけを持ち上げさせられ、待ちきれないとばかりに一氣に貫かれる。ときれときれの自分の悲鳴が他人事のように耳に響く。まぶたの裏がちかちかする。

この態勢は、さすがにきつい。精神的に。これでは猫の交尾だ。体重をかけて背中に覆いかぶさってこられているから胸が圧迫されて苦しい。唇と舌にせわしくうなじを探られ、ときどき吸われて屈辱でおかしくなりそうになる。腰だけを固定されて挿入されているなんて、自慰の道具のように扱われている気がして不愉快だ。

……のに、今までで一番よかった。慣れてきたのか角度の問題かは分からないが、「不

快でない」を通り越して「気持ちいい」に達している。こんな凶悪なものを好きに打ちつけられて気持ちいいなんてどうかしている。自ら腰を持ち上げて誘い、もっと蹂躪してくれとねだる自分の姿を受け入れるのが辛い。辛いのもっとしたい。それどころかもっと辛くなりたい。

「千、堂さん、声大きいですよ。外に聞こえます」

びくびくしているふりをしていても彼は腰の動きを止めない。よほど快楽を貪ることに夢中になっているのだろう。

しかしまだ足りない。もっと我を忘れさせたい。あの試合でのように、生死をかけて「これ」に没頭してほしい。セックスごときで死にはしないだろうが、同じくらいに気持ちよくなれる。「死」と同じくらいに殺してほしい。

ああ、そうだ、ずっと彼に殺されたかった。この爪を、この牙を恐れず、本当の本気で打ち倒してほしかった。それができるのは彼だけだ。絶対に「殺る」側になると決めてリングに上がっていた千堂の姿はさぞ恐ろしかっただろうに、彼はいつだって恐れるどころかやり返そうと向かってきてくれた。そのことが嬉しかった。あらゆる恐怖を跳ね返す彼の目を見るのが好きだった。

薄目を開け、押さえつけられているせいでうまく動かない首と肩をひねって幕之内を振り返る。彼もずっとこっちを見ていたのか、すぐに目が合って恥ずかしそうに笑った。

そのあまりに普通に普通に優しげな目を見たとき、初めて自分の欲望に疑いを抱いた。

十二歳のころに魅せられたのは、本当に「死」の夢だったのか。

幕之内のビデオを見たときに予見したのは、本当に自らの「死」だったのか。

拳を彼の体にめり込ませるたび、そして彼の拳が体に食い込むたびに感じたあの震えのような怯えのような歓喜のような感情は、本当に「死」への畏れだったのか。

さんざんあらがった挙句に彼に息の根を止められたいという浅ましい欲望は、本当に「死」を恐怖する感情から来たものだったのか。

強く目を合わせたまま、痕が残りそうなほど腰をつかんでいる彼の手を取る。その手は汗と興奮のせいできっとりと湿っていて熱かった。

彼の拳に誘引されたのは、千堂を二度も殴り倒したものだからではない。

危険な失神をさせられたからでもない、肋骨を折られて死にかけたからでもない。

自分というわけの分からない人間を心底理解し、痛みも構わず全身で受け止め、肯定し、奮い立たせ、殺されかけても殺しかけても遠ざからないでくれた人の手だからだ。

十二歳のころの千堂は、無謀に嵐に突っ込んで死にたかったわけではない。どれだけ自分に困らされても逃げずに存分に相手をしてくれて、何度だって立ち上がらせてくれる誰かを欲していた。ただそれだけだった。

悲しいほどにシンプルな、子供らしい願いだった。

「ど、どうしました？ 痛くなっちゃいましたか？ すみません、加減がよく分からなくて」
そう言いながらもまだ動いている。ここまでするともはや「存分に相手をしてくれる」
どころではない。相手をさせられているに等しい気がする。彼のその素直さが、純粹さが、
異常なまでの律儀さが、力強さが、世間と折り合えないまっすぐさが愛しくて愛しくて少
しだけ笑ってしまう。

「幕之内」

「は、はい？」

「キサマがスタミナ自慢なんは分かったが、次で最後にせえ。もうあかん。ケツが使い物
にならんようになってまうわ」

「す、す、すみません！ できるだけ早くしますから」

パニックになって赤面しながらも体を起こし、セックスを再開する。

一応尻を思いやろうとする気持ちはあるのか、さっきまでのように杭を打つような強さ
はない。代わりにぐいと前に乗り出し、恥骨を擦りつけるようにして内壁をこね、自分で
自分を追い詰めていく。そうして奥を突かれるたびに尻が跳ね上がる。腰の奥がぞくりと
し、熱が溜まっていく。ふたたび膨らんだ性器が別の生き物のように痙攣してより硬くなっ
ていく。

大波のような快楽の予感に打ち震えているうちに、頭のとっぺんから足先にまでびきと

芯が通って布団の上に精を放ってしまう。ああああ、と叫ぶ自分の声が、まるで発情中の猫の声みたいに聞こえた。

射精を終えてぐったりと布団に倒れ込んだ千堂に少し遅れて、幕之内がもはや何度目かも分からないくらいの絶頂を迎えた。今までで一番強く深く貫かれて失神しそうになる。背後の頭上からあえぎのようなうめきのような鳴咽のような声が断続的に聞こえてきて、彼にとってもおそらく最後なのだろうと思わせるほどの切なげな快楽の余韻が伝わってきた。

折り重なったまま息を整えているうちに、挿入され通しだったものがようやく引き抜かれた。これ以上入れられていたら骨格ごと変わってしまいそうだ。

「あの、千堂さん？」

もたつきながらも後始末を終えたらしき幕之内が、気まずそうに口を開いてこう言った。「体、大丈夫ですか？　ボクもう途中からわけ分からなくなっちゃいまして……無茶なことさせたんじゃないかと心配で」

どこからどう見ても大惨事やろが、と返したかったが言わなかった。

元はといえば自分のせいなのだし、彼に対して種々の暴力を振るったのも事実だから文句など言えない。

それに、最後までこの牙に怯えられて逃げられるよりはこの方がずっとよかった。彼な

らきつとそうしてくれると思った。だからいいのだ。そのためならどんな目に遭ったって構わない。どんな目に遭わせてもきつと後悔しない。

きっちり浴衣を着直して正座している幕之内の太ももに触れ、腕をもう少し上に伸ばして紐の結び目に触れ、手をつかむ。

「キサマ、初めてや言うたな」

「は、はい、そうです。ですから今まで知らなかったんですけど、エッチなことってすぐ疲れるんですね。練習とか試合ほどじゃないですがなかなかの、」

「好きな女がおる言うたな」

言葉を遮ってそう聞く。すると幕之内は我に返ったように息を呑み込み、頬と耳を赤くした。

「そ、それは……そうです。で、でも、あのときはちょっとおかしくなっていただけなので忘れてください。恨み言みたいなこと言っちゃいましたけど、乗ってしまった以上ボクにも責任が、」

「その女とやる予定あるんか」

またしても最後まで言わせずに聞く。さすがの幕之内もむっとしたような顔になり、優雅に裸で寝そべる千堂をにらみつけてくる。

「それ、答える必要ないですよね？　うちのジムの先輩方みたいなこと聞くのやめてもら

えませんか」

「洗いざらい吐けとは言うとらん。ただ、キサマを死ぬ寸前まで味おうた身として、ひとつ言うておかなあかんことがあんねん」

幕之内は黙って続きの言葉を待っている。ふてくされた顔の中に、どこか怯えがある。あえて何でもないように振舞ってはいるが、これから自分たちの関係がどうなるのか心配でたまらないのだ。

もしかして、ボクら付き合うことになるのかな？三時間前までは考えもしてなかったし、今でも愛し合ってるわけじゃないのに？というかこの人と付き合って無事に人生終えられるのか……？いや、迷っちゃだめだ、あんなことしちゃった以上、責任取らなきゃいけないだから。

そんな心の声分かりやすく伝わってくる。

「一回にせえよ」

「……へっ？」

その素っ頓狂な返事には反応せず、にやりと笑って先を続ける。

「それとな、無理やりひっくり返すのはやめえ。キサマの馬鹿力で押さえつけるのもあかん。相手が普通の女やったら死んでまうで」

「えっと、それ、何の話なんでしょうか……？」

なあ、という甘えた鳴き声が扉の外から聞こえた。さっきの雌猫だろう。本能に支配される時間は終わったのか、ずいぶん余裕のある声だ。

それに負けないように、真似をするように、しかし少しだけ傷つきながら、余裕の笑みを浮かべる。

「察しの悪いやつだな。普通の人間はあんなデカいもん入れられて五回もやったら死ぬ、ちゅう話や。うっかり好きな女を殺しかけて逃げられんようにせえよ」

「しませんよそんなこと！」

顔を真っ赤にしてわめく幕之内を見てかかか、と笑い、のろのろと体を起こして浴衣を羽織って立ち上がる。死んでも顔には出さないが、尻も腰も股関節も太ももも脇腹も腕も背中も首も何もかもが痛い。試合後に味わう筋肉痛そっくりだ。たかだかセックスで全身疲労。自信がなくなる。

「だ、大丈夫ですか？ 何だか歩みがぎくしゃくしてますけど……」

「はん、こんなもんたいしたことないわ。風呂入ってくるさかい、先に寝とれ」

「いえ、ボクも後で入りますからまだ起きてます。体じゅうべたべたですし」

ほうか、と気のない返事をし、一步一步注意して踏み出しながら風呂場へ向かう。気を抜くとうめきそうになるので必死の形相で風呂場へ向かう。やっとの思いで脱衣所に足を踏み入れると、後ろからそっと肩を支えられた。

「……何のつもりや、キサマ」

「……ほっとけませんよ、こんなの見ちゃったら。嫌なのは分かりますが、今だけ我慢してもらえませんか」

自分たちはさりげなく互いを気遣い合える関係ではない。意地を張り合って、格好いいところも格好悪いところも相手にぶつけ合って、受け止め合って、どちらかが受け止めきれなくなったときによりやく息をつけるような間柄だ。それを好敵手という。たぶん、友達ともいう。十二歳のころの千堂が二番目に欲しかったもの。

そうして無言で肩を預けているうちに、なし崩し的に一緒に入浴するはめになる。体を洗い合っていると互いを貪らずにはいられなくなる。

これってやっぱり付き合っていてことなのかなあ、と言いたげな困った表情を浮かべている幕之内の唇に歯を立てようとして、やっぱりやめて優しく吸う。あまりに複雑で個人的な、激しすぎる恋情を伝えるために。一番欲しいものを長く味わい続けるために。決して手に入らないものを仰ぎ見るように。

これが最初の失恋だった。二度目はきつとすぐに来る。三度目は思わぬ形でやってくる。四度目も、五度目も、いつか必ず。

避けることなどできない。

自分はそのたびいつも無邪気な獣のふりをしながら少しだけ傷つき、それでも無邪気でいるためにしたたかに振舞うようになるだろう。

この報われぬ恋のためだけに、飢えようと手足がもげようと頭を半分吹っ飛ばされようと前へ進まなければならぬ地獄の行軍に身を投じるようになるだろう。

よどんで腐った生の泥濘でもがき苦しみながら、「死」に憧れた青すぎる時代を懐かしみながら、あの日、この夜、骨の髄まで味わわされた恋の味を、死ぬまで反芻し続けることだろう。

誓願

Looking for Nothing

何度かやられた、なんてものではなかったことは、自分が一番よく知っている。

大振りになったところを迎えうたれて気が遠くなりかけ、そんな様子をもの言いたげに見下ろされて激昂し、ロープをつかんで立ち上がって向かっていこうとして柳岡に止められる、という一連のルーティンを一週間のうち何度繰り返したか分からない。

大事な再起戦の前なのにわざわざあんな強いと呼んでくるなんて余裕ですねえ、と記者に言われ、会長や柳岡どころか練習生にすら心配されても、絶対に逃げるわけにはいかなかった。

自分でスパarringパートナーに指名したのだから、というだけではない。誰が相手だった逃げたくない。しかしその男は特に逃げたくない相手で、少しの弱みすら見せたくないから極力一緒にいないようにしていた。

それでも沢村竜平は旧知の間柄だ。旧友とは言えないが、おおむね似たような少年時代を送り、おおむね似たような経緯でプロボクサーになったという点でも共通点がある。だからというわけではないがだんだん無視ができなくなって、一人で大阪に来てジムに寝泊まりしながらスパarringを繰り返しているだけの沢村をからかったのが始まりだった。

沢村はひねくれた不器用な男だが、会話が成立しないわけではない。頭も悪くない。それどころか他人を観察することは千堂より得意で、柳岡が止めるタイミングを早々に見定めてストップがかかるぎりぎりまで千堂を殴り続けたり、ジム内での細かな人間関係を察

知して身に降りかかるトラブルを避けたりもできる男だ。千堂が何を不安に思い、何を嫌がるかをよく分かっているから不愉快な気分にはさせられるが、わざとなので腹も立たない。そうして徐々に距離を詰めていくと、互いに話していて楽しい、というほどではないが、つまらなすぎるわけではない、という微妙なラインに収まる。

まあ、これくらいの関係性がちょうどいいのだ。本番の試合でもないのに熱くなりすぎて倒して倒されを繰り返し、意識が薄れかけているときに柳岡があわててストップをかけ、フィニッシュブローのモーションに入りにかけていた沢村が舌打ちをして背を向け、頭の中が屈辱でいっぱいになっている千堂をあざ笑うでもなく淡々と「今日はこれで上がりだな。飯にでも行くか」と言い放つ程度の距離感が。

沢村が食事に誘ってくるのは千堂を倒したときだけで、逆に千堂に失神させられたときは無言で奥に引き上げてしまう。どちらにしろ一緒に食事などしないので結果は変わらない。アホかつ、なんでキサマと仲良う飯食わんとあかんねん、と答えてはいるが、本当の理由は減量中だからだ。

試合自体が久々だからか、やりすぎなほど絞っている気がするのほとんど体重が落ちない。よく沢村にカウンターをもらってしまうものも減量がきついせいだ、と自分では思っている。

「沢村くんは今日で最後やったな。ほんまおおきに」

ヘッドギアを外して息を整えていると、柳岡が沢村のグローブを引き受けながらそう言った。

「お互いムキになりすぎなところもあったようだが、最後まで真面目にやってくれて助かったわ。また頼むで」

ムキになりすぎ、のところ、その場にいた千堂以外の全員が沢村の横顔をちらりと見る。沢村は無言で頭を下げ、反対側のコーナーにいる千堂のそばを通してシャワールームへと入っていった。

このまま名古屋に帰るにはもう遅い。バイクで来ているらしいから新幹線のダイヤは関係ないが、ダメージがある状態で普通運転はしない。ということは、今夜まではジムに泊まらないとならない。

千堂はため息をつきながらこの一週間腫れっぱなしの頬を掻き、沢村が寝起きしている部屋に向かった。

「何の用だ」

ノックもせずに中に入ると、畳まれた布団に肘をついてくつろいでいる沢村の姿が目に入った。

「用なんぞ別にあらへん。ちょっとした詫びや。キサマいつも飯行こ飯行こうるさいやろ？誘ってもらてすまんがワイも忙しいねん。大阪じゅうの女がワイを取り合うてしめて予定

が一年先まで埋まっとってな」

「減量だろ」

沢村は無機質な調子でそう言い、入り口にもたれかかっている千堂をじろりとにらんだ。
「誘ったのは嫌がらせだよ。お前、減量中は肉の夢ばかり見て聞いたからな」

「食う肉とは限らんけどな」

「食う以外の肉なんてねえよ」

「はん、下種なやっちゃな」

「下種はそっちだろうが」

低次元な悪態をつき合いそうになったところで、手に持っていたものを差し出す。ごく普通のカップ麺だ。減量中の今なら最上級のご馳走に思える。

「何だよこれは？」

「飯に付き合われへん詫びと、スパーに付き合うてもろた礼や」

「これがか？　たいそうな礼だな」

「そのうちまた別のことでも返すさかい、とりあえずこの豪華三点セットで我慢せえ」

もう片方の手に持っていた魔法びんと割り箸も一緒に渡す。もちろん自分のぶんはない。うらやましくてたまらないが、こんなところでインスタントな欲に負けると試合ができない。なってしまう。ただでさえ幕之内に二度負けたことで「階級を上げては」と言われるこ

とが多くなってきた昨今だ。再起戦で減量に失敗したらフェザー級に留まりづらくなる。「遠慮のう目の前で食うてええで。言われんでもそうするやろけどな」

その場にあぐらをかいて座り込み、沢村がカップ麺に湯を注いで割り箸を割るさまを余裕ぶって眺める。しかし腹の虫が鳴り始めるのだけは止められない。千堂は音をごまかすべく「あー！」と叫び、急いで立ち上がった。

「何だよるせえな」

「見なあかんテレビ思い出したんや。ワイはもう行くで。あとは一人で楽しゅうやれや」

「何の番組だ？」

「……そら、試合や。誰かの」

「誰かって何だよ」

嫌がらせなのか、やけにしつこい。沢村はテレビ云々がこの場から立ち去る言い訳なのを察しているのだろう。

「そういや、この間フェザーのタイトルマッチがあったな。あれのことか？」

そんな一週間も前の話やろがっ、もう何度も見とるわアホっ、と返しかけたがこの男には言いづらくて言えなかった。沢村にしてもただすっとぼけているだけで、絶対に間違いないく見ている。同じ階級の王座がかかった試合なのだから見ていないわけがない。それどころか何度も巻き戻して見直して研究を重ねているだろう。数日すでにビデオテープ

がすり切れる寸前までいった千堂ほどではないにしても。

「そや、その試合や。ここんとお前の相手するのに忙しゅうてまだ見とらんや。あのベルトは早よ取り返さなあかんさかい、しっかり見とかんと」

「まだあのチャンピオンに勝てる気でののか？ おめでたい野郎だな」

「ずずず、と音がし、黄色っぽい麺が沢村の口の中に吸い込まれていく。その様子がスローモーション映像になって目に入ってくる。空腹も禁欲による苛立ちも何もかも忘れ、頭が真っ白になる。

「分かってないなら言ってやろうか？ 今のお前は負け犬だよ。本気でベルト取り返す気だったらいつまでも呑気に休めるはずがねえ。二度も同じ奴に負けて刃向かう気力もなくなっただんじゃねえのか。やる気あるのかよ」

「おう、いまキサマをやる気ならあるで。リング上がれや」

沢村はゆっくりとカップ麺を床に置き、馬鹿にしたように笑った。

「はっ、いいのか？ あのトレーナーが帰ってたら誰もお前のお守りをしてくれる奴は誰もいねえんだぞ」

「それからこっちのセリフや。明日朝イチで帰るんやったな？ 五体満足でバイク乗れるとええなあ、沢村？」

じんわりとした懐かしさが体を包んでいくのが分かった。

この空気を味わうのは久しぶりだった。こんなにもスムーズに、いっさいの良心の呵責なく暴力に移行できるのは一種の才能だろうと思う。まったく役に立つことのない才能だが、それだけが取り柄でも許されたこともあったのだ。千堂と沢村はその時代をほとんど同時に生きた。そして今では、そんな取り柄を一度も持ったことのない男を自分たちの王として載っている。

「どうしたよ千堂。こっちはグローブなしでもいいぜ」

沢村が凶悪な笑顔を浮かべたまま立ち上がると思ったそのとき、遠くから場違いな声が聞こえた。

すみませーん。どなたかいらっしゃいますかー？

「何だその顔は。ビビってんのか？」

「……あれが聞こえとらんのか、ドアホ。ジムに客が来とるんや。そこでおとなしゅう待つとれ」

ずっと殺気を鎮めてきびすを返し、急いで正面へと向かう。

さっきから「すみませーん」と繰り返している声は若い女性のものだ。しかしがやがやしているから集団。男の声も混じっているから男女の集団。顔を見せるよりも前に柳岡が応対し始めたらしく、騒がしさは多少収まっている。こういうたぐいの突然の来客は、だ

いたいサインが目当てだ。試合前はシャットアウトしているのだが、来てしまったものは仕方がない。

一通りサインと握手を終えて部屋に戻ると、沢村はすっかり毒気を抜かれた顔でラーメンの汁をすすっていた。

「律儀なことだな。王者でもねえのに」

「ワイらはプロや。人気は飯の種やろが」

「ファンの女を食いたいだけだろ」

いっそう高くあごを上げ、最後の一滴までスープを飲んでしまうと、とん、と軽い音を立ててカップを畳の上に置いた。唇をぐっと曲げた、つまらなさそうな顔をしている。

「何や、どつき合わんでええんか？」

「白けちまったよ。しばらく見ねえ間に普通のつまんねえ野郎になりやがって」

「王者には王者にふさわしい振る舞いいうのがあるんや。今はまあ、幕之内にベルトを預けとるが、そのうちまた巻くことになるて決まっとるやろ？ その日がくるまでワイはずーっと王者として振る舞わなあかんちゆうことや。タイトルに縁のないキサマには分かんやろけどな」

「ベルトの問題じゃねえよ。お前はただ飼ひ慣らされちまっただけだろ。お前をちやほやしてくれる奴らとあのトレーナーと、『いい子』のチャンピオンに」

立ち上がって布団を敷き、寝る準備を始めた沢村を少し苦々しい気持ちで眺める。

沢村は本来理性的な男だ。頭が悪いわけではないし、周りもよく見えている。それなのに一度壊したくなったら相手も自分も粉々になるまで暴力をやめられない。

千堂もまた彼と似たタイプの人間だからこそよく分かる。それは自傷行為に似ている。人を傷つけ、遠ざけ、徹底的に孤独になりきってもまだ足りない。「死」が欲しいのだ。自分が丸ごとなくなってしまう死が。それもただ単に死にたいわけではなくて、世界や誰かを巻き添えにしないといられないから暴力という行為に至る。

不幸なことにボクシングを始めても沢村は変わらなかった。彼は相手に苦痛と恥辱を味わわせるためなら何でもした。千堂のように勝利へのこだわりも持たなかったから反則負けもいとわなかった。威圧や威嚇をして従わせるよりも本物の痛みを与えることの方が優先された。そのありようは獣ではなく残酷な人間そのものだった。動物というものは知能が高くなればなるほど行為よりも相手の反応に喜びを見出すようになる。

そんな「人間」を飼い慣らすなんて不可能だ。ジムもトレーナーも唯一の味方の恩師でさえも沢村を扱いかねている。反則を繰り返しているせいで周囲にも受け入れられていない。対戦相手には恐れられ憎まれ遠ざけられるだけで、互いに尊敬し合えた経験もない。けれど、もし彼なら？あの「いい子」のチャンピオンなら？「いい子」なんかの一言で済ますにはあまりに大きすぎる存在のあの男なら、もしかしたら。彼の顔がちらと頭をよ

ぎったとたん、自然と口が開いてこんなことを言っていた。

「キサマもタイトルに欲出したらどないや、沢村」

「日本タイトルのこと言ってるのか」

「そや。もう遠すぎる話でもないやろ。一位が負けたんやったらそろそろキサマの番や。ベルト巻いてみたないんか？」

それを口にしたとき、どういうわけだかすかに嫌な気持ちになった。

軽々しく沢村をそそのかして本当にベルトを奪われたら、と不安になったわけではない。沢村が幕之内に壊されたら、と心配したわけでもない。彼にとって手の届くものであることは間違いない。可能性はじゅうぶんにある。だからこそ罪悪感を覚えた。ついでに嫉妬も。意気揚々と挑戦できることがうらやましいような、それを認めるのは癪なような。

千堂のそんな複雑な心情を察したのか、沢村はあざ笑うようにこう答えた。

「オレが勝つとは思ってないツラだな」

「ほお？ ワイのお墨付きが欲しいんか？ 自信ないんなら経験者として相談に乗ったってもええで」

「お前に手の内明かすわけねえだろ。あのチャンピオンが負ける姿なんか想像もできねえ奴によ」

「手の内、ちゅうことは戦ふこと考えとるんやな。ほんならいちいちしょうもない挑発すな。」

實際、幕之内はそこそこ強い。それを認めるところから始めんといくらキサマでもほんまに負けんで」

「お前みたいにか、千堂？　みじめに二回も負かされて、あの王者に飼い慣らされて頭上がらなくなったもんな。あれだけ尻尾振ってりゃ二度と立ち向かえなくなるだろうよ」

くくく、というわざとらしい笑い声が狭い部屋の中に響いた。

分っかりやすいやっちゃん、と心の中でつぶやく。千堂を怒らせて手を出させようとしているのは明白だから腹も立たない。本気で怒りを買って殴りかかれて、誰かと死に至るまで殴り合えたら、おそらく沢村はそれで満足なのだ。

ボクシングでなくなっちゃいい。場所もどこだっていい。彼にとっての言葉はそのためのもので、どんな言葉も本心からのものではないし、言葉のやりとり自体にも意味がない。うんざりするほどに自分と同類だ。いいや、「同類だった」だ。

「キサマがタイトル獲れるかどうかはキサマ次第や。一度てっぺんの景色見てみい。人生変わるかもしれないで」

そう言うのと強めの舌打ちをし、沢村はさっさと布団に潜り込んだ。

「何や、寝るんか？　まだ話の途中やで」

「うるせえんだよ。一瞬ベルト巻いたくらいで上から目線で説教しやがって。もう帰れ」
「そらすまん。王様の気分も知らん人間の気持ちはワイには分からんさかい」

返事もない。こうなってしまうてはもう貝と同じだ。

親切にも明かりを消してやって扉を閉め、帰り支度をしてジムを出る。

三月の夜の空気は冷たく、街にはビル風が吹き荒れ、まだ絞りきれていない体が寒さのあまり悲鳴をあげる。

久しぶりに味わう感覚に震え上がり、あかん、さっぶいわ、と声に出してつぶやきながら自分で自分を抱きしめる。前にこの寒さを味わったのがどれくらい前のことだったのかを指折り数えていると、沢村の言葉を思い出して少し暗い気分になった。

「本気でベルト取り返す気だったらいつまでも休めるはずがねえ」。

引退するんでっか、と人に聞かれたことがある。

いつまでぼけっとしとんねんロッキー、早よ幕之内からベルト取り返してや、と無邪気に責められたこともある。

燃えつき症候群ってやつちな、としたり顔で評されたこともある。

こない長く休んどうたらリングに上がれんようになってまうやろ、と心配されたこともある。

いくら休養中でも忘れられたらのちのちの客入りに影響するでしょう、少しはおおやけの場に姿を見せた方がいいんじゃないですか、とビジネスの観点から忠告されたこともあ

る。

やっぱりダメージが大きかったのね、でもあれほどボクシングが好きなんだからいつまでもくすぶってはいられないでしょう？、と言うただけにわざわざ東京から会いに来られたこともある。

千堂は、それらには必ず自信ありげににやっと笑って「まあ黙って見とれや」と答えることにしている。「虎には『虎視眈々』ちゅう言葉もあるんやで。噛みつくしか脳のないアホと一緒にせんといてや」。

虎視眈々。もちろん漢字では書けないし、意味だって柳岡に教わっただけでフワッとしか知らない。

だいたい、引退するなんていう選択肢ははなからないのだ。ボクサーでなくなったら千堂には何もなくなる。生の実感も死の実感も味わえず、中身が抜け落ちて空っぽになったまま生き続けなければならなくなる。できれば万全の状態で続けていつか幕之内を倒したから、性に合わない長い休養期間を設けているというだけ。別に休みたくて休んでいたわけではない。

今すぐになでも、とはやる気持ちはもちろんある。目の前においしいものがあるなら早く口にしたい。しかしそれは減量中に目にするカップ麺のパッケージや気楽なセックスの誘いと同じで、衝動的でインスタントな欲だ。長期政権どころか早々に東洋や世界に飛び出

していきかねない幕之内と真正面から対峙するにはこっちにもそれなりの戦績と自信が必要になるはずで、

二度も同じ奴に負けて刃向かう気力もなくなっただんじゃねえのか。

寒さのあまり小さくしゃみをし、今度は「やかましいわ」と低くつぶやく。

千堂は自分のことをポジティブな人間だと思っている。うじうじ悩むことはないし切り替えも早い。どうしようもない問題はどうしようもないものとして放っておき、今できることをできる限りやろうとする自分がそれなりに好きだ。前向きでいたいから。前向きになろうとなるまいと生は苦しく続いていくものだから。

だがいま自分に言い聞かせるように並べ立てた言葉はどう好意的に解釈しても言い訳にしか聞こえない。よりによってこの自分が言い訳を必要とする状態にあることも気に入らない。

刃向かう気力がない、なんてことはないはずで、当然ながら彼に飼い慣らされたつもりだってないはずで、それでも体の奥底に深く刻まれた畏怖の気持ちは、ただ自分が前向きでいるだけでは解消できない気がして仕方がない。

ふと足を止め、夜道を振り返ってジムのある方向に視線を向ける。もし幕之内が沢村に

負けてベルトを奪われたら、世界はどんな風になるだろう。どんな気持ちになるだろう。きつと旧知の間柄として素直に沢村を讃えるもするだろう。自分たちが戴く王者が沢村に変われば、目指すものも変わるに違いない。

しかし地に伏した幕之内を見てどう感じるかは、まだぜんぜん分からない。

沢村を負かした幕之内を見たときには最初から分かっているのだ。彼の強さへの信頼、彼の人間性に対する敬意、あのときに刻み込まれた畏れ、そのことを誇らしく思っている自分と、彼自身への親しみと、互いに滅茶苦茶にし合った記憶と、限界以上に充足し合った幸福な苦痛と、それらすべてを「もう一度」とどうしようもなく求め焦がれる気持ちが膨れ上がり、取り返しのつかないところまでいってしまう。

彼との死闘を再現したい、以外にボクシングを続ける理由がなくなつて、欲という欲、衝動という衝動のすべてが彼の存在に塗りつぶされる。それが少し恐ろしい。もうとつとそうになっているかもしれない。

*

再起戦の後からしばらくの間は暑かったのに、五月の後半に入ったとたんいきなり寒くなった。まだ梅雨でもないのに毎日空がかげり、晴れなのか曇りなのか雨なのか判然としない日々が続いている。

柳岡に何も告げずに名古屋に発った午後は晴れで、夜に戻ってきたときは曇りだった。次の日の午後は雨で、ずぶ濡れになってロードワークから戻ってきたときにはもう晴れていて、仕方なく着替えてジムに向かうころにはまた降り出して、「傘持っていき！」という祖母の声を背中に受けてつまたずぶ濡れになりながら歩いていると急に雲が晴れた。

丸一日天気には振り回されて怒り心頭のままジムの扉を開けると、それ以上に怒り顔の柳岡がつかつかと駆け寄ってきたのが見えてぶわ、と冷や汗が噴き出した。心当たりはもちろんある。彼に断りも入れず名古屋へ行き、沢村のスパリングパートナーをかって出ようとしたからだ。

「ちゃうねん」

柳岡が口を開くより前にとりあえずそう言い、出足をくじく。

「ワイは何もしとらん。沢村にいらん言われてしても、スパードころかグローブも着けてへん。せやから、」

「こんの、ドアホ！ おどれの耳は何や、ただの穴かいな！」

耳を思い切り引っ張られ、声もなく悲鳴をあげる。

「ジムに無断で行動するな言うとするやろが！ 何べん言うたら分かるんや！」

ようやく解放された耳がじんじんと痛む。千堂をここまで頭ごなしに叱れるのは、この世で祖母と柳岡だけだ。

「まったく……。沢村をスパーに呼んだときのことおぼえとするやろ。お前が行ったらまたムキになってまうがな。タイトルマツチ台無しになったらどないすんねん、ドアホが」

「はん、あれがそんなタマかいな。台無しどころか勝つ気満々やで。幕之内は負けるかもしれへん」

耳をさすりながら脇をすり抜けて奥の部屋へ向かうと、柳岡はため息をつきながら後ろをついてきた。これ以上の話は口さがない練習生の前ではできない。

「言うとかくが、ワイは幕之内が憎いから負ける言うたわけやないで。ワイの冷静で公平な目で見た結果や」

「……ワレのどこがどう冷静で公平なんかは知らんが、こっちもまあまあ同じ意見や。沢村が相当な策士ちゆうことは前から分かった。幕之内のことはさらに研究しとするやろな。相性的にも今回はかなり危ないと思うで」

柳岡はつぶやくような声でそう言い、なぜだか心配そうに千堂を見た。

「何とも思わんのか」

「何のことや」

「幕之内が負けてしもたらお前、この先どないすんねん」

寄りかかった壁から一ミリも背中を浮かさず、無言で柳岡を見返す。眼鏡が夕方の赤い光を不吉に反射している。

「そのうち話さなあかんとは思うとった。無事に再起できたはええが、お前がどないなもんを目指すんかはまだ分かつたらん。次の試合のことすらはつきりとは決まってるない状態や。目標が定まらんまま、これからどこへ行くつもりか聞かせてくれんか」

「それは再起戦の前に言うたやないか。あのときより強くなって、幕之内に預けとるベルトを取り返すんや。それ以外の目標なんぞないわ」

柳岡はソファに浅く腰かけ、ため息をついて顔を上げた。

「せやから言うとなねん。今回、幕之内が負ける確率は低うない。沢村の全力のカウンターを食らったらタイトルを失うどころか壊されるかもしれへん。もし勝てたとしても、奴が現役である以上これからもずっとその手の恐れがつきまとう。それでも幕之内『だけ』をずっと標的にし続けるんか？ タイトルでもなくおのれのキャリアでもない、いつ変わるか分からん一人の人間を？」

視界がぎゅうと狭まる。すぐにでも反駁したいのにひとつも言葉が浮かばない。

千堂の場合、何かを強く主張したい気持ちはずぐに暴力となって現れるから、こんなときは壁を叩いたり叫んだりするのが常だ。だがそれでは伝わらない。幼児のように癩癪を

起こしているだけにしか見えない。ただ怒りを発散したいだけではいけないのだから、目の前の相手にだけは分かっているもらわないといけないのだから、衝動を拳を握りしめて耐え、必死で考えをまとめようとしても何も浮かばなくて、悔しくて情けなくて腕から指先にかけてぶるぶると震え出す。

「……無理せんでええで、千堂」

声をかけられて初めて自分が腰をかがめていたことに気づいた。あわてて姿勢を戻し、顔色を見られないようにそっぽを向く。

「別に何も無理しとらん。柳岡はんが長ったらしい話しよるさかい、寝かけとっただけや」「さよか。ま、なんぼ言うてもお前に刺さらんのは分かっとった」

「分かっとるなら言わんといてや。アンタいつもは余計なこと言わんやろが」

柳岡は首の後ろを掻き、「開き直りよって」と苦笑した。

「お前の決断にケチつけるつもりはあらへん。ライバルを倒すことを目標にしたらあかんいう道理もない。あないな試合を味わってしもたら、いつまでもこたわるな言う方が無理やさかいな」

だがな、と低い声で付け足し、指でくいと眼鏡を上げてから千堂の顔を正面から見る。

「お前はまだ若いやろ。もっと視野広げたらどないや。自分の人生の目的を預け続ける相手を手を一人に定めるには早いんちゃうか」

「何や、らしゅうない言い方やな、柳岡はん。幕之内とは元々アンタが引き合わせてくれたんやで。再起して努力して、日本一の男の首狙うことの何が悪いねん」

「狙う首があるうちはええと思うで。……ま、お前のキャリアも人生もまだ続くさかい、よう考えとき」

とん、と千堂の肩を叩き、柳岡は軽い足音を立てて部屋から出て行く。

薄暗い部屋に一人になったとたん力が抜け、目の前にあったソファにどすんと腰を下ろす。何も映っていない暗いテレビの画面に埃が薄く付着しているのが見える。黴くさい空気と遠くから聞こえるサンドバッグの音を懐かしく感じる。ここで初めて幕之内のビデオを見たときのことを思い出して唾を飲み込み、次第に齒の間から漏れ出してくる熱い息をせき止めるべく下唇を強く噛む。

柳岡の言っていることは正しい。

いかに幕之内でも、いつまでもあの圧倒的な強さを誇っていられるわけではない。それに現役を続けている限り、あの頑丈な彼だっていっつボクサーとして「終わる」か分からない。肉体が無事だったとしても、彼も生きている人間なのだから、少しずつ変化して千堂が悔しさとまぶしさをもって眺めるに値する人物ではなくなるかもしれない。永遠に変わらない強さなんてどこにもない。

だがそんな理屈はどうだっていいのだ。強さも実績もまっすぐさも、まだ十代だった千

堂が、ちょうどこの部屋のこの場所で、自らの死すら望まなければならないほどに彼に恋した理由のほんの一部でしかない。

それを他人にどう説明したらいい？幕之内一步という存在が永遠に狙うに値する「首」であることを証明するには、いったいどうしたら。

破れた唇からにじんだ血の味が口いっぱいに広がる。結局何ひとつ言語化できないことに苛立ち、リモコンを手にとって電源ボタンを指先が白くなるほど強く押すと、画面いっぱいに砂嵐が流れた。

このまま再生ボタンを押したら、きっと幕之内の直近の試合が映し出されるだろう。毎日見ているからデッキには常に同じテープが入った状態になっている。同タイプのファイター同士の対決、互いの苦しさが伝わってくる打撃戦、最後には打ち勝った幕之内の王者らしい振る舞いとほっとした表情、それらすべてを克明に思い返せる。

今回だけではない。彼の防衛戦は欠かさずこの部屋で見ている。どれもテープがすり切れるほど、一日に何度も、忘れたころにもう一度、絶対に忘れないようにまた何度も。そのたびにそこにいるのが自分だったらと想像して一人で熱くなった。自分なら最初から技術で翻弄しようなんてしないのに、もっと巧く強打を生かせるのに、すぐに倒れたりしないのに、どんな我慢比べでも絶対に音を上げないのに……などと、部外者特有の勝手な憤りとともに画面を眺めていた。

心の中でヤジを飛ばしながら傍観することしかできないのが悔しいのに、その足で東京行きの東海道新幹線に乗って挑戦状を突きつけに行こう、と思えないことの方がもっと悔しかった。

幕之内が再起戦を見に来たときもそうだ。彼に「減量がきついからまだ挑戦できない」と口にしたとき、言いようのない屈辱感がわいてきた。彼がその苦しい言い訳を額面通りに受け取るとは分かっていた。階級を上げてはどうか、と親切のつもりで提案されることも分かっていた。幕之内にとっての自分は過ぎ去った栄光と儀式的な試練と痛みの象徴のようなものなのだろうから、そう言われるのは当然だった。

だから、傷つきはしない。腹も立たない。彼から逃げずにこう言い返せる絶好の機会だと思っただけだ。「嫌や、キサマとまた戦る」。

またやる。絶対にやる。でもそれは今ではなくて、なぜ今でないのか、なぜすぐにでも倒すべき相手に向かっていかないのか自分でも歯がゆくて仕方ないが、それでもきっと彼を永遠に求め続ける。永遠に、などと言っている時点で半分逃げ腰であることが丸分かりなのがまた悔しくて、かつて持っていた自分の強さへの絶対的な信頼、という幕之内にもがれた牙がまだ完全には戻っていない、あるいは一生戻らないかもしれないと分かるのも辛い。

一年半近くも休んだというのにいまだにときどきこんな風に出口のない悔しさのループ

にはまってしまう。

再生ボタンに手をかけたまま血の出た唇を噛みしめ続けていると電話が鳴った。

乾いた舌打ちをしながら立ち上がり、コードレス電話の通話ボタンを押す。つい癖で「もしもし、千堂商」まで口走ったところで間違いに気づいてふたたびガラ悪く舌打ちをする、くすくす笑う女の声が聞こえてきた。聞き覚えがあるような、ないような。

『千堂くんね？ 代わってもらおうと思ってたからちようどよかったわ。ちょっと話を聞きたいの。今いいかしら？』

電話の向こうの女は名乗りもせずまくし立てるようにそう言った。その後の沈黙が何やら意味ありげで唾を飲み込んでしまう。

しかし、はっきり言って、身に覚えなんてない。面倒そうな女はできるだけ避けているからジムに「そういう」用の電話がかかってくるはずがないし、しかも相手は標準語。どこか自信に満ちた話し方だからたぶん東京の人間。思い切り眉をしかめたまま必死で記憶をたどっていると、電話の相手はあわてたように「ああ、ごめんなさい」と言った。

『名乗ってなかったわね。記者の飯村よ。「ボクシング・ファン」の。休養中にも取材させてもらってるでしょう？ おぼえてないかしら』

「……それを先に言うてくれへんか。寿命縮んでまうわ」

どっと脱力してしゃがみ込み、はあ、と息を吐く。

「ほんで、記者さんが何の用やねん。次の試合のことなら言えへんで。口滑らすなてジムに釘刺されとるんや」

『時期が来たらそれも聞きたいけれど、今回は別の用なの。差し支えなければ、今度の幕之内くんのタイトルマッチのことでコメントをもらえたらと思ってるんだけど』

「コメント？ どっちが勝つか当てろいうことかいな」

『勝敗を予想しろって言ってるんじゃないのよ。ただ、あなたはどっちの選手とも知り合いでしょう？ 今回の試合、公平な目で見てどう？』

公平な目。思わずにやりと笑う。

「冷静で公平なワイの意見が聞きたいんやな？ ええで。これから言うさかい、メモしてや」
『分かったわ、どうぞ』

ごほん、ともったいぶって咳払いをし、威勢よく口を開く。

「ワイには前から分かつとったんやが、実は沢村はごつつう策士なんや。ワイには分かつとったんやけどな、元々」

『そ、そうなの』

「そや。しかも奴はカウンターの名手や。デンプシーロールとの相性も悪い。せやから幕之内も今回ばかりは危ないかもしれへんで。負ける可能性は低うない。ベルト奪られるどころか壊、」

さっき柳岡が言っていたことをまるで自分の意見であるかのように意気揚々と口にし、しかし最後まで言えずに途切れた。

今回はかなり危ないと思うで。何とも思わんのか。幕之内が負けてしまったらどうするんや。自分の人生の目的を預け続ける相手を一人に定めるには早いんちゃうか。

『もしもし？ 切れちゃったかしら。もしもし？』

「……聞こえとるで。すまんのう、熱うなつて変なボタン押してもうたわ」
明るくそう応えると、ふふ、という上品な笑い声が返ってきた。

「まあ、何や、つまりな、そこそこええ試合になるんちゃうか、いうことや。知らんかもしれんが、沢村はごつつう気合い入っとねんで。幕之内かて苦戦するやろな」

『あら、ずいぶん優等生な意見ね？ あなたのことだから、てっきり自分ならどう戦うかって話になると思ったのに』

胸の奥がずきりと痛む。

「そんなん、どう戦うも何もないわい。どっちとやってもワイの勝ちやさかいな」

『期待してるわ。王者が交代したらあなたも挑戦するんでしょう？ 実現したら注目の一戦になるわね』

『交代したら……？』

聞き捨てならない一言だったからついムキになった。だって、まるで、幕之内がベルト

を巻いている限りタイトルから逃げ続ける気なんだろうとでもいうような言い方だ。

「ええか。幕之内からベルトを奪うんはワイや。沢村の出番なんぞあらへん。沢村を倒した幕之内をワイがギタギタにするさかい、楽しみに待っとれ」

『ええ、ええ、そうよね。分かってるわ』

ごめんなさい、と飯村が小さくつぶやいたのを聞き逃すわけはなかった。謝らないでほしかった。自分が情けなくなる。数度取材を受けただけの記者にすらお見通しなら、きつと誰の目にも明らかなのだろう。

『ともかく、コメントありがとう。多少手直ししてから掲載させてもらうわ』

「おう。ワイが公平、いうこともしっかり書いといてくれや。ええ評判が広まったらいつか解説に呼ばれるかもしれないへん」

『引退後の話なんてまだ早いでしょう?』

飯村は最後まで気遣わしげな話し方を崩さず、短く挨拶をしてから電話を切った。

受話器をにらみつけながら眉をひそめる。最初に取材を受けたときの彼女はむしろ挑戦的だった。自信満々の千堂の弱点をどうにか暴いてやろうと目を光らせているようにも見えた。いまはこの有様だ。遠慮がちなくせにやたらに励まそうとしてくる。

だいたい、試合の解説なんて現役でもできる。「引退」なんて単語を出すのは、彼女自身千堂が引退するのではないかと思ったことがあるからだ。

どういつもこいつも何やねん、と声に出して吐き捨て、電話機を乱暴に戻す。

あの試合はもう一年半も前のことなのに、誰も忘れてくれない。幕之内の話になったとたん心配され、腫れ物に触るように扱われる。

しかし一番あれを過去のことだと思えていないのは自分だ。後樂園ホールのライトのまぶしさを、興奮の坩堝と化した客席とリングを、恐れも知らずまっすぐに向かってくる幕之内の目を、まるで昨日のことにように思い出せる。長く休んでも、ボクシングから離れても、死ぬ気でトレーニングしても、再起のリングで会心の勝ち方をして忘れられなかった。

自分を含めた誰もがあれを忘れられないのは、彼への恋が終わっていないからだ。きつと千堂の目には、愚かしいほど分かりやすい恋の色が浮かんでいる。恋に人生を賭けていることも、恋した相手に手を伸ばせない苦しさも、他人が見ればすぐに分かってしまう。だからつい一言言いたくなってしまう。それは多くの人の身に起こりうることだ。通りの角で、電車のホームで、信号待ちの群衆の中で、コーヒーストップの二人掛けの席で、夕暮れの土手で、ありとあらゆる世界で見かける、のめり込みすぎて手痛い失恋を味わう寸前の人の目そのもの。決して特別なものではない。それどころか笑ってしまうくらいにありふれた、あまりに陳腐な感情の形だった。

*

後日自宅に送られてきた「ボクシング・ファン」最新号には、例のコメントが整然と言
い直された状態で載せられていた。

たとえば「沢村は気合いが入っとなねんで」という発言は「挑戦者には勝利の確信があ
る」、「今回ばかりは危ないかもしれないへん」は「幕之内はベルトを奪われるだろう」と、ど
ちらも強めの断定口調に変わっている。

大意は同じなのだから問題ないが、こうして見ると改めて自分自身の複雑な心情に直面
して動揺せざるをえなかった。「自分は沢村を下した幕之内に勝つ」という威勢のいい発
言の方はなぜだかほとんどそのまま掲載されているから、よけいに。

この短いコメントを見た読者及び関係者の反応は予想がつく。「千堂としては幕之内に
また防衛されたらタイトルに挑戦しづらくなるから困るよなあ。でも気持ち的には沢村に
勝たれても困るよなあ、だって二回も派手に負けた相手なんだから最強のままだってほし
いだろうし……」と思うに決まっているのだ。

自室の畳の上で寝そべりながら頭を抱え、うぐううう、と猛獣がうなるがごとくうめく。

こんなことならもっとぜんぜん気にしていない感を出せばよかった。「次の幕之内の相手が沢村？　ほーん、そうなんか。けどそないな小さい奴らのことなんぞ、でっかく世界チャンピオンを目指しとるワイには関係あらへんわあ（笑）」くらしいのコメントに……してはだめだ。読者以前に飯村に「あれから一年半も経ってるのにまだ強がらないと自分を保てないのね、かわいそうに……」と思われる。

だがあくまで平静を心がけてコメントしても、もっと熱く勝敗予想を語っても、結果はこれと同じだっただろう。記者というものは物事の中の隠された意図を見抜いて切り込むのが仕事なのだから、どんな言葉で飾ろうと結局は本心を暴露させられる。そして同じく「ボクシング・ファン」を読んだ全国のボクシングファンや自分のファンや同業者や知り合いや沢村や幕之内が千堂のコメントを見て同情し、ときには半笑いになったりするのだ。うぐうううう、とふたたびうなりながらごろごろと畳を転がる。

あの試合で負けたことを恥だと思っているわけでは絶対でない。が、いまだにあの負けを悔しがっていることを広く知られるのはなかなかキツイ。それを幕之内本人に知られるのはもっとキツイ。彼が順調に防衛を重ねてキャリアを前へ前へと進めている中、いつまでも過去にこだわっていることをどう思われるかと考えると、今すぐどこかへ駆け出しなくなる。いったいどれだけ時間をかければこの悔しさがなくなるのだろうか？

その辺に転がっていたタオルに顔を埋めて呼吸を落ち着け、うつ伏せの状態から起き上

がって大きなため息をつく。

誌面に視線を移したとたん、開きっぱなしになっているページに大きく載っている幕之内の写真と目が合ってしまったと思わずにらみ返した。彼は挑発的な顔をしているわけではない。いかにも幕之内一步らしい、どこまでも生真面目な表情だ。しかも見出しは「練習の成果を出して、精一杯全力を尽くすだけ」。

幕之内はどの試合でも同じことを言っている。精一杯全力を尽くすだけ。対戦相手からしてみたら一番嫌なタイプの決意表明だ。

沢村に電話でもかけてやろうか、とふと思った。

よけいなお世話に決まっているし迷惑がられるのも分かっているが、こういう火の玉のごとき相手を迎えうつ側の気持ちは誰より理解しているつもりだ。

それに別の心配もある。ファンの心情も雑誌の扱いも会場の雰囲気も完全なるアウェイの中で沢村が勝つには、「尖る」以外に選択肢がなくなる。沢村はルールに反するやり方を選ぶことを厭わない。皆に憎まれ遠ざけられることだって平気です。そんな加害と自己破壊をやめさせることができるのは、と、そこまで考えて、沢村の恩師の顔とあのときの自分の言葉を思い出して小さく舌打ちをした。

少なくとも、一本の電話ごときにそれができるわけではない。

雑誌を隅に放り、適当に布団を敷いて明かりを消して寝転がる。雨続きだからか六月な

のに寒くて、肌掛けにしっかりくるまってから目を閉じる。

まぶたの裏には光の名残がちかちかと映し出され、その不可思議な模様はやがて記憶と夢が混濁したイメージの世界と重なり始める。どこかのホールの照明、轟音のような歓声、マットに伏している男、どこちなくわき上がってくる満足感、善良そうな幕之内の顔。

おめでとうございます、凄かったです。純粹に喜んでくれている顔。

でももうこの人とは戦いたくないな、と言いたげなその笑顔。

不安そうな顔。

キスされて戸惑っていたときの顔。

怒って苛立っていたときの顔。

喉仏を囲むような齒形。頸動脈の力強い脈動。あれほどまでに強く深く恋した相手に優しく触れられたときの、あの衝撃。

寒さに縮こまっていた筋肉があからさまに火照って、一気に浅い夢から覚醒する。

たまらずにがばと起き上がり、一番近くにあった「ボクシング・ファン」で頭をバンバンと叩く。だが薄すぎでちっとも痛くない。もっと硬くて太いものが欲しくて枕元を探り、暗闇の中でようやく探り当てた目覚まし時計を思い切り額にぶつけようとしたとたん、まるですぐそばに幕之内がいるかのようににはっきりと声が聞こえてきた。

今までしてきたことをファイにするのはだめですよ。

両手で強く握り込んだ目覚まし時計がきしむ。あんまりしつこく鳴るものだから腹が立って壁に投げてから止まったままの秒針が、おびえたようにかちかちと音を立て始める。一年以上前、旅に出たときに偶然幕之内と出会ってしまったこと、そしてその顛末は誰にも話していない。彼がみだらな夢に出てきたことはないし、もちろん自慰のときに思い浮かべたこともない。またやりたいとも思っていない。

それなのにときどき、ふとした拍子に思い出すことがある。死と生と証明と肯定と否定と諦めの、さまざまな衝動が混ざってひとつになった欲が蘇ってくることもある。だが夢で見た「死」の衝動がどうか、そんな苦しい言い訳はもう使えないから性欲を覚えても何もできない。

だからこうしてバンバン頭をぶつけて記憶を振り払おうとするのだが、毎回途中でためらって中途半端に終わってしまう。

その後どうなるかというと、こんな状態では眠れるわけがないから仕方なく起きて明かりをつけ、追いついてられるようにポルノ雑誌を広げて性的な空想で頭をいっぱいにする。そういうときの性行為はほとんど作業だから快楽も喜びも達成感もない。体じゅうの水分がいくらか減り、体重がいくらか軽くなるだけ。なのに射精の後の虚脱感と自分の心身を雑に扱った屈辱感は完全に眠りにつくまで残り続ける。

そんなこと全部分かっているのにせずにはいられなくて、押し入れの中に隠しておいた

雑誌を取り出そうとしたとき、数枚のメモ用紙がついでに引っ張り出されてきてひらひらと宙を舞った。出会った女たちに渡されて取っておいた電話番号のメモだ。軽く考えを巡らせる。雑誌なんかよりこっちの方がいいかもしれない。人柄を見定めてメモを選別しているから、これの中のどこにかけても面倒なことにはならずに済むだろう。しかし「セックスがしたい」以外の理由がない状態で女を誘ってもたいしていろくなことにならない。最後には結局面倒な事態になる。

はあ、とため息をつき、メモをぐしゃぐしゃに握りつぶしてゴミ箱に捨てる。

あれ以来、欲が溜まっていく一方だ。どうにかして発散したいのに頭も体も強すぎる欲を扱いかね、なだめることもできないでいる。かといってケンカもスリルも酩酊も二度とごめんだ。ボクシング以外で己の身を雑に扱いたくない。それは自己憐憫だ。自傷だ。沢村じゃあるまいし、と思ったところで、ふすまの外から電話の呼び出し音が聞こえてきた。いつもなら居間の近くで眠っている祖母が取ってくれることをそれとなく期待するところだが、今日に限ってはどうか自分を取った方がいいような予感がして急いで自室を出て受話器を持ち上げる。

「もしもしー、なにわ拳、」

またしても途中で間違いに気づき、思わずくっ、と声を漏らす。受話器の向こうの相手がかすかに噴き出したのが聞こえてくる。

『も、もしもし、幕之内です。笑っちゃってすみません。お久しぶりです、千堂さん』
「おう。久しぶりやな、幕之内。わざわざ家にかけてきよって、何の用や。夜中やで」
『で、ですよ。こんな時間にすみません』

ふと薄暗い居間の壁時計を見ると九時半だった。まだぎりぎり夜中とは言えないくらいの時間だ。このくらいなら幕之内がこれほどまでに恐縮する必要はないし、雑誌に載った自分のコメントを見て恥ずかしさにのたうち回って不貞寝するにも少し早い。

『あの、実は今日ジムで真理さんに会いました。そのとき今月号の雑誌のボクの記事で、千堂さんからコメントもらったときのこと色々聞いたのでちゃんとお礼言わないと思います……』

「色々て何や、色々て」

顔をしかめ、ついドスのきいた声でつぶやく。飯村が幕之内によけいなことを吹き込んでいたらと思うと気が気ではない。

『すごく力強くボクのこと応援してくれてたって聞きました。ありがとうございます。それだけ言いたかったんです』

「……?」

無言で首をかしげる。

飯村なりの気遣いなのか、幕之内の受け取り方の問題なのかは知らないが、「沢村を倒

した幕之内をギタギタにする」という挑発は、なぜか彼を力強く応援していることになったらしい。

『本当だったら試合の内容と結果で応えるべきなんです、何というか……今回はそういう形でちゃんと伝わるか分からないので電話しました。すみません。でも少し気が楽になりました。ありがとうございました』

「急に何やねん。遺言かいな。そないに沢村に勝つ自信ないんか？」

かかか、と笑い飛ばしながらも受話器の向こうの空気に耳を澄ませ続ける。電話ごしでも分かる。単にかしこまっているだけではない。妙に思い詰めた雰囲気がある。

おかげで、彼が珍しく自宅なんかにかけてきた理由が何となく分かってしまう。

「幕之内」

『はい？』

「わざわざ頼ってもらて悪いけどな、ワイらは友達とちゃうで。キサマはワイを二度も負かした男で、またベルトをかけて戦う相手やろが。つまりは敵や。いくら心の広いワイかてそないな奴を元気づけられへんわ」

『げ、元気づけて、そんなんじゃないですよ。ただその……いまボクが巻いてるベルトは千堂さんから受け継いだベルトですし、千堂さんのそういう気持ちに二度と応えられなくなったら申し訳ないと思って、だから……。いえ、やっぱり忘れてください。すみません』

そういう気持ち。幕之内に悟られないように息を止め、唇を噛みしめる。

『用件はそれだけです。夜分に失礼しました。おやすみなさ、』

「ちょう待てや」

『は、はい。何ですか？』

受話器の口の部分を手でふさぎ、一度だけ大きく深呼吸する。

「許さへん」

『はっ？』

「絶対に許さへんで。分かつとんのか」

『な、何をです？』

「こっちは最初からキサマの応援なんぞしとらん。キサマが勝とうと負けようとどうでもええさかいな。けどな、ワイに勝った男がしょうもない姿さらしてみい、一生許さへんで。そのときは死ぬ覚悟せえよ」

わざわざ口にする必要などない言葉だ。言われなくても分かっているどころか、真面目な幕之内のことだからこっちが求める以上に厳しくそれを自分に課しているだろう。

だから、こんなのはただのサーブिसに過ぎない。彼が言ってほしいであろうことを言うただけ。彼が望んでいる通り、甘さや親密さがいっさい混じらない声で、口調もできるだけ厳しく。

しかしさすがにやりすぎたのか、幕之内は場違いにまた噴き出した。

「呑気なやつだな。殺す言うとるんやで。笑っとる場合とちゃうやろ」

『す、すみません。でも氣遣ってくれてありがとうございます』

「そないなことはしとらんわ。もう切るで」

はい、おやすみなさい、と答えたのを聞いてからわざと乱暴に受話器を置く。がちやり、という音の反響が完全に収まってから深く深く息を吐き、その場に座り込んで目を閉じる。千堂は祖母以外の人間に弱音を吐いたことがない。

他人に弱音を聞いてほしいとも思えない。そんなことを口にしたらたちまち弱い奴だと侮られる。

もし言えるとしたら、弱みをさらしてもかまわないと思える人に限る。育ての親である祖母、あるいは自分とまったく関係のない人。男たるもの虚勢を張る必要がない相手なんてそのくらいしかない。

……なのに弱音を吐かれたということはつまり、今の幕之内にとっての千堂は「弱みをさらしてもいいと思える人」だということになる。

少なくとも敵だとは思われていない。単なる昔なじみだ。性格もファイトスタイルもよく知っているから気安く話せるというだけの。

うぐうう、とまたうなって頭を抱えていると、ふすまを隔てた祖母の部屋から「夜中

にやかましいわっ」と怒鳴る声が聞こえる。「まだ十時前やでっ」と怒鳴り返し、ふらつく足取りで自室へ戻って布団に倒れ込む。

幕之内の頭の中はいま、沢村のことでいっぱいだ。次の対戦相手なのだから当たり前だが、誰のことで頭がいっぱいでも消えない顔というものは必ずある。

それを目標という。

いつかたどり着きたい相手。間違っても弱音など吐きたくない相手。

千堂にとっての幕之内がそうだ。努力して努力してやがて勝てる日が来たとしても永遠に続く恋の相手。

しかし、当然ながら、彼にとってはそうではない。最初から分かってはいたがそうではない。どうやったらそうなるかを考えて考えて、絶望的な気分で目を閉じ、また浅い夢があのとときの記憶をえぐり出し、頭と体から切り離された欲が目覚めてやり場のない激情が全身を何度も苛む。

＊

新大阪行きの終電を逃したことに気づいたのは、病院を出てしばらく経ってからのことだった。

沢村が救急車で病院に運び込まれて手術が終わるまでの数時間、終電という言葉が頭によぎったことは一度もなかった。全身麻酔から醒めたばかりの沢村と言葉をかわしているときも、沢村の恩師の心配に応えたときも、自分がどこかへ「帰る」必要があるということすら忘れていた。

病院の外へ出て知らない街を歩き続けてしばらく経って、ようやく気づいた。自分はいったいどこへ向かおうとしているのだろうか？

コンビニの壁にかけられている時計を外から盗み見ると、時刻はすでに十一時を回っていた。東京発の終電は九時すぎごろだったはずだ。この時間では、始発まで待たないとならない。

脱力してそのままコンビニの前にしゃがみ込んだとたん、近くで煙草を吸っている若者にちらと視線を向けられる。いつものように即座ににらみ返して威圧するのも馬鹿馬鹿しくて立ち上がり、知らない街をふたたびさまよい始めると、耳に入ってくる雑音が少しずつ消えていくのを感じた。

夜更けでも衰えない東京のにぎわい、酒を飲んで騒いでいるサラリーマン、立ったまま何ごとかを熱心に話し合っている集団、お互い以外のものなどこの世に存在していないか

のようにキスを交わすカップル、客引き、たくさんの人、そういう周りのものが徐々に視界からも消え、代わりにさっきまでいた後樂園ホールの客席が耳と目に蘇ってくる。

歓声、罵声、心配そうな声、拍手、シューズの底とマットが摩擦する甲高い音、鈍い打撃音、ゴング、伊達と宮田の冷静な声、いくつもの黒い後頭部、観客席からだとは少々暗く見える照明、その光に照らされたリング、そして二人の姿。

まだ自分がその場にいるかのような熱気を感じ、びりびりとした興奮を覚え、決して折れない幕之内の目に撃ち抜かれる感覚に逆らえず、交差点の真ん中でつい立ち止まってしまふ。

あのリングにいたかった。幕之内の目の前に立っていられた沢村がうらやましくて仕方なかった。たどった過程は全く別のものなのに、全力で挑んで負かされて自分の存在意義を考え直さなければならなかった沢村がかつての自分に重なって仕方なかった。

もし対戦相手が沢村でなく自分だったら勝てた、なんて言う気はない。沢村に勝てないならいまの自分でも勝てない。彼に追いつくまでどれほどかかるのかも分からない。頭の中はそんな畏れと執着心でいっぱいだった。

重くて熱い息を吐き出す。興奮と憂鬱を同時に吐ききってしまうと呼吸が苦しくなる。苦しくて熱くて震えが止まらなくて、クラクションを鳴らされて初めて自分が横断歩道の真ん中に立ち尽くしていたことを思い出し、急いで対岸へ渡る。

「は、」

シールの剥がし跡だらけの電灯に寄りかかって息を整える。

奥歯を強く噛みしめていたあごの力を抜くとやがて現実の音が息を吹き返し、エンジン音や話し声や電車の走行音などが幕之内の勝利を称える歓声に取って代わる。

そうなるのとたちまち頭が空っぽになる。どこにも行けずにぼうつとしているだけになる。

ここは東京だから素顔をさらして突っ立っていてもサインを求められることはないが、そのぶん徹底的に一人だ。ひっきりなしに人の行き交う真夜中の大都会のご真ん中に一人。

居場所を見つけることは難しくない。ビジネスホテルもカプセルホテルも漫画喫茶もサウナもすぐそこにある。東京は丸ごと歓楽街のようなものだから、夜通し遊べる店もたくさんある。

ゆるい坂になっている通りを眺めながら歩き、この息苦しさと熱を紛らわす方法を必死で考える。眠って忘れたいがすぐには眠れそうにないし、楽しいことなど何も思いつかないし、東京にほとんど知り合いがいらないから押しかけて話せる相手もない。たとえ知人がここにいっても助けにはならないだろう。本当の気持ちには祖母か何も知らない人間にしか話せない。あるいはいっそ、本人か。

ふと足を止め、拳をゆっくりと握りしめる。あの男に直接ぶつけられたら、きっと最高に胸がすくだろう。彼に恨み言を言いたいわけではない。弱音を聞いてほしいわけでもない。

い。ただぶつかりたいだけだ。体で理解してほしいだけだ。彼は目の前にいる相手を痛みも構わず全身で受け止めてくれる。今夜の沢村のように。たくさんの夜のたくさんの男たちのように。あのときの千堂のように。

がばと身を翻し、登ってきた坂を駆け下り、信号を無視して交差点を渡ってひたすらがむしゃらに走り続ける。

ここがどこかなんて分からない。後楽園ホールや沢村のいた病院どころか、さっき時計を見たコンビニまでの道すら忘れている。そもそも幕之内の家の住所を知らない。電話をかけようにも電話番号をメモしてきていない。たとえ何もかも知っていたとしても、ひどいダメージを受けたばかりのボクサーを訪ねていってどうしようというのか。同業なのに非常識だ。分かっている。全部分かっている。分かっているからこそ止まらない。他に発散する方法がないから走るしかない。

しかしペース配分も加減も忘れて全力で走っていたせい、すぐに息が切れて立ち止まり、道ばたの縁石に腰掛けた。

東京という街はどこまでいっても都会で、どれほど夜が深まっても人の姿が絶えることがない。酔っぱらいやカップルたちは汗だくで座り込んで息を荒くしている千堂を奇異の目で見ることもなく、楽しそうに騒ぎながら通り過ぎていく。リングの上でしか本当の楽しみを感じられなくなって久しい今の自分には、何が楽しくて大笑いしているのか分から

なくて不思議に思える。笑うことも笑わせることも得意なはずなのに、心の底から笑った思い出は、デンプシーロールを繰り出すべく頭を振っている幕之内を目の前で見たときが最後だ。「死んでもいい」と「生きていたい」をあのときほど切実に感じたことはない。

だから、またしたい。またあれを感じたい。今度は耐えきって、彼にも同じ思いをさせてやりたい。もっともっと強く味わわせたい。沢村がマットに沈んだとき、視界が真っ暗になるほどそう思った。

思い出すと体がねっとり熱くて腰が重たくなる。このわけの分からない息苦しさも熱さも、結局は欲だ。ただでさえ長いこと発散できなくて溜まっていたというのに目の前で見せつけられて昂ったというだけの。

立てた片膝を抱きかかえ、必死で興奮をなだめる。いったん欲を忘れないと眠ることもできない。どうにか紛らわせようとしても、以前幕之内に倒されたときのことや犯されたときの記憶が次々に蘇り、火のような情欲が募っていく。

めちゃくちゃにしてやりたいのに強すぎてめちゃくちゃにされてくれない幕之内のあの目、めちゃくちゃにされたいのに幕之内が死ぬ寸前まで牙を立てずにはいられない獣じみた恋心。

ひとつ思い出すたびに息が荒くなり、あえぎが漏れ、膝を抱えている手が震え出す。

「……シャレならん」

もう走り出すこともできない。すべての欲が獣欲に置き換わり、発散することしか考えられなくなる。

しかし誰かとセックスして紛らわせたくてもここに知り合いはいないし、土地勘がないからその手の店を探すことも難しいし、その辺をフラフラしている酔っぱらいに声をかけて一杯おごってホテルに連れ込むような余裕もない。そもそもこんな状態では他人と話をすることさえできない。

欲で切迫するとどうしてもヒトとして振る舞えなくなる。言葉が出てこなくなり、コミュニケーションが取れなくなり、人を慮ることができなくなり、相手を対等な存在として見られなくなるから人間同士のセックスが成立しなくなる。

そんなときに東京なんかにはいたくなかった。最寄り駅も沿線も、そもそも何区かも分からないところなんかに。

せめて沢村との死闘に疲れ果て、正体もなく眠っている幕之内の寝込みを襲えるくらい場所にはいたかった。筋断裂とダメージでまともに動くこともできない幕之内に馬乗りになって服はだけさせ、鬱血していないところに歯形をつけ、抵抗できないでいるうちに性器を口で愛撫して勃起させてそのまま押さえつけて、それから。

またあれをやるのか？

苦い記憶がふいに蘇ってきて、下唇を噛みしめる。

どうやっても応えられない、そもそも最初から応えるつもりのない相手を無理に組み敷いて、また暴力を振るうつもりなのか。息を吐いて拳を額に押し当てて、そのとき、

「ごん、と音がした。」

目の前でスーツ姿の男がゴミ箱を蹴り倒し、あわてふためいたどぶねずみが路地裏に消えていく。

はあ、と息を吐いて立ち上がると、ゴミ箱を戻していた男が「なーに見てやがんだころあ」とわめきながら近寄ってきた。

見るからに泥酔している。酔ってさえないなければ、目の前に立っているのが人語が通じる人間かどうかくらいは判断できただろう。まともな目をしているかどうか、話ができてうな相手かどうか、うっかり絡んだとして、無事に済みそうな相手かどうかかも。

「てめっバカにしてんじゃねーぞ。おれあなあ、酔ってんじゃねんだよばっかやろう、てめーみてーなガキには分かんねんだあ」

それつが回っていないから何を言っているか分からない。この状態の千堂が相手でなくとも意味が通じないだろう。かといって聞き直す気にも、意味を推察する気にもならない。

千堂は自分より背の高いその男を一瞥し、ゆっくりと一步踏み出す。もちろん殴る気などない。蹴る気もない。脅しをかけるつもりもない。ボクサーになる前の、路傍での暴力が日常茶飯事だったころでさえ相手にもしなかったたぐいの人間だ。

なぜ無視しなかったかと言えば、男の視線にほんのわずかな欲の色を見たからだ。何の欲かは分からない。暴力を振るいたいのか、見ず知らずの人間を罵って気持ちよくなりたのか、自分より若い男が嫌いで憂さ晴らしをしたいのか、日ごろのストレスを解消したいのか、あるいは性欲か、それともそのすべてなのか。

「な、何だよおい」

それを確かめるために視線を向けて、たった一步近寄っただけなのに、男はひるんで後ずさりをした。

おびえた目の中にはまだ欲が残っている。あわよくば、と卑屈に狙っている目、もしかしたら、と期待する目。しかしもう一步踏み出すとそれはたちまち消え失せ、男はひいっと叫んで駆け出していった。

戻したばかりのゴミ箱をまた倒し、もつれた足で走り去っていく男の後ろ姿を眺めていると、どうしようもなく嫌な気分になった。

幕之内を見ている自分の目は、きつとあんな風だろう。すべての衝動がないまぜになった獣欲を浮かべた目で見られる気分は最悪で、あんな視線を一人の人間に浴びせるのは暴力に等しいと思う。もし自分が見られる側になったとしたら、千堂は相手の目玉がなくなるまで殴る。リングの上で。おそらく沢村もそうだ。だが幕之内は違う。

誰が相手であれ、彼がそういう気持ちに応えないわけではない。たとえば寝込みを襲っ

ても、無理にセックスを迫っても応えてくれる。彼はきつと、自分の命と引き替えにしてもこの期待に応え続けてくれる。そうしていつの日にか、燃えかすになって、からっぽになって、遠くなんか見なくなる。一人の人間の中に永遠に残る強さや純粹さなんてないからだ。

それを知っているのに無邪気に信じ続けている自分が滑稽で、そう信じれば信じるほど燃え尽きる日を早めるだけだと分かっているのにやめられないのは、彼でなければ埋められない形の溝がこの命に深く刻まれているからで、つまりそれは恋以外の何ものでもない。肉欲をともなった、ごくありふれた恋心。

そう思うとまたがむしゃらに駆け出したくてたまらなくなり、その衝動を抑えるために通りの反対側にあるビジネスホテルに足を踏み入れ、必死で人間の言葉を思い出しながらチェックインの手続きをする。申し訳程度の設備や素っ気ない内装を目に入れることもなく、狭い部屋を埋め尽くすシングルベッドに倒れ込む。

ぶは、と大きく息を吐き、冷たいシーツの上で身じろぎをすると自分の体温の高さと興奮の深さを改めて感じた。

自分が何を欲しがっているのかは分かっている。またやりたいと思っていない、なんて嘘だ。本心をごまかしているだけだ。本当はやりたくて仕方ない。興奮して言葉を失ってもヒトでなくなっても牙を立てても応え続けてくれ、それ以上にやり返してくれた幕之内

の、あの顔がまた見たい。快楽にゆるんだだらしない顔、射精の瞬間の苛立った顔、大真面目にズレたことばかり言っている顔。

彼は、気持ちいいです、とは一度も言わなかった。またましよう、とも言わなかった。もう自分のものだ、と言わんばかりに馴れ馴れしく振る舞うこともなかった。目くばせをされたこともなかった。のちに顔を合わせても彼は何も言っていなかった。たぶん夢だったんだろうな、程度にしか思われていないであろうことは、自分が一番よく分かっていた。こっちだってそうだ。あれはたぶん夢だった。けれど、忘れられない夢だってある。

うつ伏せのままこそごと服をはだけ、下着の中に手を入れる。ゴムの部分をずらすと熱氣と湿り気と汗の匂いが中から掻き出されてくる。いきり立った生殖器の上半分を握り、最小限の動きで射精に追い込もうとすると、刺激の強さに腰が引け、ぬち、と音がした。

幕之内に打ち勝ってマットに沈めたときのことを思い出す。なのに立ち上がってこられたときの彼の目を思い出す。あの目で見られたときの怒りと高揚感を思い出す。ちょっとした後に出した後に体よく逃げようとしたらあの、目を思わせる目を向けてきて興奮したことを思い出す。己の身を顧みず沢村に向かっていったときの目を思い出す。上になってもいいかと聞かれたときのことを、

声も出なかった。衝撃が突き抜けていくと同時に、手のひらにぬるついた精液が吐き出される。吐精のたびに腰が本能的に前後し、シーツに額が擦れる。最後になってようやく

低く長いあえぎを吐き、そのままの姿勢でベッドに身を預ける。

息を荒げながら額に浮かんだ汗をシートに吸わせていると死にたくなった。

たぶん、一分も経っていない。たいしたこともしないのに、幕之内の顔を思い浮かべたとたん一年半ぶんの欲がマグマのごとく噴き出てきた。右の手のひらはどろりとした精液でしとどに濡れていて、溜まりに溜まった欲望の深さがよく分かる。

少し恐ろしくなる。こんなの、二度はできない。こんなことが当たり前になったら普通の暮らしを送ることができなくなる。気楽なセックスの誘いにも応えられなくなる。研究と称して幕之内のビデオを見るいつもの日課もただの淫靡な行為に……もうなっている。

元々そうだった。最初から、あのビデオを手にしたときからすでにそうだった。自分が失恋したという事実を認めたくないから、ただ目を背けていただけ。本当は何もなかったふりをされてプライドが傷ついたから。

んく、とどの奥から声が漏れる。膝を立てて四つん這いになり、ぬるぬるの手でふたたび自分を追い詰め始める。いったん堰を切った欲望は、みじめさすら糧にして膨らみ続ける。

またしてもあつという間に射精してしまうと、今度は凶悪な気分になった。次に会ったときは彼をぐちゃぐちゃにしてやりたい。涙も出ないほど痛みを与えてやりたい。

しかしその気分は途中で腰砕けになる。こっちが何をしようと、幕之内が最後までやら

れっぱなしでいるわけがないのだ。それを身をもって知っているから、想像の中の自分はいつの間にかぐちゃぐちゃにされる側になる。彼にしてみれば、あれはただ何度も爪を立ててきて痛いから少し注意した、というだけだ。黙って耐えることもできたが、千堂のやっていることがあんまりにもひどすぎるからおとなしくさせた。それだけ。仕返しをするつもりも致命傷を与えるつもりもなかった。

思いつくと屈辱で顔がゆがむ。暴れ回りたいくらい腹が立つのに股間は硬いままで、もっと刺激がほしくてびくびくと痙攣している。それだけでは足りなくてシャツをたくし上げてもう片方の手で自分の上半身をまさぐり始める。ぎこちない手つきで体に触られたときのことを思い出していると、切羽詰まった声が止まらなくなった。

それは発情した猫の鳴き声に似ていた。媚びや可憐さなどまったくない、切実で、差し迫っていて、周囲に危険を知らせるがごとき真剣な声。野良猫のそんな声を聞いた時に、本能に追い立てられる可笑しさと悲しさを感じたものだが、人間である自分を追い立てるものはおそらく本能ではない。たぶん恋。たぶん情欲。真正面から見つめ合いたい、シンブルな気持ち。

千堂はここまで執拗に人に恋したことはない。特定の人間にこんなに強く欲を抱いたこともない。絶対に自分に振り向かないと分かっている人をこれほど長く求め続けたこともない。

ああ、でも、それはただ恋しているというだけではなくて、抱き合いたいだけでもなくて、自分のものにしたいわけでもなくて、痛めつけて痛めつけられただけでもなくて、そんなものはひとつもいらなから、ただ永遠に彼が彼のままであってほしいだけだ。永遠に自分が狙うに値する首であってほしいだけだ。永遠に恋し続け、求め続けさせてほしいだけだ。

やがて四つん這いの姿勢を保てなくなり、顔と上半身をシートに埋め、腰を上げて尻を突き出した格好になる。交尾の最中の猫のような体勢だ。この状態のときに腰をつかまれて挿入されてまるで自慰の道具のようにされて殺したくなったことを思い出し、何度も吐き出した精液で汚れきった中指をそこに埋める。びくんと体が跳ねる。

あれ以来、何かをここに入れたことはない。犯されたことはもちろん、触られたこともない。そうしてほしいと思ったことだってない。次の日ひどい全身疲労で歩くのにも苦労したから、というだけではない。上に乗られて思い通りにされることが屈辱だったから、というだけでもない。快楽の所在を認めてしまったら自分自身の男らしさが失われるとか、そんなことでもない。

一度でも「これ」を求め始めたらたかが外れてしまうだろうと分かっていたからだ。

指を一ミリ沈めるたびに苦しい声が胸の奥からくびり出され、汗で湿ったマットレスに吸収される。奥に進んでくる異物を感じるとどうしてこんなことを、と頭にくるのに、

そのまま進まないしていると物足りなくなつて媚びるように腰を高く上げ、しかし入っているのは自分の指だから逆に抜けかかつてしまつて、おとなしくせざるをえなくなる。

情けない姿だと思う。絶対に人には見せられない。

そう思えば思うほど止められなくなつて、自分の中指を彼のあの凶悪な大きさの性器に見立てて奥へと誘い込み、執拗に締めつけようとする。しよせんは指なので長さは半分もなく、太さにいたつてはほとんどないも同然なのに、軽い痛みと冷たい違和感ともしっかりと求める欲望で半狂乱になっている。

もっとしてほしい。もっとめちゃくちゃにしてほしい。憎しみを抱いている人間にするようなことをしてほしい。受け入れるのではなく応えるのでもなく、もっと思うように振る舞つてほしい。

そうしたら千堂も彼に應えることができる。彼をめちゃくちゃにして、憎んでいる相手にするようなことをして、思うがままに振る舞つても、それは互いに与え合い、奪い合う行為になる。

そうでなければこっちがただ一方的に仰ぎ見しているだけだ。テレビの向こうや観客席から熱い視線を向けているのと同じく変わらない。あの酔っぱらいのような浅ましい加害欲求に満ちた目で彼を見ることを恋と呼ぶなら、人を好きになる気持ちなんてぜんぜん美しいものではない。性愛は代償行為に過ぎず、快楽でさえ痛みで痛みをごまかすだけの全身麻

酔でしかない。それなのに特定の人欲しくてたまらなくて、かすれた声でその人の名前を呼びながら自分を慰めてしまうのは、どれほど苦しかろうと屈辱的だろうと、求めるのをやめられないからだ。その理不尽さこそが恋だから。

幕之内一步は千堂の思い通りになどならない人間だ。人の思いには応えるし、どんな要求でも受け入れようとはするが、一番欲しいものは絶対に与えてくれない。自ら望んでくれようもしない。

そんな男を生涯の目標にする？一生かけて地獄の苦しみを味わうつもりか。ずっとこんな思いをしながらボクシングを続ける気なのか。もっと視野広げたらどないや。自分の人生の目的を預ける相手を一人に定めるには、

シーツに精液が飛び散った。性器を触ってもないのに射精してしまったことが妙に気恥ずかしかった。そのくせぬぷりと淫猥な音を立てて指を引き抜くと太ももがぐくぐくと震え、足りないとい体が騒ぐ。

もっと欲しい。手足がばらばらになるくらいめっちゃくちゃにされたい。絶対思い通りにならないあの男を組み敷いて縛りつけて一から十まで思い通りにしてやりたい。けれど全部思い通りになってしまうのも興ざめだから、途中からは「仕方ないなこの人は」という顔でやり返されたい。そのままぐちゃぐちゃにし合いたい。それから先の人生のことなんか何も考えずに。想像すると我慢できなくて、ふたたび指を中にねじ入れてしまう。

死ぬ、と思った。

このままでは自分の欲望に殺されて死ぬ。

こうなるのが分かっていたから幕之内の顔を思い浮かべたくなかったのだ。擦られすぎた粘膜は悲鳴をあげていて、空はだんだん白み始めていて、寝不足と疲労で頭がぼろっとして、何時間もずっと同じ姿勢を取り続けているから筋肉も関節も痛い。

ここまでするもお足りなくて、次から次に新しい欲が湧いてきて先に神経が焼き切れそうになる。ここが自宅でなくてよかった。こんなに長時間声をあげていたら祖母に聞かれる。外にも聞こえる。のどを痛めたのは間違いないだろうから、たとえ正氣に戻れたとしてもまともに人と話ができるかどうか分からない。まるで世界の底が抜けたかのように視界がぐらぐらになっている。もうやめたい。まだやるべきことが残っているのに、こんな馬鹿馬鹿しすぎる理由で死んだら悔やんでも悔やみきれない。やるべきこと。それを思ったとき、ふと我に返った。

ぜえぜえと荒く息をしながら、やっとの思いで仰向けになる。上着を脱いでいなかったから背中が蒸れてびっしょりと濡れている。乱暴にたくし上げたシャツからのぞいている素肌にはさまざまな体液が飛び散っている。下着と服を途中まで下ろしただけの下半身は、さらにひどい有様だった。

「……アホらしいわ」

ため息すらつけずにだらりと四肢を投げ出す。

ここに至るまでさまざまな葛藤はあったにしろ、客観的に見れば、久しぶりに幕之内の死闘を生で見て興奮して我慢できなくなって自慰をしてしまった、というだけにすぎない。アホらしいの一言に尽きる経緯だ。

ただ彼を見ただけで一晩中こんなことをしてしまふのだから、三たびグローブを合わせた日には人間をやめることになりかねない。もうそうなっているかもしれない。それでもいいのかもしれない。

幕之内の拳は人を生かす拳だ。どんな形であれ、無を、あきらめを、逃げることを、死を許さない拳だ。生きるためにあの拳を浴び続けなければならないのだとしたら、それなしには生きられないのだとしたら、きつとそれはもう……。

ずきずきと痛む体にむち打って起き上がり、ぞんざいに服を脱ぎ捨ててシャワーを浴びる。ビジネスホテルのユニットバスは狭くて、体勢を変えるだけで肘が蛇口や壁にぶつかる。シャワーヘッドをフックに戻そうとしたとき腕が出っ張りに当たって二の腕が顔に衝突し、脂肪の層の薄い自分の腕と唇が触れる。

とたんに嫌なことを思い出す。

他にもキスの思い出くらいある。風呂場でもっとすごいことをしたこともある。なのにあのとときのつたないキスを、あのととき幕之内につけられたごくごく小さな心の傷を、どう

して一生忘れられない気がするのだろうか？

＊

聞いたところによれば沢村は術後一週間ほどで退院し、その後は自宅でおとなしく療養しているらしかった。それを電話で教えてくれたのは沢村の恩師の河辺で、話の途中で何度も「ありがとう」を繰り返した。

竜平の友達になってくれてありがとう、気にかけてくれてありがとう。よかったら、また様子を見に行ってもらえませんか。

こっちとしては沢村の友達になったつもりなどないし、気にかけているつもりもない。少なからず関わった者として、何となく放っておけないだけだ。

しかしその足で新幹線に乗って名古屋まで行って、途中でレトルトカレーとパックの白米と缶のコーラ、実用より場を和ませる用途で選んだポルノ雑誌を買い、見舞いと称して沢村の住むアパートの部屋に押しかけたのは、はっきり言ってよけいなお節介でしかなかったと思う。

大きなビニール袋を掲げて現れた千堂の姿を見るなり、沢村は一言「帰れ」と言って扉を閉めた。

そんな予感はしていたので驚きはない。ため息をつきながら扉をノックし、「開けんかい」と繰り返している数分後に沢村が顔をのぞかせた。

「しつこい野郎だな。帰れって言っただろうが」

「ワイかてキサマの辛気くさい顔なんぞ見たないわ。せやけどしゃあないやろ。あの先生に頼まれて知らんふりでけるかいな」

沢村を押しつけて薄暗い室内に入り、勝手に上がり込んで座布団の上にどかりと座る。

一人暮らしだというのに部屋が妙に片づいていて気味が悪い。布団はきっちり畳まれているし、放置された洗濯物も読みさしの雑誌も洗っていない皿も飲みかけの缶もない。

「居心地の悪いところやな」

「文句つけるなら帰れ」

「まあそう言うなや。退院してもしばらくは家に引きこもらんとあかんのやろ。お供持ってきたったで。動けへん間はこれで楽し、」

びゅお、と音がし、袋から取り出したばかりの大判サイズのエロ本が宙を舞った。「現役グラドルの暴れん坊Kカップ！ ワールドクラスの巨乳&巨尻全部見せ！」というありきたりな見出しが鋭い拳圧にへこむ。

「飛ばすことないやろが。高かったんやで」

「嫌がらせしかできねえのかお前は」

沢村はジャブで吹っ飛ばした雑誌を拾いもせず、部屋の反対側に座った。

こうしていると大ダメージを負って手術までした人間とは思えない。包帯が残っているのも目の周囲だけだ。それでもやはり呼吸は苦しそうだから、三本折れたという肋骨の痛みは相当なものなのだろう。

気持ちは分かる。同じ痛みを身をもって味わっている千堂には、いつになったら痛みが消えるのか、いつまで風呂に入るとき不自由な思いをしなければならぬのかもだいたい分かる。

しかしどれほど大上段から自説・高説をぶったところで、幕之内に負けた悔しさがこの先、沢村の中でどういう感情になるのかはまだ分からない。

「何見てやがんだ」

「インネンのつけ方がまるで成長しとらんなと思うところや」

「ごまかすんじゃねえよ。お前いったい何しに来了。河辺先生に頼まれただけじゃねえだろ。他に何か理由があるはずだ」

ちゃぶ台に肘をつき、手のひらであごを支え、沢村の顔をじっと見る。その目に恋の色があるかどうかを見る。自分たちのような人間には似合わないその色、人を生かしも殺し

もする、強すぎる衝動。

初めて幕之内に負けたときは一瞬だっけとしていらなかった。早くやり返してやりたくてたまらなくて、リングの上で彼を負かすことばかり考えた。彼に打ち勝って倒すところを想像するだけでぞくぞくした。

他のお利口なボクサーはともかく、自分と同じ種の沢村ならきつとそんな気持ちになるはずだ。あるいはもうなっている。沢村の頭には今ごろ新たなファイトプランが山のように浮かんでいるに違いなくて、

「期待しても無駄だぞ、千堂」

「期待？ 何の話や」

「悪いがオレとお前は同類じゃねえ。単純なお前と違ってそれなりに折り合いのつけ方ってもんを知ってる」

「何やそら。その折り合い、ちゅうのは」

「分かってるんだろ。活人だか何だか知らねえが、好きこのんで何度も同じ奴に負けたがる馬鹿には付き合えねえよ。一人で幕之内の尻を追いかけてろ。道連れを欲しがるな」

「……はん、何や。つまり、」

自信ないということかいな。幕之内に病院送りにされて刃向かう気力もなくなったんやろ。キサマも丸くなったもんやな。尾張のトカゲに改名したらどないや。

悔し紛れにそう吐き捨てようとして、しかしそんなことを口にするのはあまりにも格好が悪いから言葉を呑み込んで横を向く。

まさかこんなにすぐ真実を言い当てられるとは思ってもみなかった。やはり沢村は、とんでもない観察眼の持ち主だ。千堂がどんな状態にあるのかを見透かしている。坂道を転がる雪だるまのように膨らんでいく執着も、自分の中で執着にうまく折り合いをつけないことも、それをいまだ他人に説明できずにいることも。

本当に人をよく見ていると思う。カウンターが上手いわけやな、と小さくつぶやく。

「言っとくが挑発しても無駄だぞ」

「アホか。挑発なんぞせえへんわ。キサマが妙にあきらめのええこと言うさかい、心配しとるだけや。まさか引退する気なんか？ もうちょいでタイトル獲れたんや、ここでやめたらもったいないで」

「うるせえよ。誰が引退するなんて言ったよ。ベルト巻くまで絶対やめてやらねえよクソが」
「お、おう？ さよか」

言葉の出身より、妙に強気な口調だったことに驚いてあごから手を外す。沢村は自分の欲望に対して、何やら少しストレートになった気がする。ねじくれた結び目がほんの少しだけほどけたからといって何が変わるわけでもないのだろうが、少なくとも沢村の恩師は喜ぶだろう。

千堂は足を伸ばして後ろに手をつき、畳に転がっていた現役グラドルの暴れん坊Kカッ
プをひとしきり眺めてからため息をつく。

自分より上がいることを認めるとしたら、ケンカなんぞとはほど遠い、まったく別の人
種にガッンと思い知らされたときかもしれないな。

沢村は本当にその通りになったらしい。

分っかりやすいやっちゃん、と思う。お互いに。別の人種に二度もガッンと思い知らさ
れた千堂などは、まっすぐ走りすぎて思わぬところまで来てしまった。

「で？」

「あん？」

手みやげのコーラの缶を勝手に開け、一口すすってから沢村は鋭い目を向けてきた。

「お前はとうするんだよ。これから幕之内の尻を追いかけることだけが目的でボクサー
やんのか」

「そら男として二度も負けた相手にやり返さんわけにはいかんやろが。ワイが幕之内をギ
タギタにしたら、ヤツに病院送りにされたキサマかて泣いて喜ぶやろ。それが最後になる
か途中になるかは分からへんけどな」

「最後……？　どういうことだ」

ぱき、と音がしてコーラの缶がへこむ。千堂はにやりと笑い、Kカップを手取る。沢村が嫌な顔をする前に「ワールドクラスの」という見出しを指し示す。

「ワイはな、もう獲ったことあるタイトルなんぞには興味ないねん。これからは世界や世界。世界ランカーを片っ端から沈めてベルト奪ったる。まずは、手近なOPBFタイトルからやな」

「東洋王者にはもう話ついてんのか？」

「細かいことは全部これからや」

かかか、と豪快に笑って雑誌を後ろに放る。

話などついているわけがない。そもそもこんなこと誰も知らない。柳岡すら知らない。今ここで決めた目標だからだ。

もっと上を目指す。世界に打って出る。幕之内のことはもう振り返らない。もし二度も負かした相手に先を行かれて悔しいなら、途中で相手をしてやらないでもない。ちっとも悔しくないというなら、先にタイトルを獲得して彼が来るのを待つ。

千堂が考えつく「折り合い」なんてそれしかない。あんな風に苦しみながら彼の背中を追いつけることは答えではない。恋の苦しさのあまり逃げることもない。ましてや階級を上げてあの男をあきらめることなんかでは、絶対に絶対でない。

「おめでたい野郎だな、相変わらず」

「ポジティブ、いうやつやで」

「そうかよ。それで何が変わるのかは知らねえが、少なくともあのトレーナーやお前をちやほやしてくれるファンどもは喜ぶだろうな」

肋骨が痛むのか、沢村はくっと思を詰めてから立ち上がって玄関の扉を開けた。そろそろ帰れ、と言いたいのだろう。

「本は持って帰れよ」

「ほんまにええんか？ ワールドクラスやで。暴れん坊Kカップやで。このグラドル、次いつ脱ぐか分からへんで」

「透明な袋に入れられてジムに着払いで送りつけられたくなけりや持って帰れ」

しぶしぶレジ袋に雑誌を詰め直し、玄関で脱ぎ散らかした靴をたぐり寄せて履く。去り際にほな、と言って片手を挙げると、沢村は妙な顔をして千堂をにらみつけてきた。

「どないした？ やっぱりKカップが惜しかったんか」

「分かってんのか」

「何の話や」

沢村の右目は、ひとと千堂を見据えたまま動かない。

「あれはそのうちいなくなるぞ。向かい合ってて分かった。保身なんざ少しも頭がない野

あれはそのうちなくなるぞ。

それでも構わない、とは言えない。

「承知の上のことだ、とも思わない。」

けれど、そうすると決めたのだ。タイトルでもなく自分のキャリアでもない、いつ変わるかも分からない一人の人間を永遠に求め続けると決めた。

彼の生き方に変えられてしまった自分自身のありようを、彼が命をかけて受け入れてくれた自分の変わらない部分を、永遠に愛すると決めた。

与え合って奪い合う関係には、ついぞならなかったとしても。

「永遠」は逃げ腰ではない。たぶん呪いだ。たぶん誓いだ。

番外編
①

賜物

Once in a Blue Moon

千堂武士が消防車のサイレンを耳にするたび火災の現場に駆けつけずにいられなくなったのには、たぶん何らかの理由がある。

ほんの幼児のときから似たようなことはしていた。サイレンと火災を知らせる鐘の音が遠くから聞こえてくると、祖母は必ず「武士、父ちゃんが頑張っとなで」と言う。その言葉が誇らしいと同時に父の不在を思い出させて、寂しくていてもたってもいられなくなつて、繋がれた手を振り払って駆け出す。

サイレンの音がするところに父がいる。そう思い込んだ千堂は、何度連れ戻されても叱られても迷子になつても、当の父親に諭されても同じことを続けた。

あの夜もそうだった。

夏の湿った空気をまっすぐに切り裂くサイレンと鐘の音が、怪物の遠吠えのように聞こえていた。もう暗かったのにすぐに当直中の父の元へと走り出し、しかし何度も祖母に連れ戻され、やがて疲れ果てて立ち上がれなくなった。祖母は膝の上で眠ってしまった千堂の小さな体を抱えて布団へ連れて行き、店先に戻ってくる途中で電話が鳴った。

祖母はその電話が自分と孫の人生を永遠に変えてしまうものだとは知らずに、いつものように受話器を持ち上げてそれを聞いた。

武士、おとんが。

そこまで聞いたとき、いつものように「頑張っとなで」と続くのだろくなぜか無邪気

に信じていた。しかし明かりもつけずに部屋に入ってきた祖母はすでに涙を目に浮かべていて、明らかにいつもと違う様子だった。大声で泣きわめきたいのに、孫を氣遣って努めて冷静であろうとしているのが伝わってきた。

子供の目にも分かった。ただならぬことだ。

怯えながら「父ちゃん、頑張るとるん？」と聞くと、祖母は黙って千堂の体を優しく抱きしめながらこう言った。

頑張るとるよ。一緒に父ちゃんに会いに行こなあ。

その火事るとき父に助けられたという子供に会ったのは通夜でのことだ。同じ五歳の男児で、黒い服を着ていて、両親に連れられていた。子供の父親は千堂の姿を見ると泣き崩れ、「申し訳ない」と悲痛な声で叫んだ。

こんな小さい子がおるのに、うちの子を助けてくれはって……。

母親も同じように声をあげて泣いていたが、子供の方はあまり状況が分かっていないらしくぼかんとしていた。わけも分からずただ母の手をつかんでいる彼の姿に普通を感じた。普通とは人として当たり前の状態のことだ。差し引きゼロの幸福のことだ。今までもこれからも、自分が持たないであろうもののこと。

だからうらやましいとは思わなかった。なぜ余所の子供なんかを助けて自分を置いていったのだ、と父を恨むこともなかった。

悲しみや羨望の代わりに幼い千堂の体を満たしたのは誇りだった。祖母は五歳にして早くも両親を失ってしまった孫の行く末を案じ、ことあるごとに「父ちゃんみたいに人を守る優しい人間になるんやで」と繰り返した。

しかし父のように人を守る、ということはつまり命を捨てることだ。何かを守ろうとすれば大事な人の元にはもう二度と戻ってこれないし、決して人生をとものにできない。失い、失わせることを覚悟しなければ祖母の言うような人間にはなれない。

そうして成長し、次第に暴力に傾倒していった千堂にも、変わらなかったものがひとつだけある。

サイレンが聞こえてくると、火事の現場に駆けつけずにはいられない。

火災現場に行ったら何ができるわけではないし、無理に何かしようとしても邪魔にしかならない。よくて迷惑な野次馬扱い、悪くすると公務執行妨害罪だ。分かっているのにどうしても駆け出してしまふ。

また君か、ここは危ないからおうちに帰りなさい、と消防士たちに言われているうちはまだよかった。小学校を卒業して、体が大きくなって、学生服姿で同じことをすると周囲から奇異な目で見られ始めた。学校でもどこでも、サイレンの音が聞こえてくるとそわそわして目の前のことに集中できなくなってしまう。どれだけきつく教師に制止されても、変な奴だと噂されても、かばんを置いて授業を抜け出して音のするところへと向かわない

といられなかった。

唯一サイレンが気にならなくなるのはケンカをしているときだけだ。人を殴っている間は何も耳に入らない。叩き起こされてぼんやりした頭で迎えたサイレンの夜のこと、もはや父と分らないほど煤だらけになった父の顔も、差し引きゼロの幸福のことも、すべてから解き放たれて自由になれる気がした。

その奇怪な癖は、大人になって人を殴る職業に就いてもなかなか直らなかった。

サイレンを聞いて走り出した回数はこの拳で黙らせてきた男の数よりも多い。他人には「弱い者いじめを見過ごせない性格だから火事からも人を助けよう」としてしまうのだろう」などといい加減に理解されることもあるが、祖母でさえその理由を知らないし、自分から話もしない。そもそも自分でもなぜこんなことをしてしまうのかよく分からない。

火を消しに行きたいわけではないのだ。もしそうならとくに消防士になっている。

救助隊を押しのけてでも取り残された人を救助したいのか、と問われたら、そんなわけではない、と答えるだろう。身の程くらいは分かっている。

かといって野次馬がしたいわけではもちろんないし、消防の活躍ぶりを見ていたいわけでもない。だったら何だ？

それを考えるたび少し嫌な気分になる。

人を助けたいのでなかったら、火事の現場でできることなんて現在進行形で何かを失っ

ている人を眺めることだけだ。当たり前の幸福を手放さなければならなくなった人々、早々に両親を亡くした自分よりずっと大きなマイナスを抱えてしまった人々、普通を、差し引きゼロを失って、衝動的に何かを追いかけてはいられなくなった人々を見たいのか、自分分は。

千堂は自尊心が強いから、プライドに照らし合わせて「したくない」と思うことは絶対にしないたちだ。

だから本当はもう消防車を追いかけてくはない。人が不幸になる瞬間を見て安心するよな人間ではありたくない。そもそも自分は不幸なんかでは全然ない。世の中の普通は幸福を意味するわけではないのだから当たり前で、そんな最低限の常識をわざわざ確認しなければならぬほど愚かでもない。サイレンを聞くと走り出さずにいられないのには、もっと他に何か理由があるはずだ。あるはずなのだ。

＊

当然ながらその日も日本じゅうでサイレンが鳴っていて、どこかで火の手が上がり、そ

こかしこで家が焼けていた。火災が発生すればときには誰かが命を落としかけ、ときには誰かが炭化して顔も判別できない状態で戻ってきて大事な人を泣かせるのだろうか、ちょうどその日にその場所でそれが起きたかどうかは分からなかった。火に包まれた家の中で何かが起ころうと、何も起こらなかりと、それでもサイレンは鳴るのだ。否応なく。

その日、千堂はたまたまスパーリングのために東京にいて、地下鉄の駅に向かう道の途中でサイレンの音を聞いた。

同行していた柳岡はしきりに空模様を気にしていて、一週間前に発生した台風九号の上陸が予想より早いこと、もし暴風警報が出たら新幹線が運休になるかもしれないことを心配そうにこぼしていた。新幹線が止まってしまったら今日じゅうには帰れない。雨風が強くなならないうちにさっさと東京駅に戻って新幹線に乗った方がいい。そう合意したはずだったのに、サイレンが夏の湿った空気を切り裂いたとたん、千堂はすべてを忘れて一目散に駆け出した。

どこ行くんや千堂、と呆れたように呼びかける声が背後から聞こえ、ぎりぎりの理性が足を止める。

「すぐ追いつくさかい、先帰っとってや」

振り向きざまにそう答えると、柳岡はぼつが悪そうにため息をついて「台風」とつぶやいた。

「来とるんやで。ぼけっとしとったら帰れなくなるんやで。分かつとるんやろな」

「分かつとるわい。すぐ戻るいうとるやんか」

ふたたびため息が聞こえた。柳岡の視線は優しくかった。今まで何度も同じことがあって、サイレンのたびに道中で勝手に消えて迷惑をかけてきたのに、なぜ消防車を追いかけるのかと聞かれたことは一度もない。追いかけるなど言われたこともない。眉をひそめられたこともない。

「分かった。東京駅で待つとるで。三十分経って来おへんかったら先行く」

「おう。すまんな」

「あのなあ、千堂」

風にかき回された髪を斜め後ろに撫でつけながら「何や」と聞く。早く走り出したいけどたまらない。サイレンの音は徐々に遠ざかっていて、オフィスビルが並ぶ街並みの奥へと引っ込み始めている。

「ああもう、どこか行ってまうわ。ほな！」

柳岡は明らかに何か言いたそうな様子だったが、気づかないふりをして駆け出した。とはいっても、土地勘などない。

東京の地理が頭に入っていないから、地図の見方も分からない。東京のランドマークも東京駅と後楽園ホールと鴨川ジムくらいしか知らない。実はその三つの位置関係もよく分

かっていない。その程度の知識しかない場所で迷ったら終わりだ。

しかもこれから大型の台風がやって来る予定で、新幹線が止まりそうで、火災現場を探して延々走り続けるには疲れていて、そんなことくらい分かっているのに、唯一の頼みである柳岡から離れて一人でサイレンを追いかけている自分が滑稽でならなかった。夢中で走っているとき特有の、香ばしいような焦げ臭いような風の匂いがある。それを追って追って、どこにたどり着くのかも分からない。

一時間以上も音に迫いすがりながら走り、ようやく消防車を見つけたときにはすでに火活動が終わっていた。どうやら飲食店の一角で小さなボヤが起きただけらしく、現場に残っていたのは救助車だけだった。怪我人はいないのか、すでに搬送されたのか、周囲には野次馬しかない。

千堂もその一人だ。普段のロードワークより長く走ったせいで汗まみれで息も上がっている。いったい何をやっているんだろうと思う。焦げ跡すらない建物と引き上げモードの消防士たちをただ眺めるだけならここまでする必要はない。無我夢中で火事の現場に着くところとしていつも虚脱感だけが残る。セックスの後によく似た感覚。

はあ、と長く深く息を吐き、膝に手をつけて肩を落とす。

またやらかった。馬鹿馬鹿しいことこの上ないが、やってしまったものは仕方ない。あれからずいぶん経っているから柳岡はすでに新幹線に乗っているだろう。

ぼけっとしていたら帰れなくなる、という彼の言葉を思い出して空を見上げる。

まだ五時すぎくらいだろうに真っ暗だ。千切れた分厚い雲が互いに折り重なり、不穏なグラデーションを作り出している。風は不気味にあたたく湿り、潮の匂いをここまで運んできて、これから何か凄惨なことが起こりそうな予感を漂わせていた。

本当に台風が来るのならまずいことになる。

わけも分からずサイレンを追って走ってきたからここがどこなのかも分からない。朝に家を出てスパーリングをしてその日のうちに帰ってくるだけの気楽な遠出のはずだったからほとんど何も持ってきてない。財布の中も新幹線の往復切符と千円札が一枚と小銭だけ。もし新幹線が運休になったら、1262円で台風が通り過ぎるのを待たないとならない。

もうじつとしてはしてはもらえなかった。ふたたび走り出して営団地下鉄のマークを探す。さっきはあんなにたくさんあったのにどこにも見当たらず、仕方なく通行人をつかまえて駅の場所を聞く。

生ぬるい風とともに横殴りの雨が降り出す中、鬼気迫る形相で因縁をつけてきた……ように見えたであろう千堂がよほど恐ろしかったのか、コンビニの袋を下げて歩いていたら若者は舌をもつれさせながらこう言った。

「ちっ、地下鉄の駅ならすぐそこにありますけど、台風ヤバイからもう電車止まるかもしれないらしいすよ」

目の前が真っ白になった。もはや考えている余裕などない。

おおきに、とだけ言い残して勢いよく駆け出し、不気味なほど人けのない改札へと足を踏み入れると、駅員が切符売り場に不吉な張り紙を出していた。

十八時十五分 発 ○○行き 本日最終

なお台風九号接近にともない、私鉄各社、ＪＲ、特急列車、新幹線各線の全線は十八時より運休していますのでお乗り換えはできません

「何でやあっ!？」

思わず若い駅員に詰め寄って襟首をつかもうとし、寸前で思いとどまった。代わりに駅員と「終電」と「運休」の赤字を悲壮な目でにらみつける。それ以上何かできるわけでもない。電車が動かず帰れなくなったのは誰かのせいではない。台風が来ると知っていたいながらいつものようにサイレンを追いかけてしまった自分のせいだ。

濁点つきで「あー!」と叫んで頭を抱え、一秒だけ悔やんでからさっさと切り替えてホームに下り、最終電車に乗り込む。乗り換えができないためか、車内は驚くほどすいていた。千堂にしてもこの電車に乗ったからといって状況が変わるわけではないのだが、じっとしていられないたちだから乗らないわけにはいかなかった。

そのまま十分ほど地下鉄に揺られ、何となく聞き覚えのある地名がついた駅で降りる。人もまばらな改札を出て地上に戻ると、千堂はまず公衆電話を探した。

もちろん、ホテルを探すためではない。1262円ではビジネスホテルどころかカプセルホテルにすら泊まらない。いつもなら終夜営業をしているであろうファミレスも臨時休業の札を出しているし、いくら夏だからといってこの暴風雨の中屋外で夜明かしをする和最悪死ぬ。となれば知己を頼るしかない。

電話ボックスの中にある電話帳で、まずはさっきまでスパリングをしていたジムの番号を探し出そうとする。ここからそう遠くはないし、ついさっきまでいたところだからおぼろげながらも一応場所をおぼえている。台風で帰れなくなったから朝まで置いてくれ、と頼めばきっと迎え入れてくれるだろう。スパリング相手をものの数十秒でぶちのめして病院送りにしたことだけが懸念材料だがまあ何とかなる。しかし区が違うのか電話帳に番号を載せていないのか何なのかは分からないが、一向に見つからない。

「……次や次」

軽く舌打ちをし、たまたま財布の中にメモがあった『ボクシングファン』の編集部の番号にかける。しかしオフィスに誰もいないのか繋がらない。電車が止まることを見越して早めに退勤してしまったのだろう。仕方なく受話器を置き、戻ってきた十円玉を握りしめながらほんの少しだけ躊躇する。

当てはあともう一つある。

場所も行き方も分かるし電話番号も知っている。編集部と同じく誰も残っていないかもしれないが、一人は確実にいる。あの生真面目な男が台風くらいで練習を休むことなどありえない。彼に頼めば絶対に助けてくれる。頼まなくても困っていることを察してくれる。負けた相手に頼るなんてプライドがないのか、と思わなくもないがそんなものはもう今さらだ。格好つけても仕方ない。つける必要もない。

わずかな迷いを振り切って十円玉を落とす、おぼえている番号をプッシュする。気遣わしげな呼び出し音が聞こえてくる。本当にいいのか、と聞かれているかのようにだった。

それを五回ほど繰り返し返した後にがちやと低い音がし、すう、と息を吸い込むかすかな音が聞こえた。一気に瞳孔が開く。呼吸音だけで分かる。間違いない。あの男だ。

『も、もしもし、鴨川ボクシングジム、ですが……?』

その心底困り果てたような台詞を最後まで聞かず、千堂は電話ボックスが振動するほどの大声で「ワイヤ!」と叫んだ。普段通りに。

『ワ、ワイ? ……あ、もしかして、千堂さんですか?』

『そや。そっちは幕之内やろ。キサマ一人なんか?』

『ええ、そうです。台風で会長もみんなも先に帰ってしまって、来客とか大事な電話があったらどうしようと思って緊張してたので千堂さんからでよかったです』

ずいぶんほっとした声だ。ジムの古株で日本王者なのだから堂々としていればいいものを、と思うがそこが彼らしくもある。

『そちらは台風の進路から外れてるんですね。こっちはもう朝から風が強くて、電車は止まるし海は時化するで大変です。そろそろ日が暮れますしボクも帰るところなんです。傘が飛ばされそうで……って、長距離なのにこんな話してる場合じゃなかったですね。うちのジムに何のご用ですか？ いま会長がいないので場合によっては返事が明日以降になるかもしれません』

そこで唐突にぶつ、と電話が切れた。

十円玉の限界がきたのだろう。つまらない世間話など聞かずいつものようにすぐ用件を切り出せばよかったのに、彼の声が懐かしくてどうしてか話を遮れなかった。

おかげで所持金が1252円に減った。十円玉はもうない。千円札と百円玉と五十円玉と一円玉しかない。

んぐう、と猛獣のようになりながら受話器がつぶれそうなほど強く握りしめ、勢いに任せて百円玉を突っ込んで同じ番号にかける。今度はすぐに幕之内が出る。

『も、もしもし？ 千堂さんですか？ すみません、台風のせいか電話が切れちゃったみたいで』

「もう黙っとれ」

低い声で圧をかけ、幕之内を一瞬沈黙させてから先を続ける。

「ええか、これからごつつう大事なことを言うで。よう聞けや」

『は、はあ?』

大きく息を吸い込み、覚悟を決めて口を開く。

「ワイはな、今、キサマの近くにおんねん」

『え……ええと、それ有名な怪談ですよね。最初は遠くだったのにどんどん近づいてきて、いつの間にか後ろに来てる、っていう。ボクが一人だからって驚かさなくてくださいよ。しかもわざわざ長距離電話で』

「ええ加減にせえっ! うだうだ話したらまた金なくなってるやろが!」

百円玉がどれほどものか分からないから冷や汗ものだ。現時点で所持金1152円、この百円がなくなったらまた百円玉を入れざるを得ないわけだから1052円……。指折り計算しているうちに頭が痛くなってくる。

『お金がなくなるって、もしかして公衆電話なんですか? だったら千堂さんいま、本当に東京に?』

「そういうこっちゃ。台風で新幹線止まって帰れんようになってしまった。すまんがそこに泊めてくれへんか」

たったそれだけの台詞を口にするのに百十円と、愚かなためらいと、すり減ったプライ

ドがほんの少し。

幕之内はいささかも躊躇せず『もちろんですよ！』と応えた。思に着せようとか、二度も勝っている相手に対する上から目線の余裕とか、そんなものはいっさい感じさせない純粹な善意だけが声から伝わってくる。相手が千堂でなくても彼は同じように応えるだろう。『近くに来てるってことは最寄りかどこかにいるんですね。そこから一人でうちのジムまで来られますか？ 道が分からなかったら迎えに行きますけど』

「ふん、ほんまにお人好しやな。ええからそこでじっとしとれ。外出たらキサマもずぶ濡れになってまうで」

『ボクは職業柄ずぶ濡れとか慣れてますから大丈夫ですよ。この雨じゃ大通りが冠水してるかもしれないし、そうなると迂回路を探すはめになって迷うかもしれません。千堂さんこそそこでじっとしててください。風も雨も強いんですから』

粘られたことが少し意外で、思わず受話器を見つめた。幕之内は気弱だから流されがちに見えるが実際は相当に頑固な男だ。だが、どうもいつもとは様子が違う。奇妙な切迫感がある。どこか懐かしいような、よく知っているもののような、気づくのが何となく恥ずかしいような……。

「しつこいやっちゃな。迎えには来んでええ言うとするやろが」

『で、でも』

「でも何もあらへん。そこにおれ。ワイが着くまで帰ったらあかんで。遅なってもじつと待っとれ。ええな？」

『よくないですよ！ もう暗いですし何かあったら大変じゃないですか。何か目印になる場所教えてくれたらすぐ行きますから待っ、』

「あー？ 何やて？ 風で聞こえへんわ。ほな後でな」

受話器を必要以上に乱暴にフックに戻して電話を切り、大股で外へ出た。

あんなに心配されると何だか舐められたような気分になる。だいたい、千堂は方向音痴なわけではないのだ。気を逸らされそうなものが近くになれば自慢の勘でだいたいどこにでもたどり着ける。幸い今日は台風なので野良猫は皆どこかに引っ込んでいるし、道ばたに人がいないからケンカも揉め事も起きようがない。消防車のサイレンも、嵐が通り過ぎるまではきつと鳴らない。

子供のころ、夜に雨が降るとどうしてかほっとした。

雨足が強ければ強いほどよくて、嵐なら最高だった。雨の中なら誰も焼け死なくて済む。ホースからの放水よりも激しい嵐の雨が炎と灰を打ちのめしていくところを何度も想像した。

あの日が台風だったら、きっと父は死ななかった。だから台風の日にはサイレンを追いか

ける必要がなかった。

千堂にとって嵐は、ついに届かなかった素敵な贈り物のような存在だった。この国で生きてれば何度だって台風はやって来るのに、いつだってそれは遅れてきたサンタクロースと同じだった。

雨も風も怖くない。暴風雨をものもしないものの方が、たぶんずっと恐ろしい。

＊

幕之内一步が台風の夜にできるだけ家を空けないようにしているのには、明確な理由がある。

幼児だったころはむしろ、台風が来るたび外に出たがった。空はいつもと違う色、空気はいつもと違う匂い、風は小さな体を吹き飛ばしそうなほど強く、雨はまるで生ぬるいシャワーで、妙に魅力的で楽しそうだったのだ。

母はいい顔をしなかったが、父は頼もしげに笑って一步を抱きかかえ、大嵐の中少しだけ外に連れ出してくれた。一度出たらなかなか帰りがらない息子を叱ることもなく、

「だったら海を見に行くか？」と楽しみに聞いてきたことをおぼえている。

時化の海はすごいんだぞ。海なのに山がたくさんできるんだ。時化の日に船に乗ってるとぐらんぐらん揺れて、まっすぐ立つてることもできなくなる。けどな、そんな中でも根性入れてしっかり立って、頭を冷やして風と波を読んで、度胸でピンチを切り抜けるのが海の男ってものだ。

結局母に止められて海を見に行くことはできなかったが、その言葉は嵐の記憶とともに残っている。父が大時化の海から戻ってこなかったのはそれから少ししてからのもので、母は台風が来るたびに不安そうな悲しい顔をして父の遺影を見つめていた。

嵐の夜に母を一人にしない、と心に誓ったのは小学校に上がる前のことだったと思う。

息子が帰ってこないかもしれないと思わせてはいけない。不安に怯えていた夜を二度と味わせてはいけない。母をこれ以上悲しませてはいけない。時化のときに海に出るのもだめだ。それが原因で客足が遠のいたとしても、たとえ母自身が「このくらい大丈夫よ」と言ったとしても、出航の判断は石橋を叩いて渡るくらいのつもりでしなければならぬ。失敗すれば大事な人を悲しませると分かっているのにわざわざ逆境に足を踏み入れる度胸は自分にはない。

今までその二つの鉄の掟が破られたことはなかった。台風の日之夜は母子二人で静かに過ごすのが自分の中での暗黙のルールで、練習に熱中していても学校行事があっても遠出

をして電車が止まっても日が暮れるころには必ず帰宅するのが当たり前だった。「こんなにひどい雨なんだから無理して帰ってこなくていいのに」と呆れられることもあるが、無理をしないなどという選択肢はなかった。小さなころから自分を守ってくれた母をいま悲しみや不安や記憶や危険から守れなくて何が息子だ。

だから、その日も夜になる前に帰るつもりでいた。

夏の日没は七時近くになる。六時半にジムを出て走って帰れば日が落ちてしまう前に自宅にたどり着ける。薄暗い無人のジムの電話が鳴ったのはちょうどその六時半で、最後に各所の戸締まりを確認しているときのことだった。

業務上の判断は会長や八木にしか下せないのだから自分が電話に出ても仕方ない。そう思いつつも無視できなくて、結局おそるおそる受話器を取った。こういう状況で電話を取ってかけてきた相手が知人だと分かったときの安堵は計り知れないものがある。それが話しやすい人ならなおさら。

誰に対しても必要以上にかしこまってしまおう一步にとって、千堂は特に緊張することなく気安く話せる数少ない他人だ。気性が野生動物に近くて細かいことを気にしない人だから楽だというのが主な理由だが、意外と気遣いのできる人でもあるのだ。いつも気ままに他人を傷つけているように見えて、実際にはできるだけ角が立たないように振る舞っている。もちろん苛立っているときや興奮したときは別で、あの爪と牙がいつ気まぐれにこっ

ちに向くかと思うと少々うんざりする。

が、それでも、彼はいい人だ。いつでも正直で豪放でまっすぐでさっぱりしていて予測不能で楽しい。二度も対戦した相手だからそれなりに愛着もある。自分たちはそのうち友人同士と呼ばれる関係になるだろう。もうなっているかもしれない。

だからこその猛烈な雨風の中に一人にしたと思うと落ち着かない気分になる。

滴というより水流に近い雨粒が窓と壁を激しく打ちつける。

風のせいでサッシがぎしぎしとたわみ、そこかしこから入り込んできた生ぬるいすきま風がシャワーを浴びたばかりの肌を冷やしていく。

外はもう暗くなりかけている。心臓がどきどきと鳴る。恐ろしくてしょうがない。千堂の身が心配というだけではなく、「嵐の夜に誰かを待っている」というこの状況自体が不安でたまらない。

千堂はいまだここにいるのだろうか。足を滑らせて転んだり、強風で飛ばされたりしてないだろうか？

いや、さすがにそれはない。彼の人間性をさほど深く知っているわけではないが、月面に一人取り残されても死ななさそうなたくましいイメージしかない。

それでも彼だって人間なのだから、風で飛んできた看板が頭に当たったり増水した川に落ちたりしたら普通に死ぬ。しかもこの雨ではあたりの景色も変わって見えるはずだ。途

中に冠水しやすい道があるのが一番心配で、その道を迂回しようとする土手に出てしま
うのも心配で、土手を見つけると川がどうなっているか見に行きたくなってしま
うのが人情というもので、千堂はいかにもそんなことをしそうな人で、つまり自分
はまったく人というものを信用していないのだった。

はあ、とため息をつき、締め切った窓から外を見る。しかし雨粒が絶えずガラス窓を叩
いているから何も見えない。これでは外の世界で何が起こっているのかまったく分
からない。

もうこっちから迎えに行ってしまうか、とふと思った。誰であれこんな嵐の夜に一人
になっていてほしくない。不吉な予感を抱えたままただ待ち続けるのはまっぴらだ。だが
衝動のまま暴風雨の中に飛び出していったって危険が二倍になるだけだし、入れ違いに
もなったら目も当てられない。

それに、ほんの少しの恥ずかしさもあった。

千堂は二度も戦った因縁の相手だが友達というにはまだ付き合いが浅いから、つつかれ
たら痛むところを無防備にさらして平気な顔をしていられる自信がない。彼を二度も負か
しているのだからいつも格好つけていたい……などと思えるようなプライドは少しも持ち
合わせていないが、できればあまり呆れられたくない。結局、いまでも「あの人には負け
たくない」と思ったときのままなのだ。だからこんな青い顔をしたまま外に飛び出して

くことはできなかった。変な奴だと思われたくなかった。おかしい行動の理由を探られたくもなかった。となれば、あとは祈ることしかできない。

あの人が無事にここにたどり着けますように。もう誰も嵐に奪われませんように。

かしわ手、アーメン、合掌、拝礼。知っている祈りのポーズを順に繰り返していると、ジムの正面扉がごん、と叩かれた。

ノックにはまったく聞こえないが、かといって飛ばされてきた植木鉢がぶつかったとも思えない。おそるおそる扉を開け、すさまじい勢いで吹き込んできた風に倒されそうになりながら外を窺うと、ずぶ濡れの手が扉をつかんできて思わず「うわあっ」と声をあげた。まるでホラー映画だ。

「ぼけっとすな！ 早よ開けんかい！ 飛ばされてまうわ！」

そう叫びながら命からがら中に転がり込んできたものは、もはやヒトには見えなかった。絞られていない雑巾そっくりだった。自分自身が雨雲であるかのように床に水を滴らせ、完全に虚脱した表情で宙を見つめている。

「た、大変でしたね、大丈夫ですか」

そう声をかけると千堂は無理やり洗われた猫のような顔でこちらを向き、目つきだけで返事をした。

これが大丈夫に見えるんか？

確かに、どう見ても大丈夫ではない。あわてて用意しておいたタオルを差し出して扉を閉める。

「やっぱりすごい雨だったんですね。どこか怪我してませんか？」

千堂が首を横に振ると、水滴が周囲に飛び散る。

「そのままだと風邪ひいちゃいますからジムのシャワー使ってください。ボクですけど、ついでに予備の練習着も置いておいたのでよかったら……」

「おおきに」

ついに口を開いた千堂は、素っ気ない声でそう応えずんずん奥へと進んでいく。彼が歩いた後の床には大きな水たまりができている。付き人のように後をついて歩いてモップで拭き、戻ってきて一息つくとさらに厄介なものに気がついた。

リングの脇に置き去りにされていた荷物が水没状態になっている。さほど大きくないリュックだから中身を出して絞って広げておけば乾くだろうが、勝手に開けていいものかどうか分からない。これが同じジムの仲間なら気にせずに行ってしまふのだが千堂はそこまでの距離感ではないし、一応ライバル関係にある一歩には見られたくないものだってあるだろうし……と思うとなかなか手が出ない。しかし、せめて水気くらは取らなければ。リング脇に水たまりがあると誰かが足を滑らせかねない。

こわごわ荷物を手に取ってタオルでくるんだとたん、後ろから「何しとんねん」と声を

かけられて飛び上がった。

「お、お、お、お疲れさまです。は、早かったですね？ あったまりましたか？」

「おう」

髪をがしと乱暴にタオルで拭きながら、千堂はまたしても簡潔すぎる返事をした。

思った通り、用意した服が面白いほど似合っていない。特に上がひどい。

入門したてのころ、憧れの宮田と同じブランドの練習着をこっそり買うつもりが周りの目が気になりすぎて確認を怠り、間違っただけの変なパンドの絵が描かれたオーバーサイズのTシャツをレジに持って行ってしまい、セール品だったから返品もできず、泣く泣く予備に回したといういわくつきの代物だ。

しかも下は高校のころ体育の授業で履いていた、クラスと出席番号と名前入りの緑のハーフパンツ。申し訳なくて消えたくなる。

「上下のサイズが合ってなくてすみません。下は絶対この先着ることないですし、ゴムほどこいて伸ばしちゃってもいいですから」

「ほうかいな」

明らかにびくびくしている一步を尻目に、千堂は優雅に腕を伸ばしてずぶ濡れのリュックサックを持ち上げた。

「こんな拭かんでええ。全部中出して絞らな、どもならんわ」

「ええ、そうした方がいいと思います。よければ手伝いますけど」

濡れたタオルを握りしめたままそう言うのと、千堂は無言で手をひらひらさせて申し出を断った。しかし何となく一人ではいづらくて、流しに移動した千堂についてきてしまう。

「あの、千堂さん？」

「何や」

「台風、どんな感じでしたか？ 風もですけど、駅までの道に水浸しになりやすいところがあるので途中で動けなくなったんじゃないかと心配で」

「水浸し……？」

ゆっくりとこつちを振り向いた千堂の顔には、あきれとおどけが混じったような表情が浮かんでいた。

「水浸しどころの話ちゃうで。あれはプールや。海や。こんくらいまで水来とったで」

濡れた手で腰のあたりを指す。そんなバカなと思いつつもぎょっとする。

「そんなに水出てたんですか！？ よくここまでたどり着きましたね？」

別に褒めたつもりはないのだが、千堂はなぜだか満足げににやと笑って雑巾絞りに戻った。それに愛想笑いを返す余裕はなかった。急激にわいてきた不安に顔をしかめる。

水位の話はさすがに大げさだろうが、一部が床下浸水レベルになっていることは間違いない。このあたりよりも海に近い幕之内家は海拔がさらに低い。しかも自宅は平屋だ。逃

げ場はない。せり上がってきた水に取られる母の姿を想像すると息もできなくなる。

帰らなきゃ、とかすれた声でつぶやき、わき目もふらずに出口へと駆け出す。勢いのまま扉に手をかけてジムの外に出ようとすると、物凄い力で腕を引かれて中に押し戻された。

「おんどれ死にたいんか!？」 水浸しやった言うとするやろが!」

なおも出口に向かおうとすると両肩をつかまれる。それでも前に進まずにはいられなくて暴れているうちに、後ろからタックルのような形で体当たりされて、抱きつかれて、リングの近くまで引きずり戻された。

「離してください、千堂さん! どうしても家に戻らなきゃいけません。ボクは家が釣り船屋なので嵐なんて何ともないですし、いまはそんなことよりも母さんが、」

「分かっとなる分かっとなる。せやけど少し落ち着かんとかあんで」

その声も言葉も思いのほか優しかったが、行動の方はまったく優しくなかった。

胴体に巻きついていた両腕が一瞬離れ、同時に膝の裏を蹴られて無理やり膝をつかされる。そのままふたたび背後から抱きつかれた、と思ったら、今度は腕で思い切り首を絞められていた。片腕をぐるりと首に回してもう片方の腕で固定して締め上げる、いわゆる裸締め、あるいはリア・ネイキッド・チョーク、つまりチョークスリーパーだ。

「や、やめてください! そんな強く首絞められたら死んじゃいますよ!」

「殺すつもりはあらへん。いったん落とすだけや、安心せえ」

そんなこと言われたって少しも安心できない。だいたい窒息しないように人を失神させることなんてできるのか？軍人でも殺し屋でも気功のプロでもないのに？

相当強く絞められているのか、腕をほどこうとしてもがいてもびくともしない。苦しすぎて頭に血が上る。以前鷹村に似たようなことをされたことはあるが、こんなではなかった。本気ではなかったということだろう。あんな滅茶苦茶な人でも手を抜かざるをえないほど危険な技なのだ、これは。

そう思うと一気に命の危険を感じた。このまま全力で絞められ続けていたら死ぬ。本当に本気で死ぬ。ジムが事故物件になってしまう。

「……分かりました！ 分かりましたから！ もう外行きませんから離してください！」

徐々に薄れゆく意識の中、ありったけの力を込めて必死にそう叫ぶと、ようやく腕の力がふっと抜けた。そのままどさりと床に倒れ込んでうずくまる。

視界がちかちかする。こめかみが脈打つように痛む。じたばた暴れたときにどこかにぶつけたのか足の先が痛い。ようやく血が戻ってきた脳は明らかに混乱していて、寒くてたまらないのに汗が止まらなかった。

すぐそばで仁王立ちしている千堂を恨めしげに見上げると、どういうわけだか彼は妙に優しく笑っていた。さっきから表情と言っていることとやっていることが一致していないくて怖い。千堂の中では何の矛盾もないのかもしれないが、こっちはまったく繋がりが読

めないので恐怖でしかない。

「頭冷えたかいな」

「は、はあ……どちらかというと頭より肝が冷えましたけど……」

「アホか。死んでしもたらキサマの親は肝冷えるどころやないで」

その飾り気のない一言は凄まじい破壊力だった。何も言い返せなくて目をそらす。

彼の言う通りだ。

衝動のままがむしゃらに走り出したら、父に続いて自分までもが「嵐から生還できなかった人」になってしまう。母を安心させるつもりが母に絶望を与えるだけになる。心の方とはかく、頭は冷やしておかないと本当にいつか死ぬ。

一度そんな風に冷静になってみると何だか恥ずかしくてたまらなかった。猛烈な暴風雨の中、衝動的に外へ出て駆け出していこうとするなんてどう見てもおかしい。変な奴だと思われたくなかったのに、知らただけでなく止められて説教までされてしまった。

「あ、あの……」

何かを言葉にしようとしたのにできなくて、口がもごもごと動く。

こういうときはきちんと事情を説明すべきだ。

とっさのことだとはいえ他人には見せない姿を見せてしまったのだから、彼も一步が秘密を打ち明けるのを待っているのではないか。理解してもらえないとは思えないからあまり

気は進まないが、理由くらいは明かすのが誠実な態度というものだし、互いに心を開き合うためにも必要なことなのだろうし……と、ぐるぐる考えていたが、結局千堂がそれ以上深入りしてくることはなかった。一步の家庭環境や台風にまつわるエピソードを聞き出すとするのも、こっちが話し出すまで待つこともしなかった。間髪入れずにまた流しへ向かい、荷物の処理を再開し始めた千堂の背中をほっとした思いで見つめる。

振り回されてへとへとなることも多々あるが、彼のこういう物事に頓着しないところにはときどき救われる。こんなこと、千堂ならすぐに忘れてくれるだろう。普通の人なら引っかからずにいられないことでも彼の興味を引かなければ二度と蒸し返されず、いつまでも忘却の土の中に埋めたままになる。

ずっと前に一度だけ、事故のような形でセックスのことだってそうだ。普通に考えればけっこう大事件だったと思うのに、彼の記憶からはたぶん消えている。そもそもあれはその先の何にも繋がらない、虚空に浮かぶ点のような出来事だった。何か重要な意味を持つものでないなら、彼にならって忘れてしまうのが正解なのだろう。

深く息を吐いて立ち上がり、のろのろとした足取りでふたたび会長室へ向かう。今夜中に母の元に戻れないなら電話確認くらいはしなければ。できれば十分おき。それではうっとうしいだろうからせめて一時間おき。眠っているところにかけて起こすのは悪いので、かける時間は十一時まで。

どきどきしながら自宅の番号をプッシュし、母が出るのを待つ。三コール目で通話が繋がり、「もしもし、母さん?」という言葉を食べる気味に発したところで思わぬ人の声が聞こえた。

『おーっ、一步! 無事か?』

受話器を耳に当てたまま、電話機を信じられない思いで見つめる。

「……梅沢くん!? 来てくれたのっ?」

『おう。この天気だから店も船もどうなってるかちょっと気になってよ。でも社長はこんなときに海なんか見に行くなんて言うから、いまは普通に飯食わせてもらってるとこなんだ。そっちはどうだ?』

「はああああ……」

返事も相づちも忘れ、口だけでなく体全体から長い長いため息が漏れた。安心した。本当に安心した。そのまま座り込みたくなったが、それではコードが引っ張られて抜けてしまから代わりに会長のデスクに片手をつく。

「来てくれてありがとう、梅沢くん。ほんとに、ほんとに助かるよ。ボクはしばらくジムから出られそうにないから、それまでうちにいてくれるとちょっと助かるんだけど……」

もううちで働いてもらってるわけでもないのにあつかましいかな、と思いつつもそう切り出すと、梅沢はいつものように「任しとけ」と頼もしげに答えた。

『社長を一人にしとけねえからな。今日は泊まらせてもらうよ』

「ありがとう！ でも、近所が冠水し始めたら二人で高いところに逃げてね。低いところは相当浸水してるみたいだし、堤防が決壊したら避難できなくなるから。それと、船は大丈夫だから絶対見に行かないでね。時化の海ってほんとに危ないからくれぐれも、」

『分かった分かった、そんなに心配するなって。社長の言うこと聞いておとなしくしてるよ。お前も無理して帰ってくんなよ。ジムの建物、二階も屋上もあるし頑丈そうだしそこにいろよ。一人じゃ心細いとか言うんじゃないぞ』

「一人じゃないよ。電車が止まって帰れなくなってる知り合いが一緒にいるんだ。だからボクは大丈夫。絶対明日家に帰るから、母さんにもそう伝えて」

『そっか、分かった。んじゃ、また明日な』

うん、と答える。梅沢は欠かさず試合を見に来てくれているから千堂の顔と名前くらい知っているのだが、何となく真実を言えなかった。別に後ろめたいわけではない。ただ何となく、何となく。

互いに「おやすみ」を言い合い、そっと電話を切る。

台風之夜に母のそばにいられない事実は何ひとつ変わらないが、梅沢のおかげで少しだけ気が楽になった。あとはいかに自分が母に心配をかけないかだ。そのためにも朝までできるだけ安全に過ごさないとならない。少なくとも、どんなに不安でももう外には出られ

ない。いつでも避難できるように荷物をまとめ、まめにテレビの台風中継を見て氾濫情報をチェックして、川が危険水位まできたらすぐ逃げられるようにあらかじめ避難所の位置をチェックしておかないと……と考えていると、階下から大きな音が聞こえてきた。爆撃でもされているのかと思うほどの大音声だ。

正体と出どころは見当がつく。濡れた荷物の始末が一段落したのであろう時間。冗談みたいに重くて派手な音。千堂が体を動かし始めたのだろう。

急いで階段を駆け下りて一階に戻ると、案の定グローブをはめた千堂が爆音を響かせながらサンドバッグを揺らしていた。ただ無機物を叩いているだけなのに彼の周囲がぴりりと緊張している。強い人特有の空気感。

「グローブとバンテージとシューズ、」

ひととき重たい音がし、サンドバッグを吊り下げている金具が甲高い悲鳴をあげた。

「……勝手に借りたで。誰のか分からへんけどな」

「あ、シューズはボクのです。小さくないですか？」

「小さい」

ふたたびサンドバッグが激しく揺れる。嫌というほど彼の拳を知っているはずなのに、間近で見るのは久しぶりだからか怖気が走る。

「せやけどま、三ラウンドくらいやったらもつやろ。キサマも見たとこ沢村にどつかれた

ダメージからは回復しとるようやし、ほんまは一晚じゅうやりたいところやねんけどな」
「な、何をですか……？」

嫌な予感しかない。思わず数歩後退してしまい、千堂にぎろりとにらまれた。

「そんなん、スパーに決まっとるやないかい」

「だっ、だめだめ！　だめですよ！　立会人どころか千堂さんがここにいることだって誰も知らないんですよ。何かあったらどうするんですか。こんな天候じゃ救急車も来てくれるかどうか分からないのに」

「三ラウンドやで。たったの九分で事故なんぞ起こるかいな」

「起こると思います。他の人ならともかく、ボクと千堂さんなら高確率で起こります」

だって、三ラウンドめで気を失ったことだってあるじゃないですか、とはさすがに言えなかった。

あれは事故のようなものだ。腕の角度や立ち位置が一ミリでも違っていたら失神していたのは自分だったかもしれない。それどころか殺されていた可能性だってある。二度めの試合のときも同じで、打ちどころが悪ければこっちが怪我をしていた。肋骨骨折どころではない大怪我を。そんな自分たちが誰もいないところでスパーリングをするなんて、真剣を使って剣道の稽古をするようなものだ。五体満足でいられるわけがない。

そこまで考えてふと思った。そんなのボクサー同士ならみな同じだ。だからこそ十六オ

ンスとヘッドギアが存在するのだし、マスボクシングというやり方があるのだし、その前に相手に怪我をさせないように自制心を持ってほしいだけなのに、なぜ彼が目の前にいるときに限ってどちらかが死ぬはめになってもやめられないような気がしてしまうのだろうか？

だいたいちボクシングはスポーツであるはずなのに、自制とか死ぬとか救急車とかそんなことが頭をよぎってしまう時点で、自分たちはスパarringパートナーとして不適切なのだ。命を賭けることが許される場所でないとか自然体でいられないというのも何だか変な話だと思う。それは互いのパンチ力の問題ではない。間違いなく。

「……ですから、とりあえずスパarringはやめましょう。リングに上がるとお互い打ち合うのに夢中になっちゃいますし、それじゃいざってときに避難できなくなりますから」

「ふん、真面目なやつだな」

もっと粘られるかと思ったが、千堂はさして執着せずにサンドバッグ叩きを再開した。彼が腕を引くたび、背中にもプリントされた謎のパンダがゆがむ。ジャージ生地地のハーフパンツは相当小さいのか、裾が太もものなかばまでずり上がっている。その少し愉快な後ろ姿を無言で眺める。

強そうだな、と思う。

ただサンドバッグを叩いているところを見ていただけでわくわくする。

同時に、もう戦いたくはないな、とも思う。

彼の拳が痛いからというだけではない。怪我をしそうだからでも、殺されそうだからでもない。リングの上で対峙してあんなに怖い人はいないのに、あんなにボクシングが好きなのだと思わせてくれる人もいないから、自分では行き着けないところまで行かせてくれるから、だから、少し怖い。

それは王者になって、守るべき地位ができたからなのだろうか。一度でも足を滑らせたら行けなくなるあの約束の場所にたどり着きたいと思ってさえいなければ、また彼と戦いたいと思えるのだろうか。だが自分にはそんな義務はないし必要だってない。活躍を遠くから眺めていたらそれで十分だ。彼に限らず、誰だって。

千堂に聞かれないようにこっそりため息をつき、奥の部屋の物入れの中から段ボール箱を取り出す。誰も持ち込まないから食べ物が残されていることはほとんどないのだが、栄養剤代わりのゼリーがこっそり買い置かれていることはある。ジムのものを勝手に食べるのは気が引けるが明日買って返せばいい。お客さんがいるのに飢えさせるわけにはいかない。お腹がすいていると自分だっていざというとき動けないかもしれないし、それに、何というか、あの轟音を聞いているのがいまは少し辛い。

「千堂さん、一段落したらご飯にしませんか。お茶も淹れますから奥の部屋でどうぞ」

「ほう、飯かいな。おおきに」

「コンビニにも行けなかったのだからちゃんとした食べ物はないんですけど、ゼリーくらいな

らあるのでよかったですね。じゃ、奥で待ってますね」

さっと背を向け、足早にその場を去る。視線が一步の背中を追いかけてくるのを感じたが、サンドバッグの音がふたたび響いてくるとほっと息をついた。

ひたすら無心で湯を沸かし、急須でお茶を淹れていると、かち、という小さな音とともに応接室の扉が開かれた。

大あくびをしつつ伸びをして顔をしかめるという器用な真似をしながら現れた千堂は、何の遠慮もなく大きな方のソファにどかりと腰かけて横柄に足を組んだ。さっきまで履いていたシューズはどこかに脱ぎ捨てたのか、いつの間にか裸足になっている。

「キサマの靴、小さすぎんで。靴擦れできてもうたわ」

「そ、そうですかすみません。絆創膏使いますか？」

「いらん」

千堂は真っ赤になった足先を行儀悪くふらふらさせながらぼそりと吐き捨てる。

「こないなとつたら三ラウンドもたへんな。今日のところはどつき合わんで正解や」

「はあ……」

不満そうにこぼしているわりには表情が明るい。とりあえずスパーのことは忘れてくれたのかもしれない。一步が淹れた茶をすすっては「熱い」と文句を言い、栄養補給ゼリーを親の仇のように見つめては「こないなとこまで来てこいつの顔見たないわ」とため息を

つき、テレビの台風情報の合間にやっている全国天気予報を見ては「大阪、晴れてるやん……」と悲しそうにつぶやいていて、すっかりリラックスしているように見えた。

こういうときの千堂は本当に気さくで楽しくて話しやすい。自分たちにはこのくらいの距離感がちょうどいいと思うし、ずっとこうでいられたらとも思う。

しかし、そのためには越えなければならない山場がひとつだけある。

「あの、千堂さん」

「何や」

食事を終えて三人掛けソファにうつぶせに寝そべり、朝刊を広げてスポーツ面を読んでいた千堂はこちらを振り向かずになんかそう応えた。

「夜が更ける前に話しておかないといけないことがありまして……実は……寝るところの話なんですけど」

「ここでええで」

分かってはいたが、即答されてがくりときた。

「前もここで寝さしてもろたさかい、ここでええ」

「そうですね。千堂さんはお客さんですし、こっちとしてももちろんの方がいいんですが、テレビがこの部屋にしかないんです。近くの川が氾濫危険水位まできててこまめにチェックしないといけないのでボクもこの部屋を使いたいですよ」

「キサマもそこで寝たらええやろが」

「このソファ、一人掛けなんです」

「せやったら床やな」

「ボクはぜんぜん床でいいですけど、そうすると一晩じゅう何度もテレビの音聞くことになるのでうるさいですよ」

「かめへんで」

「テレビつけるたび起こさないか気になります！ だから、その、できれば千堂さんには別の部屋で寝てほしいんですが」

口が勝手にもごもごしてしまう。

ここから先には進みたくない。おかしい雰囲気になりたくない。これ以上ごねて言い合になってキレられて暴力を振るわれて以前のように力づくで迫られたら、うまく拒める自信がない。いや別にキレられるとも迫られるとも決まったわけではまったくないのだが、危険な予感に腹の奥がざわわして止まらない。

あの夜もこんな風にお互いの存在を持て余して妙な空気になった。そのせいで間違いが起きた。軽々しく蒸し返してはいけないたぐいの間違いが。

細かいことを気にしない性格であるはずの千堂でさえ、あの日のことを口にしたことは一度もない。目配せをされたこともないし、やたらに体に触れてきたこともない。

こっちだってそうだ。冬の夕暮れの海岸で彼に偶然出会ったことは母にすら言っていない。まだ記憶が鮮明だったころはつい思い出してしまっていたが、それも今ではまったくない。大事なことはないからわざわざ思い返すようなことでもない。密室で二人きりになりさえしなければ、一生忘れたままでいられたかもしれない。

返事を待っているうちにどんどん鼓動が速くなっていく。

早く「分かった」と言っほしい。「しゃあないな、譲ったるわ」と言い残してしぶしぶでも部屋を出て行っほしい。そうしたら、あれをなかったことにできる。

卑怯者、と自分で自分を責める声がする。けれど「忘れる」以外に、あの出来事を咀嚼する方法はない。

どこにも何にも繋がれず、ひたすら虚空に浮かび続ける点のような記憶は、空の星に似ている。意味のないものに意味を持たせるのは、夜空に輝く星を手にとることくらい無謀なことだ。

「何や、ビビっとんのか、幕之内」

ここからだと言顔が斜め後ろからしか見えない。それでも彼がにたりと笑っていることくらいは分かる。

「さっきからいちいち辛気くさい空気出しょって、はっきり言わんかい。何か言いたいことあるんやろが」

「べ、別に言いたいことなんてないですよ」

そのときちょうどテレビから人の笑い声が聞こえた。ソファの上から少しも動けないでいる自分たちをあざ笑うかのようにだった。

「キサマがぐずぐずしとるうちにお笑い番組になってしもたで。どないすんねん」

「どないするって、何の話ですか。他のチャンネルならまだ台風情報やってますし、別に何も変わりません」

「さよか」

もちろん分かっている。

千堂が言っているのはそんなことではない。あれをなかつたことにしたいなら不自然さを出すな、と言いたいのだ。彼と同じ部屋で寝たくない理由を言い当てられたらと思うと緊張感で息もできない。

呑気な笑い声とがなり声と巨大なテロップがささいな失敗を責め立ててくる。こうまでして彼を追い出すことは果たして自然なのか、正当性はあるのか、意識しているからこそ意地になっているんじゃないか、そんな風に思わせる。きっと千堂にもそう思われている。それが怖くて怖くて仕方ない。

だが、彼はいつも他人の意向など関係なく自在に空気を締めたりゆるめたりができる人間だ。腹這いの状態から猫のように背を丸めて起き上がり、シャツの中にだらしなく手を

突っ込んで腹を搔きながら、千堂は拍子抜けするほど緊張感のない声でこう宣言した。

「ま、ええわ。川には興味ないさかい、出て行つた。トレーニング室のベンチ借りんで」

「……は？」

「キサマの言うとおりにしたる言うとなねん。感謝せえ」

「は、はい、ありがとうございます！ 硬いところに寝かせてすみませんが、よろしくお願いします」

体じゅうの骨が溶けたんじゃないかと思うほど脱力し、安堵のため息をつく。

千堂はそれを見て一瞬鋭い視線を向けてきたが、何も言わず裸足のまま大股で部屋を横切つて、扉を開けて出て行こうとして、雷に打たれたかのように派手に痙攣して固まった。

「千堂さん？ どうしました？」

思わず中腰になって聞くが、彼は何も応えない。わはは、と笑い続けるテレビの電源を切つて駆け寄ろうとすると、どこからかすかにサイレンが聞こえてきた。

メロディが切れ目なく上下しているから救急車ではない。パトカーか消防車だ。

暴風雨の中でも犯罪は起るだろうし、消防車は火災以外でも出動することがある。こんな大雨では周囲が浸水して避難できなくなつて119番に助けを求める人もいるだろう。サイレンなんてどこにいたって耳にする。大丈夫かなと思ひはすれ、サイレンを我がことのように感じるのは実際に自分が呼んだときか、家族や親しい人が危ない目に遭つて

いるときか、車を運転していて真後ろから音が聞こえてきたときくらいものだ。

だからこそ、千堂のこの反応ははっきりと異常だった。時間が止まってしまったかのようにはびくりとも動かず、耳だけがサイレンの音を深く遠く探っている。

もう一度声をかけようとして立ち上がり、その場から一步踏み出そうとしたとき、千堂は猛烈に扉の外へと駆け出していった。

「へっ？」

急すぎる展開に驚いたせいで一瞬反応が遅れた。

戸惑いながらも一步が彼の後を追いかけて始めたときには、すでに何メートルもの差がついていた。

「せつ、千堂さんっ!! ちょっと待ってくださいよ!」

風でうまく開かないはずの引き戸を軽々と開け、千堂が外へ出て行く。扉が開放されたとたん強い風がおお、と吹き込んできてうまく前に進めない。靴底が雨で滑る。ゴム底のスニーカーを履いている自分でもこうなのに、こんな風雨の中を裸足のまま駆け続けて無事でいられるはずがない。一刻も早く彼を連れ戻さないとならない。

必死で追いかけて続けながらも、疑問ばかりが次々と頭をもたげてくる。サイレンの音を聞いただけでこんな暴風雨の中に出て行くとうするなんていくら何でもおかしい。しかしあの奇妙な切迫感には身に覚えがある。どこか懐かしくて、よく知っていて、気づくのが

少し恥ずかしいもの。台風之夜には家にいないといられない自分と同じ、義務のような発作のようなあらがいがたい衝動。

だがサイレンを聞いて事故や事件や火災の現場に駆けつけなきゃならない人なんて、アメリカンコミックのヒーローくらいだ。あとは野次馬。野次馬に命を賭けている人なんて聞いたことがないし、ましてや千堂がそんなことをするとも思えない。

彼がそうしなければならなかったことには理由があるのだろう。誰にどう思われてもいいと思えるほどの、命を捨ててもいいと思えるほどの理由が、彼にはきつとある。

こっちは靴で向こうは裸足だったせいもあり、冠水しているであろう区画に迷い込むより前に千堂に追いついた。腕を引いたくらいでは止まらないから前に回ってタックルし、胴体を腕ごときつく抱えて抑え込む。

「千堂さん、これ以上はだめです！ 戻りましょう！ この先は本当に危ないですから！」

口を開くと雨が入り込んでくる。ばたばたばた、という激しい雨音が声をかき消す。髪も服も何もかもが暴風にかき回されてぐしゃぐしゃになって、二人まとめて濡れ雑巾になって、もう何が何だかわけが分からなくなってくる。

「裸足で冠水してるところに飛び込んだら怪我しちゃいますよ！ 早くジムに戻ってシャワー浴びて、お茶でも飲んであったかくして寝てください！ 今度はぬるめにお茶淹れますから！ よかったらボクのぶんのゼリーもあげますから！ 戻ってくれるならスパーも

しますから！ あっ、でも危ないから明日でお願いします！」

説得にはだいぶ飛躍し始めているな、と自分でも思ったがもう止められなかった。無我夢中で前進しようとする千堂をこの場に引き留めることだけに必死で、自分が何を口走っているのかさっぱり分からない。

「いやほんと、こんなときにこんな格好で外走ってたら死んじゃいますよ？ 死んでもいいんですか？ 心残りとかないんですか？ 千堂さん春に再起したばかりでしたね？ これ以上試合とかしないでいいんですか？ 初めて会ったときボクシングが好きだって言ってたじゃないですか、気持ちのいいどつき合いがしたいって言ってたじゃないですか、あんなに！ それを忘れちゃったんですか？ ボクは忘れてませんよ、ずっとおぼえてますよ、これから先も千堂さんの試合見るたび思い出しますよ、絶対に……」

少しだけ、ほんの少しだけ力がゆるむ。だがまだ一步の腕を振りほどいて走り出すことをあきらめてはいない。

引き留めたくてもこれ以上言うべきことが見つからない。何を言ったら思い留まってくれるのか分からない。自分たちの間にあるものは昔の誼以外には何もない気がして、彼に深く関わっていいのかどうかも分からない。

出会ったばかりのころと、二度も戦って気持ちが一区切りしたときと、行きたい場所に行くただけに戦い続けているいまとではいったい何が違うのだろう。本当は何も違わな

いのだろうか。それとも自分だけが変わってしまったのだろうか。

もしそうだとしても嘆く必要のない変化なら、自分たちはそれまでなのだろうから、だつたらもう言葉なんて、説得なんて必要ないのかもしれない。溺れる人を助けるのと同じで、死にゆくような行いをただ止めればいいだけだ。

一瞬腕の力をゆるめ、半身を後ろに引いて、瞬時に左腕をひねってから空きのボディに、
「何しよんねんこら」

ボディにねじ込もうとしていた左拳を強く握り込まれる。千堂は般若のごとき憤怒の表情で一步をにらみつけていた。何も知らない一般人なら震え上がってその場にへたり込みそうなほどの迫力だ。

「おんどれリングの外で手え出す気かいな？ プロボクサーやろが」

「だ、だって、さっき千堂さんだってボクを止めるために首絞めたじゃないですか！ ボクは絞め技とか知らないからこうするしかなかったんです」

「ほお、スパーせえへんのはグローブつきじゃ物足りんいうことかい。ええで。そのケンカ、買うたるわ」

「話聞いてます!! ボクはただ千堂さんを止めたいだけでケンカなんか売ってないです」

暴力の気配を感じ取ったからなのか、千堂は目に見えて興奮していた。あの夜のおかげで、いったんこうなってしまうと彼が始末に負えなくなることはよく分かっている。だが

逃げたくても離れるわけにはいかない。手を離してしまおうと彼はまた駆け出していった。もうかもしれないのだ。

「いきなりボディブローしようとしたことは謝ります。軽率でした。でも、ケンカはやめましょう。こんな風と雨なんだから早く帰らないと。サイレン聞こえなくなりましたし、音が遠かったから近所でもなさそうだし、これじゃ探すのは無理ですよ」

暴れたがって目を爛々と輝かせていた千堂は、最後の一言を聞いて急に表情をなくした。自分がここにいる理由をようやく思い出した、とでもいうような顔だった。

そのときふと思った。

もしかしたら彼にとって暴力とは、何か特別な意味のあることなのではないか。

ただ好きというだけではなくて、得意というだけでもなくて、何かを得るためだけのものでもなくて、こういうマイナスをゼロにするためにも必要なことなのではないか。

もちろん、そんなのはただの勘違いや思い込みにすぎない。人の心理や行動原理はそんな一言で言い表せないほど複雑で、家族でも友人でもない部外者の自分には彼の事情なんて何ひとつ分かりはしないのだから、そんな思いつきには意味がない。

しかし義理はある。彼自身が知られたくないであろうことをうっかり知ってしまったことに対する責任もある。何も知らない部外者なりにできることもある。さっき千堂がしてくれたのと同じだ。触られて痛いところを触らない。興味本位で聞き出そうとしない。彼

がそうしてくれて安心したことはまだ忘れていない。

「詮索するつもりはありません。ボクはただ、このままおとなしく戻ってほしただけなんです。そうしてくれるなら何でもします。この場でケンカなんて絶対無理ですけど、明日お互いジムに許可もらえたらスパーしましょう。三ラウンド。ボクの方はまだ万全じゃないので物足りないかもしれませんけど、約束します」

そう言っているうちに何だか恥ずかしくなった。舐めとんのか、と一喝されるのを覚悟しながらなおも言い募る。

「で、でも、千堂さん、きつと早いうちに帰りますよね。うちの会長はジムに来るの夕方なので時間が合わないかも……。だったらまた今度するというのはどうでしょうか。お互い試合がなさそうな時期とかに。あとは他に何か……。あ！ この間、藤井さんに面白いビデオ借りたんですよ。海外の試合なんですけど、インファイト一辺倒のハードパンチャーが相手に徹底的にアウトボックスされて見事に完封される寸前にKO勝ちした試合だったので千堂さんが見ても参考になるかと。あとは……法定速度でよければ明日東京駅まで送りますし、うちの犬を好きなだけ触ったりとか撫でたりとか遊んだりとか、その辺で何とかならないでしょうか？」

またしても自分が何を言っているのか分からなくなってきたが、千堂の体から徐々に力が抜けていっているのが伝わってきた。一步にあきれているのかもしれないし、暴風と豪

雨の中で立ち尽くしているのが嫌になってきたのかもしれない。

「ここまで言っても行くなら、どうしてもどうしても行きたいなら、ボクも行きますからね。この台風の中で何するつもりなのかは知りませんが絶対一人にはしません。二人して迷子になってたときと違ってボクにはこの辺の土地勘ありますし、水にも慣れてますし、少しは頼りになると思います。冠水してるところを通る気ならボクが背負います。靴履いてるのボクだけですから。いいですよね？」

「よおないわ」

はあ、とため息がこぼれたのが聞こえた。

雨風にさらされすぎて髪がべったりと頭蓋に貼りつき、どこか愉快な見た目になっている。濡れた前髪からのぞく目はとことん気難しげだが、少しは人間らしい表情を取り戻しているようにも見えた。

「幕之内」

「は、はい？」

千堂は「頭」と言いながら一步の側頭部をわしづかみにしてにやりと笑った。

「おもろいことになってるで。濡れた犬……濡れひじきやな」

自分だって負けないくらい面白くなってるくせに、と思ったが言わなかった。千堂がいつもの調子に戻ってくれたことが嬉しかった。嬉しくて嬉しくてたまらなかった。だから、

ついこんなことをしてしまふのだ。主人の帰還にはしゃぐ犬のように。

「確かにそうですね。うちの犬はひどい雨の中でも散歩したがるのでよくこんな風になります」

こんな風、という言葉と同時に千堂の頭に手を伸ばし、一番風を受け、一番激しく水を滴らせている部分に触れる。千堂はそのとたん無表情になる。すぐに手を引っ込めたが戻らない。

「あ、す、すみません、つい触っちゃって。とりあえず戻りませんか。まだまだ風も雨もやみそうにないですし、物が飛ばされてきて危険ですし、足も危ないですしこのままじゃ風邪ひ、」

その台詞を最後まで言えていたら、二度目の間違いは起こらなかったはずだ。

川のようになりかけている道を慎重に歩いて戻ってジムに入り、シャワーを浴び、ぬるめに淹れたお茶を飲んでそれぞれの場所で寝て、朝が来て、台風一過の強い日差しの中、駅へと向かう千堂の背中を見送って、やっぱり二人きりになるとまだちょっと気まずいな、と苦笑しながら自分も帰宅して母と梅沢の顔を見て安心して、前夜のことなどすっかり忘れてしまう。ただそれだけのささいな思い出になったはずだ。

びゅお、と音を立てて風が耳元を吹き抜けていく。めちゃくちゃに乱れている髪はかき回されてますます面白い形になる。目にも鼻にも口にも雨水が入ってくる。特に口がひど

い。生ぬるい雨と互いの熱い唾液が混じり合って、あっという間に口の中がびしゃびしゃになる。シャワーの下でキスしたらきっとこんな風だろうと思う。そんなみだらなこと、まだ誰ともする予定はないけれど。

一步の頭の横にあったはずの手は後頭部に移動している。髪を引っ張られると上あごが上がり、口がより大きく開く。開いたとたん、閉じられないようにすかさず舌が入り込んできく。手慣れているらしくさりげなく乱暴なやり方だが、無茶に噛まれたときと比べればいじらしいほど遠慮がちだ。

あの歯形は一週間近く消えなかった。仕方なく犬のせいにしたが、見る人が見れば人間につけられたものと分かっただろう。犬と人間では歯の形状が違う。犬の犬歯は大きく発達し、奥歯は鋭く尖って鋏のように合さるからもっと痛そうな噛み痕になる。雑食の人間の歯は肉食獣の猫とも虎とも違う。草食動物とも違う。結局この人は人間なのだ。顔から手首にかけて延々つけられた歯形を見るたび、なぜか悲しくなった。

これだけ暴力に愛された人が人間以外の何にもなれないなら、自分なんてきつと獣どころかどこまでも小さな「自分」でしかいられない。

しかしこんなのは大型で猛烈な台風之夜に屋外にいて、風速二十五メートルの暴風と一時間当たりの降水量五十ミリの豪雨のさなか、恋人でもない人と激しくキスしているときに考えるようなことではない。

二人が立っている道は何てことのないいつもの帰り道ではあるが、いまは考えうる限り世界でもっとも危険な場所だ。ずっと突っ立っていたら最悪死ぬ。母を残して死ぬくらいならいっそ死んだ方がましだとすら思う。

だったらキスをやめればいいのにやめたくない。せめてジムに戻ってからすればいいのに、この場でないとできない気がして動けない。どちらが先にした、というわけでもないからお互いに相手突き放すこともできず、目も閉じられず、強くにらみ合ったまま貪っている。

体が燃えるように熱くなっている。濡れた布が貼りついた股間が硬くなって互いの体に触れる。興奮しているのが分かる。どうにかしたいしどうにかされたい。あのときのように、今すぐにも。

こんな公道で、四車線の大通りで、知人がたくさん通る場所で、そして風に吹き飛ばされそうになっていなかったら、即座にマウントの取り合いが始まっていただろう。ボクシング以外の戦い方を知らない自分はたぶん不利だ。さっきはチョークスリーパーを外せなかったし、例の夜に馬乗りになられたときも態勢を変えられなかった。途中から興奮しすぎて記憶が曖昧になっていて、どうしてひっくり返せたのかはいまだによく分からない。いったいどういう流れでああなったのだろうか？単純な力比べで簡単に千堂に勝てたとは思えないから、ラッキーパンチならぬラッキー関

節技でもうまく入ったのだろうか。そうでなかったら……。

結局考えはまったくまともでないままだったが、こんな状況で「あれ」を詳しく思い出すべきでないことだけは間違いないかった。思い返そうとすればするほどたまらなくなり、何が無だか分からなくなり、目の前のことも人にどう思われるかも何もかもどうでもよくなって、回線がふつりと切れたようになって、頭と心と体が別々に動き始める。

そっと唇を離し、体も少し離す。

大きな音に驚いた猫のような顔で見つめてくる千堂の胴体に全力でタックルをして肩に抱え上げ、できるだけ早足で、しかし走ることはせずに大急ぎでジムへの道に戻る。

一步の肩のところで二つ折りにされている千堂は何が起ったのか分からずに固まっていたが、少し経ってようやく事態に気づいて静かに悪態をつき始めた。

「何さらしとんねんこら、幕之内。ええ度胸やないかい。どさくさまぎれにとんでもないことしよって、おんどれ死ぬ覚悟あるんやろな」

巻舌舌の入った、本気の脅し文句だ。顔もたぶん物凄く怖くなっているところだと思いが、いま千堂の顔は一步の腰のあたりにあるのでちらりと見ることにすらできない。

「ええ加減降ろさんかい。いまなら三回どつく程度で許したるわ。けどあと一步でも歩いてみい、タダじゃすまさんで」

「すみません、風でよく聞こえないです！ でも、ジムまでもうすぐですからおとなしく

しててください」

「何やと!？」

片手で抱えている体にぐわ、と力が入った。この人が最後まで舐められたままでいくれるわけがない。だが千堂が大暴れを決意するよりも、ジムの入り口にたどり着く方がワテンポだけ早かった。

風できしむ扉を開けて閉め、千堂を抱えたまま大急ぎでシャワー室へと向かう。一步が歩いた後にはもはや水たまりどころではなく水路ができているが拭いている暇はない。

水を吸って重たくなったスニーカーをシャワー室の入り口で脱ぎ捨て、蛇口をひねって熱いシャワーを出してそのあたたかな豪雨の中に千堂の体を下ろす。焦れていたせいで勢いがつきすぎ、後頭部が壁にぶつかりそうになる。

尻もちをついた姿勢で服のままシャワーに打たれている千堂と、そのときようやく目が合った。

さぞ怖い顔をしているだろうと思ったが、彼はほとんど無表情だった。その鋭い目つきからは何の感情も読み取れなかった。表情豊かな普段とは違って、いかにも野生の獣という感じの顔だ。彼と顔を合わせるたびに見る、ここへやって来たときにも浮かべていた、いつもと違う、どこからどう見ても不機嫌としか思えない表情。

彼を知らなければたぶん怖い。知っていても怖い。怖いはずなのになぜか焦る。ただ黙っ

て見下ろしているだけに焦る。

せっかくここまで運んできたのだから早くどうかしたいのに、何をどうしていいかさっぱり分からない。

そもそも自分がどういう感情を抱いているかも分からない。

他人と濃密に関わった経験が少なすぎて、同じような気持ちになった記憶を掘り起こそうとするとどうしても犬のことが頭に浮かんてしまう。

ワンポがまだ小さかったとき、家を出ようとするたび悲しげに鼻を鳴らして足元を駆け回っていた。ねえ行かないで、もっとかまって、ぼくと遊んで、と言っているようで、執拗に迫いすがってくるその姿を見てたまらない気分になった覚えがある。

あるいは海から戻ってきた一步を見て大はしゃぎし、勢い余って海に落ち、助けに飛び込んだ自分の腕に思い切り牙を立ててきたとき。相当に混乱していたらしく、暴れられて助け出すのが大変だった。

その後、ワンポは申し訳なさそうに鼻先をくつつけてきて傷跡を舐めてきた。溺れたことよりも一步を噛んだことがショックでしばらくの間は居心地が悪そうだったが、海水まみれになった体をシャワーで洗って乾かしたら嘘のように元気になった。あのほっとした気持ちは今でも忘れられない。

そこまで思い出して一気にぐいと視線を下に向け、雨水を湯で洗い流されている最中の

千堂を見下ろす。その目はいまだ無表情だったが、だんだんいぶかしげな色が浮かんできている。

躊躇などなかった。

備え付けのシャンプーをワンプッシュ手に取り、千堂のそばにかがみ込んで髪をがしごと洗い始める。

「……なんっ、」

何か言おうとしたその口をシャンプーまみれの手でふさいで黙らせ、次は石けんを手にとって顔と首を洗う。

服を脱がせず放り込んだせいでTシャツが邪魔だ。シャワーを流したまま洗っているから絶え間なく泡がシャツを浸食し、プリントされたパンダが悲しい色合いになっている。まっている。

幼児の服を脱がすかのように両手を上げさせてパンダを脱がせ、水ですすいで絞って隣の蛇口に干す。結果失敗したとはいえ、宮田に近づきたくて買ったものなので床に放り投げることなどできない。

そうしてあらわになった上半身を髪と同じようにせっせと洗っていると、洗うそばから筋肉の稜線に沿って流れ落ちていく白い石けん水が妙にクローズアップされて目に入った。鍛えている人特有の柔らかい筋肉と、かつて不純な意図で触ったことのある肌の感触

と、泡だらけの自分の手も。

そこまで順に目にして、ようやく大事なことに気がつく。

もしかしてこれって、途轍もなくいやらしい行為なのでは……？

急激に頬が熱くなって冷や汗をかき、次に石膏像のように固まり、最後はぶるぶると震え出す。

「あ、あの……」

何か言おうとしても何も思いつかない。

無理やり抱え上げてジムに連れ戻したところまではまだ抗弁のしようがある。しかしいきなりシャワーに放り込んで犬か車でも洗うかのように他人の髪や体を洗い始めるのは、さすがに異常だ。暴力と言ってもいいかもしれない。

「す、すみません、いきなり抱えたり洗ったりとか変なことして。この間のこととか犬のこととかが頭に浮かんでしまって、それで頭に血が上って、つい……」

ちっとも言い訳になっていないことを口にしながら、自分で自分が恐ろしくなった。

忘我することなんて、この世の何より苦手なはずだった。一步は自分自身をもっとも信頼していいから、自分で自分をコントロールできない状態に陥るのが怖くて仕方ない。

だが千堂に強い目を向けられるとそのぎらぎらした激しさに当てられて自制心を失ってしまう。彼と出会ったとき、つまりボクサー生命と彼との対戦を秤にかけて試合を選んだ

ときにはすでにそうだった。会長の言うとおり拳の怪我がくせになっていたら、今ごろタイトルどころではなくなっていただろう。だいたい本調子でもないのにあんなパンチ力の人と対戦したら普通に危ない。

でも、それでも、どうしても彼と戦ってみたかった。自分と似たスタイルの彼と戦って勝って、自分を強く肯定してみたかった。ただそれだけだった。たったそれだけの理由で我を忘れた。

自分たちは向かい合っていると互いに頭に血が上ってしまう関係性なのかもしれない。でなければ忘我してもっとも知られたくない秘密をさらし合えない。こんな風に。

心を落ち着けるべく泡にまみれた手をシャワーで洗い流そうとしたとたん、すさまじい力で体を引き寄せられて抱きしめられた。驚いて離れようとしても離れない。千堂さんと小声で呼びかけても返事はない。顔を伏せているからどんな表情をしているのかも分からない。

仕方なくそのがむしゃらな抱擁を受け続けていると、窓の外からふたたびサイレンの音が聞こえてきた。シャワーの水音に負けなくらいだから今度は相当近い。彼がまた駆け出してしまったように、さりげなく腕を回して手で耳をふさぐ。千堂はそれをうるさそうに振り払い、より強く体を引き寄せてくる。

熱い雨に打たれ続けていても、千堂の体は心地よい冷たさを保っていた。洗ったばかり

の首すじから石けんの匂いがする。鼻先に柔らかな耳たぶが当たっている。息を止めているのか、呼吸の音は聞こえない。腕の力は人間のもろい肉体を抱くにしては強すぎたが、彼にしては少々弱すぎる。

どちらともなく口づけ合い、貪り合う。またしても雨の中で、目にも鼻にも口にも湯が入り込んでくるような状況で、音が聞こえるほど激しくキスをし合う。それだけではやがて飽き足らなくなって、互いに互いを突き飛ばし、押し倒そうとしながら湯で濡れた肌を探り合っているうちにサイレンはさらに近づいてくる。

切れ目のない音階。不安をかき立てるメロディ。まさにいま、この街のどこかで誰かが何かを失っていることをありありと示す音。すでに何かを失った人にとっては儀式のように感じるであろう音。

幕之内家にとって台風は、忘れ去ったはずの傷と喪失を何度も蘇らせる過去からの贈り物だった。毎年欠かさずにやってくる台風のたびに母とともに悲しみ、乗り越えようとながき、忘れていくうちにまた次の台風が来る。やり過ごすことなどできない。忘れたふりをすることもできない。こんな大嵐の日に母の元に帰れなかったことは、消えない傷になるだろう。それほどに大事な儀式だった。

千堂もいまこの瞬間、サイレンを追いかけなかったことを後悔するのかもしれない。あとで傷つくのかもしれない。

しかし、それがどんな形をした傷なのかは、たぶん一生分からない。

彼の個人的事情なんてほとんど何も知らないし、たとえこの場で一から十まで教えてもらったとしても他人である自分には彼の痛みを本当の意味で理解することはできない。

逆も同じだ。

もし一步が父を亡くした夜のこと、それから母と二人で必死で暮らした日々のことを言葉尽くして説明したとしても、他人である彼にはおそらくすべてを理解することはできない。してほしいとも思えない。自分たちがこの場で共有し合えるかもしれないものは、自分でも制御できない義務的な衝動を抱えて生きなければならなかったということだけ。そんなものは、たぶん言葉にする意味も価値もないのだと思う。互いが「そう」であったことを思い返して噛みしめる必要もない。台風がくれば、サイレンが鳴れば、脳が記憶を探り出すより前に走り出したことを何度でも思い出すのだろうか。

遠ざかっていくサイレンに身勝手にも少しだけ安心しながら、あたたかな雨の中でつかみ合いを続ける。どちらも自分が上になることを譲らず、揉み合っているせいで傷もあざもできている。噛まれてはいないから歯形はないが、食い込んだ爪痕や思い切りつかんだ痕がシャワーに温められた肌にくっきりと赤く浮かび上がっている。

らちがあかないからせめて裸にして有利を取ろうとしても、最後に残ったハーフパンツが腰骨に引っかかってうまく脱がせない。よほど小さいのだろう。選べる状況ではなかつ

たとはいえ、こんなものを彼が文句も言わずに履き続けていたことが不思議でならない。濡れたジャージに戸惑っているうちにこっちがあっという間に裸にされてしまう。惚れ惚れするほど鮮やかで粗暴な脱がせ方だ。こういうちょっとした手つきで分かる。彼はたぶん、濡れた服を脱がせてセックスしたことがある。シャワーの真下でキスをしたこともある。

千堂は獣のように素早く四つん這いになって頭を低くし、シャワーの湯にまみれながら下腹部に顔を擦り寄せてきた。雨の中でキスをしていたときからずっと硬くなりどおしの性器が頬に触れ、思わずん、と声が漏れる。なのにすぐに離され、しばらくしてからさりげなさを装ってもう一度触れる。

何度もそれを続けられているうちに我慢できなくなって、髪をつかんで顔に先端を押しつけ、それでも何もされないでいると無理に顔を上げさせる。とたんにびっくりするほど強い視線が向けられる。

その目は恥ずかしそうでもないし悔しそうでもないし気まずそうでもない。どこまでも鋭く、強く、そして無表情だ。湯が目に入って痛いだろうに、瞬きをすることもなくひたすら上を向いて視線を合わせ続けている。こっちも無表情を貫きたかったのにあっという間に顔がゆがみ、苦しくてたまらなくなって息を吐く。

こういふところだ。彼のこういふところが、自分に我を忘れさせてやまないのだ。

このまま打ち合いを続けたら死ぬかもしれないと、死なせるかもしれないと思わせる目。狂態をさらすことも言いつけに反することも普通、通から外れることも嫌なのに、この目に追いつめられたらきつとやっってしまう。

怖いからではない。逃げたくないからだ。彼に負けたくないからだ。ただそれだけの理由のために夜の大嵐のただ中に足を踏み入れてしまう。

「千堂さん、」

はあはあと情けなく呼吸を繰り返しながら、髪をつかんでいる両手にぐっと力を込める。「口でしてください。この間みたい。でも噛んだらだめですよ。もし噛んだら、」

何か気の利いたみだらなことを言えたらよかったのに、何も思いつかないからただの吐息にしかならない。いきり立った生殖器は生き物のようにびくびくと動き、愛撫をねだるように千堂の顔の前を行き来している。何もされていないうちから声が出るのが恥ずかしくて片手で顔を覆い、かといって自分のものが口の中に呑み込まれていくところは見逃せなくてつい指の間から見えてしまう。

普段生殖器のサイズを人に笑われることが多いから、どう思われているのが少し怖かった。そもそも生殖器なんてどんなサイズであれ人の口に入れていいものだとも思えない。見下ろされているのも、言われたとおりにするのも屈辱だろう。

しかし千堂はいささかの躊躇もなく、大きく口を開けて浅ましく膨らんだ先端をくわえ

込んだ。とたんに腰が引ける。いったん逃れるべく頭を押しつけようとしたら下からざろりとにらまれる。仕方なくじっとしていると熱い舌と唇が敏感なところを滑り、抑えきれないあえぎが漏れ始める。

流しっぱなしのシャワーに打たれながら、ときどき反応をうかがいながら、彼は頭を前後させて熱心に他人のものを慰めている。頭から鼻の横を通して流れた湯の川が唇に落ち、さらりとした唾液を巻き込んで性器の表面を摩擦している。こんなところ見ちゃだめだ、と思いながらも目が離せなくて、顔を覆っていた手をふたたび千堂の後頭部に戻して見やすいようにおそるおそる頭の角度を変えさせる。

だんだん膝立ちの姿勢を保てなくなっていく。脳の容量はもう満杯で、これ以上何も入らない。倒れ込みそうになって手を壁につくと、腰まで前に出てしまいのどの奥を突く形になる。千堂は苦しげにえずいていたが、頭が完全に真っ白になっていて気遣いの言葉すら出てこない。

こうなってしまうともうだめだった。千堂の頭を壁に押しつけて逃げられないように固定し、セックスをしているときのようには腰を振る。興奮しすぎていたせいでほとんどたなくて、あっという間に射精してしまう。

口の中に出してはだめだ、という意識くらいはあったから、途中であわてて引き抜くと今度は顔や体にかかった。シャワーの軌道から外れていたせいで即座に洗い流されること

もなくそのまま残っている。申し訳ない、と思いつつも止まらない。ようやく射精を終えて尻もちをつくころには、湯であたためられた体も緑の高校ジャージもひどい有様になっていた。

「……しつこいちゅうねん」

すみません、と答える声がかすれた。点々と飛んだ精液を指で拭った手をつかまれて舐め取られる。中指を含んだ口はキスをしていたときよりもさらに熱く、よりねっとりとして湿っていた。あんなに出したのに小さくならない性器がぴくんと震え、ああ、と声が漏れた。これは、だめだ。このままやられっ放しでいたらただ翻弄されるだけで終わってしまう。

思い切って指を口の中から引き抜き、額をつかんで壁に押しつけ、精液で汚れた顔と首に舌を這わせる。絶え間なく熱いシャワーに打たれ続けていたせいか汗がうっすら浮かんでいる。その何の匂いもしない塩辛い汗も一緒に舌でこそげ取っているうちに肩にたどり着き、何人もの男たちを終わりのない恐怖に陥れてきた腕や手首、手の甲に口づけていく。腕はさすがに太くてたくましいが、手の方は目に見えて分かる違いなどそうはない。手のひらは意外と広く、指はあまり長くなく、関節は硬くて大きく、指先は角張っていて、度重なる減量のせいか爪が波打っていて、少しささくれがあって、けれどただそれだけだ。普通のひととほとんど変わらない。

もしかしたら人間でないものになりたかったのかもしれないその拳に何度もキスを落と

していると、千堂が力のない声で「やめえ」と言っ手振り払った。

「す、すみません……？」

あわてて手を離す。だが何となく納得いかなくてさっきまでさんざん弄ばれていた自分の指と千堂の手を見比べる。もちろんされて嫌なことをわざわざする必要はないのだが、やっぱり納得できなくて未練がましくちらと手に目をやる。すると前触れもなく急に右拳を振り上げられ、顔の前ぎりぎりのところで止められた。

たたりと冷や汗が流れる。視界いっぱい千堂の拳が映っている。血管が浮き上がるほど強く握り込んでいるということは、それなりに本気で一步を殴ろうとしたということだ。グローブもせず、素手で。もし当たったら冗談では済まない。文句のひとつでも言うべき状況なのに、なぜか興奮している。こんなものが当たったら気絶どころか死ぬかもしれないのに、もっと危険なことがしたくてたまらなくなっている。もう何もかもがどうなってもいいような気持ちになる。

視界をふさいでいた右拳にもう一度唇を押し当てて口を開き、指と関節をひとつずつ熱心にねぶっていく。千堂は部下から忠誠のキスを受ける領主、あるいは体をべろべろ舐めてくる犬をあしらう飼い主のような格好で手を差し出していて、奉仕しているような気分になってくる。ちらりと顔に視線を移すと、無表情ながらもどこか満足げに見えてほんの少しだけ腹が立った。

わけの分からない苛立ちを抱えたまま頭突きでもするかのようにキスをし、せわしなく頭を動かして上半身を唇で探っていく。

鎖骨、胸、みぞおち、脇腹、と移動して最後につんと硬くなった小さな乳首を舌で弾くと、千堂は初めて息を詰めて声を漏らした。軽く立てられていた膝が揺れ、乱暴に頭をつかまれる。力が強すぎて髪が抜けそうになる。

何とかやり返そうとして膨らんでいる性器に手を伸ばし、ゆるやかに刺激すると、背中が大きく反って腰が跳ねた。身を乗り出すように覆いかぶさっていた一步の体もつられて波打ち、押しのけられるような形になって口が離れてしまう。唾液が糸を引いているところの妙にいやらしく見える。目をそらしたとたん、鮮烈な生の匂いが鼻の奥に広がった。

「……えっ」

何か愚かなことを言いそうになってあわてて口をつぐむ。

千堂は恥じること半開きの口元を隠すこともなく苦しげにあえいでいて、精一杯絶頂の余韻を味わっているようだった。

頭の芯が熱くなり、視野がぎゅっと狭くなる。さっきは濡れて貼りついてびくともしなかったハーフパンツを思い切り引っ張り、剥き返すようにして力任せに脱がせていくと、中にこもっていた熱と湿気とともに精液の濃い匂いが立ち上る。何を問うたらいいのか分からないまま、問いただすように千堂の顔を見る。だから何だ、とも言いたげな目で見ら

れて目をそらしてしまふ。代わりに足の間にかみ込んで音を立てて大きなペニスからんだ精液をすすり、軽く吸い立てながら刺激する。千堂は素直に気持ちよさそうにあえいで、膝を震わせてうっとりとして愛撫を受け続けている。その姿は獣のように泰然としていて優雅で、あまりにも彼らしかった。

しかしこの男が長時間されるがままになっているわけがない。案の定すぐにじっとしていられなくなって足先でしつこくタイル張りの床を擦り、ときどき一步の腰を思わせぶりに搔く。

無反応を決め込んでいると太ももを遡上して指の腹が脚の付け根に触れる。ついには硬い爪の先でそっと性器を押され、軽い電気ショックのような恐怖が走った。

彼が何を求めているかは明白だった。こんなささやかな愛撫では足りない。もっと危なくてスリリングな、命のやり取りに近いことがしたい。殺るか殺られるかの危険な綱渡りがしたい。思い切り打ちのめてやりたいし同じだけ打ちのめされたい。

そのぎらぎらした目から伝わってくる、もっともっと、という心の声に溺れて窒息しそうだ。ここで少しでも抵抗すれば千堂は自分から手を出してくる。いったん血を見れば見境がなくなつて終わりのない暴力の応酬が始まる。

彼にとって暴力はセックスと同じくらい楽しくて気持ちよくて、もしかしたら何か特別なことなのだろうが、一步にとってはそうではない。ボクシングの棒を外れたルール外で

の殴り合いが楽しいとも思えないし、暴力と性欲がシームレスに繋がる感覚にも慣れない。一步にとってセックスというのは好きな人とするもので、お互いをいたわり合って愛を確かめ合うものだと思っている。実際に他人と性行為に及んだことはなかったし、いまだに好きな女の子と見つめ合っていると恥ずかしくなってしまうが、それでも夢くらいは抱いている。すべての欲望が、渴望が、傷が、痛みが、理解が、あたたかな誼が、性衝動と地続きである人がいることを知ったあの夜を経てもなお、変わらず同じ夢を見続けている。手を出される前に素早く体を起こし、力が入りかけている肩と腕をつかんで壁に押しつける。脅しのつもりでそっと首すじに歯を立てると筋肉がぐっと硬くなる。

歯が当たっているのはちょうど頸動脈のあたりだ。こんなところを食い破ることを想像しても楽しくないどころかぞっとして萎えそうになる。普通は誰だってそうだろう。だが千堂はあからさまに興奮した様子で、切羽詰まったあえぎ声を漏らして身悶えていた。自分や相手の気まぐれひとつで死ぬかもしれないことが気持ちいいってどんな感性してるんだろう……とあきれつつも、試合のときのことやあの夜の出来事がごちゃごちゃに混ざったままフラッシュバックして結局同じだけ興奮してしまう。

「ふ」

たまらずに息が漏れる。背中がぞくぞくする。腰の奥が燃えたように熱くて、硬くなりすぎた性器が瀕死の小動物のように痙攣している。セックスがしたい。あのときのように

深く突き入れて、あの目に煽られながら何度も何度も奥に出して、できるなら彼が音をあげるまで徹底的に打ちのめしてやりたい。支配したいわけではない。傷つけたいわけでもない。ただ逃げたくないだけだ。少なくとも彼にだけは根性なしだと思われたくない。

首を解放して不器用に脚を開かせ、その部分にこわごわ触れる。そこは狭くて固くこわばっていて、ヒトの男性器などとも入りそうにない。しかし千堂は浅く探っているだけの指に焦れて腰を浮かせ、もっと深くに誘い込もうとする。だめですよいきなりそんなにしたら、と心の中だけで叫ぶ。逃げ腰になっていると思われるから声には出さない。その後は何となくの勘だけで中を探っていく、粘膜があたたまつて柔らかくなってきたのを確認してから指を抜いた。男性同士のセックスの知識などないからどのくらい馴らせばいいのか分からないが、自分自身が限界なのでもう挿入することにする。

勢いのまま両膝を持って脚を広げさせて腰を突き出そうとして……しかし、何だか無理、というかどう考えても無理な気がして動きを止めた。やっぱり入らない気がするし入れたらだめな気がする。無理やり入れたら救急車を呼ぶはめになりそうな気がする。

そういえばあの夜はどうしていたんだろう。夢中すぎて入るとか入らないとか救急車とかなんて考えなかったが、思い返してみれば終わった後千堂は妙に歩きにくそうにしていた。眠るときも「このまま二度と起られへんかったらキサマのせいやで」と冗談のかけられない声で恨み言めいたことを言っていた。もちろんあの朝目覚めなかったら再起もでき

なかっただろうし、そもそもしここにいない。

かといってまたあんな目に遭わせるのは人としてどうなのだろう。自分は無傷なのに相手だけ大怪我状態、というのも不均衡な気がして仕方ない。だいたいセックスはボクシングと違って双方が平等にリスクを負うものではないのだから、頭に血が上ったからといってスパーのような気分で軽々しくしてはいけないのではないか？ その場の勢いに流されてするには、この行為は心や命と繋がりすぎてやしないか。

だからしたいのか。だからあのときもしたのか。命のやり取り似ているから。

「幕之内」

ぐるぐると回る思考に絡め取られて固まっていると、千堂はおそろしく不機嫌な声で一步の名を呼んだ。

「は、はい？」

「早よせえ。いつまで固まっとんねん。冷えてまうわ」

「え、ええ、でも、こんなの入れたらダメなんじゃないかと思ひまして……」

「ゴムなら要らんで」

それもあった、と心の中でつぶやく。コンドームのことをすっかり忘れていた。

「うん、やっぱりやめましょう。しない方がいい気がしてきました。この間はわけが分からないまま流されちゃいましたけど、本当はもっとちゃんとした下調べが必要なことなん

でしようし、野良猫じゃないんだから欲望のままこんなことしちゃいけないと思うんです。ボクら現役ボクサーですしお互いいつ試合が組まれるか分からないじゃないですか。だからもっと体を大事にしないといけないんじゃないかと。もちろん心の方だって同じです。だってボクら人間なわけで……」

そのときいきなり股間に激痛が走った。くは、と情けない声を漏らしつつ自分の体を見下ろすと、股間全体を右手で思い切りつかまれていた。

「い、たいんですけど」

「そやろな。リングも潰せる握力やで。潰したことはあらへんけどな」

「やめてください、千堂さん。冗談になってませんよ」

「そらそやろ。冗談やないさかい」

その静かすぎる声に驚いて顔を上げると、すぐに目が合ってぎょっとした。無表情なのに獣じみてぎらぎらした、例の目だ。

「変わらんわ、キサマは」

「そ、そうですか？」

「何も変わらんわ、あのとときから」

その声は手の力や目とは裏腹に、奇妙なほどにしみじみと優しくかった。鳥肌が収まらないままぐくりと唾を呑み込み、彼の目を見返す。

「……何を望んでいるのか分かりませんが、たぶんボクは千堂さんの期待には応えられないんじゃないかと思います。ボクなりに十分乗せられて煽られて、やりすぎなくらいにやっていますから。よく知ってる人を痛い目に遭わせるとか傷つけるとか再起不能にするような度胸はやっぱりないです。いつも無事でいてほしいです」

「再起不能……？ 何やそれは。キサマ真面目な顔でとんでもないこと考えとるんやな」
急に手から力が抜け、握りしめられていた股間が解放される。

「え、違うんですか？」

「再起不能にしてほしい奴がどこにおるんや。だいたいキサマ、こっちが再起不能になるまでやる気なんか？ でけるわけないやろ。ヤバイ裏ビデオの見すぎや。見るんなら普通のにせえ」

「みっ、見たことありませんよそんなの！ 普通のとかもぜんぜん知りませんから！ 本当ですから！」

両手で赤面した顔を隠し、からかうような笑い声から逃げる。

頭の中は恥でいっぱいだったが、それでも千堂にうまくごまかされたことに気づかないわけはなかった。

彼はおそらく、何か重要な選択を迫ろうとした。

まったく違うことを言おうとした。

一番言いたくて、一番言いたくなかった何かを口にしようとした。彼の性格からして、それを聞くことはもうかなわないだろう。天変地異でも起こらない限り。

千堂は顔を覆っている一步の手のひらを慎重に引き剥がし、恋人にでもするかのようにそっと唇を合わせてきた。優しいキスを受けると唇と胸の奥がじんとする。好きな人とするキスはきつとこんなだろうと思う。だったらこのままこの人を恋人にした方がいいような気がする、でもたぶんだめだろうなと思いついて、両手で頭をつかんで口を開けて貪る。一步にとつての恋人とは、単に「好きな人」だ。優しくされたい人、受け入れられたい人、愛されたい人。

だが千堂にとってはおそらく違う。彼にとつての恋人とは、壊しても壊されても後悔できないほど猛烈に欲している人のことだ。そして死ぬまで続くそのやり取りに付き合ってくれる人。

自分はそんなことには付き合えない。たどり着きたいところがあるから、帰りたいところもあるから、絶対に失えない人もいるから、どんなに煽られても我を忘れてもそこまでは行けない。

だから、二人はこれから先もずっと平行線のままでいることだろう。なのにお互いの岸から目を離せないでいるだろう。あのととき味わった恐怖や躍動を「見ていると楽しい」というだけのシンプルな懐かしさに変えて、彼の恋人になりそこねたことをそのたびごとに思

い出すのだ。

乱暴なキスを繰り返しているうちにだんだん我慢できなくなってきた、自分の唾液の匂いのする肌にふたたび舌を這わせる。体脂肪が極端に少ないから皮膚の下でうごめく筋肉の様子がよく分かる。いかにも肉体、という感じでエロティックだが露悪的にも見える。自分だってきつとそうだろう。千堂ほどではないが脂肪の層は人より薄い。興奮しているところもそうでないところもよく分かるはずだ。自分を内側をあげすけに見せて、隠さないうことを恥とも思わず、相手を貪り食らうだけに集中していると二人して人間をやめてしまったような気分になる。

深くキスをしながら勃起した生殖器を触り合って互いを射精させ合い、間髪入れずに股間に顔を埋めると頭上から低いうめきが聞こえた。快楽のあえぎというよりは不満の声だ。膝を立てて足を開いて腰を揺らし、あからさまに挿入をねだっている。欲望を隠す気のないその仕草のおかげでまた忘我しそうになる。

「だめですってば。今日はそういうのはしないってもう決めたんです。いったん入れたらまたわけ分からなくなつて何度も中に出しちゃうことになりますし、それだと明日帰れなくさせますから」

脅したつもりなのによけい興奮させたのか、思い切り体重をかけられて後ろに押し倒されそうになる。

「だつ、だめです。そんな風にしてもそんな目で見てもだめなものはだめなんです。代わりにもっとしてあげますから、今日のところはそれで勘弁してください」

無理やり上げさせられた頭をもう一度下げ、萎えるきざしもないペニスに口づける。人の股間なんてまじまじと見るものではないからはずきりとは言えないが、彼のそれはかなり大きな方ではないかと思う。きつとたくさんの女の人を喜ばせたり泣かせたりしてきたんだろうな、という羨望に似た想像とともに、だったらこんな経験ゼロに近い人間の技巧で満足するはずがないのでは、という不安が同時にわいてくる。しかしひたすら懸命に唇と舌で愛撫を続けているとだんだん息が荒くなり、膝から先に力が入り始めたのが分かった。ひくひくと痙攣するようにせわしなく上下する胸郭が快樂の所在を伝えているようにも見え、少しだけ目をそらしたくなる。

やがて子供がわめき散らすような悲しげな声が聞こえてきて、頭を抱え込まれて口の中で精液を受け止めるはめになった。腰が本能的に跳ね、限界まで膨らみきった先端が口蓋を突き、そのたびに青くさい匂いがいっぱいに広がっていく。千堂が射精するところはどう何度も見ているが、なぜだかいつも胸が痛くなる。気持ちよさそうというよりは、妙に苦しげな暴れ方をするからだ。

「大、丈夫ですか？」

精液が口の中に入ったままそう聞くと、呼吸とともにのどの奥に入り込んで激しくむせ

た。むしろ大丈夫でないのはこっちなのだが、壁に寄りかかって四肢を投げ出したままびくりとも動かない千堂を見ていると死んだんじゃないかと思つて心配になる。

「千堂さん？ 息してますか？ しっかりしてください」

顔を上げさせて軽く頬を張ると、見えないところからいきなり手が出てきて手首をつかまれた。

「何しよんねん」

「あ、よかった。失神してたわけじゃないんですね。動かないから窒息したんじゃないかと、」
げほげほ、と体をくの字に折り曲げてせき込むと、頭上からため息が降ってくる。

「何や、大丈夫かいな。窒息しそうなのはそっちゃで」

「分つ、かつて、ます、分かつてるんですけど……」

熱い手のひらが背中をさすっているのを感じる。それは意外と優しい手で、人の都合など意にも介さない獣の手などでは決してなくて、そのことがどうしても悲しくて視線を上げられない。

もしかしたら、自分たちはもっと深く理解し合えるのかもしれない。分かり合い、受け入れ合い、いたわり合えるなら、こんなことをする必要はないのかもしれない。千堂が自分に望んでいるものだって、ひょっとするともっと当たり前のことで、人として当然受け入れられることなのかもしれない。壊すとか殺すとか死ぬとかそんなことではなくて、セッ

クスが必要なことなんかでもなくて……。

うるさかった風の音がいつの間にか聞こえなくなっていた。代わりにまたサイレンが聞こえてきて、とっさに千堂の耳をふさぐ。ピーポーピーポー、という明確な音階のサイレン。救急車だ、と思ったとき、さらに手に力がこもった。聞かせたくない。また走り出させたくないというだけではない。あのサイレンは命に直結しすぎている音だから、もし彼がああ何らかの義務や衝動を感じているなら、二度と聞かない方が彼のためなんじゃないかと思った。もし二度と台風がやって来ないなら、その方がいいと自分自身が思っているから。

しかし千堂は面倒くさそうに頭を振って手を外し、「やめえ。頭潰す気かいな」とつぶやいた。走り出すどころか反応する気配さえなかった。

「……え？ あれ？」

「何や」

じろりとにらまれて小さくなる。詮索はしないと決めたので「何でサイレンが鳴ったのに走り出さないんですか？」とは聞けない。ごまかすしかない。

「え、ええと、あの、台風通り過ぎたみたいですね？ 外が静かになってますし」

とはいえ、雨の方はまだ分からない。相変わらずシャワーを出しっ放しにしているせいで雨音だけはまったく聞き取れない。

「とりあえずシャワー浴びて寝ましょうか。起きるころにはもう電車走ってると思いますから一安心ですね……って、痛っ！ やめてくださいよ！」

立ち上がりかけた瞬間にまた股間を思い切りつかまれて引っ張ってられたせいで激痛が走り、つい床にへたり込む。

「引き留めたいならそこじゃなくて肩とか手とかをつかんでください！ 　　というか言いにくいことあるならはっきり口で言ってもらえると、」

「なら口で言うたるわ。勃っとるで。まだ出し足りんのやろ」

「……」

音もなく顔面に血が上り、見開いていた目を思い切り閉じる。

「そ、そ、そういうことはっきり言わないでください。恥ずかしいじゃないですか」

「はっきり言え言うたのはそっちやで」

「そ、そうかもしれないけど、でももういいんです。前みたいにくっさんすると次の日足腰がへろへろになってまともにロードワークもできなくなりますから」

「ほお？」

さぞにやにやしているんだろなと思って薄目を開けて千堂を見たが、彼はただ不機嫌そうな顔をしているだけだった。

「だからもう、本当にいいんです。ボクらはお互い道具じゃないんですから、相手は無茶

苦茶にするまでやめないとか自分が満足するまで続けるとかそういうのもおかしいんじゃないかと……」

「ま、そやな」

「分かってもらえたならいいです。もう夜遅いですし早く寝ましょう」

早口でまくし立て、隣のシャワーを出して急いで体を洗い始める。

下半身の方は確かに指摘された通りで、腰の奥にもまだ放出し足りない熱が溜まっていて少し辛い。一度寝て起きれば少しは冷めるだろうが、おそらく今夜は眠れない。

この場で少しでも発散できるとすれば、やっぱり足腰が立たなくなるまでセックスするか殴り合うしかないんだろうなあとふと思ひ、すべての衝動がシームレスに繋がる感覚を少しだけ理解できた気になって、そうやってしまったらやはり困るので頭を振ってその考えを追い出す。

シャワーを止めても雨音はしなかった。それなのにまだどこかでサイレンの音が聞こえる気がする。さっさと体を拭いてシャワールームを出て行ってしまった千堂が命に直結しすぎているその音を聞かないように、飛び出していかないように祈る。

かしわ手、アーメン、合掌、拝礼。

知っている限りの祈りのポーズを繰り返す。

*

翌日は朝から晴れで、うんざりするほどの強烈な陽光が家という家、人という人を平等に焼き焦がしていた。

床上浸水被害はゼロ件、道路にあふれ出した水も深夜にはすっかり引いていて、地下鉄やＪＲや新幹線は始発から通常ダイヤで運行していた。暑いこと以外は街は平和そのもので、まるで何もなかったみたいだった。

着るものがなくなってバスタオルを巻いてトレーニング室のベンチで眠っていた千堂は、夜明けとともに起き出して半乾きの服を着てジムを出て行ったらしい。らしい、というのは、一晩中眠れなかったにも関わらず彼が出て行ったことにまったく気づかなかったからだ。野良猫みたいな人だな、と思ったが、ベンチに残されていたバスタオルと緑のジャージと「おおきに」という幼児みtainな字のメモを見るとあまりそんな風に思っているわけではないような気がして、一度だけ拳でこつんと自分のこめかみを叩いた。

念入りに掃除をしてからジムを出て、走って帰宅するとすでに梅沢は帰ってしまった後だった。

「ただいま」と言うと犬は飛びかかってきて匂いをかき回り、母はほっとしたような顔で「おかえり」と返してくれて、扉を開けたとたん味噌汁のいい匂いが部屋中にふわっと広がってなぜだか泣きそうになった。

「ごめんなさい、昨日帰れなくて。心配したよね」

「心配なんてしてなかったよ。だってジムにいたんでしょ？ 鉄筋の建物ならうちより安全じゃないか」

母は冗談めかしてそう言い、肩を叩いて居間に迎え入れてくれた。テーブルには朝食が用意されている。

「そろそろ帰ってくるころだろうと思って朝ご飯作っておいたよ。早く食べて、少し休んだらどうだい。疲れてるんだろ？ 仕事は母さんがやっておくからさ」

「ううん、ちょっと眠れなかったただけだから普通に仕事はできるよ。でもまだ波が高いから船を出すのはどうかなあ。台風の後も危ないし、何かあったら困るし」

「まったく……」

急須から茶が落ちるひそやかな音とともにため息をつき、母はそっと顔をそむけて父の写真に目をやった。

「お前は父さんとは違う存在なんだから、独立した一人の人間なんだから、いつまでも母さんを心配させることを気にしないでいいんだよ。でも、それを母さんが言っても仕方

ないね。そうしたいって気持ちとそうしなきゃって気持ちはまた別のものだから。『しなきゃ』って気持ちは結構強いものだから」

うん、と小さく頷く。

「人はね、自分が経験した一番辛かったことやショックだったことをつい繰り返してしまいう生き物なんだって。そのためだけに、どんなにやっちゃいけないことでも『しなきゃ』と思ってやってしまうんだって。昨日ちょうどテレビでそんなことをやってね、梅沢くんが漫画のネタに使える！　って大喜びしながらメモしてたのよ」

「うん」

今度は母の目を見て頷く。その目にはもう悲しみの色はない。とっくに乾いて砕けてしまった優しい絶望だけがある。自分の目にもきつとそれがある。

「だからって、急にやめられるものではないかもしれないね」

「うん」

「でも母さんはお前を……ううん、何でもない。とりあえずご飯食べなさい。部屋に布団敷いておくから」

「ありがとう、母さん」

食卓の前に正座して、箸を手に取りうとして、自分の手が震えていることに気づいて、父の写真を眺めやって唇を噛む。

父がいなくなって悲しいことは間違いないのに、「悲しい」という気持ちはもう思い出せないのだ。

台風が来て時化が来て同じことを何度も何度も繰り返すたびに、強すぎる悲しみや混乱は徐々に風化していく。けれど消え去るわけではなくて、細かな砂になって心の底にさらさらと溜まっていくだけだ。台風之夜に家に駆け戻るのは、父を失って悲しかったときの記憶をその砂の中から掘り起こそうとする意味のない努力なのかもしれない。

千堂がサイレンを聞いて走り出すのも、同じようなものなのだろうか。

人はね、自分が経験した一番つらかったことやショックだったことをつい繰り返してしまいう生き物なんだって。

彼が繰り返し砂の中から掘り起こそうとしているものは何なのか、何もないと知りながらそれでも手をつつまなければならぬ理由は何なのか、自分に知る権利はない。たぶん義務もない。知ってほしいと思うことさえできない。

決して言語化されないこの底なしの砂地獄に飛び込めるのは、何もかもを失い、失わせ、それでも後悔しないと思える人だけだ。

番外編
①

因業

Bad Animals, Bad

ほぼ裸で寝たせいか、濡れたの服を着て新幹線に乗ったせいかは分からないが、台風一過の東京から大阪の自宅に戻ったとたんに熱を出した。

千堂は子供のころから頑丈で、風邪をひいた経験など数えるほどしかない。それもないといくしゃみと鼻水だけだ。試合後以外で発熱したことは、初めての練習で柳岡にぐうの音も出ないほどやり込められて悔しくて知恵熱を出したときと、幕之内に初めて失神KOされて悔しくて悔しくて知恵熱を出したときと、幕之内に二度めの敗北を喫して悔しくて悔しくて悔しくて知恵熱を出したときの三回しかない。

つまり風邪で熱を出したことはない。そんな自分が少々濡れたくらいで寝込むわけがない。しかも夏に。と、思っていたのだ、このときまでは。

帰宅してすぐ風呂に入って出て、自室へ戻ろうと廊下に一步踏み出したとき、なぜか足元がふらついて歩けなくなった。いきなり背筋に怖気が走り、頭が割れんばかりに痛くなつて、顔が火照つて、手足が萎えた。まるで幕之内に殴られた後みたいだった。

そのまま居間と廊下の境目でうずくまっていると祖母が額に手を当ててきて、混乱している千堂の代わりにきっぱりとこう宣告した。

「風邪やな。薬飲んでおとなしゅう寝とき」

祖母が敷いてくれた冬の布団にくるまり、がたがたと震えながら目を閉じる。

布団の隅では飼った猫のトラが丸くなっていて、いつもなら「暑うてしゃあないわ」と苦

笑するところなのに、いまはトラが湯たんぽ代わりになってくれているのがありがたくて仕方ない。

頭が痛すぎて眠るところではなかったが、それでも目を閉じていると何十分かは眠れた。ふたたび寒気と頭痛で起きて、ときどき眠って、起きて、汗でぐっしょり濡れた服を着替えて、また眠って、を繰り返しているうちに外はとくに暗くなっていて、祖母がふすまをとん、と開ける音がして目が覚めた。

「具合はどないや、武士。汗かいてちよつとは楽になったんちゃうか」

ふすまの隙間から入ってくる明かりがまぶしくて何も答えられずにいると、そつと額に手を当てられた。

「あんまり下がつとらんな。夜も葉飲まんとあかんわ。その前に何か腹に入れた方がええで」
「……何も食われへん」

口から出た自分の声があまりに弱々しくて驚いた。幕之内に肋骨をまとめて折られたときですら、今よりはずつとしっかりした声が出ていた気がする。

初めて経験する高熱とひどい頭痛と吐き気と回り続ける視界の中、嘔き出した弱気が抑えられなくなつてついこんな情けない弱音が出てしまう。

「すまん、ばあちゃん、ワイこのまま死ぬかもしれへん」

「何言うとんねんどアホつ。何度殴られてもピンピンしとるアホが風邪ひいたくらいで死

ぬかいな」

掛け布団をばしっと叩かれ、驚いたトラが部屋の外に出て行く。

「そないなことより、お前にさっき電話あったで。いつも丁寧やなあ、あの子は」

「誰や」

「幕之内さんや。忘れ物の服を送る前に勝手に洗濯してええか、て聞かれたわ。代わりにお礼と返事したいで」

節々の痛みと弱気がずっと引いた。昨夜のことを急に生々しく思い出し、力の入らない拳を握りしめる。

「他に何か言うと思ったか、ヤツは」

「お前が熱出して寝込んでる言うたらえらい恐縮しottaわ。『すみません、それボクのせいです』やて。お前もいっぺんあのくらいしおらしゅうしてみい」

もう一度布団をはたかれる。「すみません、それボクのせいです」。彼の声まで聞こえてくるかのようだ。

「熱下がったらかけ直してお礼言うんやで。出かけるたびに忘れもんばっかりしよって、アホウが」

「わざとや」

「ん？ 何やて？」

力なく首を横に振り、「何でもあらへん」と言い残して布団にもぐる。祖母はため息をついてふすまを閉め、軽い足音を立てながら遠ざかっていく。

ハンマーで殴られているかのように痛む頭で今朝のことを思い出す。鴨川ジムに服を一枚忘れたのは、もちろんわざとなんかではない。千堂は小学生のころから通知票に欠かさず「忘れ物に気をつけましょう」と書かれるくらいいつも忘れ物ばかりしている人間で、貴重品をなくすことも多いし落とし物も多い。

だが幕之内に借りたシャツを自分のと間違えて着て帰らなければ、忘れる確率もぐっと下がったことだろう。最初に幕之内に着替えとして渡されたXXXLサイズの、お世辞にも可愛いとは言いかねる妙なパンダが描かれたTシャツ。

いま祖母に洗濯されているであろうそのシャツは、きつと幕之内の大事なものだと思う。彼が服に触る手つきで分かる。何か思い出があるのか、あるいは誰かにもらったのか。それを分かっていながら袖を通し、そのまま着て帰ってしまった。わざとではないが、もっと早く間違いに気づいてもよかった。あれが一番濡れていて、サイズが大きすぎて着心地が悪くて、もし幕之内に借りたのでなかったら手に取ろうとも思わないはずだったから。

薄暗い自室の壁を見つめていると、嵐の日に船にでも乗っているかのように視界が揺れた。寒気は収まってきているが、体はさっきよりも熱い。布団をかけていられなくてはぎ

取り、はあはあと息をしながらふいに部屋の奥の暗闇へと右手を伸ばす。その闇から引きずり出されるように記憶がさかのぼっていく。「すみません、それボクのせいです」。

ほんまやな、と恨みがましくつぶやく。

改めて思い出すと心当たりなんていくつもあった。豪雨の中、外に出てずぶ濡れになり、その状態で長時間シャワールームでこもってセックスをし、着替えがなくなつて全裸にバスタオルをかけて寝た。体調を崩しそうな異常行動しかしていない。しかしどれもこれもお互い、最初から分かっていたことばかりだ。

台風で帰れなくなって、鴨川ジムに電話をかけよう、と思ったときから分かっていた。二人きりで過ごして何事もなく終わるにはどう考えてもまだ早かった。何事もなく終わらせるには細心の注意が必要だということも、じゅうぶんよく分かっていた。

それなのに「それしか選択肢がない」というとつてつけた理由で電話をかけ、絶対に断られないことを知っていながら幕之内に助けを求め、彼も不安を感じながら千堂を受け入れ、あとは……なるようにしかならなかった。

それでも、なりたいたいようにはならなかった。したいことやしてほしいことがかなえられることは最後までなかった。幕之内という男は本当に、どこまでも、こっちの思い通りにはならない人間だ。

敷き布団からはみ出した右手が畳に触れて冷たい。熱のせいで拳の関節にぼんやりした

感触だけがある。自ら拳を差し出してキスさせたときのあのぞくぞくする高揚感を思い出す。従順に奉仕していてもどこか納得いかなさそうな幕之内の顔も。

あんな風に煽られるだけ煽られて放り出されることがどれほど辛いのか、彼には分からないのだろうか。たとえ女を知らなくても、想像くらいつくはずだ。あんな不器用な触れ合いで満足できるわけがない。しかし試合を見れば誰でも分かる通り、彼は耐えようと思えばどこまででも耐えられる人間で、すべきでないことは頑としてしない性格で、彼に絶対負けたくない千堂も先に音を上げたり弱音を吐いたりするわけにはいかないのだからこうなるのは当然で、やはりなるようにしかならなかったということなのだろう。

「……ほんまアホらしいわ」

もしかしたら、あのときめちゃくちゃになれなかったぶん、いまひどい目に遭っているのかもしれない。他人に向けた強すぎる思いや願い、欲望というものは、最後には自分に返ってくる形で帳尻が合ってしまうものなのかもしれない。

回らない頭で考えているうちにいつの間にか眠っていて、次に目を覚ましたときには窓の外が明るかった。

熱が下がったのか手も足もスムーズに動き、魂が体に戻ってきたような感覚になった。頭はまだ少し重いが今なら人と話すことくらいできそうだ。

上半身を起こすと額に乘せられていた濡れたタオルがずるりと落ち、生ぬるいものが顔を

滑って布団を湿らせる。体を縦にするとたんに頭がぐらくらくらしてふたたび突っ伏してしまいそうになるのを何とかこらえ、立ち上がって歩いて自室の外に出る。

早朝だからか、祖母はまだ起き出してきていなかった。無人の居間にそっと足を踏み入れ、電話機の前に立つ。時計は五時をさしている。人の家に電話をかけるには少々早すぎるが、千堂の中に「迷惑かもしれないと思って躊躇する」という選択肢はないのですぐ受話器を取ってボタンを押して呼び出し音が鳴るのを待つ。

一回、二回、三回、四回、の途中。

眠そうな声、あるいは迷惑そうな声がするかと思ったが、受話器の向こうの人物は、予想に反して妙に迫力のある調子で「もしもし幕之内ですが！」と言った。

「……お、おお？」

つい勢いに押され、名乗るのを忘れてしまう。一瞬口ごもっているうちにさらに畳みかけてきて、「もしもしっ？」と責め立てるように繰り返す。

『どちら様ですか？ あ、営業のお問い合わせでしょうか？ 今日は今時間帯船を出せますので予約の時間通りに来ていただけたら、』

「お問い合わせやない。ワイや」

『はっ？』

一瞬とはいえ気圧されたことが悔しかったからすぐに答えることはせず、たくさんの

「？」が浮かんでいるであろう空気をしばらくの間楽しむ。

『あの……もしかして……?』

「そや。ワイや。さっきから何をイライラしとんねん」

『ああ、いや、その、すみません。朝釣りの時間が迫ってるので焦ってて……って、早くないですか？ 熱を出して倒れたって聞きましたけど体大丈夫なんですか?』

幕之内は早口でそうまくし立て、返事を待たずに「すみません」と口走った。

『風邪ひかせちゃって本当にすみません。千堂さんあれ以上着替え持っていないって分かってたわけですし、毛布と乾いたシャツもう一枚くらい出しておけばよかったです。申し訳ないことしました』

『謝らんでええ。ばあちゃんが大げさに言うただけで別に何ともないわ。何せこれから走り行くとこやさかいな』

『でも昨日夜電話したときは三十九度も出てるって聞きましたよ。声も元気ないですし、しばらく休んでた方が……』

思わず顔をしかめそうになるのをこらえ、明るい声で「そやな、そうするわ」と答える。心配されるのが嫌、なんていうのは思春期の子供のわがままな理屈で、心配をかけたくないなら心配されないように接すればいいだけの話なのだ。特に心配されたくない人の前では、いつも明るく楽しい人として振る舞わなければならない。

『それで、ボクに何のご用でしょう？ そろそろ仕事に行く時間なので手短にしてもらえると助かるんですが』

「おう、そやったな。用件は忘れもんのことや。キサマから借りたけったいなパンダあるやろ？ あれを忘れたシャツの間違えて代わりに着てきてしもて、今うちにあるんや。すまんのう」

『そうだったんですか。なくしたかと思ってたのでほっとしました』

予想よりもずっとあっさりした反応だ。最悪泣かれるか責められるかと思っていたのに、幕之内は何ということのない調子で続けた。

『それじゃ、千堂さんが忘れた服と交換になりますね。ボクの方は急ぎませんから、次にお会いしたときでも構いません』

「……？ 大事なものとちゃうんか、あのパンダ」

『ええまあ、そこそこ大事にはしてますけど、サイズが大きすぎてボクだと肩が出るので日常的には着られなくて。何かあったときの予備にしかならないんです』

「せやったら要らんやろ。世話してもらた礼にもん買うて送ったるで」

空気が一気に緊張したのが受話器越しにも分かった。

怒らせたのか、傷つけたのか。どちらにしても軽はずみな言葉だったのは明白だった。

そのときの気分は最悪で、女子供を殴ったらきつとこんな気分になるだろうと思うほど

だった。何か言い訳をしようと思って口を開きかけたとき、幕之内はあはは、と笑って先手を取った。

『お礼なんて、そんなのいいですよ。困ったときはお互い様ですし、ボクもいつかお世話になるかもしれませんし……』

「ほうか」

『はい。じゃあ、ボクは仕事行きますね。早く元氣になってください。千堂さんの次の試合、テレビで見るの楽しみにしてますから』

「おう」

それでは、と言い残し、幕之内はそっと電話を切った。暴力の手応えが残っているうちに受話器を置き、うー、とうなりながら居間に大の字になる。

めまいがする。体の芯もふにゃふにゃになっていて、足腰にうまく力が入らない。この状態でケンカをしたらその辺のサラリーマンにも負ける。しかし焦りはなくて、怒りもなくて、無力感だけが全身を支配している。初めて幕之内に負けたときとも、二度負けて肋骨をへし折られたときとも違う「無」の感覚がある。いつもなら苛立って頭を掻きむしってがむしゃらに走り出すところなのに、怒る元氣もないからだただ無に流されている。

時計の秒針が規則的に時間を刻む音がする。外を走る車のエンジン音が聞こえる。朝を待っていたスズメの声とカラスの声、どこかでシャッターを開ける音、自分の鼓動の静か

な音。

怒らせたことを後悔しているわけではない。爪を立てれば傷つくのは当たり前で、腹が立つならやり返せばいいだけで、もしその勇気があるのならどんな仕返しでも受け止めてやる覚悟くらいはある。

だがこれは、正当性のある暴力ではない。相手に全力でぶつかった結果でもない。ただの幼稚な意地悪だ。

小学生のころ、教室で似たような光景を見たことがある。隣の席の女の子が大事にしていた鉛筆を間違えて持って帰ってしまった男の子が、次の日代わりの鉛筆を持ってきて「あの鉛筆、短すぎるから捨てといたで。これ代わりや」と言って新品を差し出した。彼はその鉛筆が転校した親友からもらった大事な品だということを知っていて、わざと彼女の思いついた出を奪ったのだ。もちろん彼女は傷ついて怒って大泣きした。この構図はあれにそっくりだった。幼すぎる嫉妬。支配欲。

最低や、アンタろくな大人にならへんで、と好きな子に責められていた彼の無表情な横顔を思い出す。教室での千堂は暴力専門のフィクサーで、そういう男女のデリケートな問題には首を突っ込めなかったからわけも分からずぼうっと見ていただけだ。

その純粹な視線がいまの自分に向く。もうとっくに大人である自分が、したくないことはしないはずの自分が、誇り高いはずの自分が、なぜあんなくだらないことを？

はあ、とため息をついて起き上がる。病み上がりのくらくらしした頭を持ち上げるとすうっと血の気が引き、めまいの予兆が起こりかけて舌打ちをする。他人へ向けた強すぎる思いが、欲望が自分に返ってくるなら、本当にそうだというのなら、まだしばらくは治らないだろう。一生治らないかもしれない。

ふたたび自室へ戻って湿った布団に横になると、一昨日から火がついたままの情欲が風邪のたるさを突き破り、いじましく体温を急上昇させた。欲しくて欲しくて仕方なくて、その欲がさらに熱を上げる。

たぶんこれは知恵熱の方だ。ボクサーになってから、いまの自分ではどうにもならない悔しさを覚えるたびに発熱した。悔しさとはつまり飢えと渇きで、いま自分がどう行動したところで満たせないものがあるから代わりに体に火がつく。

いつも曖昧な何かに飢えていた自分が、はっきりと形のあるものを欲するようになってしまったのはいつからだだろう。なぜ絶対に手に入らないものばかり欲してしまうのだろう。このまま燃えて燃えて燃え尽きて、この手の中に何も残らなくなったら、いつかやめられるだろうか。

ま、無理やろな、とかすれた声でつぶやく。自分のことは自分が一番よく分かっている。どれほど大人になっても願望をかなえるための手段が巧妙になるだけで、欲そのものが変化するわけではない。

好きな子の思い出の鉛筆を捨てたあのクラスメイトも、いまならもっとまじな気の引き方ができるだろう。それが彼女に伝わるかどうか、うまくいくかどうかはともかく。

千堂ははん、と笑って目を閉じ、欲望の熱を下げるために眠りにつく。

新星

The Fleeting Grace of the Dangerous Method

パンチと同じくらいにいい名だ、と思った。

本人によれば、「星」には夜空に浮かんでいるものとは別に、「勝敗」という意味もあるらしい。スポーツニュースでよく聞く白星や黒星、大金星、という言葉がそれにあたる。あとは月日の流れ。大昔は星の運行によって暦を把握していたのだから。

その退屈な話の途中で柳岡が「自分、えっらいキャッチフレーズの作りやすい名前やな。苗字だけで期待の新星や」と混ぜ返し、星が「いえ、それはちょっと。どうせなら『一番星』がええです」などと大真面目な顔でデカすぎる態度を取り、あきれ顔を向けてやると逆に真面目から見つめられた。

「アンタ、男やな」

「ああん？」

「ワイの上段突きもろて倒れへんかったんは人生でアンタだけや。アンタの男ぶり、この目にしっかり焼き付けさせてもろたで」

「そうかいな。おおきに」

素っ気なくそう返事をし、グローブをしたまま頬を搔く。気絶から回復してすぐだったから、熱く見つめてくる目がうっとうしくて仕方なかった。暑苦しいやっちゃん、と小声でつぶやく。

ボクシングを始める前からこういうたぐいの男どもに例外なく懐かれてきた千堂だが、

星という男は中でもトップクラスの人材だ。

空手の達人だからというだけではない。さして背は高くもないものの、ごつい体つきを見せつけるように胸を張ってのしと歩き、話し方は悠然としていて威圧的で、岩を削ったような荒々しい相貌に不敵なにやり笑いが異様に似合う。強面選手権を開いたら優勝しそうな男だ。柳岡に問われるがまま自分の来歴を語っているところを見ると意外に純朴そうでもあるが、その堂々とした野心的態度には目を引かれた。

千堂の強さに憧れてすり寄ってくる強面はたいてい千堂に男としての理想を投影しているから、影のごとき存在に徹して千堂の視界に入ろうとはしないが、彼のような人間は違う。虎視眈々と機を窺い、食らいつき、千堂に成り代わろうとする。ボクサーになる前はそういうたぐいの男が何人もそばに寄ってきたから、そのたび拳で黙らせて立場を分からせてきた。しかし今はもうそんな命知らずは存在しない、はずだった。

星はリングを下り、柳岡と何やら熱心に話し込んでいる。周囲がうるさくて話し声は聞こえないが、もしかしたら柳岡が星を勧誘しているのかもしれない。ありえない話ではない。タイトル経験者の千堂を一撃で失神未遂に追い込んだパンチがあれば誰だってこの道に誘いたくなる。空手とボクシングは格闘技としての形は違うが打撃技を使うところは同じだから、一から仕込めば相当強くなるだろう。だが、と思う。だが。

「あかんで、柳岡はん」

リングの上から静かな声でそう言うと、星と柳岡と、周りの練習生がいっせいに振り向いた。

「こいつの殴り込みはまだ済んどらんのとちゃうんか。誘う前にそこんこはつきりさせなあかんやろ」

ゆっくりと二人に歩み寄り、拳の関節をぎきぎき鳴らしながら続ける。

「星、いうたな？ プロボクサーを一発どついただけで満足したんか？ もう一回リング上がれや。もっとええ右の使い方教えたるで」

その抑えた口調がよほど恐ろしかったのか、リングの周囲でシャドーをしていた練習生たち波が引くようにさーっと壁際へと後退していった。なのに星は顔色も変えない。にらみ合いが数秒続いた後、柳岡がため息混じりに口を開いた。

「素人さんにええの一発もろた程度で何を熱うなっとなねん。勧誘しとったわけやない。お前の話をしとったんや」

「ワイの話？ 何やそら」

柳岡は仕方なさそうに頭を掻き、リングの下から千堂を呼び寄せた。星は相変わらず微動だにせず、暑苦しい目を千堂に向け続けている。

「よう分からんが、こいつどうやらお前の戦績とファイトスタイルを知りたいらしいで。ざっと説明したがまだ足らんいうさかい、あとは自分で頼むわ」

「頼むて、アンタ逃げるんか？　ワイにこないな奴押しつけて？」

「生意気な奴や、ジムを代表してワイが相手したるわ、言うて最初に出てったんはお前やで。最後まで面倒みたらええがな」

「冗談やないで！　ワイは忙しいんや、厄介なファンの相手まででけるかいな」

「ファンとちやいます」

急にずい、と前に出てきた星は、例の不敵な笑みを浮かべながら体の前で右拳を握った。
「今日からアンタはワイの目標や。アンタを知り尽くすまで帰らへんで」

それを見たとなん頭が冷え、肩から力が抜けていくを感じた。確かに、熱くなる必要はない。今日出会ったばかりの人間相手に対抗心をむき出しにする必要もない。「目標」は一発殴ったとか殴られたとか、その程度で成立するものではないからだ。

「星、いうたか」

首の後ろを掻き、目の前の堂々とした体躯の持ち主を氣のない目で眺める。

「ワイを目標いうたな。何も知らんようやから教えたるわ。同じジム同士のプロのボクサーは本番のリングで試合でけへんのや」

「かめへん。ワイはアンタとリングで勝負したいとは思ってへん。権利もライセンスも要らん、ワイの上段突きに耐えきったアンタと男賭けて勝負でけたらそれでええんや」

「それもあかんねん」

バンテージを巻き直しながら短く答えると、星は怒りと悲しみを含んだ声で「何でやっ?」と叫んだ。

「自分、そないなことも知らんでボクシングジム来たんかいな。プロボクサーの拳は凶器なんやで。黒帯か何か知らんが、ズブの素人をリングの外で相手にはでけへん。そないにワイと戦りたいんなら別のジム行ってライセンス取ったらええがな。フェザーの世界ランカーにでもなったら喜んで対戦受けたるで」

にべもなくそう言うとき星はがくりと肩を落とし、悲しげに眉を下げた。

「もう氣い済んだやろ。出て行き。ワイは忙しいんや。これからスパーやさかいな」

「……ちょう待ってや」

姿勢を戻し、すっかり意気消沈した顔を千堂に向けてくる。

「それ、見ててもええでつか。迷惑はかけへん」

「見学だけなら別にかめへんで」

ひらひらと手を振って背を向けると、星はおとなしく後方に下がって壁に寄りかかった。もう一度グローブをはめてリングに上がり、軽く準備運動をする。見られ続けているのがうっとうしくて仕方がないが、ゴングが鳴ると何も気にならなくなる。

スパーの相手は、自分より上の階級の力強い男だった。長い左をさばき続け、ようやくとらえたボディから連打に入ろうとしたとたん、相手が急に悶え苦しんで倒れる。三ラウ

ンドの予定のはずが一分足らず。それもはや日常茶飯事だ。退屈な気持ちで相手が回復するのを待っていると、背後から張り詰めた空気が漂ってくるのを感じた。

集中を切らすな、と柳岡に注意されるのが分かっていながら、つい後ろを振り向いてしまう。そこには星がいて、例の凶悪きあまりない右拳を握りしめてファイティングポーズを取っているところだった。スパーを見ながら真似でもしているのかと思ったが、千堂の構えとはまったく違う。自分なりの構えを研究しているのかもしれない。

「どうやら本気のような、あれは」

それを何とはなしに眺めていると、柳岡がそっと耳打ちをしてきた。

「ふん、何や。やっぱりアイツ勧誘しとったんかい」

「しとらん。だが一目でお前に憧れ持ったんは分かった。せやったら放つといても来るやろ思てな」

「ワイと勝負したなって別のジム行かれたらどないするつもりやったんや」

「憧れいうんはそれだけのもんとは違うで。とことん強気のお前にはまだ分からんやろが」

苦笑とともにそう言い、柳岡はちらりと星に視線を向ける。

「あれは対戦相手いうより目標を探しとったんやろ。戦いたいいうより、こうなりたいと思える相手を」

「はん、黒帯かなんか知らんがよう分からんやっちゃな。男ならそんなん見つけたら勝負

したなるやろが」

「出合い方と相手によってはそうならんこともある、いう話や」

柳岡はとんと千堂の肩を叩き、ついに立ち上がれなかったスパarring相手に声をかけに行った。視界の隅には見よう見まねでシャドーをしている星の姿があって、何だか少しうらやましい気分になった。

憧れ。

千堂があれほど恋い焦がれた相手について持ち得なかったもの。

＊

それからというもの、星という男は毎日ジムに通ってくるようになった。

空手の素地があったためか、柳岡の言いつけを守って真面目に練習をしているだけであるみるうちに強くなった。慣れ親しんだ型をできるだけ崩さないように意識と体をボクシングに馴染ませ、長所を最大限に伸ばして勝負する。おかげで元々自信満々だった星はさらに自信を深め、あっという間にプロになりデビューして連勝を重ね、その一撃必殺のフ

イトスタイルに日本中から注目が集まった。

彼におかしな習慣があることにジムの皆が気づいたのはちょうどそのころのことだ。

星は誰よりも早くジムに来る。なのに人より少し遅れてトレーニングを始める。その間着替えもせずウォームアップもせずいったい何をしているのかと思ったら、どうやら毎日奥の部屋でビデオを見ているらしい。

千堂がそのことを知ったのは偶然だった。以前までのように、幕之内の試合のビデオを毎日飽きるほど見る習慣があったならすぐに分かっただろう。だが今は次の対戦相手の研究のときくらいしかビデオデッキを使わないから、星がここにこもって何かを見ているしばらくは気づけない。

暗い部屋に明かりをつけながら「何をこそそ見とんねん、AVなら家で見んかい」と言おうとしたとき、巻き戻しすぎてすっかり画質が荒くなった映像が目に入った。

千堂の名を連呼する観衆とリングアナウンサーの絶叫、互いに引かずに打ち合う二人の姿。このときはもう意識がなくて、地鳴りのような声援だけが遠くから聞こえていたような記憶がある。すでに完膚なきまでに殺されているのに、それでも殺し返そうと必死に奮闘しているかつての自分がどうしようもなく懐かしくて愛おしかった。

まだ二人とも十代だったころのことだ。

「何やっとなねん、自分」

低い声でそう言うと、星はリモコンを持ったままゆっくりと振り向いた。

「日本チャンプの研究でもしとったんか？」

「ええ、そんなところですよ」

「もうタイトルマッチやる気でおるんか。気の早いやつぢやな。せやけどそないな昔のビデオ見てもしゃあないで。いまの幕之内にもうこないな粗は残っとらん」

「それでも勉強にはなりますわ。武士さんも王者もパワー型のファイターや。戦い方の参考になります」

予想に反して星は軽い調子で答え、リモコンのボタンを押してテープを少し巻き戻す。

「ちょうどええとこに来てくれました。武士さんにちょう聞きたいことがあります」
「何や」

ジムの先輩に負け試合のことを質問するなんてたいそうな度胸だ。無然としつつもそばに寄ってやると、星はちょうど千堂がダウンする寸前で一時停止を押して、「ここですよ」とつぶやいた。

「これが何やねん」

ちょうど幕之内に鏡対称のスマッシュを食らってダウンする瞬間の映像だった。負けた本人の目の前で、わざわざこんな場面を選んで一時停止などするか普通？ますます腹が立ってきて静かに拳を握りしめ、力を溜める。

「噂通り強いでんな、この幕之内いうのは」

「あ？」

「武士さんのスマッシュを怖がらんばかりかまともに食らって耐え切って、同じ技で倒すちゅうのはもう、ほんまの男ですわ。シビれますわ」

「……ワレ、ケンカ売っとんのか？」

ついに拳をぎぎぎ鳴らし、ソファに泰然と腰掛けている星をにらみつけた。

「聞きたいこというんは何や？ おどれの悲鳴かいな？」

「この瞬間ですやろ。武士さんがこの幕之内を男と認めたんは」

千堂の殺気を意にも介さず、星はにこりと笑ってそう言った。

「武士さんよりちょい上や言われても想像つかんし、ごっつうパンチが強いがおとなしい人やいう話しか聞かへんし、武士さんを二回も負かした男がどないなもんか今まで分からなかったんです。けど、何度かビデオ見たら何となく分かりましたわ。この人は確かに男や。武士さんが惚れ込むわけや」

さりげなく目をそらし、唇を曲げた。星はまったく邪気のない声で先を続ける。

「せっかくプロのリング上がれるようになったのにすぐ終わってまうのがつまらん言うたら、ライバルを作れて柳岡さんに言われたんです。千堂もいつも退屈や言うと思ったがいつの間にか一人の男に惚れてあないに強なったんやで、て」

よけいなこと言いよって、と心の中でつぶやいて頭を搔く。真下から振り切ったスマッシュの威力が伝わってくる映像を眺めながら、千堂は「アホか」と吐き捨てた。

「ライバル探せ言われとんのにしばらく戦れんチャンピオンのビデオ見てどないするんや。西日本で当たる連中や近くにおけるランカーの試合見た方がええやろが。思い切りどつき合いたいと思える男がおるかもしれへん」

「もう全部見たんですわ」

「せやったら東日本も探したらええがな。柳岡はんが東京にアマ出身の生きのええのがいるいう話しとったやないか。最短でそういうんを全員しばき倒さんと幕之内のところにはたどり着けへんのやで」

可能性がないわけではない。それどころか、可能性だけならかなり高い。今の星ならどんな大言壮語を吐いてもおかしくない。しかし星は緊張した面持ちで、千堂の目をまっすぐに見た。

「武士さん」

「何や」

「もしワイが幕之内を倒してもうたら、どないしますか」

「どないするも何もないわい。やれるもんならやってみい。道頓堀じゅうのソープ借り切って祝ったるわ」

「なら、ワイが幕之内を再起不能にしようたらどないしますか？ 二度とリングに上られんようになってもうたら」

遠くから響いてくる、規則正しくサンドバッグを叩く音がどこか間抜けに聞こえた。

「くだらん心配すなドアホ。あれはお前にどつかれた程度じゃ壊れんわ。疑うんやったら実際打ち合うてみい。意味分からんほど打たれ強いで。心を折るんも無理や。幕之内をあきらめさせることは誰にもでけへん。これからワイがやるかもしれんけどな」

かかか、と笑ってそう答えると、星はほんの少しだけ顔をゆがめた。

「そないなことより自分が壊される心配した方がええで。沢村も大口叩い妥妥が最後は結局デンプシーの餌食になって病院送りになってもうたやろが」

「はあ……」

「だいいち自分、まだ新人やろ。新人はごちゃごちゃつまらんこと考えんとらんで裸一貫で挑んだらええんや。勝って男上げるだけでええ。ジムの先輩の顔色までうかがったら何もかんも中途半端になってまうで」

励ますようにそう言うのと、星はついに肩を落としてうなだれた。彼は周りに思われているよりもずっと人の良い男だ。どこかの誰かのように、「普通」や「愚直」という言葉がよく似合う。うらやましいくらいに。

「自分、武士さんのようになりたいんです」

一時停止になったままだったビデオをようやく止めると、星はこぼすようにぽつりとそう言った。

「ワイの憧れの人はずっとアンタや。幕之内やない。武士さんがワイの上段突きを耐え抜いたときから、どないかして降参させられんか考えてました。けど練習して練習して強なってもプロのリングで武士さんに会うてもうたら、そこでやる気が落ち着いてまいそうで……」

「で、代わりにワイに勝った幕之内の首を狙うことにしたっちゅうことかいな」

はあ、と嘆息して首の後ろを搔く。

「すまんが、そういうんはよう分からん。へこませたい男がおったらなんぼでもどつき合いたなるやろが。いっぺんやったらやる気が落ち着く？ 憧れいうのはそないにええ加減な気持ちなんか？ どないにええ女でもいっぺんやったらどうでも良うなるんと同じ理屈やないか」

うんざりしながらそう言うのと、星は目を剥いて「何ちゅうこと言うんですか！」と抗議した。

「お前の話がぜんぜん分からんいう話や。せやけどジム変えて挑戦するいうんならいつでも受けたるで。それで気が済んでまうなら、憧れもその程度ちゅうことや」

「……武士さんにはほんまに分からんですか、人に憧れるいう気持ちか」

一瞬、哀れむような目線を向けられてどきりとした。負けたくなくて「そんならい分かるとるわドアホ。バカにすな」と返すと、今度はあきれのこもった目で見られる。

「せやったら、実際に憧れてる人はおるんですか。なんぼでもどつき合いたいなら王者は違いますやろ。その他に誰かおらんですか。こないな人になりたい、ずっと見ていたい、輝いてほしいという相手は」

首をひねって考えを巡らせる。

とりあえず、同階級のボクサーの中にはまったくいない。幕之内を負かした伊達英二や最後まで引かずに打ち合ってくれたヴォルグ、幕之内を最大の危機に追い込んだ沢村、手を合わせたことはないが東洋王者の宮田一郎など、認めていたり親近感を持っていたりそこそこ興味を持っていたりする男はいるが別に憧れなどは抱いていない。

こんな風になりたい人物、というのなら鷹村守以外にはいないが、勝負になるものなら勝負したいし同階級なら絶対にしつこく挑戦状を出していたはずなので星の言う「憧れ」とは違うような気もする。そもそも憧れて何だ。執着するほど気になっている相手の視界に入りたくない気持ちなどさっぱり分からない。

「おらんな」

「そうですやろ」

うんうん、と何度も頷かれてむっとした。

この歴代トップクラスの強面が千堂に理解できない繊細な感情を持てるほどに普通、人間だと思いと、何だか複雑な気分になった。もしかしたら千堂だけが特別あつかましくて、その他の人々はそれなりに分というものをわきまえているのかもしれない。きつと幕之内も。胸がちり、と痛み、唇を噛んで顔をそむける。

「武士さん？ どないしました？」

「どうもしとらん。それよりそろそろ戻らんとあかんで。いつまでもサボっとったら柳岡はんにしばかれてまうわ」

力任せに星の肩を小突き、大股で部屋を出て行く。あわてて後をついてくる星の足音を聞きながら、千堂はここ最近かかりきりになっている問題を思い出していた。

＊

世界に打って出ると決めた方がいいが、ただ決心しただけですべてがとんぱ子に進むわけはなかった。

ジム側は千堂がもう一度日本タイトルに挑戦するものだと思っていたから、秋に入って

いきなり「世界戦をやりたい」と言い出したことに驚いてしばらくは盆をひっくり返したような騒ぎになった。柳岡だけは賛成してくれたが、マッチメイクが難航することは間違いないかった。

「世界」は順番待ちで、チャンスが巡ってくることはそうそうない。忍耐強く待ち続け、機を窺ってうまい具合に列に割り込むしかない。だったら先にOPBFのタイトルを獲得して王者の世界ランクを奪い取る、と千堂が鼻息荒く宣言したとき、ジムの会長も柳岡もああ……と同時にため息をついた。

「何やねんその反応は。まさか、ワイが宮田一郎に負けると思とんのか？」
かっとなって詰め寄ると、柳岡はさらに深く嘆息した。

「勝てんとは言うとらん。タイトル挑戦にも賛成や。せやけどお前も王者のことは知っとるやろ。幕之内の因縁の相手や。二人は長いことコンディション整えながら対戦の機会を待っとる。噂じゃ、幕之内が日本王座返上して宮田に挑戦する日も近いとか」

「それが何や。そないなことはワイには関係あらへん。だいたい一戦もしとらんのに因縁て何やねん。お互い世界へのステップにしたいだけやろが。元同門の昔なじみか何か知らんが話盛りすぎやで」

「宮田一郎は幕之内の憧れの男で、目標なんやて」

柳岡はつぶやくようにそっくり言い、ミットをそっとベンチの上に置いた。

「確かにプロでは一戦もしとらんが、プロになる前に手え合わせたことはあるらしい。入門したての幕之内にとっちゃ、遠い目標で身近なライバルやったんやろな。とにかく宮田に追いつきたいいう一心で必死に練習しとった、て前に鵜川さんが言うてはったわ」

「そんなん昔の話やろ」

「単なる昔の話やったら業界じゅうの噂になっとらんわ」

ずっと黙っていた会長が目頭を揉みながらそう口を挟んできた。

「もし噂がほんまやったら、うちが割り込むのは難しいやろなあ。幕之内との対戦が本決まりになる前に何とか算段つけられるとええが……」

柳岡が深く頷き、カレンダーを見ながら何かを思案し始める。頭の中でスケジュールを組み直しているのだろう。今年はあと数ヶ月で終わってしまうしすでに次の試合の予定も入っているから、もし宮田に挑戦できるとしたら来年の早春以降になる。

その噂とやらがどこまで本格的になっているかは知らないが、できれば幕之内がタイトルを返上する前に決めてしまいたい。自分だけ置いていかれたくない。何となくこう、意地があるからだ。できるだけ彼の先に行っていたい。すでに二度も負けているのだから、そのくらいしないと立場や気持ちの差を埋められない。

具体的な手だてはジムに任せ、自分は別の方向から情報を集めることにした。業界じゅうの噂、と言ってはいたがあの話だけではどういう噂なのかよく分からない。まずは会長

や柳岡が知らないことを知って、いそうな人にコンタクトを取ることに決める。一番詳しいのはもちろん幕之内・宮田兩人に決まっているが、張本人にはさすがに聞けない。こっちにはこっちの意地があるのだ。

勝手にジムの電話を借り、少しためらった後で『ボクシング・ファン』の編集部にかける。何度か呼び出し音を繰り返した後、ラッキーなことに話しかかった当人が電話に出た。『わざわざ編集部にかけてくるなんて珍しいわね。記事への苦情？ それとも聞きたいことでもあるのかしら』

名乗ってから話したい旨を手短に伝え、飯村は直截にそう聞いてきた。

『ここ最近、色々な人に聞かれるのよ。幕之内くんのことを。あなたもそうなんじゃない？どこかで聞いたんでしょ、彼が日本タイトルを返上するって噂を』

「ほお？ 返上なんぞ、そんなん初めて知ったわ。詳しく聞かせてや。あれは元はワイが巻いとったベルトや。この先どないなるんかは知っとかんとな」

正直に「そうだ」と言うのは癪だったので全力ですつとぼけ、飯村の返答を待つ。

『……少し前からの噂だったのよ。幕之内くんとOPBFの王者双方が対戦を望んでいるのは周知の事実だったけど、具体的にはならなかった。でも夏が過ぎたあたりから誰も噂を否定しなくなって、あとは時間の問題だって言われ始めたの。今はもう、お互いにスケジュールが噛み合って所属ジムがGOを出せばすぐにでもタイトルマッチが決まる状態の

ようよ』

「何やそら。はつきりせえへんな」

唇を思い切り曲げてつぶやく。

互いに戦いたいと思っっているならジムの反対やスケジュールなど押しのけて強引に決めてしまえばいいのに、二人はなぜだか周りの迷惑や世間の空気が自分たちの対戦に向けて醸成されるのを待っているように思える。誰にも反対されないように、二人の縁を絶対に壊されないように、慎重に慎重に。

『仕方ないのよ。本当はあの二人、東日本新人王の決勝で戦おうって約束をしていたらしいの。でもみんな知っている通り、決勝のリングでは会えなかったでしょう。宮田選手は長くいた鴨川ジムを移籍してまでプロのリングでの対戦を望んだそうだから、幕之内戦にかける思いは人一倍なんじゃないかしら。幕之内くんの方も彼との対戦のためにキャリアを続けてきたと言ってもいくらい尋常じゃない憧れを彼に持ち続けているし、今度こそ縁が繋がることを必死で祈ってるんだと思うわ』

「祈ってどないするんや」

『祈らないとかなわないこともあるのよ』

そこまで強く願っているなら祈っている場合ではないのではないかとあきれると同時に、祈りにすがれるくらい強く願えることが少しだけうらやましくなった。雑誌の記事や

人づてに聞いた程度なので今までうつすらとしか知らなかったが、どうやら二人の間には思っていた以上の結びつきがあったらしい。

『それで？ そちらがうちの編集部からこっそり聞き出したかったことって何なのかしら。幕之内くんの王座返上の時期？ それとも宮田くんの今後の予定？ 求め合う二人の間に割り込める隙？』

「んー？ 電話遠うてよう聞こえへんな。けどまあ、感謝はしとるで。おおきに。おかげでええ話聞かせてもらたわ」

『あらそう。もうちょっと色々聞きたかったけど仕方ないわね。どちらのベルトを狙うにしろ、それほどまでに因縁のある間柄の二人に割って入らなきゃならないとなれば複雑な気持ちにもなるでしょうから』

「はん、ワイはそないなもん狙っとるんとちゃうで。日本も東洋もスケールが小さいわ」
ついむきになってそう言うのと、飯村は電話越しでも分かるほどに息を呑んだ。

『へえ……？ なら今回のことは一つ貸しにしておくわね。世界の話が本格的になったら優先的に話を聞かせてもらうわ』

「……誰も世界とは言うとらん」

小さく舌打ちをする。挑発に乗せられてうっかり口を滑らせてしまった。まだ会長と柳岡にしか話していないことを外部の、しかもマスコミに漏らしたとなったら大変なことに

なる。

『心配しないで。ジム側から公式発表がない限り記事にはしないわ。それにあなたの場合、世界よりも前に幕之内と宮田のどちらかの……いえ、おそらく宮田選手の方に対戦を申し込むつもりなんでしょうから、そっちの方を先に取材しないとね』
「そうなるとは限らんで。こういうんは縁がある方が強いさかいな」

その悔しまぎれの台詞はまるで祈りに似ていた。あるいは願望。飯村はさらっと「そうね」と答え、最後にこう言った。

『どんなに願っても祈っても、かなえられないことってあるもの』

そのまま電話を切ると、得体の知れない、気色の悪い感情が意識の表面に浮かび上がってきた。今まで感じたことのない気持ち。知ったおぼえのない感覚。

嫉妬、というわけではないのだと思う。幕之内に憧れられたいわけではないし、たいしてよく知らない宮田の執着の対象になりたいとも思わない。

羨望、というのも違う。プロのリングで会う、などというささやかにすぎる約束を、今さらうらやましいと思うわけでもない。

焦り、というのはこの気持ちの表面的な部分でしかない。その約束とやらの割り込めないなら世界への道は遠回りになる。だがそんなものは小さな問題で、ジムやプロモーターに別の近道を見つけてもらえばいいだけだ。

不安、というの何か違う気がする。二人が対戦した結果どうなろうと、自分には関係のないことだ。死闘の末どちらかが再起不能になるならそれまでだったということだろうし、約束を果たせて満足してリングから消えるわけでもあるまい。

幕之内が本当に宮田に尋常でない憧れを抱いているなら、何度だって挑戦したいはずだ。彼の視界に入っていないといられないはずだ。

宮田の存在がボクサーとしての幕之内を生かしてきたのなら、手を合わせれば合わせるほどもっと強くなりたくて必死になるはずだ。先へ先へと駆り立てられるはずだ。幕之内に負かされるたび生かされてきた千堂のように。

そうであってほしい。彼も自分と同じであってほしい。満足なんてしないでほしい。

どんなに強くそう願っても、この不吉な気持ち悪さはいつこうに止まない。ゆっくりゆっくり上っていくジェットコースターにいつの間にか乗り合わせてしまったかのようで、あとは頂点に到達して落ちるだけのその景色がもう見えていて、これ以上もう上るべきでないといと本能が警告している。

たとえそうでも、千堂には別に関係のない話だ。二人とも同じ階級のタイトルホルダーであるというだけで、その中の一人にはいつか借りを返したいと望んでいるだけなのだから、この感情が何であれ干渉する権利も傷つく必要もない。

握りつぶしそうになっていたコードレス電話を戻し、暗くなりかけた窓の外に一度視線

を移してからみなのいるトレーニングルームに戻る。

最近、陽が落ちるのが早くなった。ゆっくりと秋から冬へと進もうとする季節の中、ジェットコースターは着実に最高点へと向かっている。

＊

……という経緯があったため、星が言う「憧れ」という謎の言葉に敏感にならざるをえなかった千堂だが、その後思い出すことはほとんどなかった。自分が星に憧れられている、ということを意識することすらなかった。星が強すぎたからだ。

前評判でも実績でも名声でも自分よりはるかに勝っていた相手を決勝であっさり沈めた星はますます自信を深め、幕之内とのタイトルマッチを実現すべく本気で動き出した。

西日本獲っただけでタイトルなんて気が早いんじゃないか、と笑う者は誰もいなかった。千堂でさえ星なら幕之内に勝てるのではないかという気がしてきて、夜布団に入るたびに幕之内があの右に打ち倒されるイメージが頭に浮かんで頭を抱えてやかましく叫んで祖母に叱られた。

東日本の決勝を見に行く、と星が言い出したのは自分の決勝が終わってすぐのことだ。試合が終わったばかりとは思えないほどきれいな顔をした星が「ついでに王者に挨拶して話通してきますわ」と柳岡に言っているのが耳に入って聞き捨てならなくて急いで支度をし、面食らっている星を引きずるようにして新幹線に乗り込んだ。

星は「何でついてくるのか」とは聞かなかった。幕之内と顔見知りの千堂に紹介してもらった方がスムーズにいく、と思ったのかもしれない。あるいは千堂の苛立ちを見透かしていたのか。

どちらにしろ東日本の優勝者の頭越しにいきなり王者に挑戦状を突きつけようとするなんて、前王者としてはとても看過できない。が、挑戦するとも言えない。欲しいものに一直線に手を伸ばせる性格を嫌えるわけがない。星も千堂と同じく、「縁」も何も知ったことではないと思っているはずなのだ。同類なら彼のすることに文句など言えない。

その夜は結局、内心で煩悶したまま敵情視察に付き合い、本当にただ星を幕之内に紹介しただけで大阪にトンボ帰りせざるをえなくなった。何のためにはるばる東京までやって来たのか分からない。千堂は著しく不機嫌だったが目的が果たせたためか星は妙に上機嫌で、がら空きの自由席の通路側に陣取って訥々とこの先の展望を語り始めた。

「で？ その後はどういすんねや」

板垣を軽くひねってベルトを獲って……などという楽観的な将来像を黙って聞いてやっ

ていた千堂は、ふっと眉を下げてしまった星の横顔を鋭くにらみつけた。

「何や、急に黙りおって。その先は？ 日本タイトル獲ったら自分のキャリアは終いなんか」

「それは……どうなんですやろなあ……」

「何やら曖昧な言い方だ。みながみな先々のことまで考えてるわけではないし、千堂などはもはや二日先のこともよく分からないまま生きていることもあるのだから彼を責める資格はない。だが、星の未来設計がそこで止まってしまっている理由に心当たりがないわけではないから突っ込まないわけにはいかなかった。

「そないに小さくまとまってもうてええんか。自力で海越えて体張って道切り開くんが男の生き方やろが。大口叩くんなら幕之内しばいてタイトル獲った後一気に宮田とリカルド倒して伝説の統一王者になるくらいは生意気言うてみい」

「いきなりそれは無理がありますやろ。武士さんかてまだやれてへんことやないですか」
「そのうちやるわいドアホ。スケジュールの調整に時間かかっただけや」

きつく腕組みをして顔をそむけ、真っ暗な窓の外を見る。

あの後すぐジム経由で宮田に対戦を申し込んだが、いまだ色よい返事はもらえていない。会長によれば「先約の予定がどうなるかはっきりしないからもう少し返事を待ってくれ」と言われたそうだが、つまりはやんわり断られたということだろうと思う。

あの噂が、二人の間の大事な約束が今にも実現しそうなら、宮田側もこれ以上うかつに

動けまい。

その返答を聞いたとき、柳岡が「噂はほんまやったんやな」とぼつりとつぶやいた。何かのアクシデントでもない限り、割り込むことはもうでけへんやろな、とも。

個人間の約束、という小さく固い繋がり、ビジネスも契約も名誉も跳ね返してしまう強い力がある。

千堂が宮田に挑みたいのは単純に行き場の問題と世界ランクが理由だが、幕之内は宮田のタイトルやランキングを狙っているわけではない。次のステップのためでもない。幕之内本人の口から宮田の話聞いたことはほとんどないが、そういう純粹さはとても彼らしい気がした。

彼は今でも宮田の背中を追いかけるとするためにボクシングを続けているのだろう。リングに上がる理由をいつ変わってしまうかも知分らない一人の人間に預け、ひたすら愚直に憧れを追い、機を待ち続ける。その気持ちはよく分かる。二人の間に固い約束があるのなら、思い直して前を見て先へ行く必要もないはずだ。

正直に言えば、そのことだけは、ほんの少しうらやましいと思っている。

「……ま、自分は小さなことからこつこつといきますわ。幕之内を倒したらその先のことも見えてきますやろ」

「はっきarseえへんな。とんだ期待の新星やで」

からかうようにそう言うと、星は眉を下げて「またでっか」とつぶやいた。

「一番星」という星自身が望んだキャッチコピーはファンの間ではもうずいぶん浸透しているのだが、ローカル紙や雑誌、スポーツ新聞などではいまだに「期待の新『星』」と書かれている。苗字にかけて気を利かせたつもりなのだろう。星はなぜだか、それを目にするたびに嫌がっている。「期待の新星」なんてありふれた言い方で、侮辱されているわけでもないのになぜ嫌がるのか分からない。千堂も新人のころは飽きるほど「期待の新星」と併記された気がするが引かかった記憶などない。しかし「新星」呼びを嫌がるのには一応理由があるらしい。

まず、「新星」というのは、新しい星ではない。

死んで小さくなった星が、隣にある生きのいい星からガスを吸い取って爆発する現象のことを言うのだそうだ。

星が空手を始めた子供のころ、周囲の大人たちから「この子は期待の新星や」ともてはやされて舞い上がっていたところに、近所に住んでいた賢しげな同級生に意地悪くこう言われたらしい。

新星って死にかけて隣の星を巻き込んで爆発する星なんやで。知らなかったん？

そのせいで少し傷ついたのだ、と本人は言っていた。

確かに、何度も「期待の新星」と書かれ、実際に期待され、必死に戦ってきたボクサー

たちの最後と照らし合わせると何やら残酷な言葉だ。夢も希望もない。とはいえ、いい大人がそんなありきたりな言葉の正確な意味などいちいち考えて傷ついてなどいられない。気にしているのは苗字に一字入っている星くらいなものだろう。

＊

そのまま大阪に戻ってまたいつもの日々が始まり、年が明け、本物の冬が来て寒くなってくると、今度は本格的な断りの連絡がジムに来た。

「先約のある相手と春に防衛戦をやることになったのでこのたびは……」と断られ、だったらその後は、と食い下がると「春以降の予定はまったく分からないから決められない」ときっぱり言われたそうだ。

柳岡からその話を聞いたとき、星の言葉が頭に浮かんた。

練習して強なってもプロのリングで会ったら、やる気が落ち着いてまいそうで。

二人ともお互いの存在がそれほどまでに巨大なら、今度の対戦がキャリアのクライマックスになってもおかしくない。

宮田のことはよく知らないが、少なくとも幕之内はそうなる可能性がある。暴力になど縁遠いはずの彼がボクシングを続けているのは、金のためでも名誉のためでもないからだ。ただボクシングが好きだから。

しかし「好き」という気持ちはとてももろいもので、「憧れ」という名の恋心は果たされたとたん無に変わってしまう。

だったらもう憧れなんて捨ててしまっただけいい。永遠にお互い最高の敵でいたいと思っ
ていてほしい。そうすれば誰もリングから消えなくていい。「新星」にならなくていい。
自分だけ置いていかなくていい。それは、あまりにも子供っぽいわがままだ。

もやもやした気持ちを抱えたまま帰宅し、電話機を目に入れながら祖母が用意してくれ
た夕飯を食べ、そのままおとなしく自室へと戻ろうと……したができなくて、結局電話に
飛びつく。

本当は幕之内本人にかけたい。できれば東京へ飛んで行って家に押しかけて、宮田との
試合の後どうするつもりなのか胸ぐらをつかんで問いただしたい。「もちろん勝って世界
への足がかりにするつもりです」と答えてくれたら、それ以上何も思わなくていい。

だいたいこんなもの、星の話以外には何の根拠もない予感でしかないのだ。さっさと片

をつけたい。だがどうあっても本人には聞けない。こっちにもプライドがあるからだ。

大いにためらいながらも何度もかけたことのある番号をプッシュし、イライラしつつ誰かが出るのを待つ。五コールめでようやく『ボクシング・ファン』の編集部に通話が繋がったが、飯村は不在だった。昨夜、宮田のタイトル防衛戦があったから今日は昼から各所への取材に走り回っているらしい。いないものは仕方ないので試合の詳細を尋ねると、電話口の編集者はどこか言いづらそうに答えた。

勝つには勝ったが、打撃戦に持ち込まれたすえでの辛勝だった。宮田は両拳を骨折し、治療のため春に予定されていた幕之内戦は夏に延期されることになったそうだ。

それを聞いたとき、星の話から連想しただけの嫌な予感が徐々に形を持ち始めたのが分かった。しかし幕之内は我慢強い男だ。不安を覚えながらもきつと普段通りの精神状態にいることだろう。何も心配することはない。外野の自分が口を挟める余地はない。

「どないしたんや、武士。えらいふてくされた顔しよって」

電話機の前で腕を組んで考え込んでいると、いつの間にか祖母が茶を淹れてくれている。ため息をついてちゃぶ台の前にどかりと座り、熱い茶碗を手取る。

「どうもしとらん。これもふてくされとるんとはちゃうで。色々真剣に考えとるだけや」

「どう見てもふてくされとるやろが。夜店で引いたクジが自分だけハズレやったときの顔とおんなじやで」

「いつの話をしとんねん！ ガキのころのことやないか」

それは小学校に入る前の話だ。

近所の子供たちと夏祭りに行つて、露店で引いたクジが自分だけ外れた。他の子たちがおもちゃを引き当てているのがうらやましかったのにその場では気にしないふりをし続け、帰宅した後爆発して寝るまでずっとふてくされていた。

自分ではうっすらとしかおぼえていないが祖母がよく口にするので記憶にディテールが上書きされてしまっている。

「……幕之内がな」

ん、と祖母は頷き、そばにいたトラの背を撫でる。

「今度、試合するらしいんや。ワイにはよう分からんが、幕之内には昔なじみで憧れとる男がおつて……まあ何ちゅうか、そいつがまたそこそこ強うてそこそこツラのええ東洋王者なんやが、そのいけ好かんスカした男と初めてプロのリングで試合することになった、いう話でな」

ん、と祖母がふたたび短く頷くと同時に、今度はトラが千堂の膝に乗ってくる。その体はあたたかで柔らかかずしりと重い。

「何年もかけてそいつと対等に戦えるまで強うなって、スケジュールも合わせてようやく、いうところで、今度は相手のケガで試合が延びてもうたんやと」

「ほお。せやけど、のうなったんやなくて延期なんやろ？」

「そやで。夏に延期するいう話や」

トラの頭から背にかけて指の背で何度か撫で下ろすと、やがてぐるぐるといい始めた。「ま、ワイには関係あらへんけどな。日本か東洋か知らんが好きにしたらええんや。こっちは世界のてっぺん目指しとんのやからな。小さくまとまっとる奴らに関わっとるひまなんぞないわ」

「何や。やっぱリクジンときとおんなじやないか」

祖母は盛大にため息をついて茶をすすり、とん、と軽い音をさせて茶碗を置いた。

「ばあちゃん、いちいちガキのころのこと蒸し返すのやめてえな。そないなしょうもない話とちゃうで。約束か何か知らんがお互いの都合に振り回されてアホやな、いう話や。あきれとんねんこっちは」

「そのことに手も口も出せへんからイライラしとんのやろ？ 自分だけ蚊帳の外になってもうて」

撫でる手が止まってしまったからかトラが不満げに声をあげ、長い尻尾をばたばたと横に揺らす。もし自分に尻尾があったなら、同じように横に揺れていただろうと思う。

「ようは、もう幕之内に見てもらえん気がするんが悔しいんとちゃうんか。お前が何しても気持ちを動かせへんのが」

「ちゃうわ」

鋭く答える。そんなことを認めるのは絶対に嫌だった。嫉妬なんかではない。誰かへの嫉妬なんて、羨望なんて、感じたところで何も変わりはない。

「小さいころから変わらへんなあ、お前は。昔から自分の思い通りにならない人にしかほんまの興味持てへんかったやろ。優しい人なのに、お前を思ってくれるのに、お前が何を言うても絶対動かせへん人にしか」

祖母はさりげなく両親の遺影に視線を移した。壁にかけられている中学校の卒業証書にも。その様子に気づかなかったふりをし、トラを撫でる作業を再開する。

「……ま、確かに、幕之内はこっちの思い通りになんぞならん、頑固な男や。いっぺん引かんと決めたらこっちが何言うても絶対引かん。それどころか負けんようにメンチ切ってくんねん。腹立つわ」

「礼儀正しゅうておとなしそうな子やったのになあ」

「見た目通りの男とちゃうねん、あれは。ばあちゃんもあの目え見たら分かるで」

あの目。自分で言って、それを思い出してぞくつとした。

あんな目を持つ男が絶対に引かないと決めたなら、永遠にでも宮田を待ち続けるだろう。無為の月日に削られて失って変わってしまったても、愚直に待つのだろう。プロになる前の青すぎる憧れに殉じてもきつと幸せでいられるだろう。

不吉な予感に胸がざわざわする。恐ろしくて仕方ない。これは本当に嫉妬なのだろうか。この不安は一人だけハズレのクジを引いてしまったときのささいな疎外感と同じなのか？むしろ大事になりそうなものがこの手をすり抜けていくとき、ああ、でも自分は最初から何も持っていなかったじゃないか、だったら何も惜しく思う必要はないんだ、と思い直して嫌な気持ちがかからからに乾いていくときの、あの感じにそっくりだ。

もう幕之内の後を追いかけるのはやめると決めたはずだった。先へ先へとがむしやらに進むことにしたはずだった。

あのときそう決断できたのは、こっちが何もしなくても彼は黙々と前を走り続けるだろうという確信があったからだ。幕之内が憧れの存在と対峙した後にはそれがなくなってしまうなら、話はぜんぜん違ってくる。

彼の心を折ることなど誰にもできないと思っていた。だがそれができる人間が一人だけいるのだ。この世にたった一人だけ。

「どないしたんや。またふてくされた顔しとるで」

「……せやから、いま色々真剣に考えとんねんっ」

「ほうか。ほんまに大事な友達なんやなあ、あの子が」

「友達ちゃうわ。あいつは敵やで。道で会うても挨拶なんぞせえへん」

「何を言うトンねンドアホ。電話で話しとるときいつつも大騒ぎしとるやないか」

「騒いどらんわ!」

ちやぶ台をばん、と叩きながら抗議すると、膝の上でおとなしくしていたトラがさっと逃げていった。

「ともかく、友達は大事にせえよ。お前にはいもんを持つてる友達を。昔からお前の周りにおるんはいちいち凄んでくる力自慢のアホばかりやったやろ」

「あれが力自慢ちゃうんやったらその辺のチンピラなんぞ生まれたての子猫やで。……まあええわ。そろそろ寝る。茶、おおきに」

ん、とだけ答え、祖母は年寄りらしい無表情で空の茶碗を受け取った。それはたぶん、孫の考える「色々」に多少なりとも思い当たっている顔だ。

＊

そのまま風呂に入って寝支度をしてから布団に入り、おとなしく目を閉じる。しかしいくらじっとしていても眠気はいっこうに訪れなくて、すぐにまぶたが開いてしまう。

子供のころから妙な夢ばかりみていたせいか、千堂は普段からあまり寝つきがいい方で

はない。いったんは入眠できても途中で覚醒してしまうことも多いし、夜の明けきらない早朝に目覚めることもある。何もかも忘れて長時間泥のように眠れるのは、さんざん打たれて倒された試合の夜くらいだ。その他はどんなシチュエーションでもだめだった。眠気を誘発するはずのセックスの後でさえしばらくは寝つけないし、酒は飲まないし、菓などもってのほかなので毎晩こうして少しだけ苦しい時間を過ごすことになる。

かすかにうめきながら左右に寝返りを打っていると、ふと性欲を感じた。一回抜いてから眠るのも悪くないが、ここ最近の傾向だとたぶんそれだけでは済まない。

反射的に腹に手のひらを当てて一度深呼吸をする。そうして目を閉じ、一番最近したセックスのことを思い出し、ぐるぐるとうごめく欲望のイメージを追いつけようとする。無駄だと分かっているながら何度か同じことを繰り返し、やがて面倒になってふうう、と長いため息をつく。

幕之内と沢村の試合を観戦した日の夜、幕之内の「あの目」に当てられて一晩じゅう自慰をしてしまつて以来、その種の欲を感じると決まって腹の底が熱くなった。一人のときはもちろん女といるときもそうだからセックスに集中できなくなつて、今日はいったいどうしたのか、と必ず聞かれる。もちろん馬鹿正直に急に特定の男と無茶苦茶に殴り合ひたくなつた、などと答えたら大変なことになるから言えない。

下腹部に溜まつた欲望は熱いを通り越してぐらぐらと煮え立つ。観念するように細く長

息を吐き、暴れ回りたくてたまらない衝動を押さえつけながらも一度目を閉じる。

こんなささくれ立った気持ちを抱えたまま彼の顔を思い出したくなかった。間欠泉のごとく嘔き出す劣情が皮膚を破って外に出て行かないよう、全身に力を込める。

腹が立って仕方ない。どうして自分がこんな欲望を覚えなければならぬのだろう。どうしてこんな欲望に苛まれ続けなければならないのだろう。一度やって気が済んでしまえば、今までもこれからもずっと自分らしい自分でいられたのだろうか。

幕之内一歩という人間は千堂の欲と快と生と死に深く絡みつき、いまやもう分離不能な存在になり果てている。自分で自分を好きだと思える部分は彼の存在そのものによって肯定され、承認され、受け入れがたかった部分は彼のあの目に焼き滅ぼされて消えた。そのまま彼に憧れを持てたら、彼のようにになりたいと願えたら、彼に自分を丸ごと作り替えてほしいと望めたら、最初から強く強くそう思えたのなら、この恋はもしかしたら別の形を取ったかもしれない。互いに理由のない執着と独占欲で成り立つ関係性。自分たちはたぶんそうはならない。そういうのは何か違う。だから、この胸の痛みもやは嫉妬ではないのだ。

頭が勝手にそう結論づけようとしたとたん、胸の痛みとともに火のような怒りが嘔き出してきた。

嫉妬でなかったら何だというんだ。他に何かあるんだ。

彼にとってその「約束」以外のすべてのことは儀式的に乗り越えるべき試練で、丹念に作り上げられた肉体も技術も、どんな出会いも記憶も何もかもそれに集約されていったまう。千堂も他の対戦者たちも周囲の人々も皆、そんなことなど何も知らず、すすんで彼ら二人の約束という大いなる物語の一部になった。

それが腹立たしいんだ。誰もかれもまだ人生とキャリアが終わったわけではないのに、まだ何の答えも出せていないのに、何も返せていないのに、何も返してもらっていないのに、勝手に止まるな。勝手に満足するな。勝手に消えるな。すべてが小さく閉じて終わった気になって、自分たち以外のすべての人を置いてけぼりにしてエンドマークをつけて、それで済むと思ったら大間違いだ。

はらわたが煮えくり返ったまま思い切り顔をゆがめ、血が出るまで下唇を噛みしめる。口の中に血の味が広がるのを感じていると急激に嫌な気分になってきて、怒気と苛立ちで茹だりそうな頭を冷やすべく起き上がり、頬を両手で叩く。しかしくすぶり続ける怒りと欲望からは自由にならない。

このまま何もかもぶち壊してやりたくて仕方ない。

東京に乗り込んで、宮田に無理やり対戦を迫って、ジムとスポンサーを巻き込んでめちゃくちゃにかき回して、スケジュールも縁も台無しにして、その後は？

それを想像して重だるい息を吐いた。ただ軽く頭をよぎっただけの妄想なのに、言いよ

うもなく気持ちの悪い手応えが指先にまざまざと浮かび上がってくる。

そんなことできるわけがない。情けないし、みつともないし、あまりに自分らしくない。そもそも嫉妬なんて感情自体、少しも自分に似合わない。それならそれで仕方ないと思える方がずっと自分らしい。どうしようもないことをいつまでも引きずっていないで前を向いていようと思える方が。

ぎり、ともう一度唇を噛み、グレーがかった闇をにらみつける。

すべて幕之内のせいだ。あの男が現れなければ、こんな醜悪な感情を知ることにはなかった。心の奥にこんな自分が隠れていたことに一生気づかずにいられた。どうあってもかなわぬ恋に傷つき続ける必要もなかった。

いったい自分は、これから何度失恋するはめになるのだろう。

そう思ったとたんに馬鹿らしくなって、怒りで硬直していた全身の筋肉がふっとゆるむ。自分の感情に振り回されているうちに夜はどんどん更けてゆき、外から猫の鳴き声が聞こえ始めた。発情期の猫の声。本能のまま必死に相手を求める雌猫の声。雌を巡ってやぐたいもない争いを続ける雄猫たちの声。この時期の野良猫はぴりぴりしていて、そばに寄って話しかけてもさっと逃げられる。きつと恋の鞘当てに振り回されて疲れているのだろう。理性ではどうにもできない衝動に突き動かされ、言うべきでないことを言い、すべきでないこととしてしまう自分に激しく苛立っているから。

しょうもな、と吐息まじりにつぶやき、今度こそ眠るべく布団に入って目を閉じる。

一晚眠れば人に話しかけられてもまともな受け答えができるくらいまでには回復できるだろう。そうであってほしい。猫ではないのだから、恋に振り回されている自分にどんなに苛立っていても現実から逃げ続けるわけにはいかない。

*

結局その醜い嫉妬を嫉妬だと認められないまま何ヶ月も経ち、相変わらず正体不明の不吉な予感を抱えたまま日々を過ごしているうちに、少しずつ空気の湿度が高くなってきた。季節はすっかり夏になり、地面を焼き焦がしそうな晴天とたまの雨とを繰り返すうちに、溜まった水気があたためられてあまり気持ちのよくない汗を流させる。野良猫たちは目に見えてだらけ始め、時間によって変わる涼しい場所を順繰りに移動するだけの回遊魚となり果てている。

その日はたまたま陽がかげっていて、ジムに行く夕方前の明るい時間にも猫の姿を多く見た。ぼさぼさの毛皮を懸命に舌で整えている黒猫のそばに寄り、嫌な顔を向けられなが

らもにらみ合いを始める。目を合わせたまま外さず、威圧するように斜め上から見下ろしている。黒猫はついに観念して姿勢を下げ、尻尾を股の間に収める。

まいった、のポーズだ。勝ち誇ったようにふん、と笑い、猫を抱き上げようとしたとき、真後ろから騒々しい声が聞こえてきた。

「あつ、ロッキーや！」

「また猫と遊んどるで！」

「ロッキーが練習サボってるって会長に言いにくいこ！」

子供の声のあまりの甲高さに思わず耳をふさぐ。どういう仕組みなのかは知らないが、子供の声だけは遠くからでも聞こえるし聞き流すこともできない。

「アホか。遊んどるんとちゃうわ。こいつに世間の厳しさを教えとったんや」

振り向きざまにそう言うと言ランドセルを背負った子供たちの視線が一斉に黒猫に集まり、猫はすぐに塀の向こうへと消えていった。

「あー、逃げてもうた」

「ぜんぜんボスやと思われてないやんか。ロッキー舐められとるで」

「おのれらがやかましいからや！ ええ加減学習せえ」

キャップの上から頭をはたくと子供たちはふたたび火がついたように喚き始めた。

ボクサーが人殴ったらあかんのとちゃうんか、会長に言いつけたろ、それより新聞の人

に言うた方がええやん、有名な人はマスコミを一番怖がったのやておとんが言うottaで、そうなんや、ならこれから新聞の会社行こ！、と口々に不穏なことを言っている。幼かった彼らも成長するごとに知恵がついてきて、無邪気なだけだった言動がだんだん聞き逃せないものになってきている。

げんなりしながらトレーニングウェアのポケットに手突っ込んでフルーツ味の飴をいくつか手渡すと、子供たちはさらに興奮して後をついてきた。

「待ってやロッキー！」

「あーもう、何やねんお前ら。学校帰りやろ。いつまでも遊んどらんでおとなしく家帰ってテレビでも見とれ」

「テレビなんておもしろないわ。アイスおごってえな」

「おごらんわドアホ！ いま飴やったやないか！」

もう一度ばかりと頭をはたくと、今度はなぜか全員が含み笑いをし始めた。

「何やお前らその顔は。ワイは新聞なんぞ怖ないで」

「ワイら、ロッキーの秘密知っとんねん」

「ああん？」

いひひ、と漫画のような笑い方をし、示し合わせたように一斉に手のひらを差し出した。きた。

「新聞には言わんとくさかい、ワイらにアイスおごつてえな。六時間目プールやったんや」
「……そら『脅迫』いうんや。ヤクザの手口やで。ガキのすることとちゃうわ」

ため息をつき、手のひらにさらにひとつづつ飴を乗せていく。

「アイスちゃうやん！」

「アホか。人を脅してアイスおごつてもろたらお前らみんな前科もんになってまうで。だいたいな、知り合いがどないなええ女とおっても見て見ぬふりするんが大人っちゅうもんや。おぼえとき」

「ええ女て何や？」

一瞬呼吸が止まった。子供たちの目には一点の曇りもなかった。しまった、と思っていると一人が新聞紙を取り出した。

「ロッキーの秘密、これとちゃうんか？」

それは妙に薄汚れたスポーツ紙だった。裏返されて格闘技面が表になっていて、巨大な字で「鷹村守 二度目の世界タイトル防衛戦決定」と書かれた見出しが見える。

「おおっ、鷹村さんまた防衛戦やるんやな。新聞には当たり前前に書かれとるがほんまえらいことなんやで。お前らも男ならこうならなあかん」

「そこちゃうで」

「あん？」

子供の細い指が見出しのはるか下を指す。

そこには小さな字で、「なお、セミファイナルに予定されていた宮田―幕之内OPBFフェザー級タイトルマッチは急遽中止となった。理由はまだ明かされていないが、因縁の対決を長年待ち望んでいたファンの失望は大きなものとなりそうだ」と書かれていた。

「……何やと?」

「ロッキーが先にこの宮田というイケメンをやつつけることにしたんやろ? せやから中止になったんとかやうんかて公園にいたおっさんが言うとしたで。新聞も知らんことやったらえらいニュースやん? ワイら秘密にしとくさかい、アイスおごってえな。ええやろ?」

「よおないわ。これも没収や。ガキが知らん奴から物もろたらあかんで」
手からスポーツ紙を奪い取り、取り戻そうと追いつがってくる子供の頭にとんと拳を押し当ててから駆け足でジムへと向かう。

それにしても汚い新聞だ。何日か前の号なのか、湿っているし黒く汚れているしすえた匂いまでする。それでも繰り返し見ないわけにはいかなかった。中止。延期ではなく、中止。自分にはまったく関係ないはずのことなのにひどく胸騒ぎがする。

勢いよく引き戸を開け、ジムの中に足を踏み入れるなり大股で柳岡のところへと向かう。練習生のミットを持っていた柳岡の腕を取って無理やり奥の部屋へ引きずり込もうとする、というわけだか星までついてきた。幕之内にたどり着く前の試合で幕之内の後輩に

完敗を喫してからというもの、星は「また一から勉強させてもらいます」などと言って付き人よろしく千堂の後について回るようになった。あまりジムの後輩に聞かせたい話ではないが、ついてきてしまったものは仕方ない。目で指示して扉を閉めさせる。

「……いきなり何やねん！ 相談があるんやったら言葉で言わんかい！ おんどれは動物かいな？」

ミットを外して襟を直しながら、柳岡は忌々しげにそう言った。

「何で教えてくれへんかったんや」

「何の話や」

「決まっとるやろ。幕之内と宮田の試合が流れたという話や。アンタ知っとったんとちゃうんか？」

「知っとった」

息を詰めてその涼しい顔をにらみつけると、即座ににらみ返される。

「先週会長から聞いたわ。みんなビックリしとるで。ここまできてまさか流れるとは、て」「先週で、そんな前から知ってて黙っとったんか？ その『みんな』によりによってワイが入っとらんのはどういいうわけや!!」

柳岡はああ、と息を吐き、あきれ顔で千堂を眺めた。

「どういいうわけも何もないわい。ここ最近の自分の言動を振り返ってみい。話振られるた

び『ワイには関係あらへんわ』て怒鳴り散らしとったのはどこの誰や。記者さんから雑談ついでに聞かれたときも嫌な顔で追い払ったやろが。そないな態度取ってたら誰も教えてくれんようになるんは当然や。反省せえ」

ぐうの音も出ない。視界の隅にいる星もどうにか助け船を出そうと口をばくばくさせているが、結局何も言えていない。柳岡の言ったことがすべて事実だからだ。

「新聞持つとるいうことは、記事で知ったんか。マスコミも長いこと期待持たせる書き方しとったさかい、触れんわけにはいかんやろな」

「中止いうのはほんまなんか？」

汚れた新聞を片手で握りつぶし、うつむきながらそう聞く。

「ほんまらしいで。会長がどこから聞いてきた話によれば、ケガの治療が長引いとるとかスケジュールが合わんからいうんやなく、何の説明もなく宮田側から一方的に対戦を断ってきたらしいわ」

軽く首をかしげる。

宮田は腹立たしいほど無愛想で不器用な男だったが、そこまでの不義理を働く人間だとは思えなかった。軽い気持ちで男の約束を踏みつけにして平気な顔のできる奴にも見えな。むしろ潔癖すぎるくらいに潔癖で、いつも必要以上に自分を追い込んでいそうな性格をしているように思える。

実際に拳を合わせたことがあるわけでもなければ人間性を深く知っているわけでもないが、「何の説明もなく一方的に断ってきた」という言葉は何となく彼のイメージとは結びつかなかった。

「宮田側はいっさいキャンセルの理由を明かさんまま、ひたすら平謝りしとったそうや。ほんで鴨川さんと幕之内がえらい怒って、二度と関わらんと宣言したとか」

「怒っとるんも関わらんように言っとるんも鴨川はんとこの会長だけやろ。幕之内は怒っとらん」

「見たわけでもないのに自信満々やな。何で分かる？」

「何でもや」

ぐしゃぐしゃになってしまった新聞をゴミ箱に突っ込み、ガードマンよろしく入り口に突っ立っていた星を促して扉を開けさせる。

「おおきに、柳岡はん。おかげでよお分かったわ」

「何が分かったんや」

「ワイがこの先どないするか、や。これからはもっと上目指すで」

振り向きざまにこん、と拳を扉に押し当てる。柳岡は頭を掻きながら、「そら当然や」と答えた。

「これからどないするんでしょうねえ、幕之内は」

無言でロッカールームに向かっていると、後ろをついてきていた星がぼそりとそう言った。妙に心配そうな口調だ。

「あいつらのことなんぞもう知らん。上目指しとるワイには関係あらへんわ」

「武士さんは杵に収まらん存在やからそれでええかもしれませんが、王者がどんな上を目指してくれんと下のもんは困りますわ」

「幕之内が返上したベルトかすめ取る気いやったんか？ 何やそら。ずいぶん小さくなっ
てもうたやないけ。いまここで根性叩き直したろか」

ひどい負け方をして自信を失ったとはいえ、卑屈すぎる発言だ。思わず足を止めて振り
向くと、星はむっとしたように顔をしかめた。

「そういうんとはちやいます」

「何がちゃうんや」

「やる気の問題です。王者いうたらみんなの手本ですやろ。王者が無理にでも上に
行こうとしてくれたら、そのやる気は同じ階級のもんにうつるんですわ。せやけど王者が立
ち止まってしもたらみんな立ち止まってまうやないですか」

よく分からない理屈だが理解はできる。

幕之内はいまや絶対王者だ。みなが彼の背中を追いかけている。憧れ、目標にし、真面
目に謙虚に戦う姿勢を見習ったり逆に反発したりしている。千堂がベルトを巻いていたと

きも、日本じゅうの男たちに恐れられて標的にされたものだ。王者とはそういうものなのだろう。良くも悪くも。

「武士さん、日本タイトルもう一度狙うたらどうですか」

「……あ？」

一瞬無視をしようと思ったが、真正面から相對している状態では不可能だった。星は真剣な顔で先を続ける。

「幕之内がこの先も上を目指す強い王者でおってくれたらそれでええです。けどそうならなかったら……」

「なるわけないやろが！ 単なる勘でもの言うんはやめえ！」

「せやかて武士さんには分からんやないですか。人に憧れる気持ちは」

ぐ、と息を呑み、星を思い切りにらみつける。しかし彼は少しも引かない。

「自分、王者の気持ちは何となく分かるんですわ。もし憧れの相手と公式に對戦することが決まったらそれだけで少し気が済んでもうて、実際にリングで向かい合う日待つんが生き甲斐になって、楽しみで楽しみで練習も減量もぜんぜん苦にならんようになって、先のことも何もかんもどうでもようになって、そのことしか考えられんようになって……そこでいきなり取り上げられたらどないな気持ちになるか、少しは想像つくんですわ」

星の言うことを理解したくないのに、その言葉は長いこと嫉妬でささくれ立っていた胸

に痛いほど突き刺さる。

「もし東洋王者がごつつう嫌な奴で、ベルトが惜しかったとか幕之内のパンチが怖なって逃げたとかしょうもない理由やったらまだええんでしょうが、武士さんが男と認めた男が憧れる男やったらそない奴のなわけあらへん。あっちにも何か深い事情があるいうことや。せやったらもう憎むこともグチることもでけへん。どこにも気持ちの行き場なくしてもうたら、幕之内がなんぼ強い男でもそのままでいられるわけないんとちゃいますか」

「何やそら。幕之内がベルト持ったままやる気なくすかもしれないとでも言いたいんか」

「武士さんには何か心当たりがあるんでっか？」

「あらへんわ！」

心臓が嫌なリズムでどきどきと鳴っていた。

以前、宮田との対決を待ち望んでいた幕之内にこう言ったことがある。

キサマら二人ははっきりと縁がないわ。

あんな嫉妬と八つ当たり混じりの嫌な予言が当たってほしくはなかった。もしその通りになってしまったら、その代償はすべて彼自身が引き受けなければならなくなるからだ。

ボクにとっては何より大事な試合を控えてまして、今はそれ以外考えられないんですよ。

どんな事情があるにせよ、あの実直な男があればほど慕っている人間を憎めるはずがない。何があっても彼に憧れたまま、執着したまま、彼を深く愛したまままで彼と訣別しようとするだろう。そうして二人ともこの先何年かは呪われる。

涙ひとつ流せない別れが、嘆くことを許さない誇り高い死が、千堂を永遠に縛り続けるのと同じ理屈で。

「これは憧れの人を持つもん同士としてのただの勘ですわ。当たるとは思いません。万が一にでも王者にやる気なくされたら困るいう話です。王者が強いまんま上を目指さんようになってもうたらみんな停滞しますやろ」

「ほんで、何や？　ワイにもういつペンタイトル獲れいうんは、やる気なくした幕之内にやる気出させえいうことかいな」

「幕之内に勝ってベルトを取り戻すいう選択肢もありますやろ。自分、いまやったら武士さんが絶対勝つと思てまっせ。世界挑戦を公言しとる武士さんがもう一度ベルト巻いたら、こないな雰囲気もがらっと変わるんとかやいますか」

冗談を言っている顔ではない。おべっかを使っている様子でもない。星は真剣だ。本気でそう思っている。

千堂は日本タイトルなどもはや欲しくないが、いまが狙いどきだというのも分かる。力が拮抗している者なら、抜け殻のようになってしまった幕之内など敵にはなるまい。

だが実際に、いまの彼を狙う者など存在しないだろう。星自身だってそんなことはできないはずだ。抜け殻と戦ってタイトルを獲って、それで何が得られる？幕之内に心底望まれていない相手だと分かっている対峙するなんてプライドが許さない。約束の場にたどり着くために乗り越えなければならぬ手頃な障壁扱いの方が億倍でした。

そこまで考えてようやく気づいた。

ボクサーとしての幕之内一步を生き生きと躍動させてきた心臓は、前へ前へとがむしやうに進ませた原動力は、千堂を完膚なきまでに恋に落とした「あの目」を生み出した源泉は、宮田一郎ただ一人だ。彼の存在なくして幕之内のいまはありえない。ということは、彼らが出会っていなければいまの千堂も存在していなかったということになってしまう。

うつむいて床をにらみつける。

ああ、そうだ。いま分かった。

これは嫉妬だ。羨望だ。うらやましくて憎らしい。彼らのその立場は自分には絶対に手に入らないものだから。

だったらこの醜い感情はきつと、胸のうちに生涯くすぶり続けることになるだろう。

「た、武士さん？」

星のあわてたようなその声のおかげで我に返った。

はっと顔を上げ、気まずさをごまかすために星の頭を軽くはたく。理不尽に殴られた星はむしろ安心したような表情を浮かべて頭を下げた。

「……自分、出すぎたこと言いましたわ。ほんますんませんでした。何発でもどついたってください」

「かめへん。つぎ幕之内とやるときにワイが勝つんは当然やさかいな。せやけど今さら日本タイトルは要らん。ワイが上で戦っとれば幕之内もそのうちやる気出るやろ。二回も負けた男に先越されたら悔しゅうてじっとしてられんようになるわ」

空元気を振り絞りながら無理に明るくそう言う、星はわずかに同情を込めた目で千堂を見た。

「何やその顔は。腹立つ顔やな」

「いえ……ただ、武士さんが人に憧れる気持ちが分からんのも同じで、ワイらも武士さんが望んでやることはよう分からんのもかもしれへんなと思てまして」

「何が言いたいんや。言いたいことあるんならはっきり言うてみ」

ワイ、ではなくワイら、と発言したことが少々引かかった。星は神妙な表情でこう続ける。

「聞いたらさらに二、三発どつきたくなりまっせ」

「ええから早よ言わんかい。こっちはお前の間の悪さには慣れとるわ」

冷や汗をかきながら咳払いをし、星は意を決したように口を開く。言わない方がよかったことを口にする。いつものように、彼らしく、正直すぎる気持ちを吐露する。

「怒らんといってくださいよ。……自分の経験上、憧れの人がおったら報われたいとか敵として見てほしいとか振り向いてほしいという気持ちは、早めに捨てとった方が楽なんですわ。せやけど人に憧れられんとなると、ましてやその気持ちを絶対に捨てられんとなると、そのうち地獄みることになるんちゃうかなと……」

＊

地獄なんて見たことも聞いたこともないまま漫然と日々を過ごしているうちに、千堂も星も何試合かして何回か勝ち、絶好調とは言えないまでもそこそこ順調にキャリアを先に進めている。

よくは知らないが、この間幕之内も何試合かして何回か勝ったらしい。「よく知らない」というのは強がりでも何でもなく本当のことだ。対戦相手の国籍とタイトル保持者だとい

うことくらいしか知らない。彼の試合を見なかったのはたぶん初めてだったが、観戦して明らかな変化を感じてしまったらもう黙ってはいられなくなりそうだったから見られなかった。

これ以上心を奪われたらしたくないことをしてしまふ。その足で新幹線に乗り込んで東京へ行つて、幕之内の胸ぐらをつかんで「ワイに勝った男ならいつまでも落ち込んでらんでしっかりせえ」などと凄んで脅迫するのは間違いない。昔の自分ならそうした。迷う前にやった。いまはもうそんなことはできない。こっちにも意地があるからしたくないし、するべきでもないし、たとえしたとしても効果がなからする意味もない。

口から出た言葉で彼をどうにかできるのは宮田だけだ。宮田は幕之内の心臓なのだから、何か一言言うだけで彼を動かすことも止めることもできる。

問題は自分から訣別しておきながらそんなことをする必要があるかどうかという点で、他に目標を見つけたなら、もう幕之内を振り返らないと決めたなら、未練がましく振る舞うべきではないのかもしれない。男として。

まあ分からんでもないで、と口に出してつぶやき、メモ帳に走らせていたペンを止めて唇を尖らせる。

宮田とは観戦しながら立ち話をしたことくらいしかないはずなのに、勝手に彼の心情を想像しているうちに徐々に親近感をや同情を覚え始めている。かといつてもっと話してみ

たいとか友達になりたいとか、そういう気はまったく起こらない。

だいたい、話などしたってその人間の本質が分かるわけではないのだ。幕之内は一般的に良い人間だと思うが、リング上で拳を合わせてみないと彼の本当の良さは一生分からなかった。逆に外で話したときにはそこそこの奴かもしれないと思って、拳を合わせてみたら最悪の相性だったとかそういうこともある。ボクサーとして手を出せない一般人には心を許しきれないこともあるし、何がどうあっても殴り合ってはならない女子供の扱いには困ることも多い。

幸い、宮田はボクサーだ。しかも同階級の。これほど思い切りどつき合えるジャンルの人間はいない。

さばとらの猫の絵の下に「シマ 二才」と書いたきり止まっていたペンを畳の上に置き、部屋の隅に散らばっているボクシング雑誌を手取る。

表紙と巻頭特集は鷹村だ。再来月の世界戦に向けた展望や相手の情報やインタビューがふんだんに掲載されている。世界戦特集の次のページには相変わらず無愛想な顔の宮田がいて、記事の冒頭で幕之内との因縁対決が流れたことにさらにと触れた後、次のタイトルマッチの相手のことを詳しく紹介している。

実際に試合が決まったことで、世間の興味はとくに次に移ってしまったらしい。彼らのささやかで強固な約束のことはすでに過去のものとして忘れられつつある。宮田の次の

対戦相手は幕之内以上に因縁の深い仇敵らしいが、自分にはまったく関係ないので興味がない。

千堂の目を引いたのはそこではなく、宮田が近い階級の日本ランカーを一度に何人も呼んで特殊なスパリングをしているらしい、という一文だった。

一人では相手にならないということだろうか。それとも近い階級の強豪どもをまとめて叩きのめすことで対戦相手に自分の強さをアピールしてビビらせようとしているのだろうか。記事の中にはその特殊なスパリングの意図や具体的な方法までは書いていないから想像するしかない。

繰り返し読んでいるうちに押しかけたい気持ちちがむくむくと湧いてきた。相手になってやろうとか力になってやろうとかいう気は少しもない。実際に拳を合わせて、宮田一郎という男が本当はどんな人間なのかを知りたいだけだ。そして幕之内が宮田をどう見、どう語るのか、この目でしかと確認したい。だがそんなことをストレートに宣言してしまっただけは沽券にかかわる。宮田が主目的であることを悟られないためには、別の目的をたくさん作るしかない。

猛烈な勢いで雑誌をばらばらとめくり、近い階級でそこそこ活躍していそうな男の名をかたっぱしからメモ帳の次のページに書き写していく。中学一年生の春から押し入れの奥で眠りっぱなしになっていた地図帳もついでに引っ張り出し、ジムとジムの間の距離や位

置関係を頭に入れつつ具体的な旅程を決めていく。

目的が東京であると気づかれないよう、まずは九州から始めることにする。そこから近畿を飛ばして東海地方に移動し、東進して関東へ行き、東北で終わる。

なぜ日本じゅうを旅して近い階級の男たちをどついて回っているのか、と聞かれたら、近いうちに世界挑戦する自分にもはや国内に敵はいないとアピールするため、と答えよう。スケールが大きくていい。

試合の近い宮田と沢村に反則行為をはたらいて謹慎中の間柴の名まで入っていることを怪しまれたら、メキシカンの左を攻略するための練習台だと答えればいい。実際彼らの左は、二人まとめて近所に越してきて定期的に練習相手になってほしいと思うほどに見事で勉強になる。

完っ壁なプランやないけ、と、にやつきながらつぶやいた。

強い男どもを順繰りにどついて回ればなかなか試合が決まらなくて溜まる一方のストレスを発散することもできる。

心配なのは祖母のことと星のことと柳岡のことくらいだ。祖母を何週間も一人にしてはおけないし、この計画を星に話したらついてくると言い出しかねないし、それより何より、柳岡に知られたらまずいことになる。千堂のことを千堂よりよく知っている柳岡だ。どれほどありえそうな理由をひねり出したところで、このタイミングで東京へ行くなんてこと

を一言でも漏らしたら、あつという間に真意に気づかれてしまう。

だらしなく腹這いになっていた姿勢から体を起こして布団の上に座り込み、「どつくりスト」と名付けたページを見つめながら真剣な顔で考える。

悪だくみをしている自覚くらいはあった。ジムに黙って行くことに後ろめたさがまったくないわけでもなかった。衝動的に東京行きの新幹線に乗ってしまうことと何が違うのかと問われたら返す言葉もなかった。この壮大な言い訳に少々無理があることを認めないわけにもいかなかった。だがやると決めた以上はもう引けない。

決意のため息をついてメモ帳を閉じ、押し入れから大きなショルダーバッグを取り出して旅支度を始める。今まで修学旅行に参加したこともなかったから、これだけの長距離を移動して回るのは人生で初めてだった。

わくわくすると同時に少し不安にもなった。

幕之内に会うのは久しぶりだ。目標を失って久しい彼をこの目で見て、その彼と宮田の話をして、自分がどう感じるかが分からない。あの日から煮え立つ熱が溜まったままの腹の底を嫉妬で掻き回されたら、今度こそ我を忘れてしまうかもしれない。嫌な気分が重たくなった下腹を手のひらでそっと押さえつける。熱い吐息が漏れる。もしかしたら自分は今もう二度と彼にあの目を向けられることがないのかもしれないと思うと、憂鬱に支配されそうになる。

*

全国どつき回しの旅、と称した千堂なりの腕試し日本縦断は、お世辞にも順調とは言えなかった。

事前の申し入れも、ジムの仲介もなしに突然乗り込んできた選手を警戒しない人間はいない。どうにかなだめすかしてリングに上がらせても相手をすぐに嘔吐、失神、鼻骨折、肋骨骨折、降参のどれかに追い込んでしまう千堂はどこへ行っても嫌がられた。この調子ではジムに苦情がいつてもおかしくないが、柳岡が追いかけてくる気配は今のところない。大阪に残してきた星が防波堤になってくれているのだろう。おそらくは。

それよりも頭が痛いのは費用の問題だ。

どうやら日本列島の広さと交通費を低く見積もりすぎていたらしく、大阪を発って数日経つころにはすでに懐が寂しくなっていた。これではもう居心地のいいホテルには泊まれない。食事もグレードを落とさなければならなくなる。少々羽根を伸ばしただけで特急券すら買えなくなるような状態だ。

その日は仕方なくスパーをしたジムに泊まらせてもらい、朝早くに発って博多駅から東海道新幹線に乗った。ホームで柳岡が見張っていないかハラハラしながら新大阪を通り過ぎ、名古屋駅に着くといきなり春の匂いがした。九州をフラフラしているうちにいつの間にか三月になっていたらしい。

ジムの練習生の顔が多少が入れ替わり、埃っぽい強風が吹き、店を訪れる子供たちが少し感傷的になり、猫たちが本格的に発情期に突入する季節だ。もう少ししたら桜が咲く。春らしい空気の中へ出ると、千堂はまず公衆電話を探した。ダメ元で以前一度だけ行ったことのある沢村のアパートに電話をかける。挨拶もそこそこに事情を話し、案内ついでに泊めてくれと頼むと、沢村はあっさりと承諾してすぐに迎えに来てくれた。

あれから何度か沢村の恩師に経過を聞いてはいたが、事故後に本人に会うのはこれが初めてだった。彼自身も大事故から生還したばかりにしては元気で、日常生活には支障なさそうに見える。

それどころか一緒にジムに殴り込んで千堂を紹介し、相手がスパーの申し入れを呑まないとみるや息を合わせて挑発混じりの脅しをかけ、スパー中セコンドにまでついてくれた沢村は、明らかに以前とは違う雰囲気をもっていた。すぐに引退せざるをえなくなったとはいえ、一度はベルトを巻いたという自信のおかげだろうか。部外者の自分にはよく分からないが、少なくとも沢村の恩師はほっとしているに違いない。

「何をぼけっとしてやがんだ。食いたいなら手伝え」

テレビのニュースをぼんやり眺めながら考え事をしていると、台所から熱した油と醤油の匂いが漂ってきた。一口しかないコンロにフライパンを乗せ、手際よく前後に揺する鍋の中身は見えていないがたぶん焼きそばか野菜炒めか、何かそのたぐいのものだろう。

「皿出せ。ひとつでいい」

「キサマは食わんのか？ えらいもてなされようやな」

「オレは普段皿なんざ使わねえんだよ」

確かに、この部屋にはまともな食器がない。冷蔵庫の上に大きめの平皿とガラスコップがひとつずつぽつんと置かれているだけだ。つまりこの恐ろしげな男の家にも最低一人は客が来る、ということになる。それが女か友達か職場の同僚かは知らないが、少なくとも沢村の恩師の河辺が一番頻繁に使っているであろうことは間違いなかった。

その皿に半分盛られたのはもやしとちくわが入った焼きうどんだ。汁物も副菜もない。白い湯気を立てるうどんを箸で持ち上げ、ふうう、と何度も息をかけて冷ましていると、顔じゅう縫い跡だらけの沢村がぎろりとにらみつけてきた。

「肉でも探してんのか？ 悪いがそんないもんは入ってねえ。文句があるなら出て行け」
「文句なんぞないわい。こっちも前と違うてまともに手みやげもないさかいな」

油分と水分と塩気を吸った熱い焼きうどんは、見た目よりずっといい味がした。コンビニ

二にすら寄るのをためらうこの懷事情では望めないほど豪勢な食事と言っている。

「うまいやないか。こら普通のエロ本じゃ返せへんな」

「要らねえんだよ。何度も言わせるな。貸しの方につけるぞ」

「分かつとるわ。せやけど他に恩の返し方思いつかんねん。キサマといい、幕之内といい、よう分からん男ばっかしや」

何だか泣き言のようになってしまったことを後悔し、シンプルな醤油味の焼きうどんを
一気にかき込んだ。

「ずいぶん荒れてやがるな。まだ人間を殴り足りねえのか？」

「荒れとらん」

「何に苛ついてるかは知らねえが、お前の思い通りにならない奴を『よう分からん男』だっ
ていうならこの世の人間のほとんどがそうだろうよ。違うと思うなら幕之内にも聞いてみ
ろ。聞けるもんならな」

沢村は鼻で笑ってそう言い、空になったフライパンと皿を持って立ち上がった。

「飲むか？」

「酒ならいらん。現役のうちは一滴も飲まんで決めとんねん」

「酒じゃねえ。こっちだ」

返事も聞かずに冷蔵庫からコーラの缶を二本取り出し、テーブルの上に置く。きつとこ

れも沢村なりのもてなし方なのだろう。

「おおきに。見た目と違うて気い利くやないか」

「飲み食いしてねえと氣詰まりなんだよ。飲んだらすぐに寝ろ」

「まだ九時やで。夜の早いやっちゃん」

だはは、と笑ってブルタブを開け、きんきんに冷えたコーラを口に含む。冷たくて甘くて辛くて痛い。

「それで？」

「あん？」

その調子でちびちびコーラを飲んでいると、沢村が突然真剣な顔を向けてきた。

「噂になってた幕之内の話ってのは、どこまで本当なんだ？ お前なら知ってんだろ」

「急に何や。噂て何のことや。幕之内がどないした？」

いきなりそんなことを言われて面食らったのは本当の話で、別にとぼけているわけではない。だが沢村は一步も引かず、ますます鋭い視線を浴びせてくる。

「あれだけ幕之内をケツを追いかけてたお前が知らないはずがねえ。ジム経由で聞いたか、記者に聞いたか……それとも本人のところに乗り込んだか？」

「せやから、何の話なんやそら。幕之内の何を聞きたいんや」

「いちいちすつとぼけるんじゃないやねえよ。分かってんだろ」

忌々しげな口調に慎重さがにじみ出ている。それだけ切り出しづらい話題だということだろう。わき上がってきた不吉な予感を振り払うように、あごを掻きながら「そやなあ」とこぼす。

「宮田 一郎いう東洋王者との対戦がなくなったという話やったら、そらほんまやで。ちょうど古い情報やけどな」

「それは知ってる」

「最近の幕之内の試合のことならほんまに知らんで。ワイは試合見とらんし相手の名前も分からん。勝ったいうことしか知らん」

「そのことじゃねえ」

「せやったら何や。まどろっこしいのう。はっきり言わんかい」

苦い口調でそう言うと、沢村はまだ中身が入っているアルミ缶を凹ませながらぼそりとつぶやいた。

「引退するかもしれねえって話が流れてたんだよ、前に」

「引退？ 誰のことやそら」

「幕之内のことに決まってるだろうが。だから、お前が知らないわけがねえんだ。お前のことだから東京乗り込んで本人に聞いたただただろ。奴はどう答えてた？」

今年の桜開花予想が発表されました。名古屋市と静岡市はともに三月二十三日、岐阜市

は三月二十四日、津市は三月二十六日、いずれも平年並みとなっているようです。満開予想日は……気温の変化に影響されるのでちょっと難しいんですがねえ、予想ではこのあたりになるんじゃないかと、

「おい、千堂。どうした」

目の前でひらひらと手を振られる。気遣わしげ、というよりは苛立たしげな仕草だ。

「何でもあらへん。テレビの桜の話聞いとっただけや」

「桜あ？」

「期待させてすまんが、ワイはその噂を知らん。幕之内にも一年近く会うとらん。せやけど引退はないやろ。どこのアホが流した噂や、そら」

いつも通りの口調を心がけたはずなのに、声がかすれているからごまかしきれていない。沢村はふん、と鋭い息を吐いてコーラの缶を傾け、手の甲で口元を拭いた。

「オレは事実を聞いてるんであって、信憑性の有無を聞いてるわけじゃねえ。そんなことお前と話し合っても無駄だ。何も知らないなら『嘘だ』って言うに決まってるからな」

「実際嘘やろが」

「嘘だと思いたいだけだろ」

かつん、と音をさせて缶をテーブルの上に置く。

「噂の出所は東京の新聞記者だ。秋ごろこっちのジムに取材に来たとき、そこらじゅうに

こそこそ告げ口していったよ。東洋王者との試合が流れてから幕之内はすっかり覇気がなくなつた、引退が近いんだらうってな」

「幕之内のこと知らん記者やったんしちゃうんか？ リングにおらんときのあいっはいつもそうやで。その辺歩いとる普通の男にしか見えへん。お前も知っとるやろが」

沢村は何も言わなかつた。それ以上言い募ると言い訳がましく聞こえそうだから、千堂も何も言えなかつた。

噂の内容そのものよりも、幕之内とたいして親しくもない記者が感じた印象が公然の噂として出回っていることの方が気になつた。ここ最近の彼は、そうしてもおかしくない状況にあると皆に思われているということだ。

どこにも気持ちの行き場なくしてもうたら、幕之内がなんぼ強い男でもそのままでいられるわけないんっちゃいますか。

あのととき星が言ったことに思い当たった人間は、千堂が思うよりもずっとずっと多かつたのだから。

「録画、しとらんか？」

「何をだ」

「ここ最近の幕之内の試合や。テレビでやっとなやろ。キサマのことやから録画したやろ。ほんで隅から隅までねちこく見て研究したやろ」

「それがどうした」

沢村は吐き捨てるようにそう答え、千堂をじろりとにらみつけてきた。

「ビデオはジムだ。ここにはねえ」

「ほならこれからキサマとこのジム行ってくるわ。勝手に行って勝手に見るさかい、氣遣わんでええで」

「閉まってる」

「鍵持っとらんのか？　いまトレーナーのタマゴやっとなのやろ」

「持っても渡さねえし入れねえよ。お前部外者だろ。どういう神経してやがる」

柄悪く舌打ちをし、沢村は立ち上がってカラーボックスの棚の中から数冊の大学ノートを取り出してから戻ってきた。

「何やそら？」

「幕之内の試合のメモだ。オレがまとめた」

ノートをぱらぱらと開くと、色分けされた几帳面な字でびっしりと埋まったページがいくつも出てきて気が遠くなった。ところどころ図解つきだが沢村の絵は絵というよりは図で、眺めていて楽しいものではないから字と変わらない。

「読む気が失せてる顔だな。全部の漢字にルビ振ってやろうか？」

「バカにすな。普通に読めるわい。せやけど、これはあかん。見てもさっぱり分からん」

これは試合の記録でも解説でもない。研究だ。ひとつひとつの行動にどんな意図があるのか、どんな心理が隠れているのか、どこに隙があるか、どこに穴があるか、どう対抗すればいいか……という、まるでこれから幕之内と試合する選手のトレーナーであるかのように、緻密な研究を重ねているのが見て取れる。

「幕之内はよっぽどキサマの恨み買うたみたいやな。次の対戦相手に高く売れんで、これはランカーもみんな欲しがるやろな」

「お前のもあるぞ。別の階級の奴らのも」

「はん、ワイはどない研究されても怖ないで。実際に手え合わさんと分からんことしかしとらんさかいな。幕之内も同じや。こないに長い文読んだところで、リングの上で顔合わさんと何も確かめられへんわ」

「そう言うと思ったよ」

ノートを受け取った沢村は表情筋を動かさずにそう答え、ぱたと音をさせてページを閉じた。

「ビデオを見てもどんな記事を読んでも誰かに聞いても、お前は絶対に認めないだろうよ。会場に行って直接見たって、それどころか実際に手を合わせたって、最後の最後、ぎりぎ

りまであきらめないだろうよ。ほんの少しだって疑わないだろうよ」

いつの間にかニュースから連続ドラマになってしまったテレビの画面にさりげなく視線を移し、無表情でその言葉を聞く。沢村の台詞にかぶせるように、目に涙を溜めた女優が「信じて」と叫ぶ。

「いちいち分かりやすい野郎だな。そんなにショック受けるなよ。だいたい噂を広めた記者だって、ちょっとした端緒を感じただけで確信なんざあるわけねえんだ。小さいきっかけで元に戻るようなつまらねえ変化を大げさに捉えてるだけの可能性だってある」

「そうに決まっとるやろが。そのアホがそうなってほしいと思っとることと現実っちゃうねん。一緒くたにすな」

「あの王者が少しずつフェードアウトするところなんか見たくない、と思ってるのはお前だけじゃねえ。知りたくもないのに凝視しちまうか、最後まで目をそらし続けるかの違いだけだ」

沢村は半分以上残っているコーラの缶を千堂の手から奪い取り、流しへ持って行く。

「もう寝ろ。これ以上お前と話すことはない」

「まだや。キサマが幕之内の試合見てどう思ったのかまだ聞いとらん」

「どうとも思ってたねえよ。やたら打たせるところも凶悪なパンチ力もいつも通りだ。あとは自分の目で確かめろ。そのうちまた試合あるだろ」

「何や、友達甲斐のない奴やな。ワイがお前の心配性を笑い飛ばすところまでがセットの会話なんやで」

「そんなに安心したいならお前をちやほやしてくれる奴のところに行つて話せ。山ほどいるだろ。男も女も子供も年寄りも。そいつらならお前が言つて欲しいことを言ってくれるだろうよ。現実じゃなく、お前がそうなつてほしいと思う理想をな」

テレビを消され、テーブルをどかされ、座布団を投げられ、「どけ」と言われ、立ち上がつて作つたスペースに即座に布団を敷かれ、いいとも悪いとも言わないうちに電気を消される。

「現実、かいな」

「あ？」

仕方なく布団に潜り込みつつぶやくと、こちらに背を向けている沢村が不機嫌そうな声で答えるのが聞こえてきた。

「いつもながら後ろ向きなやつぢやな」

「現実が見えてない奴に限つて自分が前向きのもりでいるらしいな」

「見えとらんのはちやうわ。現実をこっちに引き寄せようとしとるだけや。外野がなんぼ言うてもヤツは終わったわけやない。幕之内はまだ世界のてっぺんの景色を知らん。まあワイかて知らんが、これから行こうとはしとるわけやろ。つまり、ワイは近いうちにてっ

ぺんに立つちゅうことや。自分に二度も負けた男が世界チャンピオンになったいうたらそら、男としてやらんわけにはあかんようになるやろ。キサマが言うたよう分かん『現実』には、このことは入っとらんのとちゃうか？」

少したどたどしい口ぶりで、まるで自分に言い聞かせるようにそう言う。口論がしたいわけではない。沢村を言い負かしたいわけでもない。自分でそう信じられなかったら、もうやっていけないからだ。

「お前が世界獲れば幕之内が発奮して追いかけてくると思ってたのか。相変わらずおめでたい頭してるな」

「男の意地と面子の問題や。二度も負かした男に先行かれたら普通腹立つやろが」

「当の本人にどれだけあるかも分からねえ男の意地と面子とやらだけで、宮田一郎の存在感到勝とうってのか？」

ぎょっとして思わず振り向き、薄ぼんやりとした闇と布団にくるまった沢村の背中を見つめる。

「分かってんだよ、そんなことは。対戦を盛り上げるためか何か知らねえが、あの二人のことは少々報道されすぎた。お前がコメント求められてやけに興味なさそうな発言をしたのも知ってる。試合が流れたって聞いたとき、真っ先にお前の顔が浮かんだよ。昔のお前なら、幕之内の代わりにぶちのめしてやるとか何とか言って東洋王者に挑戦状叩きつけ

に行ってただらうからな」

そうしたいと思わなかったわけではない。勝てば世界ランクも手に入るのだから、ジムを説得するのも簡単だっただらう。だが意地と面子があるからできなかった。幕之内をこれ以上傷つけることもできなかった。

「自分に勝った奴を何年もしつこく追っかけ回す気持ちはちっとも分からねえが、あの男に見られていたい気持ちは分からないでもない。お前にとっての幕之内は、つまり、慈悲のない河辺先生みたいなもんだろ」

「……ああんっ？」

突然の一言に黙っていられなくなり、飛び起きて立ち上がって明かりをつける。

「いま、何て言うた？ 幕之内が誰やって？」

「何興奮してやがる。凶星か？」

ほらどうだ、言い当ててやったぞ、とでも言いたげな沢村の顔を見ていると頭がくらくらしてくる。

「お前……ほんまっ……、途中まで真面目に聞いたのがアホらしなるわ！ 時間返さんかい！ こっちは移動とスパーで疲れとんねん！」

「うるせえな。どこが違うってんだよ。慈悲がないってどこか？ ずいぶん目が曇ってやがるな」

沢村は強めに舌打ちをし、しぶしぶ起き上がってあぐらをかいた。

「真剣に殴り殺そうとしてくる奴のどこに慈悲を感じてんだよ。お前もアレにヤバイ負け方してるだろ。しかも二度も。あんな情け容赦のない野郎に慈悲の心があるわけが、」

「そことちゃうわ！……まあ、ええわ。お前みたいな世界の狭い奴とこない話したんが間違いやった」

完全に脱力してそのまま布団に倒れ込む。沢村は以前から色恋を含めたヒト同士の複雑な機微にあまり興味を示さない男だったが、まさかここまでとは思わなかった。観察力と思考力が高いぶんギャップが激しい。

「……寝よか。いきなり疲れたわ」

「それはこっちのセリフなんだよクソが。タダ飯食わせてやったのに延々くらだねえ話に付き合わせやがって」

「話しとったのはほんとんどキサマやで」

何だかんだ言っても、沢村はいまだに幕之内に関心があるのだ。彼に負けて病院送りになったのは二年近くも前のことなのに。大きな存在といえど恩師だけ、という小さな小さな沢村の世界にも、負けたことが悔しくて一度は目標にした幕之内がしっかりと根を張っている。

それはどうにも奇妙なことのよう思えた。沢村も千堂も同じ種を植えつけられたはず

なのに、出てきた芽もつけた花もぜんぜん違う。きっとそれは他の対戦者と同じで、皆それぞれに違った思いや期待を幕之内に抱いていることだろう。そう思うと少し孤独だ。

星は憧れの人を持つ者同士、幕之内の気持ち少し分かるのだと言っていた。だが当の千堂の気持ちとは分かってくれない。

これほど鋭くて、千堂をよく知っているはずの沢村でも、この胸の中にあるものの正体を見抜いてはくれない。

誰かに分かってほしいなんて思ったことはないはずなのに、自分が誰にも理解されないことはむしろ誇らしく思っているはずなのに、どうしてか心細い気持ちになる。

＊

幕之内が窓の外にいることは分かっていた。きっとその場にいた皆が彼の百面相に気づいていた。どうして中に入らないのか、どうして声すらかけないのか、どうして窓から半分しか顔を出さないのか、その理由もだいたい分かっていたと思う。

宮田はちなりとも窓に視線を向けなかった。意地でも見るものか、というかたくなさを

感じた。

なぜそう思ったかといえば、千堂もそうだからだ。幕之内が窓の外にすることに気づいていたからこそ、絶対にそっちを見ないと決めていた。

彼がどんな顔をしているかは分かる。おそらく宮田も分かっている。もし千堂が「窓のどこに何かおるで」と一言でもささやかうものなら、スパーは中断されていたかもしれない。

なぜそう断言できるかといえば、宮田がそんなことをしたら自分も宮田と同じくらいに機嫌を損ねていただろうから。

そんな奇妙な合意の元で幕之内の存在は無視され続け、結局最後まで窓の外にあるものが顧みられることはなかった。

着替え終わってジムの外に出ると、一緒にいた板垣があわてて逃げ帰ろうとする幕之内の腕をつかんで困ったようにこう言った。「もう先輩ってば、一人で来て一人で帰ったら本当にただの覗き魔になっちゃいますよ。宮田さんはまだ出てきませんから安心してください」。

もしそこに居合わせたのが自分でなく宮田だったら、彼は気まずそうにうつむいて顔を赤らめ、「ごめん、さっき窓からスパー見てたんだ。やっぱり宮田くんはすごいね」などと言いながらもじもじしていたことだろう。だが先に外に出てきたのが千堂だったから、

幕之内は少しも照れくさそうにせず、駆け寄ってきて「あつ、お疲れさまです。宮田くんの左はいかがでしたか？」と食い気味に聞いてくるだけだった。

何でキサマここにおんねん、どないして抜け出してきたんや、と混ぜ返してわざわざ空気を温めてやるのも馬鹿馬鹿しくて、ただ一言「たいしたことないわ」とだけ答える。

「たいしたことないなんてことあるわけじゃないですか!」「あ? ワイが宮田を圧倒しとったの見たらんのか?」「左の話をしてるんです。だってそんなに顔腫らしてますし、何かこう、感じるところがあったでしょう? すごいとかきれいとか参考になるとか」「なんもあらへん。三分で攻略でける左なんぞたいしたことないわ、と思うただけや」「だからっ! 絶対そんなことないはずなんです!」……と、そこまでいったところで板垣がまあまあ、と笑顔で間に入ってくる。

「不毛な言い争いやめましようよ。駅前じゃれ合つてると目立っちゃいますよ。二人とも声大きくなってるし顔も怖いし」

そう言われたとたん幕之内はさつと左右を見回し、通行人に視線を向けられていることが分かると急に小さくなった。つかみ合いのケンカをしているわけではないのだから堂々としていればいいものを、と思うが、この男にとっては注目されることそれ自体が恥なのだ。不特定多数の人間に見られて指さされることがなぜ怖いのか、千堂にはさっぱり分からない。

幕之内が黙りこくってしまったからその後は自然と会話がなくなり、いつの間にか来たときは逆方向の電車に乗って、また鴨川ジムの最寄り駅で降りて、何となく三人連れ立って土手をぶらぶら歩き続けていた。

このまま川沿いを散歩し続けたところでは何にない。柳岡と宮田の父親がかつてのライバル同士だったという話の衝撃を分かち合うためでなければ一緒にいる意味もない。柳岡のことを話しているうちにふつふつと怒りが湧いてきて、いい年をして幼児のように叱られたこととか、資金の問題を解決できる希望をチラ見せただけでいなくなれたこととか、そういう柳岡に対する身勝手すぎる文句があとからあとから口をついて出てきて、気がつくとも幕之内が家に泊めてくれることになっていた。

と、いうのは半分嘘だ。下心がなければわざわざここまでついてこないし、何の関係もない幕之内と板垣に懷事情を匂わせる必要もない。本当にどうしようもないほど困っているなら、名古屋に行ったとき沢村にそうしたように、最初から素直に事情を明かして泊めてくれと頼めばよかった。なぜそうしなかったかといえば、こっちにも意地があるから。それに尽きる。

下心と意地のどちらかしかないなら話は早いのだが、その二つが揃ってしまうと回りくどくて面倒くさい行動に出なければならなくなる。真正面からそうしろと迫るのではなく、本心からそうしたいと思わせるようにしなければならなくなる。押した後でいきなり引い

たり、引いたと安心したところで押されたり、また強く押されるかと思つて身構えているところであつたと消えたり、親切心や庇護欲をくすぐつて利用したり。

幕之内は案の定、こういう単純な駆け引きに弱かった。彼に恋愛の経験が少しでもあれば簡単に引かかることなどなかっただろう。それどころか、こっちの下心をすぐに察知して意地を逆手に取つて、本心を白状させて優位に立つこともできたはずだ。疑うことすらできなかった時点でもう勝負は決まっていた。

かといつて別に千堂は勝つたわけではない。むしろ負けだ。どれほど遠回しでも、どれほど策を弄しても、慈悲を乞うた方が勝者であるはずはなかった。

どこか負けたような気分のまま幕之内の後をついていくと、やがて住宅街のはずれにある幕之内の自宅兼店舗にたどり着いた。引き戸を開けたとたん巨大な犬が飛び出してきてさかんに千堂の匂いをかぎ始め、幕之内に「大丈夫だよ、ボクのお客さんだから」と言われるまでやめようとはしなかった。

「これが例の犬かいな。キサマに聞いた話とちやうで」

「例の犬……? ああ、そういえばワンポのこと千堂さんに話したことはありませんね。あれは確かまだ子犬のときでしたから、大きさはもうぜんぜん違いますよ」

はは、と照れくさそうに笑い、幕之内は犬の頭を優しく撫でる。そばにかがみ込んで正面から目を合わせると、白い犬は戸惑つたように固まった。初めて会った野良猫に必ずや

る、立場を分らせるためのにらみ合いだ。しかし犬に通じるかどうかは分からない。飼い主に似て温厚そうだがなかなかの大きさだし、このままケンカになって飛びかかれて噛みつかれたらただでは済まないかもしれない。

お互い少しでも自分を強く見せようと少しずつ目に力を入れ始めていたとき、幕之内がいかに親切そうにこう言った。

「さあ、どうぞ入ってください。母が夕飯用意してくれてるみたいなのでまずご飯にしましょう」

その声にうれしげに反応したのは犬で、千堂のことなど忘れたかのようにくうんくうんと甘えた声で鳴きながら先に扉の奥に消えていった。一人取り残された千堂はひとつため息をついて立ち上がり、案内されるがまま玄關に入って靴を脱ぐ。

廊下に足を踏み入れたとたんに他人の家の匂いが鼻を突いた。だし汁と味噌の匂い、砂糖と醤油の匂い、乾いた洗濯物の匂い、古い木の匂い、洗剤と芳香剤の匂い、開封したてのドッグフードの匂い、ダンボールの匂い、海の匂い、茶葉と湯の匂い。

子供のころから、「他人の家」という場所には何だか馴染めなかった。その家の住人と住む世界が違うことに思い当たるのは、たいていこうして最初に匂いをかいだときだ。

「千堂さん、ボクの部屋こっちです。先に荷物置いてください」

逆方向からぱたと足音が聞こえる。陶器と陶器が擦れ合ってかちやかちやと鳴るせ

わしげな音も聞こえる。

「急にすまんのう」

真つ暗な部屋に大きな荷物を置きながらそう言うのと、幕之内は意外そうに息を呑んで「え？」と答えた。

「え、て何や」

「い、いえ、何でもありません。でも遠慮しないでいいですよ。いつも仕事を手伝ってくれてる学さんと妹さんがご飯食べていくこともありますから」

ほうか、と短く答え、埃ひとつ落ちていない廊下を抜けて居間に足を踏み入れる。エプロンをして箸を並べている後ろ姿に向かって挨拶をしようとしたとたん幕之内が遮るように前に出て、「手伝うよ」とあわてたように言った。

「そこに座っててください。すぐできますから」

「お、おう」

「あらあ、こんばんは。一步の母です。息子がいいつもお世話になってます。千堂くんて、たまに電話くれる子よね？あのにぎやかで声の大きい。一步もつられて声が大きくなってるから分かるのよ。あと可愛い猫の絵のついた年賀状も確かそうだったでしょ？毎年猫の絵なのは猫が干支に入っていないから猫好きとしてのリベンジのつもりなんじゃないかって一步が、」

「母さんもういいから！　そういうの恥ずかしいから黙、」

「キサマがしばらく黙っとれ」

話しかけるタイミングをことごとくくじかれ、真っ赤な顔をした幕之内をにらみつけると、ようやくおとなしくなった。

邪魔されないうちに礼と自己紹介を済ませて食卓に座り、白飯が山と盛られた飯碗を受け取る。テーブルの上には何かの魚の姿煮、緑の小鉢二種類、白米、味噌汁、漬け物が乗っている。まるで料亭だ。

「気にしないでたくさんおかわりしていい。おかずもまだあるから」

「ほんまおおきにですわあ。しばらくもやしとちくわしか食うとらんかったさかい、こないうまそうで豪華なん久しぶりやわ。間違うて温泉旅館来てもうたんかと思とるとこやで」
冗談だと思われたのかうふふ、と笑われる。沢村に聞かれたらこの恩知らず、二度と来るな、となじられそうだが毎朝毎晩まったく同じメニューなのはさすがに少し辛かった。あの調子だと沢村は千堂が来る前も帰った後も同じものを食べている可能性がある。

「一步、お風呂はもう沸かしてあるからね。二人とも疲れてるだろうから先に寝てなさい。母さんの帰りを待ってなくていいから」

「どこか行くの？　船の掃除ならボクがやるよ。今日仕事手伝えなかったし」

「仕事じゃなくて町内の集まりだよ。近くにリサイクルセンターができるかもしれないか

ら住民説明会をやるんだって。全員集まれるようになってことらしいけどこんな夜にやることないのにねえ」

困ったね、とため息をつく、呼応するように幕之内がそうかあ、と言って同じくため息をついた。何ということもない日常会話なのに、こっちが驚くほど息が合っている。

小さなころに父親を海難事故で亡くし、長いこと母子二人で支え合って釣り船屋を営んできた母親思いの苦勞人、という幕之内の生い立ちが昔から有名だった。雑誌はもちろん、一番最初に見た、東日本新人王の決勝のビデオを柳岡に手渡されたときにも言われた。

全日本の相手は母子家庭で育ったお母さん思いの優しい子なんやて、このタイプは根性あるか己の優しさに負けてまうかのどっちかや。冷徹にそうつぶやいた柳岡の声にすら隠しきれない同情と親しみがこもっていて、聞いているだけで居心地が悪くなるほどだった。

しかしいくら優しかろうと母親思いだろうと幕之内も同年代の若い男で、人生を賭けるものにボクシングを選んだ人間なのから自分とそう変わるはずがない。同じように幼児のころ親を亡くした者同士、勝手ばかりして唯一の肉親である祖母に迷惑と心配をかけっぱなしの自分とぜんぜん違うわけではない。

千堂は心のどこかでかたくそう信じていたが、幕之内の人柄を知るたびにテレビや雑誌が言っていたことは本当だったのだ、自分とはぜんぜん違うのだ、と思い知らされないわけにはいかなかった。

千堂は「優しい」と言われたことが人生で一度もない。己の優しさに負けてしまうのではと心配されたことも当然ない。一度として「おばあちゃん思いの優しい子」になれたためしかなかった千堂には、幕之内のこの姿が少しまぶしすぎた。自分だって似たような境遇なんだからなろうと思えば幕之内のようになれたはずだ、何でできなかったんだ、自分が彼のような優しい人間だったら祖母はもっと楽に生きられたんじゃないか、だいたい今までちゃんと祖母の苦勞を考えたことなんてあったのか、そんな風に自分を責める声を知ると、頭の奥から聞こえてきた。

もしかしたら幕之内に勝てなかった理由は幕之内にあるものが自分じゃないからで、それは身内に対する優しさとか思いやりとか氣遣いとかそういう点で、だが今さら彼のような自分と真逆の人間になろうとしたってそう簡単になれるわけではない。

お前にないもんを持つてる友達を大事にせえ、という祖母の言葉をふと思い出す。

幕之内は友達ではない。家に上がらせてもらって食事までさせてもらっておいて「友達ではない」は通用しないかもしれないが、それでも友達ではない。しかし幕之内が自分にないものを持っているのは事実で、それは千堂が突かれたら痛いところなのは間違いない。大事にせえ。

でも、いったいどうやって？

「千堂さん、それ、痛くないですか？」

「あん？」

突然話しかけられて顔を上げると、鋭い痛みが口の中に走った。ぐあ、と声をあげたとたん何か硬いものが皿の上に落ちる。

「骨せんべいにしたものの以外ではできるだけ骨食べない方がいいですよ。前もうちのお客さんで、メバルは骨まで食べられるって聞いて普通の煮付けにして丸ごと食べたらず中で骨が刺さって病院に運ばれたってことが……」

「分かつとるわい」

唇の端から流れてきた血を手の甲で拭い、宮田の左で深く切った傷口を突き刺した大きな骨をにらみつける。

「口の中が切れてるときってしみるから煮魚つらいですよ。揚げ物か焼き物かにしてもらっても傷に刺さって痛いですし」

フォローのつもりなのか、幕之内は気遣わしげな笑顔を浮かべながらそう言った。彼は座り方も箸の持ち方も骨のよけ方もお手本のようにきれいだ。どれも五歳のころからあまり成長していない千堂とはまるで違う。

「切れとったんとちゃうわ。これはたった今、魚の骨でやったんや。宮田の左ごときで切れるかいな」

「インターバル中にも口から血出てたじゃないですか」

「あれは元から切れとったところがマウスピースはめたときに切れてもうただけやがな。あちこちスパ―して回っとるいう話したやろ。東京に来る前にやったんや」

「そ、そうですか。千堂さんがそれほど打たれる相手ならすごく強かったんじゃないんですか？」

「強いわけないやろが。瞬殺やったで」

「でも口を切ったって、」

「しつこいのうおのれは！　たいしたことない言うたらたいしたことないんや！　ごちゃごちゃしゃべっとらんでありがたく飯食わんかい！」

と、わめきつつ食卓を見下ろすと、いつの間にか骨以外何もなくなっていた。考え事をしているうちに完食していたらしい。満腹にはなっているようだが、味も何もおぼえていない。

「……ごちそうさんや」

「はい」

「うまかったで。お前の親に礼言うといてくれや」

「言っておきます。じゃ、ボクは食器片づけてきますから、よかったら先にお風呂どうぞ。着替えがなかったらボクの出しとくので使ってください。あつ、でも入らないかな。そういえば前に梅沢くんが置いていったTシャツがあったような、」

あわてて駆け出そうとしていた幕之内を吐息ひとつで制し、食器を持って立ち上がる。

「タダ飯食わせてもろた身や、皿洗いくらいするがな」

「そんなことしないでいいですよ。お客さんなんですし、ボクが泊まられて言っただけなんですし」
「ええから座つとれ。ここんと皿洗いはつきりしとんねん。そろそろプロの域やで。任せえ」

どうにか引き留めようとするのを無視して流しへと向かい、勢いよく水を流して食器洗いを始める。幕之内はしぶしながらも拭く側に回り、濡れた皿をタイミングよく受け取って拭いてかごに戻していく。

「あの」

「何や」

水出しすぎですよ、と言われるかと思ったが、彼の口から出てきたのはまったく別の言葉だった。

『「ここんと皿洗いはつきりしてた」って、何してたんですか？　もしかして、危ないこととしてたんじゃ？」

「危ないこと？　何やそら。行く先々でナンパした女の家で転がり込んだんとも思ふとんのか」

「そういうことではなくて……く、食い逃げとか……」

「しらん」

「そ、そうですか。よかったです」

はあ、と安心したようにため息をついた幕之内の頬を、泡まみれの手で思い切りつかむ。

「うわあっ!?　ちょ、ちょっと、何なんですか!?!」

「そろこっちのセリフや!　食い逃げなんぞするかいなドアホ!」

「す、すみません!　変なこと言ってますみません。千堂さんわりと行き当たりばったり……いえ!　豪快なところがあるから、そんな長い間どうしてたのかちょっと心配で」

「キサマに心配されることなんぞ何もないわい」

手を離してふいと横を向き、皿洗いを再開する。ざああ、と派手な音を立てながら湯飲みをすすいでいると、幕之内が顔を拭きながら「だいぶ前の話なんですけど」とこぼすように切り出した。

「ヴォルグさんがアメリカに発つ前、しばらくうちに泊まっていたことがあったんです。でも家の場所が分からなかったみたいで、ボクと偶然会うまで外で寝泊まりしてたって言ってます。それ以来何かこう、知り合いが行き場なくしてるのを見るとどうしてるのかつい心配になってしまいました」

「さよか」

一気に肩の力が抜け、すすぎ終わった小鉢を力なく手渡す。

ヴォルグが再起するとき、鴨川ジムの人脈を頼ったことは知っていた。だがそのとき幕之内の家に厄介になっていたことは知らなかったし、ましてや道に迷って路銀が尽きて野外生活を送っていたとは思わなかった。イメージ以上にたくましい男だ。

「しかし、ほんま律儀なやつちゃなキサマは。いちいち敵に情けかけることないやろが」「そんな、ヴォルグさんのこと敵だなんて思ってますんよ。尊敬できる人で、尊敬できるボクサーです。もちろん千堂さんも」

蛇口を閉めると静寂が際立つ。車のエンジン音と廊下を歩く犬の足音、隣の家から聞こえるテレビの音がさざ波のように押し寄せてくる。

『『もちろん千堂さんも』、何や?』

「で、ですから、ヴォルグさんと同じく尊敬できる人で尊敬できるボクサーだって、」

「せやったら宮田はどないや。キサマにとって尊敬でける奴なんか?」

突然宮田の名前が出たことに驚いたのか、一瞬の間があった。しかし幕之内は躊躇せず「そんなの当たり前です」と固い声で答えた。

「あれほど尊敬できる人はいません。宮田くんがいつもどれほど努力してるか、どれほど気高いか、どれほど苦勞してあのカウンターを手に入れたか、ボクは知ってますから。ずっと前から見てましたから」

「大事な約束破られてもうてもか?」

二人の間の空気が一気に緊迫した。幕之内は斜め下を見つめたまま手を止め、小さな音のさざ波に身をゆだねている。

口にすべきでないことを口にした自覚はあったが、後悔はなかった。幕之内が宮田をどう語るかを目の当たりにすることは今回の旅の目的のひとつだ。彼が対戦をあきらめていないなら何も言うことはない。千堂が口を挟む資格もない。だがもしそうでなかったら、こっちにもまだすることがある。幕之内を思い切り揺さぶって、憎まれてもいいから焚きつけてやるつもりだった。星の言うように、どこにも気持ちの行き場をなくしてしまったら、彼がどれほど強い男でもそのままではいられるわけではないから。

しかし幕之内はとことん頑固者で、決してこっちの思い通りになどならない男で、いつも他人を深く思いやってくれるのに、千堂が何を言っても何をしても絶対動かさない人間なのだった。

「あ、あはは、恥ずかしいなあ。その話、知ってたんですね」

「当たり前やがな。そこらじゅうで噂になっとったで」

「そうなんですか。でも、もうちょっと詳しい噂が広まって欲しかったです。それだけだと誤解されちゃいますから」

愛想笑い、ごまかし笑い、追従笑い。見ていると自分が侮辱されたような気がして無性に頭にくる。

「宮田くんは理由もなくボクとの約束を破ったわけじゃないんですよ。ボクなんかより大事な相手がいたってだけです。実はその人がちょうど次の対戦相手で、」

「知っとる。記事にもなっとる」

「そ、そうですか。実は先日、学くんがその人とスパーしたんですけど強いしすごくやりづらそうで、」

「そないな話はどうでもええ。キサマは悔しなかったんか。何とも思わなかったんか」

「はい？ 何とをもって、何のことですか？」

流しに両手をついて深くため息をつく。幕之内の顔を見られない。彼はたぶんいま、きょとんとした顔をしている。どうしてもっとも敬愛する人に対して何かを思わなければならないのか、どうして今さら悲しみや悔しさを思い出さなければならないのか、心底わけが分からなくて混乱しているからだ。

もし自分が幕之内なら、何ヶ月経とうと烈火のごとく怒り続けるだろう。相手にどんな事情があろうとも、たとえこっちの身を慮ってくれているのだとしても、仕方ないなんて思えない。実際に拳を合わせてみた宮田は卑怯で身勝手な人間などでは決してなかったし、幕之内の言うように誰より努力家で誇り高い男だということも分かっている。それでもこんな風には笑えない。相手の事情を受け入れて許せたとしても笑うことだけは絶対にできない。本当は悔しくてたまらないくせにへらへら笑っている幕之内にも腹が立って仕方な

い。だがこの笑顔も彼の優しさがなせる業なのだとしたら、揺さぶりも焚きつけも結局暴力にしかならないのではないか。

大事にせえ、という祖母の言葉がふたたび脳裏に蘇ってくる。

「……何でもあらへん」

「そ、そうですか」

「皿洗い、終わったで」

「ど、どうも」

濡れた手をぶらぶら振って自然乾燥させながら背を向けると、それを追いかけるように幕之内が声をかけてきた。

「あの、」

「何や？」

首だけで振り返る。幕之内は背を向けたままだ。

「千堂さん、前に言っていましたよね。ボクと宮田くん縁がないって。いまから思うと、なんだか予言みたいでしたね」

思い出して嫌な気分になった。あれは単に、嫉妬を無理のある理屈で覆い隠しただけの言葉だ。

「もしかしたらボクも心のどこかでは分かったのかもしれませんが、でも認めたくなくて、

絶対認めたくなくて、千堂さんを少し恨みました。縁がないのは本当だったのに。だから謝ろうと思ったんです。あのとき変な態度取ってすみません、って」

その背中に大股で駆け寄って、無理やり振り向かせて、思い切り胸ぐらをつかんで、拳でも張り手でも何でも浴びせてやりたかった。

謝罪する必要がどこにある？認められないのは当然だ。恨むのだって当然だ。こっちは嫌われても憎まれても仕方ないほどのことをあのとき言った。何よりも大事な絆を侮辱されたんだから怒って当たり前なのに、そうしないばかりか謝ってしまうのは本当に優しさゆえの行動なのか。尊重すべき意志なのか。彼の穏やかさや優しさを好ましいと思っているなら、自分にはないものを持つこの男を大事にしたいと思っているなら、「怒れ」なんて言うべきではないのだろうか？本当に？

「あれはキサマを挑発するためやった、て言うたらどないする？」
「えっ？」

抑えに抑えたその声に、幕之内が半分だけ振り向く。

「ほんまのことやで。挑発するために言うたんや。だいたいキサマらに縁があるかどうかなんぞワイに分かると思うとんのか？」

「え、いえ、でも、統計的にはそういうこともよくあるっていう話かと……」

「統計なんぞ知らん。ライバル対決が流れることがようある、ちゅうのもウチの会長から

聞いただけのことやさかいな。けど、言わなあかんことやった。宮田もキサマも、約束や何やっちゅう狭い世界に収まる器やない。もしキサマがそないなところで小さくまとまてまう男やったら、二度も負かされたワイの立場ないと思わんか？ この気持ち、どないしてくれんねや。この行き場のない気持ちを」

話しているうちにだんだん露悪的な気分になってくる。長い間抱えていた煩悶を本人にぶつけるのは気持ちよかった。暴力的な喜びだ。あとで自分が嫌になるタイプの快楽。

「それは、すみません。でもそこまでしてボクを挑発する必要なんてないですよ。ボクがどうなろうともう千堂さんには関係ないはずです。だって、ボクが上を目指さなくたって世界には行けるじゃないですか。世界にはボクらより強い人なんてたくさんいるんだから、これからどんなチャレンジでもできるじゃないですか」

表情がこわばっている。卑屈な目の奥に戸惑いと混乱と恐れがある。この期に及んで怒りは混じっていない。

「ま、そやな」

「でしよう？」

「せやかて、強いだけの奴がおつても意味ないんや。どないな奴をしばき倒しても満腹にはならん。ええ具合に世界のとっぺんに立てたとしても、それだけが答えになるか？ それだけで自分が強い思えるか？ キサマはどないや、幕之内。『あれ』を一度やってもう

たワイらが、この先半端な答えで満足でけると思うんか？」

ふきんを持ったままの幕之内にゆっくりと歩み寄り、目の前に立つ。大きな黒い目はさらに見開かれ、まばたきもせずに千堂を強く見つめている。

「それって、すごく険しい道だと思えますよ。縁のない人と縁を繋げることと同じくらいに」
ここにいるのが千堂以外の人間だったら決まりが悪くなるほどの視線を向けたまま、幕之内はささやくようにそう言った。

「ボクにとって『あれ』はものすごく高い山でしたから、そう簡単にもう一度なんて思えません」

「ほうか」

「でも、あのとき試合が楽しみで、練習も楽しくて、ボクシングが楽しくて楽しくて仕方なかったのは事実です。千堂さんも同じだと思いますし、わざわざ言わなかったって全部分かってると思いますけど……」

「ほうか。せやったらワイはその思い出、世界のとっぺんで塗り替えてきたるわ。道の途中でももっとすごいもん味おうてくる」

「……え、」

「険しいところも高い山も通らんで何がでけるんや。一方的にどついて終いのボクシングの何がおもしろいねん。全力ぶつけられる強い相手以外やったら戦る意味ないさかいな。キサ

「マも同じやと思うとったが、残念や」

目にぐ、と力が入った。

明らかに対抗心に火がついたことが分かる瞳だった。ぞくぞくすると同時に、ひどく懐かしくなった。

ああ、そうだ。自分たちはこうだった。こういうシンプルな関係だった。お互いがいるだけで何だか自分まで肯定された気がして、だからこそ誰より負けたくないと思えた。性格も人格も考え方も厳密に言えばファイトスタイルも何もかも違うのに、初めて存在を知ったその日からそうだった。

だったら自分たちには言葉なんて、嫉妬なんて、挑発なんて、本当は必要ないんじゃないのか。無理に感情を作用させ合う必要すらないんじゃないのか。胸の奥が熱くてぎらぎらしてねばつく液体で満たされていく。

「真剣な話してる最中にそんな風に見ないでください。絶対だめですからね」

ふっと視線をそらし、幕之内は苛立ったようにそうつぶやいた。

「ここはボクの家です。母がそろそろ帰ってくるでしょうし、犬もいます」

「……？ それがどないしたんや」

「どないしたんや、じゃないですよ。千堂さんはお客さんだからいいかもしれませんけど、ボクの身にもなってください。見られたり聞かれたりしたらどうするんですか。千堂さん

声大きいし、暴れられると壁に穴が空きそうですし」

頭を四十五度傾け、顔じゅうに「？」を浮かべていると、幕之内はみるみる赤くなってその場にしゃがみ込んだ。

「何や。どないした？」

「……わ、忘れてください今のことは」

「あ？」

両手で顔を覆って限界まで小さくなっている幕之内のそばにかがみ込み、どうにかして表情をのぞき込もうとする。だが腕と腕、手と手の隙間がぴったりと閉じていて少しも見えない。

「大丈夫かいな。腹でも壊したんか？」

「ボクは何ともないですからもう早くお風呂入って寝る準備してください！……って別に、そういう変な意味って言ったんじゃないですから！普通に寝るって意味ですから！明日も早いですし！」

そのあわてた声に聞き覚えがあった。完全に脱力しながらふうう、と長くため息をつく。

「人が真剣に真面目なこと考えとるっちゅうのに呑気なやつちゃな、キサマは」

「ま、真面目なことって……？」

指と指の間がわずかに開き、幕之内の大きな目がちら、とこちらを見る。

「関係ないわい」

「そ、そうですか」

にやりと笑って立ち上がり、「先に風呂もらうで」と言い残して居間をあとにする。

幕之内家の廊下の空気は湿った匂いがしてひやりと冷たく、言い合いに興奮して火照った体に心地よかった。他人の家の匂いに囲まれているのに居心地の悪さを忘れていられたのは、たぶん生まれて初めてだ。

＊

宮田に顔を打たれたことを忘れていたせいで傷に湯がしみて仕方なくて、悪態をつきながら風呂から出ると応急セットを持った幕之内の前に立ちふさがっていた。黙って手当を受け、入れ替わるように入浴しに行った幕之内を尻目に布団に潜り込む。

布団が敷かれている部屋は幕之内の私室らしいが、少々片づきすぎているし一見していかかわしいものもない。一瞬押し入れを探ってやりたい衝動に駆られたがどうせたいしたものはないだろう。彼の態度からして、おそらくポルノすらろくに見ていない。手みやげ

と称してグラビア満載の成人向け雑誌など贈ろうものなら沢村以上に嫌がられそうな雰囲気がある。どぎつい猥談などもってのほかだし、好みの女のタイプとかその手の軽い話題すら切り出しづらい。

そういえば以前、好きな女がいるとか言っていたような気がするが、その後本人からいっさい話を聞かないから振られたのかもしれない。あのボクシング一筋の硬派で母親思いの優しい男が女に横暴な真似をするわけがないから、振られたとしたら原因はやはりあのしつこさとサイズ感にあるのでは……などといい加減なことを考えていると、当の本人がふすまを開けて現れた。

「あ、すみません。待っててくれたんですね。先寝ててくれてよかったんですね」

「キサマがおらん間に押し入れん中漁っとって忙しかったんや」

「そうだったんですか、押し入れを……って、何してくれてるんですか！ やめてくださいよ！」

血相を変えた幕之内が押し入れの引き戸に飛びつくのを見ながら眺める。

「アホか。冗談に決まっとるやろ。寝っ転がって考え事しとっただけや」

「そういう笑えない冗談やめてください。鷹村さんじゃないんだから」

「何や、怖い顔しよって。よっぽどヤバいもん隠してあるんか？」

「何も隠してません」

「AV一本くらいはあるやろ。男同士や、別に驚かへんで」

「ありません。期待に添えなくて申し訳ないですけど」

水のように冷たい声で幕之内はそう言い、明かりを豆電球にして自分の布団に潜り込んで背を向けた。やはりだめだ。猥談に到達するところまでもいかない。

「怒ることないやろが。せっかくの楽しい夜やで」

「怒ってませんよ。こうやってからかわれるのは日常茶飯事なので慣れてます。でも、楽しくはないです」

「さよか。そらすまんな」

「はい」

深く嘆息し、幕之内はさらに丸くなった。おそらく、気を悪くしたことを後悔しているのだろう。こんなことで怒る必要なかったのに、などと責める必要のないことで自分を責め、気まずそうな表情を浮かべ、おずおずと謝罪の言葉を口にする。

「あの、すみません」

ごろりと転がって仰向けになった幕之内は、案の定そう言って口元を掛け布団で隠した。「謝らせてすみません。怒ることなかったです。千堂さんが言ってた通り、中に見られたくないものがあつたのでついむきになってしまつて」

「押し入れやで。そら見られないもののひとつやふたつあるがな」

フォローのつもりでそう言うとますます小さくなる。

「見られたくないものがあることが嫌なんです。というより、この後ろめたいって気持ち自体が」

「けったいなやつちゃな」

「そう、かもしれせん」

それっきり幕之内はふと黙ってしまい、耳に痛い静寂が訪れた。二人して天井を見上げてみると眠くなるどころか頭がどんどん冴えてくる。いつも寝つきが悪いから今夜もしばらくは幕之内の寝息を聞きながらまんじりともせず過ごすはめになるかと思っていたが、何だかそれだけではもったいないような気がする。

しかしこういうとき、普通は何をするものなのだろう？数年前幕之内と道に迷って宿に泊まったときも同じようなことを考えて悩んで、うやむやのままセックスをし始めてしまったから結局何の答えも出ていない。

そういえば去年の夏、合宿の夜に星が「せっかくですから恋バナでも」などと言い出して、しかしすぐに「あっ、やっぱりえげつないもんが出てきそうなんでええです」などと失礼なことを言われて話を遮られた記憶がある。恋バナ。猥談との違いがよく分からない。

「やっぱり、キサマとはどつき合うしかないのかもしれないな」

「やけに静かだと思ったらいきなり何言い出すんですか。嫌ですよ」

「せやかて他にやることないやろ」

「もうお風呂にも入って歯も磨いて布団に入って電気も消してるんだから寝ればいいんじゃないでしょうか。さっきも言いましたけどボクの家、朝早いですよ。もちろん気にせず寝てくれてかまいませんけど、犬がうるさいから一度は起きちゃうと思います」

「かめへんで。力仕事なら手伝ったるわ。世話になった礼代わりに」

「お客さんにそんなことさせられませんよ。これから毎日宮田くんとスパーするのに疲れさせたら申し訳ないですし」

「どっちに悪いんやそら！」

思わず掛け布団を剥いで起き上がる。目が慣れたおかげか、ぼんやりした闇の中でも幕之内の顔がはっきり見える。

「どっちにもです。そんなことで怒ってないでもう寝ましょうよ。あちこち回ってきた後にあんなスパーしたんだから疲れてるでしょう？」

「疲れとらん」

「そ、そうですか。体力ありますね。でも寝ましょう。ボクは寝ます。明日仕事で早いので」

「……分かった」

家主にそこまで言われると従わざるをえない。しぶしぶ布団に戻り、幕之内に背を向けて目を閉じる。だが頭が興奮しすぎているせいか一秒と目をつむっていられなくて、布団

の上をごろごろと転がって眠気が訪れるのを待つ。

「千堂さん、何してるんですか。早く寝てくださいって言ってるじゃないですか」

「分かったるわ。こっちかて寝ようとするとんねん」

「はあ……もしかして、いつも寝つきよくないタイプなんですか?」

驚いて振り向くと、幕之内の顔がこっちを向いているのが分かった。

「もし眠れるまでに時間がかかりそうだったら、机のライトつけて本棚の本読んでください。居間でテレビ見てもいいですよ」

「何で分かった?」

固い声で聞く。祖母以外の他人に言い当てられたのは初めてだ。

「何でって、そんなにごろごろしてたら普通に分かりますよ。ボクもたまに眠れないことがありますし」

普通に、と頭の中で繰り返し、隣の布団に手を伸ばしかけ、掛け布団カバーの端に到達する前に引っ込める。確かにそうだ。見透かされたのが初めてだったわけではないだろう。だが千堂の拒絶や怒りや、この頭の中身を直視することを恐れず口にしたのは今のところ彼だけだ。

「なので、少しなら話に付き合います。でも興奮するような話はやめましょう、念のため」
「エロい話なんぞせえへん。キサマをなだめすかす方に時間取ってまうわ」

「そっちじゃなくてボクシングの話です！ 特に、その、宮田くんの話はだめです。世界挑戦の話も。僭越ながら、ボクらのキャリアの話も。それ話してるとどうしてもさっきみたいな険悪な空気になっちゃいますから」

「ボクシングの話でけへんかったら他に話すことないやろ。ワイらの知り合いもボクサーばっかしやで」

「そ、それもそうですね。どうしよう……」

今度は頭を抱えて悩み始める。

とことん律儀で善良な男だ。彼のこの親切さは彼が怒るべきところで怒れない臆病さと裏返しで、切っても切り離せないものなのだと思う。千堂は自分の長所を前向きで行動力のあるところだと思っているが、裏を返せば浅慮でうかつということになるのだろうし、その二つは表裏一体なのだからどちらかを捨てられるものではない。

もし幕之内が臆病さを脱ぎ捨てるときが来るのなら、そのときは彼の持つ優しさも同時に捨て去ることになるのではないか。いつかそんな日が来るのか、あるいは来ないのか、早く来た方が幸せだったのか、永遠に来ない方がいいのか、それはまだ分からないけれど。「そや。お互いに興奮せえへん話で眠たくなりそな話やったら、ええのがあるで」

「え？ 何ですか？」

千堂がうまく眠れないことなんてしょせん他人事なのに、純粹にうれしそうな顔をする。

その様子に何だかほっとして笑顔が浮かび、ほんの少しだけ頭を幕之内の布団の方に近づける。

「前に星が言うと思ったんや。こないなときには恋バナするんが『普通』らしいてな」
「こっ、恋バナ!? あの星くんがそんなことを?」

幕之内はがば、と起き上がり、ずるずると体をずらして机の方に離れていく。

「で、で、できませんよそんなこと! 普通の人たちはともかく、ボクには」

「何でや。ええ具合に眠たくなりそうやろが」

「それで眠くなりそうって、つまり恋愛の話なんて興味ないって意味ですよね……? さすがですね、千堂さんは」

肩を落としてため息をつき、布団に倒れ込む幕之内を納得いかない気持ちで眺める。さすがですね、って何だ。

「何やねんそら」

「興味ないのは、人からどう思われるかを気にしてないからってことじゃないですか。いつも自信満々だから好きな子に嫌われることが怖かったり、いつまでも勇気出せない自分を嫌いになったりもしないでしょうし」

「ほお? 何や、何か悩んだんのか?」

「悩んではいません。悩むところまでもいってないので」

「よう分からんが話してみい。ええアドバースでけるかもしれへんで」

「ほっといてください。関係ないじゃないですか千堂さんには」

「あん？」

声に力を込めて威圧しても反応がない。幕之内はうつ伏せになったまま顔を上げようとせず、ふてくされたように黙っている。

「おいこら幕之内。何やその態度は。何か言わんかい。最後まで付き合うんとちゃうんか」
「……『最後まで』じゃなくて『少しなら』ですよ」

つま先で布団をつつくとしぶしぶそう言い、ふたたび仰向けに戻った。眉尻が下がり切っていて、困ったような傷ついたような顔をしている。

「あらかじめ言っておきますけど、ボクには何もないです。本当に何もないです。なので、恋バナしたいなら千堂さんからどうぞ」

「試合の後ラウンドガールに3Pしよて誘われた話でええんか？」

「あつ、すみません、ものすごいものが出てきそうなのでやっぱり結構です。というかそれってエッチな話であって恋バナではないですよね……」

はは……と力なく笑って鼻先まで布団に潜り込んだ幕之内を少し焦りながら眺めた。一気に心を閉ざしたのがよく分かる仕草だった。ごまかすように舌打ちをする。

「そないなことどうでもええわ。よう考えたら敵のキサマと女の話してどないするんや。」

「アホらしいわ」

「元は千堂さんが恋バナしようって言ったんじゃないですか」

「お前が口開かんせいやろが。3Pの話で笑い取って空気がよまぜたろと思ったら今度は嫌な顔しよる。3Pなのがあかんかったんか？ 青姦の話なら、」

「だから、ボクはそういう過激な話を聞きたくないんです！」

部屋が暗いから赤面しているかどうかは分からないが、困っていることだけは分かる。からかうにしても揺さぶるにしてもこのあたりが限界だろう。これ以上やったら本気で嫌われかねない。

「ふん、星の話なんぞに乗ったワイらがアホやったな」

「ワイ『ら』……？ それってボクも入ってるんですか？」

「いちいちやかましいやっちゃな。恋バナがあかんのやったら他に何かないんか。眠たくなりそな話題は」

「難しい話はいかがですか？ 環境問題とか宇宙の話とか……」

「その何がおもしろいんや」

想像するだけで眠くなってくる。眠くなることが目的だから正しいのかもしれないが、せっかくこの状況なのに退屈すぎるのは困る。

「いいから聞いててください。まずニュースでやってた環境の話なんですけど、ダイオキ

シンとかいう有害物質が最近とても問題になってるらしくて、」

「宮田の性格、何やねんあれは」

「……はい？　ボクの話聞いてます？」

「聞いとらん」

横柄に寝そべったまま手首をごきごきと鳴らす。

「プライド高いのは結構やねんけどな、ええ年こいて笑うことも人に頭下げることでもできへんちゅうのは問題あるやろ」

「はいっ、じゃあ次っ、宇宙の話いきますね。今朝の朝刊に載ってたんですけど、冬の大雪のひとつのベテルギウスっていう星が大きくなりすぎて爆発しそうで、もしベテルギウスが超新星爆発を起こしたら何とかバーストとかいうのが地球にやってくるかもしれないくて、」

「キサマが宮田を甘やかしとるせいやで」

「話聞いてください！　あと残念ながらボクは甘やかせるほど宮田ちゃんと親しくなっていないので！」

何やら悲しいことを悲しげに叫ぶ幕之内の声が途中からくぐもって消えかけた。また掛け布団に潜り込んだのだろう。腕を伸ばして布団カバーに触れ、引きずり下ろして頭を引っ張り出す。

「やめてください。寒いです」

「お前がいじけとるからや」

「いじけてません。それより、平気な顔で約束破らないでくださいよ。陰悪になるから宮田くんの話はしないって言ったじゃないですか」

「何とかバースよりましやろが！ 宮田の話されたいんやったらもっとおもしろいこと言わんかい！」

「宮田くんの話を人質に取るのやめてください！ だいたいボクに千堂さんを満足させられるほど面白いことが言えると思ってるんですか？ 無理ですよそんなの！」

「せやからそのいじけた態度をやめえ言うとんねん！ キサマはワイに二度も勝った男やろが！ 堂々とせんかい。いつもはワイの言うたことが気に入らんとメンチ切りよるくせに、何やねん今日は」

思わず身を乗り出して幕之内にのしかかりかけ、どうにか思いとどまって自分の布団に戻る。

危なかった。肉体関係を持ったことのある相手がこの状況で目の前にいるのに、いつまでも接触しないでいるのは無理がある。しかし幕之内がまったくその気になってないのに無理やり迫るわけにはいかないし、そもそもここは厳密な意味で二人きりではない。ふすま一枚隔てた先には家族の空間がある。この優しい男が努力して苦勞して築き上げてきた

平和な世界がある。千堂には決して作れないもの。この優しくない手では触れることさえできないもの。

「……あの」

同じことを考えていたのか、念押しをするように幕之内が言った。

「母が、もう帰ってきてるみたいですよ」

「そやな」

「さっきお風呂から出た音がしたのでそろそろ寝るところかと」

「さよか」

「言い出した手前まだしばらくは話に付き合いますけど、声は落としてくださいね。犬も近くで寝てますから」

ふう、とため息をつき、二人して姿勢を整えてから改めて布団に横たわる。

声を落とせということは少しくらいならいいということなのは、といういじましい下心と、大事にせえ、という祖母の言葉の両方が心の表面にわき上がってくる。

さりげなく誘えばおそろく乗ってくるだろう。手や口で射精させ合うくらいなら、それほど大きな音は出ないから彼の平和を壊さなくて済む。問題はお互いにそれだけで満足できるかということであり、マウントを取り合うための激しいつかみ合いやもみ合いや、そのたぐいの暴力的手順を経ずにスムーズにセックスに移行できるかということであり、少

し考えただけでもまあできないだろうことが分かる。幕之内も同じ考えだろう。

だからあのとき念入りに釘をさされたのだ。一度始めるとお互い手加減ができなくなりそうだから。

「変なこと考えないでくださいよ、くれぐれも」

「キサマかてさっき考えとったやろ」

「か、考えてましたけど、それはそういうことじゃなくて、千堂さんがいきなり変な目で見てきたからじゃないですか。うちに泊まられて言ったのもそういうつもりじゃなかったから、もし誘われたと思ってたらそれは違いますって先に言っておこうと思って……」

「ほうかいな。ワイはそないなこと考えもせえへんかったわ。わざわざ思い出せてくれたんや、感謝せなあかんな」

うう、とうなる声が聞こえる。もはや顔のほとんどが布団に隠れてしまっている。

「……も、もうやめましょうよこの話題。だんだんエッチな話枠に入っちゃってしまっているような気がするんですけど」

「せやかて他に何も話すことないで」

「だったらそろそろ寝ませんか？ 寝れば何の問題も起こりませんよ」

「あかん。まだ眠れへん」

わざと唇を尖らせて言う。

別に嘘ではない。これだけ頭と口をフル回転させておいて眠れるわけではない。しかしそれ以上に、まだ眠りたくない。できれば一晩中起きていたい。ただアクシデントに興奮しているというだけではない。何の実りもない無駄話しかしていないのに楽しくて仕方ない。

「じゃあ、やっぱりボクシングの話にしましょうか。でも宮田くんの話は厳禁ですので」

「ガードの固いやっちゃん」

「千堂さんが挑発するようなことばかり言うからです。いったい宮田くんの何が気に入らないんですか。いつもニコニコしてないと人としてダメなんて、そんな理屈絶対おかしいですよ。千堂さんだって宮田くんに頭下げてなかったじゃないですか。それどころか宮田くんの頭はたいてましたし、それをちゃんと謝ってもなかったです。そもそも、あんなきれいなパンチを打てる人の人間性に文句つけるなんてどうかしてます。あれを見たら血のにじむような努力してる人だってことが分かるはずでしょう？ 分からないなら調べてください。よければ明日、宮田くんの特集が載ってる号の雑誌と試合の録画を全部お見せしますよ。スパーするときの参考にもなるはずです。いくら調べても対策するのは難しいかもしれません」

早口すぎて引いた。なのでこう返すのが精一杯だった。

「……宮田の話はせえへんのとちゃうんか」

「あ！ そうでした。千堂さんが挑発するからつい……」

「ワイのせいにするな。せやけどま、キサマが悔しい思う気持ちには分かるで。たった六分で憧れの男を攻略されてもうたら、そらムキにもなるわな」

「は？」

声がワントーン低くなったことに驚いて視線を隣に向けると、幕之内は「やれやれ困った人だなあ」とでも言いたげな眉を下げた顔で千堂を眺めていた。

「ボクは窓から見てただけなので全部を把握していたとは言いがたいですけど、あの二ラウンドで宮田くんを攻略なんてしてましたか……？」

「しとったわ。キサマ窓から全部見とったやろ。隠れたつもりやろがバレバレやったで。宮田も分かっとったわ」

「そつ、それは……でもいいです。恥ずかしいし気まずいですけどそこは折り込み済みでジムを抜け出してきたので……それよりもスパーの話です。ほんとにあれで宮田くんを攻略したおつもりなんですか？」

「何やねんその腹立つ言い方は！ 最後見とらんのか？ 宮田が手も足も出えへん状態に追い込んだやろが。つまりワイの方が強いいうこっちゃ。残念やったな」

「は？」

さらに声が低くなる。怒っている調子ではないのが逆に不気味だ。

「どっちが強いかなんてあの二ラウンドで分かるわけないです。あと、千堂さんさっきか

ら声大きいですよ。言ったじゃないですか。声落としてくださいって」

「キサマがいつまでも認めんからや。試合にしろスパーにしろ結局二ラウンドで終わっとったわ。試合前の男を失神させてもうたらあかんから恩情かけただけやで」

「だから、その前提が間違ってるんです」

「ああんっ?」

幕之内に飛びついて胸ぐらをつかんでがくがく揺さぶりたい衝動をどうにかこらえる。代わりに半分だけ身を起こし、ぼんやりした闇に浮かび上がる幕之内を思い切りにらみつけた。

「前提なんぞ知らんわ。キサマがどない思ってもワイの方が強いのはもう証明されとんねん」
「その証明にも前提条件が必要です。……ほんと声大きいですってば、千堂さん。もう夜中ですよ」

「わけの分からんこと言うて煙に巻こ思とるんやったら大間違いやで。あのスパーをなかったことにはでけへんさかいな」

「なかったことにしようとしてるわけじゃないです。どっちが強いかはまだ分からないって言うてるだけですから」

「……この……」

怒りと苛立ちで血圧が上がりすぎて頭がくらくらする。もはや胸ぐらをつかむだけでは

済まない。馬乗りになって殴ったり首を絞めたり思い切り関節技を決めたりしたい。

だがこのどうにもできない頑固者は、いま千堂が手を出そうものなら我を忘れてやり返してくるだろう。そうなると家が壊れるまでつかみ合いや殴り合いをするはめになる。

「なあ、ワレ、ほんまに認めんつもりなんか……？」

「認めるとか認めないとかじゃないですよ。本気を出し合ってるわけでもないのにどっちが強いとかは分からないはずだって言いたいだけです」

「この、この、」

拳と背中と肩と唇がわなわなと震える。今まで本気の全力叫びだけはしてこなかったが、もう抑えられそうになかった。

「この、分からず屋〜っ！」

もっとめちゃくちゃに面罵したかったのに、どういうわけかこんな可愛いセリフしか出てこなかった。頑固者を罵倒する言葉としては的確だが、かつて大阪一の不良と恐れられた自分が発する言葉としてはあまりにも物足りない。というか悔しまぎれの捨てぜりふにしか聞こえない。

千堂が目の色を変えたことに気づかないのか、幕之内は相変わらず困った顔のまま「夜中に大きな声出さないでくださいよ」と答えた。

その後は押し問答だ。幕之内がどうあっても折れないから完全に頭にきていたのに、言

い合いの最中ほとんど手を上げなかったことだけは褒められていいと思う。

それでも体に触れはした。ぎりぎり暴力にならない範囲ではあったが、触ってしまったのはまずかった。永遠に終わらなさそうだった宮田の話が決着して、背を向けて寝始めた後も、そのせいで何やら気まずい空気になった。

腹が立つから殴りたい、絞めたい、関節技をかけたい。……という単純なことだけだったらまだよかった。話の流れにはおおかた満足したので、もう苛立ってはいない。だが興奮は続いているからとにかく手を出したくて仕方ない。のしかかったり押さえつけたり、止められて逆にのしかかられたり押さえつけられたりしたい。もしかしたらそれを「じゃれ合い」と言うのかもしれないが、そんな可愛いものでないことがしたい。彼とこういう引けない言い争いになると必ず思う。もっとぶつかり合いたい。もっと危ないことがしたい。幕之内の平和をかき乱すようなことが。ここが彼の自宅でなかったら、躊躇せず布団を剥いでいるところだ。

「だっ、だめですからね」

幕之内はきつく布団にくるまったままおびえたような声でそう言った。

「お願いですからこのままおとなしく寝てください。さっきずいぶん騒いじゃいましたし、母さんとワンポが起きたかもしれないかもしれませんから」

「せやかてキサマ、このまま寝るつもりなんか？　寝られるんか？」

「寝ますよ。当たり前じゃないですか。何度も言ってますけど、ここはボクの家なんですよ。母は一度も試合見に来てくれたことないですけど、千堂さんがボクと二度対戦した相手だってことくらいは知ってます。ボクらがどたばたやってたらケンカだと思ってすぐ止めに来るはずですよ」

鼻から息を吐き、唇を曲げる。確かに、客観的に見れば自分たちは同階級のライバル同士だ。本来なら世間話程度の用で電話をかけたなり家に泊まりに行ったりするような関係ではない。うれしそうにかつてのライバルと飲みに行った柳岡を笑えない。

「せやったら、どたばたせえへんかったらええんやな？」

「よくないです。分かっているでしょう。音を立てないでするなんて無理ですよ。千堂さんすぐ頭に血が上っちゃいますし」

「キサマもやろが！」

掛け布団を弾き飛ばしてどかりとあぐらをかき、相変わらず丸まったままの幕之内を見下ろす。

「必死に隠しとるつもりやろが、二度やったワイには分かっとんねんで。やりたいんやろ」「やりたくないです。変なこと言うのやめてください。家に泊めたのは誘うためじゃないって言ったじゃないですか」

「誘われたとは思ってへんわ。誘ったのはこっちや。柳岡はんがどっか行ってもうたとき

からそのつもりやった。キサマについてきたのも下心があったからや。分かっとったやろ、全部」

あくまで静かに、落ち着いた口調でそう言う。逃げられないようにだ。幕之内は息を詰めて「そ、そんな」とささやいた。

「いや、でもそんなの、」

「ほんまに分かつたらんかったんか？ 誓えるか？」

「……誓え、ません。すみません。本当は少し分かつてました」

長く細くため息をつき、幕之内は力なく仰向けになった。

「一番最初、千堂さんが大きい荷物持つてジムの前に立ってたときから、何となく予感がありました。そのときはもっと大事なことで頭がいっぱいだったのであんまり意識しませんでしたけど、今から思えばそうだったなって。学くんと三人でいつもの土手に戻ってきたとき、ああそういうことかって初めて気づいて、でも千堂さんのことだから本当に行き場なくて困ってるんだらうし、困ってるって分かっているのに見なかったことにはできないし、その後はこう、流れて……」

「話長すぎんで。分かっとった、の一言でじゅうぶんやろが」

「それですけど、千堂さんの意図が百パーセント分かってたわけじゃないって言いたいんです！ だから何も絶対今日しなきゃならないってわけじゃ、」

そのセリフを全部聞く前に幕之内の体に覆いかぶさる。体重はかかっているが、掛け布団の上からだからぎりぎり体には触れていない。だが幕之内は身をよじらせてあえぎ、すぐに悔しそうな表情を浮かべた。

「話、聞かなすぎじゃないですか？」

「答えはもう出とるやろ」

はあ、と嘆息し、ごく自然に手足を押さえつけてくる千堂の体を跳ねのけるように身を起こす。

「分かりました。でも、この三つだけは約束してください。一、大声を出さない。二、暴れない。三、疲れすぎない。ボクもちゃんと守りますから、お願いします」

頷こうと思っていたのにもう待てなかった。

半端に起き上がった上半身に体重をかけて布団に押しつけ、片手で頭を固定して唇をむさぼる。いくらも経たないうちに口を開けさせて舌をねじ込み、唾液をすすり取る。かすかに歯磨き粉の味がする。お行儀のいい味が。

「ちよっ、ちよっ待っ、」

体の間にあった掛け布団をむしり取り、寝間着の上を脱がそうとしてボタンの存在にまずき、面倒になって下を先に引き下ろしてしまうと幕之内はあわてて抵抗し始めた。

「力ずくでやるのやめてください」

必死に股間を隠しながらも「約束」のことが頭から消えていないらしく、ほとんどささやき声だ。千切られないうちに自分でボタンを外し、はだけた状態になると千堂の服を脱がそうとし始める。だが当の千堂が協力的でないせいで頭から抜くところまでいかず、胸のところまでたくし上げただけになった。下も、お互い太ももの途中まで下ろされたただだ。

どういうわけかもう息が切れている。五ラウンドほど全力疾走した後のようだ。キスとも言えない乱暴な探り合いに夢中になりながら、どうやって相手をやり込めるかだけに神経を使っている。何をどうやっても屈服させられないことなんて経験上分かり切っているのだから、合意の上でそういう遊びをしているだけとも言える。この場所が完全な密室で、完全に二人きりだったら、ぶつかり合いはエスカレートしていっただろう。

だがここは残念なことにそうではなくて、以前祖母がぼつりと言った「大事にせえ」という言葉が頭から離れないせいで、もどかしさだけが溜まっていく。どちらかが力を入れれば、大きな音を立てたようにもう片方が同じだけの力で押し返す。いいところを刺激されて声が出そうになっていたら、声をかき消すように唇をふさぐ。

「そっ、それだめ」

声を抑えようとして自発的に首すじに吸いつくと、幕之内は焦ったように体を離れた。「シャツで隠れないところに痕つけるのだからです。言い訳するの、すぐく大変なんですか

らね」

そうは言いながらもさっきより息が荒くなっている。なだめるようにその場所に舌を這わせ、唇に優しくキスをし、みっちり筋肉が詰まって盛り上がった胸にも何度かキスを落とし、すぐに頭を下げて腰骨のあたりに口をつける。

かすかに声がした。性器を舌で愛撫されることを予期してか、体がこわばっている。期待と不安で勃ち上がった大きなペニスの根元をそっとつかみ、邪魔にならないよう少しだけ傾けて足の付け根にきつく吸いつくと、戸惑ったような反応が返ってきた。

つ、と鋭い音を立てて唇を離し、赤い吸い痕がついたのを確認してからその周囲にも痕をつけていく。下腹部のさらに下、腰、内もも。絶対にシャツからのぞかないところ。幕之内は小さくあえぎながら、信じられないものを見るように千堂のやりようを見下ろしていた。興奮しているのが分かる。我を忘れそうになっているのが分かる。

股間の周囲を吸い痕だらけにしてからようやく、ぴくぴくけいれんしている性器に舌を這わせる。とたんに鼻に抜ける声がし、幕之内はあわてて自分の口を手でふさいだ。血管の浮いたそれを煽るように唾液で濡らしていき、さらに膨張させてから先端だけをそっと口に含む。

何度かしたからだいぶ慣れたつもりだったが、このやけくそじみたサイズ感にはいまだに驚く。ゆるく上下に動かしているだけなのに顎が外れそうになるし、絶頂が近づいてく

ると頭をつかんで腰を振ろうとしてくるから逃げられなくなる。そうなる前にやめないのは、彼が普段のお行儀の良さや優しさを忘れて、身勝手な欲望に支配されている姿を見たからだ。同年代で同じような境遇の男である自分と、何も変わらないことを確認したいから。

「なれてください、千堂さん、もう、」

頭を押さえつけていた手の力がふっと消え、逆に剥がされてしまう。幕之内は重ねた両手のひらの中に射精するとはああ、と長いため息をついた。

「……すみません、ボクばかり気持ちよくなっちゃって」

多少落ち着きを取り戻した声で幕之内はそう言い、ぎこちない手つきで服を脱がせてきた。

「そういうえば聞くの忘れてましたけど、スパーのダメージは残ってませんか？ 残ってた無茶なことほししないでおきましょう。もし大丈夫そうなら、その……」

欲望でうわずったその声とともに最後に残った下着を足から引き抜かれると、暴れ出したい衝動を抑えられなくなつてふたたび幕之内の体に馬乗りになった。

もし大丈夫そうなら、何だ。以前できなかったことがしたい、ということではないのか。「で、でも、明日からのスパーに差し支えないようにしたいので、二人とももうちょっと冷静になってから考えた方がいいかもしれません。千堂さんが動けなくなると宮田くんの

力になれませんし」

彼はすぐ自分が言い出したことに自分で驚いて逃げ腰になる。そんなことは分かっている。拳も体も合わせた仲だから、嫌と言うほどよく知っている。

「前に色々あったから、その、ボクなりに調べてみたんです。こういうエッチなことって科学的に検証されてないことも多いので何が正しいかは分からないんですけど、挿入される側の体に負担をかけるのは間違いないみたいで、つまり……またひどい目に遭わせるかもしれないくて」

太ももに乗ったまま覆いかぶさり、両手で幕之内の顔をごしごしと撫でる。

「い、痛いんですけどそれ……。とにかく、そういうわけですからせめて千堂さんが話せるようになるまでは判断を待っておこうかと」

「押し入れ」

必要最低限の音量でそう言い、押し入れのある引き戸を指す。

「あん中にあるんやろ。早よ出せ。律儀なキサマのことや、全部揃っとんのやろ」

さすがの幕之内でも、この期に及んで「何が」とは聞かなかった。ごくりとのを鳴らし、「全部じゃないですけど」とささやき声で答えた。

「買うの初めてだからすごく恥ずかしかったんですよ。絶対に知り合いに会いたくないからけっこう長く電車に乗って大きい街に行って、でも売ってるお店がどこにあるのか分か

らないから恥を忍んで交番で聞いたりして……やっとお店見つけたと思ったらすごくおどろおどろしい雰囲気で、まず入るまでが大変でした。勇気を出して入ってから何だかもうよく分からなくて、気分が悪くなって固まってたらお店の人が介抱してくれまして。すごいもののぼっかり置いてるお店なのに店員さんはすぐ親切なんですよ。ボクはほとんど何も言っていないのに事情を察してくれて、おすすめで教えてくれて」

「話長いわ。ええから早よ出さんかい。そこまで苦勞して買うたもんをいま使わんでいつ使うねん。キサマが動かんのやったら勝手に開けるで」

裸のまま立ち上がろうとすると、すさまじい力で両腕を引かれた。腕が抜けそうなほどの強さだ。

「……だめです。絶対だめです。見られたくないものは他にもあるので」

「何やそら。憧れの宮田の隠し撮り写真でも入っとんのか？」

「違います。宮田くんに関する下品な冗談、楽しくないので次からはやめてください」

一瞬ひやりとするほどこわばった声でそう言い、幕之内は服をただけ戻して立ち上がった。押し入れを四分の一ほど開けて奥の方をごそごとやり始めると、すぐに黒い紙袋が現れる。

「買ったの一年以上前なので少し埃が積もってましたけど、まだ使えると思います。……あと、千堂さんに見られたくなかったのは普通のエッチな本です」

「お、おう。さよか」

「で、でも、正直に言ったからって絶対見せませんよ。ボクはそういうのを人に見せて平気な顔できる性格じゃないので……って、早くしないと体冷えちゃいますよね」

心配そうに言うなり、幕之内は躊躇なく千堂の裸体に抱きついてきた。

体の大きな面が触れ合うと、じわりとあたたかくなる。

脂肪の層が薄いボクサーの肉体は、触れたときひんやりすることがない。柔らかく締まった、質のいい筋肉の感触と体温が正直に伝わってくる。鼓動の力強さ、呼吸の深さ、血の熱さ、筋繊維一本一本に込められたエネルギーの塊が触れたところからどんどん乗り移って、どっちがどっちの体か分からなくなっていく。女と抱き合ってこんな風に感じたことはない。といって他のボクサーとでもきつとない。この男とだからだ。求め合っているのも許し合っているのも貪り合っているのも受け入れ合っているのもなく、ただただ重なり合って、互いに「ここだよ」と教え合っている。

普段意識しない場所、滅多に目にするのではない場所、自分の中で一番強く、一番幼く、一番好ましく、一番純粹でいられる場所を。

「千堂さん、どうしました？ 眠くなっちゃいましたか？」

太くて短い腕にきつく抱かれたまま揺り動かされ、うー、と抗議のうなり声をあげる。

「眠いなら無理しなくていいですよ。急にあったかくなってボクも眠くなってきましたところ

なので……」

「いま寝たらどんなになるか分かつとんのやろな」

ベアハグ状態になっていた凶悪な腕からどうにか脱出し、幕之内の眠そうな頬を思い切り引っ張る。

「キサマのデコにおもろい柄つけたるで。起きて鏡見るの楽しみにせえよ」

「そ、そうですか。じゃあしましょう。頑張りますから」

脅しがぬるすぎたのか、幕之内はどうにも緊張感のない口調でそう言った。ぬるいというより慣れてしまったのかもしれない。

ふたたびゆるく抱きしめられて口づけられる。角度がおかしいし力が入りすぎていて、慣れていないのが丸分かりなキスだ。斜めから伸び上がるような形で顔を近づけているから上唇がほとんど触れていない。そのくせ舌を入れるときは妙に強引で、後ろの髪を引っ張って上あごを上げさせたり、舌を入れた後は戻らないように両手で頭を押さえつけたりしてくる。

暗すぎて近すぎてよく見えないが、きっと彼は眉を寄せた真剣な顔をしていることだろう。息を荒げながら舌を絡めたキスをしているときに浮かべるには、ずいぶんと不似合いな表情を。

長すぎるキスがやんで、幕之内の顔が少しずつ下がってくる。あご、くびすじ、喉仏、鎖骨、

胸、みぞおち。すべての部位に何度もしつこく唇を落とされていると肉牛になった気分になる。肉の部位ごとにマークをつけられ、切り分けられて出荷される牛。こっちの勝手な想像なのに頭にきて、腰骨のあたりにキスをしていた幕之内の髪をつかむと、思いのほか強い視線が返ってきた。邪魔をするなという目。どうにもならない頑固者の目。

ため息をついて手を離し、頭を解放すると今度はキスが下半身に移った。足の付け根、太もも、太ももの裏、内もも、膝、すね、ふくらはぎ、足の甲、と何かを確かめるかのように丁寧丁寧に唇を這わせていく。実際、これだけ時間をかけて愛撫されたら体調が簡抜けになってしまう。もし幕之内と再々戦できることになっても試合前には絶対本人とセックスしないようにしよう、などという当たり前にすぎることを心に決め、やっこの思いで体を起こす。息が切れて仕方がない。

「……もう、ええ加減にせえ。朝になってまうわ」

それだけ言うのが精一杯だ。展開を早めるために脚を開くと、ずっと触られずに放っておかれた性器に柔らかな刺激が走った。ふ、と短い声が漏れる。こわごわ見下ろすと、股間全体に幕之内の黒い頭が覆いかぶさっていた。位置を少しずらずらしながら表面をキスで塗りつぶすように、丁寧すぎるほど丁寧に唇をつけていく。正直、気持ちいいというほどではない。射精させるための愛撫ではないからだ。それでもこれは間違いなく何らかの愛の行為で、しかし愛を伝えるためというよりは自分らしさ、つまり人並みはずれた律儀

さや真面目さや頑固さをいかになく発揮するためにしていることで、ようはいま、彼は彼なりの全力で千堂にぶつかってきているということなのだと思う。それに全力で応えないなんて男ではない。

両手でぐいと幕之内の顔を離させ、後ろに押し倒す。薄闇の中でも彼が驚いた顔をしているのが分かる。のしかかって一度唇を奪ってから、脇に放置してあった黒い紙袋の中を、ごそごそと漁り始める。

ずいぶんもったいぶっていたが、彼が何を買ってきたのかなんて分かり切っている。どうせ大きいサイズのコンドームとローション程度のものに決まって、

ぎゃあ、と怪獣の鳴き声じみた声が出た。コンドームの紙の箱をつかんだはずの手に何か硬いものが当たったかと思うと、ヴィーンと音を立てて動く何か袋の中をさまよう手を追いかけてきた。

「何やこらっ!!」

思い切って取り出すと、どこに出しても恥ずかしくないほどの分かりやすいアダルトグッズが中から現れた。シヨッキングピンクの輝くボディがぶるぶると震えている。

「あつ、それ、一番のおすすめってお店の人に言われたやつです。さすが千堂さん、お目が高いですね!」

「どの目えが高いんやこのドアホ! 店員に騙されて買うただけやないか! こないなも

んいつ使う気やったんや!？」

特に大胆に震えている先端の部分を幕之内の頬に押しつけ、「いだだだ」と叫ぶ様子を忌々しい気持ちで眺める。

「すすすすみません。正直ボクもどう使うのかさっぱりだったんですけど、お店の人の口振りだと持っていて当たり前前のスタンダードな商品みただったので、千堂さんなら知っているかなと……」

「知っとるんと使いたなるんは別の話やろが!」

スイッチを押してバイブレーションを止め、隣の布団の上に放り出す。いきなりどっと疲れたが、まだ序の口だった。袋の中には馬鹿馬鹿しいほど多種のアダルトグッズが詰め込まれていた。

手錠、アイマスク、口枷として使うポールギャグ、荒縄、尿瓶。だいぶSM寄りのセレクトだ。何をどう説明したら店員にこんなものを勧められるのだろう。押し入れを死守するわけだ、と今さらながらに思う。

「とりあえず、いま使えるんはこれだけで」

荒ぶるバイブとSMグッズをまとめて袋にしまい、最後にひとつ残ったものを二人の間に置く。チョコレートの香りつきのローションだ。

「妙な匂いがついとるのが気に入らんが、これだけはまあ合格にしてもええ。せやけどな、

「肝心のもんがあらへん」

「肝心のものって……？」

「ゴムに決まっとるやろが」

ばん、と布団を叩き、正座してゐる幕之内に詰め寄る。

「こないなわけの分からんもんぎょうさん買わしてゴムを勧めへん？ どないなっとなねやその店。詐欺やないか」

「詐欺って、何も分らないボクに親切にしてくれたのにそんな言い方ひどいですよ。だいたい千堂さんはお店の人に会ったこともないじゃないですか」

「やかましいわっ！ キサマが騙されたことには変わりないやろが！」

もう一度布団を叩いてから自分の荷物を引っ張り出す。ポストンバッグの底の方でバラバラになっていたコンドームをひとつ取り出すと、幕之内のぼかんとした顔めがけてサイドスローで投げつけた。

「いたっ……準備いいですね、千堂さん」

「マナーや。やる前にきっちり用意しとかんと段取り悪うなって途中で止まってまうさかいな」

幕之内はさっと顔を赤らめて目に力を入れ、千堂の太ももに手をかけて身を乗り出してきた。

「あ、あの、段取りが悪くて本当すみません。ここぞつてときに何度も中断させてしまつて申し訳ないです。で、その……それで……」

「そういうんは要らん。もう確認も腹の探り合いも要らん。お互い出すもん出したんや、あとはやるだけやろが」

ローションの蓋を勝手に開け、プラスチック容器を傾けて自分の腹の上に垂らす。とたんにチョコレートの甘い香りが広がる。板チョコや高級チョコではなく、駄菓子のチョコのような匂いだ。つまり慣れ親しんだ香り。

幕之内はへそのくぼみに溜まった粘度の高い液体をこわごわすくい取り、足の間につ、と指を滑らせていく。さっきさんざんキスを受けた性器に丁寧にローションを塗り、完全に勃たせてから改めてローションを補給し直して下へと移る。指の腹が触れるとそれだけで声が漏れる。ここを他人に触られるのは久しぶりだ。不器用に探られるたび、ずっと隠していた自分の欲望のありかを意識させられる。腹の底でマグマが沸き立つ。甘い匂いのする指が少しずつ中に入ってくると、欲望の発生源を直接触られているような心許ない気分になった。

「痛くないですか？」

ぬるぬるした短い指が、おそるおそるの手つきで内壁を探り回す。幕之内の肩を両手でつかみながら熱い吐息だけで応え、もっと奥へ誘い込もうと腰を揺らす。互いに向かい合っ

て座っている状態だからそんなに大げさな動きにはならないのに、感触が少しでも変わるとそれだけで甘い衝撃が走る。それを繰り返しているうちに偶然のように指の腹がいいところに触れ、すぐに腰が抜けそうになった。

もっと、と頭の中で本能が泣き叫ぶ。誰の目にも触れないよう隠しておいた一番の弱点を探り当てられた屈辱と恐怖は、誰より恋した男にそれをされた、という多幸感と不安に引っ張られてぐらぐらになった。もっとしてほしいのに、そこをかすめるたびに怒りが沸いてくる。絶対間違いない頭にくてくるはずなのに、もっと打ちのめしてほしくなる。

千堂が相反する欲望の間で千切れそうになっていたとき、幕之内はすっと指を抜いて「じゃあ、そろそろ」と緊張した声でつぶやいた。

「大丈夫そうならこのままいきます。もし途中で痛かったり苦しかったりしたら右手を挙げてください」

歯医者か、と思ったが口には出さなかった。幕之内はもたもたした手つきでコンドームを装着し、片脚を抱えて馴れ馴れしくのしかかってくる。

信じがたいほど硬く大きく膨れ上がった性器の先端が、足の間や尻たぶを滑る。焦らしができるほど器用な男ではないから、これはおそらく無意識の示威行動なのだろうと思う。自分がどれだけ興奮しているかを相手に知らしめるための、動物じみた仕草。

大きく口を開けてはああ、と息を吐き、抱え上げられた左脚をそのままにして、布団の

上にだらりと仰向けに寝そべる。

光源が豆電球と窓から差し込む街灯しかない状態では、覆いかぶさっている幕之内の顔は暗くなっていてよく見えない。彼は限界まで欲情するとどういうわけか何かに腹を立てているような表情になるから、きつともいまでもそんな顔をしているのだろう。

幕之内はひとつ息をつくと少し体を起こし、手を添えながら、狭い肉の隙間にほとんどめり込ませるようにして性器を押し込んでいった。

あまりの衝撃に、快樂への甘やかな期待は早々に吹き飛んでいった。幕之内一歩という一人の男への、誓いのような願いのような強い恋心も、夜ごと自分の体内に植えつけたいじましい欲望も、ささやかな親近感と楽しさも。

数年ぶりに味わう苦痛は記憶や想像をはるかに超えていて、自分がバラバラになってしまったかのようにだった。こんなに苦しいのにまだ半分も入っていない。どうやら幕之内は快感を覚えていたらしく、切なげにあえぎながら腰をびくびくとけいれんさせている。

許さん、と叫んで首でも何でも絞めてやりたかったが、苦しすぎて声が出なかった。手足が冷たい。全身に噴き出た冷や汗のせいで体温が急降下する。寒くて震えているのか痛くて震えているのか分からなくなってくる。無理やり押し広げられて、体の形まで変えられそうになっている感じがする。人生の中でここまで苦しいことはそうはなかった。幕之内に何発も殴られて死にかけたときと、幕之内にボディを殴られて肋骨が折れたときと

……全部結局こいつやないかい、と自分で自分に突っ込み、苦々しい思いでうつすら目を開ける。

「大、丈夫ですか？」

体の下にいる相手を氣遣っているにしては説得力のない口調だった。だらしなく口を半開きにし、あえぎ混じりの荒い呼吸を繰り返し、快楽のためか笑えるほど舌足らずになっている。

「体がすごく冷たくなってますよ。痛いなら抜きましようか」

即座に首を横に振る。たったそれだけの動きでも結合部に伝わって、微細な苦しさと痛みを伝えてくる。

「そんなにやせ我慢しなくていいですよ。耐えたからって何かいいことがあるわけじゃないですし」

「は、」

「は？」

ごくくんとわずかな唾を飲む。これも虚勢だ。ずいぶん長く口を開けっ放しだったから、飲み込むべき唾液などほとんど残ってない。

「早よせえ、しゃべっとらんで」

「で、ですから、まさにそういう態度自体が……いえ、いいです。じゃあゆっくり、少し

ずついきますね」

彼はそれ以上深追いをしてこなかった。経験上、千堂が絶対に逃げないことを分かっているからだ。

腰にぐ、と力が入り、さらに奥へ入ってくる。意地でも悲鳴をあげたくなかったから必死でうめきを吞み込み、痛みでがちがちに固まった脚の筋肉をゆるめる。息を止めるのをやめ、せわしなく息をするのもやめ、ベンチプレスでバーベルを持ち上げるときのように、ゆったりした呼吸を続けて重みを受け止める。やがてすべてが中に収まってしまおうと、幕之内は感極まったようにああ、と嘆息した。

しばらくの間はそのままだった。馴染むまで待っているというよりは、急にこみ上げてきた射精欲に耐えるためだったのかもしれない。経験の浅い幕之内は保たせるためのやり方など知らないだろう。ひたすら耐える一択だ。

体が冷える前に腰に力が入り始める。そのうち曖昧な動きでは我慢できなくなったのか、いったん腰を引いて力強く最奥をうがってくる。たったそれだけなのに苦しくて仕方ない。死んでも顔には出さないが、腰を動かされていると痛みで吐きそうになる。幕之内はすっかりセックスに夢中になっていて、あ、あ、と小さな声を漏らしながら腰を振りたくっている。その気持ちよさそうな様子に無性に腹が立って、なのに同時に狂おしいほど愛おしくなっていて、両手で幕之内の頬を挟む。

これを望んでいた。ずっと望んでいた。

けれど、この男を永遠に自分のものにしたわけではない。この恋は憧れとは別のものだからだ。

彼のようになりたいたいわけではないし、彼に自分のようになってほしいわけでもない。もうなっているからだ。

自分のものにしたいわけでも、さだたいわけでもない。対等であることを捨てて支配し合おうとしたら、とたんすべてが台無しになるからだ。

その姿を追いかけていわけではないし、追いかけてほしいわけではない。彼のその目に、等身大の自分自身が価値あるものとして映っていられたら、そして同時に、自分の目にも永遠に彼を価値のあるものとして映していられたら、この恋はもうかなったも同然だから。「す、すみません、痛いですか？」

裸の胸に涎のしずくが落ちたことにも気づかず、幕之内は泣きそうな声でそう言った。

「ちゃんと右手挙げてたのに気づかなくてすみません。ずいぶん無理させてますよね。お店の人にも、くれぐれも相手の人に無理させないようになつて念を押されたのに」

鋭い息が漏れ、言葉が途切れる。絶頂が近いのだろう。右手を下げ、残った左手で幕之内の頬を撫でる。何度も撫でる。幕之内は困った顔でその愛撫を受け入れ、頭を傾けて手のひらに唇を寄せる。まるで恋人にキスをするように。

その後はもう、どちらも言葉を発しなかった。

幕之内はとつくに限界のくせにときどき動きを止め、チョコレートの匂いがする性器を慰めるように撫でる。それを繰り返していると深くうがたれている部分が熱く火照り、じんと痺れてくる。そのままをこねられ続けているうちにふいに射精してしまい、痛がゆい快感に身をよじっているうちにさっきまでとは違った声が聞こえてきた。

いく、と切羽つまった様子でささやいた幕之内は、顔を悔しげにゆがめながら千堂の体にしがみついていた。恥骨を叩きつけるように腰を振り、さらに奥へと押し込むように吐精する。ごく普通の男の、ごくごく普通の姿だ。

だからこそ分かる。彼は、少し変わった。少し大人になり、少し乾いて、少し湿っぽくなった。腰と脚をぎゅうぎゅうと押さえつけている幕之内の右手を取り、指に指を絡める。長すぎる射精が終わり、解放された下半身によりやく血が通る。あのまま押さええられていたら壊死するところだ。幕之内は相変わらぬいつまでも萎えない性器を引き抜き、ぎこちなく互いの後始末をしてから隣に横たわった。

「体、大丈夫でしたか」

いまだに息が荒い。よほど疲れたのだろう。時計などもう見たくもないだろうが、今すぐ眠れたとしてもこの調子では朝の仕事に差し支えそうだ。

「痛い思いさせてすみません。血は出てない様子だったのでがとかはしてないと思うん

ですが、苦しいことには変わらないですよ。明日、ちゃんとスパーできそうですか？」
結局それかい、とがっくりしつつも頷いてみせる。以前と違って一回で終わったぶん、疲労もダメージもあまりない。

「そうですか。よかったです。でも、できれば明日はやめましょうね。明後日も。その次も。やっぱりというか何というか、夢中になって声や音のことを途中から忘れたので……」

「ワイは大声出しとらん」

「出てましたよ！ 思いつきり出てました。千堂さんの中では小さめでも一般的には大声なんです」

「お前よりははるかにマシやがな。いつもやかましゅうてたまらんわ」

「それはボクのセリフなんですが!? ……でもまあ、もうずいぶん深夜なので母も犬も起きてることはないかな、と。甘い考えかもしれませんが」

はは、と困ったように笑い、頬を掻く。そんなつまらない仕草さえ愛しい。

「それで明日のことなんですが、ボクも母さんも朝釣りに出た後、夕方ジムに行くまで店に出たり入ったりになると思います。なので宮田くんのところに行くときは断りを入れずに出発してください。もう案内は必要ないですよね？」

幕之内の肩に額をくっつけながら頷く。

「帰ってくる時も連絡とか要らないですから、普通に直接ここに戻ってきてくれていい

です。でもスパーのあと動けなくなってたらそのときは電話くださいね」

「ワイが宮田にやられて動けんようになるかもしれない、いうことかいな」

「え、い、いえ、そんなつもりじゃ……でもその可能性だって普通にあると思うんですよね。宮田くんはライトクロスだけじゃなくて他にもKOパンチ持ってますし。あ、よかったら明日宮田君の試合のビデオ見てから行ってください。ほんとは全部見てほしいんですけど、特におすすめののを並べて置いておきますから！」

返事はしない。かといって引きもしない。笑いもしない。吐息だけで答え、鼻先をしっかりと筋肉のついた首すじに埋める。

意志や感情は言葉を介さなくとも伝わる。よく知った仲でなくとも、二人だけに通じるテレパシーのように感じ取れることがある。初めて会ったときからそうだった。お互い少しも感じ取れず、分かち合えもしないことといったら宮田のことくらいだ。だからこそあんなに嫉妬したのだろう。いまもそうだし、これからもそうする。彼が彼らしく生き続ける限り、永遠にそうなる。

「じゃあ、そろそろ寝ましょうか。千堂さんすぐ眠そうですね」

思ったとおり、千堂が無言でいる理由をまったく感じ取れていない幕之内は、からかうようにそう言って散乱していた服をかき集めた。

「寝る前に服着てください。二人とも裸で寝てたらさすがに申し開きできませんし、風邪

ひいちゃいます。……ついでに自分の布団に戻っていただけたらありがたいんですが」
「分かっとるわい」

とは言っても、暗闇の中ではどっちがどっちの服なのか判別しづらい。幕之内のパンツを間違って履いてしまってもおかしくない。

何悶着かしながらも無事に服を着て、ズレた布団を直して部屋の秩序を取り戻してからようやく眠る準備に入ると、幕之内は安心したようにため息をついた。

「ボクもものすごく眠くなってきました。久しぶりにしましたけどやっぱり疲れますね、こういうことって」

「ま、そやな」

「それで、あの」

「何や」

掛け布団の脇からおずおずと手が出てきて、自分の領地からだらしなくはみ出した千堂の手に触れる。

「……ありがとう、ございました。ことさら優しくしてくれたわけじゃないのは分かっています。二人きりだったから、こういう流れになるのもある意味当たり前というか、予期できたことですよね。前もそうでしたし。それに千堂さんは言うべきだと思ったことを言うて、したいと思ったことをしたただけだと思うんです。いつもそうですから」

「当たり前やろが」

何と言いたいのがよく分からない。なぜ感謝されているのかも。幕之内はさらに声を小さくし、ほとんど独り言のように先を続けた。

「あれ以来、色んな人が慰めてくれて励ましてくれて叱ってくれて、いつまでも落ち込んでないで戻ってこいって、待ってるからって言うてくれました。もっと広い世界が広がってるんだから、こんなところで小さくまとまってちゃダメだって。だけどあんまりピンとこなくて。もちろん理屈では分かるんですよ。あれからタイやフィリピンの国内王者と試合して、本当に世界は広くなって実感しました。でも、どんなに練習しても、どんなに目の前の相手に一生懸命になっても、ボクをひとつに繋ぎ合わせてた原動力みたいなものがすっぽり抜け落ちて、手と足と頭と腹にそれぞればらに力を入れてないと立ってられない感じがするんです。動くには動くからただ頑張ればいいってうだけの話なんですけど」

二人とも微動だにしなかった。激しいセックスの後、こんな深夜に打ち明ける話にしては重すぎる。いや、そうではない。欲も無も快も不快もさらけ出す行為の後でないとやえないことだ。誰にも言えない。自分自身にすら言えない。だから「ありがとう」なのだろう。そこから出てくる言葉が自分を責めさいなむものでしかないとしても。

「手足をちゃんと動かしてくれたものが今まで体のどこかにあったなら、それがボクを小

さくまとめてたんでしょか。小さくまとまってることがそんなにダメなことなら、どうしてボクの体はあんなに自由に動いてたんでしょか。本当は、これ以上先に行ったら一人になるのが怖いのもかもしれません。どれほど遠くへ行っても、これからはもう宮田くんがこの道の先で待っていてくれるわけじゃなくなったから。もういい大人なのに情けないですよね。あれから練習して練習して、色んな人と戦って、強くなったとは言わないまでも少しは成長したつもりでいたけど、ボクシングを始める前から何も変わってなかったのかもしれない。もう宮田くんが待っていてくれないことが、一人ぼっちになることがただ嫌なだけなんて……」

吹き消されたろうそくの火のように言葉が途切れた。

いま二人の手の中にあるものは、彼の一番柔らかで一番弱い部分だ。少し力を入れただけで簡単に握りつぶせてしまう。孤独という名の弱さは野ざらしにされた死体のようなものだから、必死で目をそらし続けていないと生きていけない。したり顔で受け入れたり、笑い飛ばしたり、励ますつもりで否定したりしたら、彼に孤独の存在を思い知らせることになる。

ゆるく繋がったままの手をそのままに、千堂は寝息を立て始める。少々わざとらしいほど分かりやすく眠ったふりをする。すると幕之内はほっとしたように嘖き出し、「おやすみなさい」と小さくつぶやいて、一瞬だけ強く手を握ってから離れた。

薄目を開け、ぼんやりした視界の端に幕之内の背中があることを確認する。多くの人に慰められ、励まされ、叱咤され、承認され、愛され、待っていると言われてもなお、孤独に捕らえられたままのその背中。広い世界に足を踏み出すごとに、寄る辺なだけに打ちのめされるその背中。人々に力強く押され続けてよろけ、いつしか隘路にはまり込んでしまったその背中。

そのときやっと分かった。

悩む必要なんて最初からなかった。彼のところに飛んで行って挑発する必要も、焚きつける必要も、彼自身が怒りたくないことに怒れなどと迫る必要もなかった。ただ強いままであればよかった。自分だけは何があっても絶対に変わらぬまま、彼がどんな苦境にあらうとも「この人にだけは負けたくない」と思える人間のまま、彼がどこにしようとも、どこへ進もうとも、この名と体と存在が嫌でも彼の目に入るところ、一番びかぴかと光っているところであればよかった。悔しくて苦しいときも、道に迷いかけたときも、彼が強いまま、いつまでも変わらぬままいてくれたからこそ先へ先へと進めたのだ。

今度は自分がそうならう。彼の手足を動かす心臓にはなれなくても、半身ではいられる。普段は意識もしないし滅多に目にすることもないけれど、自分は一人じゃない、孤独じゃないと思えるものにならう。

そしてもしいつか彼が迷うときがきたなら、誰よりも大きな目でいよう。茫漠たる世界

を眺め渡して、どこを見ればいいのか分からなくなるときに、ああそうか、こう見ればいいんだ、ここを目指せばいいんだと思えるような……。

すうすう、と静かな寝息を立てて眠る幕之内の背中にそっと手を触れる。あたたかくて弾力があって、誰より強い筋肉に覆われたところ。自分たちを否応なく結びつけた純粹な力の源。彼の意志や感情を雄弁に語る場所。

大事にせえよ、と声に出してぼつりとつぶやく。

＊

何だいもう、二人して甘い匂いさせて、と言われてどきりとした。千堂は内心どきりとしただけで済んだが、幕之内は完全にパニックを起こした。しかし彼の必死の言い訳は軽く聞き流され、「はしゃぐのはいいけど布団でお菓子食べ散らかすのはやめなさい。子供じゃないんだから」というまことに都合のいい一言でまとめられてそれで終わりにされた。もしあのローションが花の匂いだったらこうはいかなかっただろう。

結局、次の日は朝の四時半などという信じがたい早朝に犬に叩き起こされ、何がなんだ

かよく分らないままに着替えさせられて顔を洗わされて朝食を食べさせてもらった。

あわてて仕事の準備をし始める幕之内を尻目に二度寝を敢行しようとする、「あつ、千堂さん、寝るんですか？ 早くに起こしちゃったので寝てもらってもぜんぜんかわないんですけど、起きた後ロードワークとか行きますよね？ 差し支えなければそのときワンプも一緒に連れて行ってもらえますか？ 今日ちょっと散歩させる時間なさそうなので」と食い気味に頼まれて断れなくなった。半目のまま頷き、幕之内の足音が遠ざかっていくのを聞きながら目を閉じる。すぐに夢も見ないような眠りが訪れ、次にまぶたを開けたときにはすでに二時間が経っていた。

こち、こち、と時計の秒針が鳴る音で目が覚めた。頭も上げずに視線だけを向けると、短針は七、長針は二を指していた。七時十分。普段ならもうとつくに起きてロードワークへ行っている時刻だ。

そう思うともうだからだとしていられなくなって、寝そべっていた畳から起き上がって首を回す。雑に畳まれたままの布団からかすかに安いチョコレート匂いが漂ってくる。この家の居心地の良さと穏やかさをぶち壊す匂い。天日に干せば抜ける程度の匂いだ、それでも何だか心に引かかった。さすがにもう、ここではできない。

布団を適当な物干しざおに干して戻り、無人の居間をのぞき込む。おすすめの宮田のビデオを出しておく、と昨晚言っていたのにテーブルの上には何もない。忙しすぎて忘れた

のだろう。かといってわざわざ探すのも癪だし、仕事から戻ってきた幕之内に「宮田のビデオのこと忘れとるで」などと言うのもやたらに宮田を気にしているみたいで癪だ。

こっちも忘れていた、という体でさらっと居間を通り過ぎ、ふたたび幕之内の部屋に足を踏み入れる。トレーニングウェアに着替えるために荷物の中身を引っ張り出していると、何となく呼ばれた気分になって顔を上げた。

「……?」

視線の先には本棚しかない。おびただしい数のボクシング関係の本や雑誌が整然と並んでいる。首をかしげて数歩進み、本棚の前に立つ。別に、おかしいところはない。『ボクシング・ファン』の中にポルノ雑誌が隠してあるわけではないし、格闘家向けのトレーニング教本の並びにオカルトな本が混じっているわけでもない。首の角度を元に戻し、着替えを再開しようとしたとき、ようやくそれに気づいた。

雑誌も本もすべてきれいに並んでいるのに、数ミリ前に出ている『ボクシング・ファン』がいくつかある。よく取り出すから探さなくていいようにしているのだろう。その証拠に、ほんの少しだけ飛び出している号にはいづれも背表紙に宮田の名が記されている。几帳面に凹凸した背表紙を指ですす、とさかのぼっていった、一番初めの号で手を止める。

発行年月日はずいぶん前、デビューして間もなかった千堂が西日本新人王を戦っていたころだ。ということはあの二人も東日本新人王トーナメントに出場していて、対戦の約束

が果たされることを純粹に楽しみにしていたころのことだろう。まだ因縁だ何だと周囲に騒がれ始める前で、千堂はもちろん業界の誰もが二人のことを知らなかった時代。

一瞬目を閉じて息を吐き、その号を引っ張り出して広げる。誌面の中ごろに新人王に出場する有力選手の特集が載っている。間柴や宮田は扱いが大きいが、幕之内は顔しか載っていない。次のページにはいまより多少若かったころの自分がいて、ずいぶん威勢のいいことを放言している。事実この通りになっているので恥ずかしくはないが、少しだけむずがゆい。みな、きっと同じ心境だろう。

ざらざらした紙に印刷された、まだ何も知らなかったころの幼い自分をひと撫でし、雑誌を閉じる。元のように数ミリ前に出した状態で戻そうとしたのに、急に嫉妬心が湧き出てきて思い切り力を込めて奥まで押し込んでしまう。そのとき表紙に書かれた「新人王T開幕！ 輝け期待の新星！」という見出しがちらと目に入った。

「期待の新星」。その中の一字を姓に持つ星が、少し嫌な顔をしたあの言葉だ。

このころは全員が期待の新星だった。そう言われて皆が胸を張った。「新星」が死にゆく星を指していることなんて知りもせずに。

新星とは、新しい星のことではない。新星の輝きとは、死んだ星が隣の星からガスを吸い寄せて爆発するときの光を指す。本当に消えてしまうその日まで、何度も何度も別の星からエネルギーを吸い取って爆発する。それを思えば、「期待の新星」はそう的外れな言

葉ではないのかもしれない。自分たちはいずれ消えるその日まで、対戦相手から気力や氣迫や負けたくない気持ちをとことん吸い尽くして輝く。何度も何度も輝く。周囲はこれこそが新しい星が生まれる光だと思い込み、希望を託し、その強烈な輝きを称える。

そんな爆発と賞賛の繰り返しを、自分たちは人生で何度繰り返すことだろう。

そしてその虚しい繰り返しを人生で大事だと思える人間が、自分の他にいたいどれだけいるだろう？

そこまで考えてため息をつき、雑誌を数ミリ前に出た元の状態に戻す。幕之内が自分の心臓をいつでも探し当てられるようにしておく。

きっと、宮田にとっても幕之内は手足を動かす心臓だ。互いが互いの心臓だ。片方が鼓動を止めてしまったらもう片方も生きてはいられない。

だからと言って別に何もしてやらないが、あの頑固で不器用で潔癖すぎる男をどうしても嫌いになれない自分がいる。幕之内のように目を輝かせて応援する気にはちっともなれないが、突き放して知らん顔ができるほどにはもう他人同士ではない。定期的に爆発する星仲間。実際に拳を合わせてみたからこそ分かったことだ。だからまあ、東京に来てよかったのかもしれない。

本棚から離れて着替えを済ませ、廊下でそわそわと待機していた犬に一声かけて外へ出ようとしたとき、がらりと玄関の引き戸が開いた。戸口に現れたのは大きな荷物を持った

幕之内で、帽子の奥の大きな目が千堂を捉えるなり「よかったあ」と言つて満面の笑みを浮かべた。

「よかつたて、何がや」

「千堂さん、いま走りに行くところだったんですよ。入れ違いにならなくてよかったです」
千堂はしばらく首をひねっていたが、幕之内の背後にいる人影を見てやっと納得した。青い顔をした柳岡が立っている。身なりは普通だが、眼鏡が少し傾いているし全体的によれよれになっている。疲れているのか寝不足なのか飲みすぎなのか。おそらく全部だろう。

「……何や。今さら何しに来たんや」

「お前を迎えに来たに決まっとるやろが。いつも幕之内くんに迷惑かけよつて、早よ荷物まとめて挨拶せえ」

「余計なお世話や。もうアンタがおらんでも一人でやってけるで」

「何が『一人でやってける』や。反省の色はないんか。お前の後を追いかけて謝って回らなあかんこっちの身にもなれっちゅうねん。いつの間にか星まで抱き込みおつて、見つけるのによけいに時間かかったやないけ」

「それが余計なお世話や言う тоннねん。自分のケツくらい自分で拭くわい」

「十年早いわこのドアホ」

「何やと?」

朝一番であるせいか、二人ともやり取りにいまいち余裕がない。とはいってもいつものことなので気が済むまで言い合えばすんなり丸く収まるのだが、そんな事情を知らない幕之内は血相を変えて止めに入ってきた。

「そ、そんな、家出した子供とその親みたいない言い争いしないでください。そ、そうだ、よかったらお二人ともお茶飲んでいきませんか？ さっきご近所さんにお茶菓子もらったので一緒に食べましょう。落ち着いた状態で話せばきっと分かり合えますよ」

「いらん」

ふいと背を向け、大股で幕之内の部屋に引き返して上着と荷物を持って戻る。ついに散歩に連れて行ってもらえなかった犬が、大きな荷物をふんふんと嗅ぎ回っている。

「幕之内」

「は、はい？」

期待を込めた目で千堂を見上げている犬の頭に手をやり、猫にするように指の背で軽く撫でる。

「こいつ、散歩に連れて行かれへんかった。すまん」

「いいですよそんなの。時間なかったですし、ボクもあとでロードワーク行くのでそのとき連れて行けばいいことですし」

「お前の親は戻ってこおへんのか？」

「母はまだ船に残ってますけど、何かご用ですか？」

「礼言うといってくれ。一晚世話になったさかいな」

しっかり靴ひもを結んで立ち上がり、柳岡の脇に並んで「行こか」と促す。

「そやな。……ほな幕之内くん、ほんまおおきに。今日の夜にでも改めて伺って親御さんにお礼言わせてもらうさかい、待ってな。そのときスパーの途中報告もできると思うで」

「せえへんわ。妙な期待さすな」

「まあ確かに、一郎くんにこてんぱんにやられとつたらお前は話なんぞでけへんやろがな」

「そういうこととちゃうわ！」

もうすっかりいつものペースだ。柳岡がいると否応なく意識が日常へと戻っていく。少し残念なようなほっとしたような、どちらにしろ長かった冒険はここで終わり、あとは決めた道を進むだけ。歩きにくいことこの上ない道を、つまづきながら傷つきながら、それでもひとときわ派手に光る巨大な流れ星としてがむしゃらに先へ先へと駆け抜けていくだけ。何と言うことのない日常が一番の冒険だ。

「あ、あの、道中お氣をつけて。それと、その……」

「またな」

振り返りながらもしっかりと目を見合わせ、ほんの少しだけ微笑してそう言う。「また

な」。幕之内はその意味をしっかり受け取り、照れくさそうに頬を掻きながら「はい、また」と応えた。お互いにしか通じない、ちょっとしたサインだ。

玄関の引き戸を閉め、のんびりしたペースで駅へと歩いていく。今日は朝から快晴だ。風が強くて埃っぽく、陽の光にあたためられた草や土の匂いがあたりに立ち込めている。春らしいその空気の中、柳岡は何度も深いため息をつきながら歩を進めている。

「何やねんさっきから。具合でも悪いんか」

「二日酔いや。日本中おんどれを探し歩いて疲れとった中で飲んでもたさかい、なかなか効いたわ」

「そらすまんな。せやかて飲みすぎやで。そないに盛り上がったんか、オッサン同士で」
「そらそうや」

柳岡はふっと笑みを浮かべ、わずかに弾んだ声で答えた。

「あの人は長いことずっとワイの憧れのボクサーやったんや。強くてパンチが鋭くて華麗で、立ち振る舞いもインタビュの受け答えもとにかくクールな男やった。試合前はあのスカした面をぶちのめそうとはやとったのに、最初にカウンター食らった瞬間にはもう夢中になっとったわ」

また憧れの話か、と思った。柳岡にまでこんな話を聞かされるとは思わなかった。

「あの人に負かされてボクシングに見切りをつけたところまではまあ、まだよかったんや

けどな。あの人が負けてリングから消えたとき、どないしたらええもんか分からんようになってもうた。理由はもちろん分かったが、こっちは納得いかへん。一度の負けで消えるな、こっちの気持ちどないしてくれんねんと思うたわ」

気だるげな咳払いを挟み、さらに先を続ける。

「憧れという気持ちは意外にも、見返りを必要とするもんなんや。恋愛と同じやな。誰かに憧れれば憧れるほど、恋心を向けたぶんだけそいつに輝いてほしい、一番でいてほしい、こっちを見てほしいという気持ちから逃げられんようになる。けど相手は生身の人間や。返ってくるもんなんぞあるわけがない。そのせいで恋心が憎しみに転じることもあれば、納得いかん気持ちを無理にかき消そうとして空っぽになってまうこともある」

「……何の話をしとんねん」

「そやな」

はは、と柳岡は笑い、たった一日で盛大にしわが寄ったジャケットに手のひらを擦りつける。

「けどな、憎んだり空っぽになったりせんでええ方法もあるんや。それは相手をよく知り、相手に自分を知ってもらうことや。話すんでも飲むんでも一緒に何かするんでもええ、時間をかけて理解し合えば、見返りのない苦しさから解放される。唯一それだけが恋した相手と自分を対等にしてくれるんや。絶対に自分を見てくれん相手でも、手が届かんように

なってもうても、遠くへ行ってもうても」

ふと足が止まった。

自分は世の中の大多数とは違って、人に憧れる気持ちが分からない人間だ。

幕之内が宮田に抱いている気持ちなどまるで理解ができない。

ずっと前に幕之内に植えつけられた種は誰のものとも違う芽を出し、決して人に見せられないほど異形の花を咲かせている。

だから彼に危険な欲望を向けることになって、肉体関係を持つはめになって、長い間醜い嫉妬を抱え続けることになって、敵とも恋人ともライバルとも友達とも言えないようによく分からない関係になってしまったのだと思っていた。

唯一それだけが、恋した相手と自分を対等にしてくれるんや。

けれど、とっくの昔から千堂はそうしてきた。

彼を理解しようと、彼に理解してもらおうと試みること。

激しい恋から生まれる憎悪や空虚さを愛に変える方法。

対話も言い合いもじゃれ合いもセックスも、その他のすべてのものも、次から次へと沸いてくる恋心を無にしないための愛の行為だった。これは誰にも理解できない感情などで

はなかった。地獄をみる必要もなかった。関わり合おうとし続ける限り、分かり合おうとし続ける限り、自分たちは絶対に孤独になんかならない。

「どないした、千堂。寝不足か？ 妙に甘い匂いさせとるし、幕之内と夜中まで菓子食い散らかして騒いどったんやろ。あんな死闘した仲やっちゃうのに、しょうもないガキどもやな」

「飲んだくれよりマシや。ええ加減本気で酒抜いた方がええで。そないに酒臭かったらジム追い出されるやろ」

「そら大丈夫や。宮田さんも今ごろ二日酔いになっとるわ」

「死ぬほど飲んで二日酔いにならんと対等になれへんのかいな。しょうもないオッサンどもや」

柳岡が苦笑を向けてくるのを知らん顔でやり過ごし、白っぽくかすんでいる春の空を見上げる。

この恋は、いつか収まるべきところに収まってしまふのかもしれない。

行きたかった場所にはもうたどり着けないかもしれない。

何が何でも手に入れたかったものも、最後まで手に入れないまま終わってしまうのかもしれない。

なりふりかまわず欲しかった記憶だけがあとに残り、ぜんぜん違うものを求め始めなけ

ればならなくなるかもしれない。

それでもいい、と思えるほど千堂は大人ではない。

だが、そんなことになったら生きてはいられない、と思うほどもう子供でもない。

自分たちが生きている現実には自分の力だけではどうにもならないものが山ほどあって、変えることもなくすこともできない悲劇が足元にたくさん転がっている。

それでも最後の最後までなくならないものはある。

身も世もなく彼を求めたことは無駄じゃないと思える方法がある。

不器用に迂遠に乱暴に少しずつ積み重ねてきてよかったと思える時間が、思い出が、愛だった行為が、確かにそこにある。

番外編②

半身

The Recurrent Problems

肩に雪、髪に桜、頭に葉っぱ、ズボンの裾に棘がついていることはよくあるが、背中にめんにガムテープがくっついていいることはそうそうない。どこかの壁に貼られていたガムテープがたまたま剥がれてついてしまった、というには長すぎるし、上着にべったりと貼りつきすぎている。

いたずらではないか、と最初は思った。

変態が女子高校生のコートの背に変なシールを貼りつける事件がちょうど世間をにぎわせているところだったから、彼の背中のガムテープを見てそれを思い出さないわけにはいかなかった。しかし子供の背中にシールを貼りつけることくらいしかできない小心者の変態が、こんなに迫力があって怖そうな成人男性を狙うだろうか。ボクシングを始める前の自分だったら、話しかけるどころか半径三メートル以内にも近づけない。

あ、待ってください、背中にかかっていますよ、と言うと、千堂は立ち止まって雑巾を絞るかにようにぎゅうう、と体を横にひねって自分の背をのぞき込んだ。背中を毛づくろいするときの猫のようなポーズだ。

「ほんまやな。何かついとるわ」

「これたぶんガムテープですね。ボク取りますよ。ちょっと待ってください」

と言って手を伸ばしたとき、背中にくっついたガムテープがものすごく長くて粘着力が

強いことに気づいたのだ。

途中でよれて曲がってぐちゃぐちゃになっているが、全長二メートル以上は確実にある。大きな荷物を梱包するときでもこんなに出さない。ということはいたずらか。変態か。一瞬頭をよぎったそれらを笑い飛ばすかのように、千堂は何でもない口調でこう言った。

「あかん、家からつけてきてもうたわ」

「家からって、この状態で新幹線乗って試合見てたんですか？」

どうりでべったりくっついていているわけだ、と思った。自重と座席に何時間もプレスされ続けたら簡単には剥がれなくなってしまう。

「無理に剥がしたらジャケットの色が剥げるかもしれませんね。慎重にやりますから動かさないください」

「ベリーてしてええで。この上着、内側血だらけになっとんねん。今さ라도ないなっても同じやさかいな」

「え!? 血? 何かあったんですか!?!」

「声がデカいわっ! 黙っとれ!」

千堂の手で顔の下半分を思い切りつかまれる。抵抗しようとして手首を押さえると、観戦帰りの客たちがいっせいに振り返ってざわめき始めた。

うわっ、あのときの二人が一緒にいるよー、サインもらお。

やめろよ陰悪な雰囲気で怖いよ、このままケンカになるんじゃない？

アホっ、ケンカなんぞするかいな、と大げさな手振りで抗議し始めた千堂を置いて、一步はさりげなくその場から逃走する。帰りに偶然会っただけとはいえ、自分たちは後楽園ホールの目の前で立ち止まって騒ぐにしては少々人目を引きすぎる。

いったん離れようと思っていたのに千堂も後ろから追いかけてきて、距離を取ったり縮めたりしているうちにいつの間にかドームの目の前の広場まで来ていた。

「おいこら幕之内、何を一人で逃げとんねん」

声が大きい上に口調も威圧的だ。また誰かに見られていないか気になって後ろを振り返ってしまう。

「い、いやだって、目立つじゃないですか、ボクらが一緒にいたら……」

「プロボクサーがホールにおいて目立つのは当たり前やろが。コソコソせんと堂々としとつたらええんや」

それだけ言うと、千堂はつう、と小さく声をあげて左肩を押さえた。さっきの話を思い出す。

「大丈夫ですか？ 上着の内側、ひどい怪我なんですか？ 医務室に行って手当てしてもらいましょうよ」

「手当てくらいしとるわい。そないに大げさに騒いどつたらまたケンカや思われるで」

「それは別にボクのせいじゃないと思うんですが……。でも大丈夫ならしいです。背中ของガムテープはボクが責任もってちゃんと剥がしますから後ろ向いてください」

千堂は無言でベンチに座り、くると背を向けて少し前屈みになった。剥がしやすいようにしてくれているのだろう。

腕まくりをしてベンチの上で正座し、慎重に慎重に、とつぶやきながらそーっとガムテープを剥がし始める。

「だっ、だめだ、やっぱり色が……。っ！ 剥げて……。っ！」

ぶるぶると震える手で二センチほど剥がすと、テープの粘着面にしっかりと赤い染料がついているのが見えた。責任もってちゃんと剥がす、と宣言したのにこの有様だ。自分が情けない。

千堂は肩を大きく上下させてため息をつき、心底あきれたようにこう言った。

「律儀すぎんでキサマ。ベリーやってええて言うとするやろが」

「で、でもそんなことしたら上着の背中が面白い柄になっちゃいますよ!？」

「せやったらこれはこないな柄の服や、って堂々と歩いとったらええだけや。このペースで待ったったら終電行っちゃうわ。早よせえ」

いいんですね本当にいいんですねやっちゃいますよ、と泣きそうな声でつぶやき、ガムテープの端をつかんだ手に力を込めて一気に下へと引く。

すると、絹を引き裂くような音が、夜の後楽園に響きわたった。

「……す、すみません。本当にすみません」

「何謝っとなねん。ワイの背中、どないなっとるんや」

千堂はまたしても限界まで体をひねって自分の背を振り返り、あゝ、と気の抜けたような声をあげた。

「本当に、本当に、本当にすみません。思いっきり剥がしたら破れてしまいました。ちゃんと弁償しますから」

「いちいち頭下げんのやめえ。弁償もいらんわ。内側が血だらけになっとる時点で限界やったださかいな」

申し訳なさのあまりその場に突っ伏したいほどだったが、最後の一言で少しだけ冷静になった。なぜ上着の内側が血まみれになっているのかの謎はまだ解明されていない。近くにいるとふと血の匂いが漂ってくるし、少し腕を動かしくそうにもしている。

刺された、とか、撃たれた、とかなのだろうか。

しかし現実にはヤクザ映画じゃないんだから、普通に生きていたら襲撃など受けない。通り魔がこんな迫力があって怖い感じの人を襲うとも思えない。ああいう犯罪者は子供の背中に卑猥なシールを貼りつける小さな変態と同じで、たいいてい自分より弱くて小さい者しか襲わないものだ。よほど相手が巨大か、よほど危険な目に遭ったのか。

想像を巡らせているうちに不安になって、上着を脱いで立ち上がった千堂をおそる見上げた。

「あの、千堂さん、ここに来る前何かあったんですか？」

「何かて何や」

「事故とか事件とかです。警察行かなくて大丈夫ですか？　よかったら一緒に行きますよ」

「警察？　血いくらいでけったいな妄想しとんな」

千堂はあきれたようにはっと笑い、ひどく軽い調子で「見るか？」と言った。

「見るって、何をですか？」

犯罪現場を？と言いかけてやめ、眉を上げて答えを待つ。返答は言葉ではなく血の匂いのする上着で返ってきて、顔面めがけて放られたジャケットをどけるほんの一瞬の間に、千堂は上半身裸になっていた。真冬の屋外で裸。上着なしというだけでもじゅうぶん寒そうなのに裸。

「これやこれ。そろそろ血止まっとるやろ」

一步の隣にどすつと腰掛け、左肩の背中側に貼られた茶色いテープに手をかける。ぺり、と音がし、急に血の匂いが濃くなった。

「……止まってへんな」

「どうしたんですかこの傷。えぐれてますよ。何があったんですか」

テープが完全に剥がされると傷口があらわになる。固まりかけた血と新鮮な血が混じり合い、肩甲骨から背中へと流れ落ちていく。

「簡単に言うとな、ま、急いどったんや」

右手にテープを握り込み、千堂は淡々と言葉を続けた。

「行きがけに家のふすまに頭から突っ込んで、ふすまの……何や、梓の木のところ、あるやろ。あれが折れて肩に刺さったんやけどな、手当てしとる暇ないさかい、そのまんま上着着たら血だらけになってしもてな。急いで手当てして出てきたら内側が血だらけになったちゅうわけや。ふすまもきっちり直そ思て急いでガムテープでくつつけたんやけど、ま、たぶん今ごろ剥がれとるやろな」

「……ええと」

正直コントとしか思えないが、血の匂いをかいで想像していたよりはずっと平和な理由ではある。二メートルのガムテープの謎も何となく解けた。

しかし、そんなことより突っ込むべきところは他にある。

千堂が右手に持っている血まみれのテープは、絆創膏でもサージカルテープでもない。ガムテープだ。ガーゼを挟みもせずガムテープをじかに、傷口に……？

「千堂さん、その傷、そんな手当てじゃ治らないと思いますよ」

「何やそら。不吉な予言すな」

予言じゃないです。ガムテープを絆創膏代わりに使わないのは人としての常識です。と言いたかったがぐっと飲み込んで立ち上がり、破れた上着を差し出す。

「とりあえず服着てください。ホールの医務室行っちゃんと手当てしてもらいましょう。ボク、付き添いますから」

「余計なお世話や」

「はい？」

血がつくのも構わず元通りシャツを着た千堂は、それ以上何も言わずに大股で歩き出した。水道橋駅の方角だ。

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ！ そのまま帰るつもりですか？」

小走りで追いつき、千堂の斜め前へと躍り出る。

「せめて消毒だけでもした方がいいですよ。ふすまの木枠なんてきれいなわけないですしそのままじゃ化膿して危、」

「分かつとるわ」

そう答えるなり進行方向を変え、蛍光灯で煌々と照らされたコンビニの中に入っていく。頭の中に「？」を大量に浮かべながらもあとをついていくと、千堂は日用品コーナーに柄悪くしゃがみ込んで応急処置用品を吟味していた。妙に上機嫌な様子だ。やることなすこと急すぎてついていけない。

「コンピニにもこんなん置いとるんやな。ゴムくらいしか知らんかったわ」

「ええ……そうですね……」

「その顔何や？ キサマの言う通りにしたったやんけ」

「ええ……そうですけど……」

振り回されるのはいつものことだから別にいいのだが、彼がすんなり受け入れられることとそうでないことの違いがいまだに分からないので妙に疲れる。

消毒液とガーゼとサージカルテープを適当に選んで会計を済ませ、半透明の袋をぶら下げた千堂とともに店を出ると、ドーム帰りの野球ファンで道がごった返していた。駅へと向かう黒とオレンジの波に逆らってさっきのベンチへ戻り、何となく隣り合って腰を下ろす。氷のような座面に尻が触れたとたん怖気が走る。

「傷の手当て、ボクがやりますよ。後ろじゃやりにくいと思いますし、さっき上着を破ったお詫び代わりに」

「上着はかめへん言うとるやろ。キサマもう帰ってええで。最後まで付き合わんでええ」

千堂はがさがさ音を立てながらビニールの中から処置道具を取り出し、ふたたび上半身裸になった。

「で、でも、一人にはしておけませんよ。またわけの分からない方法で手当てしてないかどうか見届ける義務もありますから」

かといって千堂に上から目線でものを言えるほどの医療の知識が自分にあるわけではない。無理やりホールの医務室に引っ張っていかうにも今ごろもう閉じているだろうし、知り合いに医療者は、もちろんいるが、こんな時間によく知らない人を連れて家に押しつけるなんてとてもできない。大げさに考えすぎなだけでしょ。せんだだの浅い刺し傷とも言えるわけだから放っておいてこのまま帰宅してもいいような気もする。

そうやってぐるぐる考えているといつの間にか応急処置は終わっていた。傷にガーゼを当てた上に雑に貼られたサージカルテープの、その青みをともなった白は冬の夜の空気や彼の濃い肌の色から浮かび上がっていて、どことなく奇妙な感じがした。

血まみれのシャツを着直し、血を隠すために破れたジャケットを羽織った千堂は、ベンチの上で軽く息をついてかたく拳を握りしめた。寒気による身震いを止めるためだ。

「あ、よかったらボクのコート使ってください。背中破れてたらあったまりませんし」「いらんわ。いちいち余計なことすな」

「いいから着てください！ 駅に着くまでいいですから！」

千堂のルールやペースに合わせるのがだんだん面倒になってきて、さっさとコートを脱いで無理やり羽織らせる。袖を通すにはサイズが小さすぎるから肩にかけさせているだけだ。セーターだけになってしまうと不安を感じるほど寒くて、早くあたたかい地下鉄の車内に移動したくなってくる。腕で体を抱えて小さくなりながら駅へと歩き出そうとしたが、

どういうわけだか千堂がついてこなかった。

ベンチに足を組んで座ったまま、妙に鋭い目で一步をにらみつけている。

また何か気に入らないことでもあったのだろうか。有無を言わさずコートをかけられたのが屈辱だったとか、道を行く野球ファンが巨人ファンばかりだったからとか。

「今度は何です？　ボクの顔に何かついてますか？」

「ついとる」

思わず頬を触ったが別に何もついていない。頭に葉っぱでも乗っかっているのかと思つて髪に触れたとき、千堂は猛獣のように素早く立ち上がって後ろを向かせた。

「これや」

セーターの背中から、ぺりり、と軽い音が聞こえる。すぐに振り向いて見ると、千堂の手には五センチ四方ほどのシールがあった。

「えらいけつたいなもんついとるで。何やこら、キサマの趣味かいな」

その白いシールには「一発で気持ちよくしてあげる」とマジックで殴り書かれていた。背すじがぞわりとする。これは、巷を騒がす変態シール貼り男の仕業ではないのか？

「け、け、」

「け？　何や？」

「警察に通報してきます！　ボクは男だからいいですけど、こんなのを放置してまた女性

や子供が被害に遭ったら大変ですから！」

「ちょお待てや」

卑猥なシールを指先にくつつけてひらひらさせ、千堂はあきれたようにそう言った。

「キサマ後輩のくせに分からへんのかいな」

「は？」

「昔サインもろたワイにはバッチリ分かるで。この字、鷹村さんの字やろ」

「え？」

両手で千堂の手を固定し、薄オレンジ色の街灯に照らされたシールを間近で見る。

言われてみればそうかもしれない。丸く崩してはあるが異様にきれいな字だ。

そして「一発で気持ちよくしてあげる」という文言。「一発で気持ちよくして」ならともかく「してあげる」というのは女性の背中に貼りつける嫌がらせワードにしては少しおかしいような気もする。

それに、考えてみたら地下鉄でも後楽園ホールでも一度もコートを脱いでいないのにセーターにシールを貼りつけられるわけがない。最後にセーター姿になったのは夕方前、ジムのロッカールームでのことだ。今日は珍しく鷹村もいて、その場にいる全員を巻き込んだ馬鹿話に花を咲かせていた。

となれば、いつものささいなイタズラである可能性が一番高い。

「……もう、仕方ないなあ、あの人は」

脱力してはああ、と息を吐き、千堂の手を解放する。くだらなさすぎるいつものことだから腹も立たない。

「ともかく、発見してくれてありがとうございます。一人じゃたぶんお風呂入るときまで気づかなかったと思うので」

「そのまま貼っとったらええがな。キサマの一発で気持ちよくなれるんは事実やさかいな」ぎょっとして顔を上げると、千堂は軽く首をかしげて一步を見返してきた。

「何やねん、その目は。ケンカ売っとんのか?」

「千堂さんこそ何言ってるんですか、こんなところで。やめてくださいよ。恥ってものがないんですか」

「何を今さら照れとんねん。キサマも飽きるほどいつもパンチ力褒められとるやろが」

「バ、パンチ力の話、ですか!? そ、そうですよ、分かってます、もうすぐ飽きてます!」変な想像をしていたとはとても言えず、盛大に後ずさりをしながらまくし立てる。

こんな勘違いをしてしまったのは、たぶん二人きりだからだ。そしてガムテープのせいで何だか妙な雰囲気だから。

早く忘れないと、と思い、ぎこちなく背を向けて改めて駅の方へと歩き出す。今度はさすがに千堂も黙ってあとをついてきて、いつしか横並びになって後楽園を出る。

「……あの」

「何や」

「そのコート、よかったら大阪まで着ていってください。ボクはすぐ家に着きますから」

「いらん言うとるやろ。背中に別のジムの名前書いてあるもん着とったら柳岡はんにどつかれてまうわ」

「そうですか……」

今日はお互い、背中に奇妙なものがつく日だ。刺し傷に二メートルのガムテープ、大きな裂け目、イタズラのシール、『KAMOGAWA』。

こういう日を何というのだろう。大凶？ 仏滅？ 天中殺？ 別にどれでもいいが、背というのは自分では視認することも手出しもできない場所だから、一人でなくてよかったのかもしれない。背中に何か貼りつけていた同士、ホールの出口で偶然出会ったのも何かの縁なのだろう。

「それじゃ、ボクは地下鉄なのでこのへんで」

「おう」

「千堂さんはJRから東京駅ですよね。お気をつけて」

コートを受け取って頭を下げ、くると背を向けるといきなりセーターの背中をつかまれて引き寄せられた。日々の生活のおかげで少々バランスを崩したくらいではぐらかな

いので、セーターを千堂の手と引つ張り合う形になる。

「……今度は何でしょう？」

セーターが伸びることを心配し始めた瞬間に手が離されて、こわごわ後ろを振り向く。すると千堂は無言で自分の右手の人差し指を掲げた。指先に何か黄色いものがくっついて
いる。

「付箋、ですか？」

「あと三枚、ケツについとるで」

「そんなに!？」

あわてて両手でズボンの尻をまさぐると、折れ曲がった付箋が手にくっついてきた。

「あれ? この付箋、何も書いてないですね。ってことは鷹村さんのイタズラじゃないのかな」

「さっきのベンチに散らばったんとちゃうか。ワイのケツにもついとったわ」

と言って同じ白紙の付箋を見せてくる。何か書いてあっても気持ち悪いが、白紙なら白紙でなかなか不気味だ。

「もう、何なんでしょうね今日は……。ボくら二人とも呪われてるんでしょうか」
「そうかもしれないな」

呪いなんて言ったからってつきり鼻で笑われるかと思ったのに、千堂は呆然と何もない虚

空を見上げながら神妙な顔でそう言った。ワンポがよく何もない空間をじっと見つめていてぎょっとすることがあるが、まさにそういう感じだ。

「な、何見てるんですか？ まさか幽、」

「終電」

千堂が指さした先には、街路灯に照らし出された大きな設備時計があった。

午後九時三十五分。

東京駅発新大阪行きの東海道新幹線の最終電車は午後九時過ぎ。

ということは、

「行ってもうたわ」

「す、すみません！ ボクがお尻に付箋なんかくっつけてたばかりに」

見えないところに何かくっついてたことなんて別に自分のせいではないのかもしれないが、それでも謝らないわけにはいかなかった。背中の傷の手当てをしろと食い下がったのは自分だ。しかしよくよく考えたらそれも別に自分のせいではないような気もしてくる。あとは何だ。シールの件？ ガムテープ？ それとも上着を破ったこと？ その細かい、ささいな出来事すべて？

「あの……よかったらまたボクの家泊まっていってください。知ってると思いますがうちは朝が早いので、普通に起きて朝ご飯食べてから出て遅くなることはないと思います」

千堂は眉根を思い切り寄せ、その提案を品定めするように一步の顔をにらみつけてきた。「今さら遠慮しなくていいですよ。犬はもうすっかり匂いと顔おぼえてますし、母もあの後千堂さんのこと『電話でいつもにぎやかだから覚悟してたけど意外と普通の子ね』って褒めて、」

「あかん」

がくりと頭を落とし、千堂ははあ、とため息をついた。

「ど、どうしました？ 母さんの言う『普通』って常識的とかそういう意味で、特徴がないとかつまらないってことじゃないと思いますけど」

「せやから言うとなねん。キサマ、一人親なんやろ。親に心配かけたらあかんやろ。また夜中に騒いどったら今度はきっちり紹介せえ、て言われるで」

「前もちゃんと紹介しましたよ」

「察しの悪いやつचना。二度もキサマの部屋から変な声聞こえきたらキサマの親がどんなに思うか、いう話や」

「……え？」

顔から血の気が引くのと同時に顔が紅潮する、という不可思議な現象のおかげで冷や汗がどっと噴き出た。

「え、いや、別に、何もしませんよ？ というか千堂さんも何もしないでくださいよ。ど

うして最初からそんなことになる前提なんですか」

「もうお互い収まりつかんやろが」

「お、お互いって、ボクの知らない間に何でそんなことになってるんですか！」

思わず目を剥いて二、三步後退する。

千堂は追いかけてくることはせず、うろたえる一步を動物じみた目でじっと見ている。明らかに狙われている。何で、と思う。己の気持ちにも人の気持ちにも鈍い自分だが、知らないうちに断崖絶壁のきわに立っているなんて思いもしない。

何もしたくないというのは本心だ。以前行き場をなくした千堂を家に泊ませたとき、空が白み始めるまで眠らせてもらえずひどい目に遭った。言いがかりをつけられ、張り合われ、ケンカを売られ、引かないでいたらうれしそうに目を爛々と輝かせて迫ってきて、無視して布団にくるまったら迫ってくるから逃げようがなかった。

この人と一晩過ごして無傷でいるなんて無理な話だ。そんなこと全部分かった上で泊まらせたのだから文句を言う立場にはない。

それでも自分たちは人間同士なんだから理性的に振る舞うことだってできるはずで、熱烈に愛し合う恋人同士だってどちらかが望まなければ「しない」ことを選択するのは当たり前で、恋人同士なんかではない自分たちならなおのことで、千堂はどうか知らないがこっちははっきりと望んでいないのだからそんな、母を心配させるようなことにはならないは

ずで……。

そこまで考えたところで、千堂はうんざり顔で大げさにため息をついた。

「何時間悩んどんねん。ワイはもう行くで。キサマの親にこないだの飯の礼言うといてや」
「え？ どこに行くんですか？ 礼って、ボクの家来ないんですか？」

「行かなくてさっき言うたやろが。このへんで漫画喫茶でもファミレスでも何でも探すわい。
ほなまたな」

「千堂さん！」

気がついたら二メートルほどの距離を猛ダッシュしていて、思い切り腕をつかんでいた。
まだ背を向ける前だったから懷に飛び込むような形になる。あ、この距離ならボディ
打てる、とふと思ってしまう、こわごわ顔を上げると千堂が無表情で一步を見下ろしてい
た。

「相変わらずええ足持つとるやないけ」

「は、はあ、おかげさまで……」

ごくりと唾を飲み込み、腕をつかんだまま頭を上げる。

近い。この距離は良くない。リングの上でもないのにボディを打てそうなところまで近
づくべきではない。

千堂は何も聞かず、悠然とその場に立っている。目線一つで場を支配できる人だから何

も言う必要がないのかもしれない。そのさまはいかにも強者で、自信ありげで、いつも少しだけうらやましい。

「どこへ行くのも千堂さんの自由ですし、口を挟む権利なんてボクにはないですけど、ひとつだけ聞かせてください」

「何や」

「背中にガムテープが貼ってあったのはわざとですか？」

殴られるかもしれない、と思った。そうでなければ突き飛ばされるか頬を引っ張られるか、最低でも今まで見たこともないほど怖い顔でにらまれるだろうと思った。だが千堂はぴくりとも身動きせず、表情も崩さなかった。

「怪我がわざとじゃないことは分かるんです。あれじゃサンドバッグ叩くにも痛いですから、千堂さんが練習に差し支えそうなことをするわけがないって」

相変わらず返事はない。何の反応もない。

「ボクの背中の中のシールも、たぶん本当に鷹村さんのイタズラなんだと思います。千堂さんの字、前に見たことありますけどあれとはぜんぜん違ったから。でも付箋はわざとじゃないですか？ ベンチに付箋が散らばってることなんてありえないんじゃないかと思うんですが。あとさっきからそうやって急に帰ろうとしたりとかするのも何か……ボクにはよく分からない世界の話ですけど、一種の駆け引きみたいなものですよ。女の人にするよ

うなことですよね？」

そこからたっぷり一分は待ったと思う。呼吸すらしていないんじゃないかと思うほど空気が凍りついていて、彼の周囲だけ時が止まったかのようだった。その静寂を破るように、千堂はふうう、と長く息を吐いた。

返事は言葉ではなかった。

つかまれている方の腕がゆっくりと持ち上がり、手が顔の前にくる。握り込まれているから殴ろうとしているわけではないのが分かる。緊迫した自分たちのすぐ横を残業終わりのサラリーマンが通り過ぎていく。通行人が視界から消えたたん、その手が素早く後頭部に回され、首すじにかぶりと噛みつかれた。

その瞬間、足の先から頭のとっぺんまで強すぎる電流が流れ、「は」と「あ」の中間くらいの弱々しい悲鳴が腹の底から漏れ出た。すでに一メートルほど離れていたサラリーマンが振り向いたときには後頭部も首も解放されていて、二人とも何事もなかったかのように立っているだけだった。

体の外側はともかく、内側は大惨事だ。

試合中、意識を失って我に返ってまた失って、を繰り返しているときのように思考も感覚も距離感もぐちゃぐちゃで膝が笑う。心臓は強く鳴り、やりすぎなほどに全身に血を送り続けている。千堂の腕をつかんでいる手はみっともないほど震えていて、すでに破れた

ジャケットに二つ目の穴を作ろうとしているかのように力がこもってしまう。

「あの」

唾を飲み込む音が浅ましく大きく響いた。

「やっぱりうちに来ませんか。ボクら知り合いなのに、困ってるの知ってるのに、このままファミレスで時間つぶして帰れなんて言えませんか」

気まずいほど強い目で見つめているのに、千堂は平然と見つめ返してくる。一瞬とはいえる意味キスより過激な行為をしたことも、さっきの質問にも答えていないことも、まるで気にかけていない素振りだった。

「それと……ああもう、何がわざとで何がわざとじゃないかなんていいですから、駆け引きとかももういいですから、とにかくこんな寒いところに立っているのはやめて移動しましょう。あったかいところに。上着破れてても大丈夫なところに」

膝がかくかくと震えているのは、たぶん寒さのせいではない。恐怖だ。抑えても抑えても膨れ上がってくる欲望が恐ろしくてたまらない。

「地下鉄の中ならあったかいですから、最寄りまで乗り換え一回で着きますから、早く、」
「いつまで続くんや。まどろっこしいやつだな。キサマに任せとったら朝になってまうわ」
ため息混じりにそう言ったと思うと、千堂はいきなり腕をつかんで駅とは反対方向へと一歩を引っ張っていった。すさまじい力だ。

「え、ちょっと、どこ行くんですか？ 地下鉄の入り口、向こうですよ」

「お前の家には行かん言うたで。親を心配さすな」

「な、何でそんなわけの分らないところで妙に頑固なんですか！ 上着破れたまま外ろろうしてたら凍死しちゃいますよ」

「心配あらへん。キサマの望み通り、あったかいとこに連れてったるわ」

「あったかいところって？」

横断歩道を渡ったところで急に手を離される。あごを上げて斜め上を見上げている千堂の視線をたどると、そこにはひどく見慣れた看板があった。

「……ええと」

後樂園ホールに行くとき、あるいは帰るときによく見るビジネスホテルだ。地方や海外から来る選手はこういう近隣の宿泊施設に前泊して計量や試合に臨んでいる。

が、一步は都内に家があるから利用したことはない。これからもないと思う。こんなことでもなければ、たぶん一生。

思い悩んでいるとふたたび腕をつかまれ、今度は中に引きずり込まれる。

「せ、千堂さん、いきなりこんなの、だめですってば！」

いつものようにそう叫んでしまっただけで激しく後悔した。フロントの目の前でこんなことを言ったら強面の男に無理やりホテルに連れ込まれそうになっていると思われる。い

や實際その通りなのだが、同年代で同性で同じ階級のプロボクサーで、腕力でさほど後れをとっているとは思えない相手に力づくでホテルの部屋に引きずり込まれるなんて、そんな情けないことはさすがにできない。

腕を引っ張っている手を軽く叩いて外させ、ひとつ息をついてから千堂の両肩をつかんでこっちを向かせる。

「千堂さん」

「何や？ まだゴネる気いかないな。こないなとこまできてもうたらもうタダでは帰れへんで。観念せえ」

「とりあえずそういう言い方やめましょう。本気で誤解されます」

フロントの方をちらりと見て咳払いをし、先を続ける。

「まず最初に言いたいことはですね、ボクはここに泊まる気はありません、ってことです。明日は朝釣りの予約が入ってるので何が何でも夜のうちに家に帰ります。お金はちゃんと一泊分払いますから」

「ほうか。律儀なやつちゃん」

「はい。でも、千堂さんがこういうちゃんとしたところにいるくれるのは安心できるのでありがたいです。どんな意図があったにしろ上着が破れたのはボクのせいだし、それで体調崩したりしたら申し訳ないですし」

「ほうか」

「はい。なので……そういう感じでお願ひしたいのですが、いかがでしょうか？」

肩をつかんでいる手と視線にぐっと力を入れ、決死の覚悟でそう言うのと、いきなり肩に腕を回されて無理やりフロントに連行された。「大人二人、一泊、ツイン、割引料金で頼むわ。このツレ仕事あつて途中で出て行くさかい、まけてえな。ええやろ？」とマシンガンのようにまくし立ててすげなくノーを突きつけられた千堂に連れられてエレベーターに乗る。狭いエレベーターの中でもがっちり肩を組まれたままなのに、千堂はいっさい口をきかない。心臓がどきんどきんと鳴っている。

つ、ついにやってしまった。やったのは自分ではなくて千堂なのだが、とにかくやってしまった。何度となく肉体関係を持った相手をなし崩し的にホテルに連れ込むなんてそんな、まるで遊び慣れた男のようなことをしてしまった。状況的には連れ込まれたのはむしろ自分なのだが、帰りかけていた千堂を呼び止めて最後のきっかけを作ったのはこっちなのだから同罪と言える。それどころか最初はホテルどころか家に連れ込もうとしていて、母や犬に声を聞かれたら聞かれたでまあいいやくらいのをやけばちな気持ちにはなっていたわけだし、遊び慣れた男どころか下半身でしかものを考えられない色狂いのようになっていたことは間違いないのだ。恥ずかしくて情けなくて頭がパンクしそうになる。

だだだだだだだだだだこんなの、早く帰らないと、思っているうちにエレベーター

の扉が開いて、廊下を引きずられて、あえなく狭い部屋の中に放り込まれる。

そのまま荷物みたいにシングルベッドの上に放り出され、扉が閉まる音がするのと同時に大きな影が覆いかぶさってくる。肉食獣が追いつめた獲物を最後に仕留めるとき動きだ。決して急がず、なのになににすさまじい速さで、見とれるほどしなやかに凶暴に。人間以外のものになれた試しのない自分には絶対に出せない空気。

何だか急に悔しくなつて、馬乗りになつてゐる千堂を焦燥を込めた目で見上げる。

「脱げや」

一步の腰にまたがつたまま、穴のあいたジャケットとシャツをぞんざいに脱ぎ捨てながら、千堂は苛立つたような声でそう言った。

「早よせえ。お前の服も破いてまうで」

「い、いや、あの、シャワーくらい浴びさせてくださいよ。ホール行く直前に船から荷物下ろすの手伝ってきたのでいまたぶん魚の匂いが、」

「ええから早よ脱げ。ここまで来るのに何やかんやで一時間以上かかってんねんで。これ以上は時間をもつたいたないやろが」

ひ、と悲鳴をあげている間にコートをはぎ取られ、セーターをたくし上げられて無理やり首から引き抜かれる。

二人とも上半身裸になるともう下を脱ぐまで待てなくて、力づくで体を引き寄せてがむ

しやらに抱きついて顔じゆうにキスをし合った。背中も腕も、お互い力任せにつかんでいるから痛くて仕方ない。キスもキスというより噛みつき合いで、血こそ出ていないが顔も首すじも胸も肩も歯型や吸い跡だらけになっている。

この調子だとまた翌朝言い訳が必要になる。板垣は梅沢や母よりもずっと目端がきく人だから、この歯型が犬のものでないことにすぐ気づくだろう。もう先輩ってば、誰とそんな激しいことしてきたんですかあ、とあの人なつこい笑顔で聞かれたら、何て答えよう？ ほとんどあえぎのような呼吸音が響く中、どちらともなく下を脱がせ合って窮屈だった前をくつろげる。どちらも生殖器が腹につきそうなくらい大きく硬くなっている、密着した状態だと簡単に触れ合ってしまう。ほとんど同時にうあ、と声が漏れる。興奮しすぎてぬるついた先端が擦れ合うもどかしい刺激に我慢できなくなって片手で腰を抱き寄せ、もう片方の手で頭をつかんで唇に吸いつく。

千堂はいつも、体の表面以上に粘膜が熱い。口の中を貪り合っていると粘膜づたいに熱が移ってきて汗が止まらなくなる。肉体の内側がいつもこんなに燃えていたら早死にするんじゃないだろうかと思ってしまう。くすぶりを必死にかき集めている今の自分には、その尽きない熱が、消えない炎が、ときにまぶしくてたまらないことがある。

両手で互いの髪をかき回し、舌や唇を乱暴にすすりながらむき出しの下半身を押しつけ合う。快感を得たいからではなくて、どれほど自分が興奮しているかを相手に知らしめた

いからだ。

やがて横向きで体を密着させているのにも耐えられなくなり、馬乗りになろうとして力を込めると心外だとばかりに同じことをやり返される。手首をつかもうとしてもすぐに逃げられて反撃がくる。片方の腕をシートにぎゅうと押しつけられて仰向けにされかけ、むきになってそのまま押し返すと手と手で押し合う状態になる。

純粋な力比べで簡単に負ける気はしないが、簡単に勝てる気もしない。まるで仇敵同士のように強くにらみ合ったまま数秒経ち、だんだん欲望を抑えられなくなってすがるようにその目を見る。

「千堂さん、お願いですから、しばらくおとなしくしててください。相手がボクじゃ満足できるか分かりませんが、できるだけ努力しますから」

息も絶え絶えにそう言うと、ふっと力が抜けてシートに体が沈んだ。

唇は半開きで目は完全な無表情、筋肉を弛緩させて全身を他人に預けているその姿は、何の恥もてらいも恐れも弱さも感じさせない、威風堂々とした獣そのものだった。

ふたたびわいてきた羨望に見て見ぬふりをし、おずおずと覆いかぶさって鎖骨に軽く歯を立てる。そのまま強く吸いついて離すとそのUFO型の吸い跡が妙にいやらしく思えて、体じゅうに唇を這い回らせて同じものを残していく。首、胸、みぞおち、わき腹、腕、手首、手の甲、腰、膝、内もも。

最後に血管の浮いているペニスの先端にそっと口づけると、ここにも跡をつけられると思ったのか一瞬体がこわばる。そのおびえを優しくなだめるように愛撫しているうちに膝と足先が落ち着きなく動きだし、右手が一步の頭を執拗に撫で始める。同じことを続けているだけで海水のような味の粘液が舌の上に広がり、髪を撫でつけるように前後していた手がいつの間にか耳と頬の間に移動している。嬌声というには差し迫りすぎている声が聞こえてくるとあととはほとんどもたない。何度となく肌を合わせた経験から、そんなことはもう分かりすぎるくらいに分かっている。

勢いよく吐き出される精液を舌で受け止め、荒く息を吐きながらぐったりとベッドに倒れ込んだ千堂の重たい体を返してうつ伏せにする。そのままのしかかって性交の準備をしようとしたとき、ようやく背中の中の傷の存在を思い出した。よれよれのサージカルテープで留められたガーゼにうつすら血がにじんでいる。そういえば今日は、背中によく変なものがつく呪いの日なのだった。

浅ましく唾を飲み込み、ガーゼの上からそっと傷に口づけるとアルコールと濃い血の匂いがした。さすがに傷口に触るわけにはいかないからガーゼの周囲に吸いついていく。消毒液の味がする。鉄のような味もする。肩甲骨と背中を覆う見事な背筋に沿って腰に下り、ボクサーらしく引き締まった尻に何度もキスを落としていくと、やがてくぐもった声で「幕之内」と呼ばれた。

「もうええ加減にせえ。キサマいつもしつこいで」

激しく息を切らせながらそう言い、千堂は体をひねって背後を振り返った。

「時間ないんとちゃうんか。さっさと一発やらんと終電に間に合わんようになってまうやろが」

仕方なさそうに体を起こしたかと思うと、あっという間に姿勢をひっくり返されて押し倒される。混乱しているうちに頭が股間まで下り、いきり立った性器が熱い口の中に三分の一ほど呑み込まれたのがはっきり見えた。

のどの奥からくつと声が漏れ、腰と太ももが大げさにけいれんする。初めて同じことをされたときと比べればだいぶ慣れたはずなのに、それでも辛い。痛みや苦しみの辛さではない。神経が混線してぐちゃぐちゃになってしまいそうなほどの快楽と、誰にも言えないことをしている背徳感と、快感とともにかすかな支配欲を感じている自分への嫌悪感だ。こういうとき千堂がなぜだか必ず目を合わせてくるのでそういうものが増幅されて余計に辛い。射精欲に耐えようとシートをつかんでいる手を取られ、指と指を組み合わせるようにきゅつと握られると、辛さが簡単に閾値を超えていく。

「千堂さんそれ、だめです、離してください」

その声は懇願というよりは悲鳴に近かった。下半身が丸ごと自分のものでなくなっ

まったかのようにがくがく震え、間違つて喉の奥を突いてしまう。千堂は射精間近の硬くなりきった性器を深くくわえ込んだままえづいていて、よほど苦しいのか顔が真っ赤になっている。

このまま出してはだめだ、と思う気持ちと、このまま出してしまいたい、と思う気持ちが混じり合い、一瞬泣きそうなほど混乱した後、ぎりぎりで理性の方が勝ってさっと口の中から引き抜いた。

「す、すみません、大丈夫ですか？」

吸い跡まみれの背中をさすり、かは、と弱々しい咳をする千堂の顔をのぞき込む。口元を手の甲で覆い、眉根を思い切り寄せたその顔は、まるで試合中ダメージを受けたときのように見えた。

「いつもコントロール効かなくなってすみません。まだ苦しいならうがいした方が、」

「ええから早よ出せ」

「だ、出せて、何を？」

「ゴムやがな。決まっとるやろ」

ぎゅうと両肩をつかまれ、心臓が飛び上がる。

「逃げよ思っても無駄やで。こないなことでして今さら何もしないで済むかいな？ ああ？」
「……だから、そういうこと言うのやめましようよ。もしホテルの人とか隣の部屋の人と

かが聞いてたら勘違いどころか通報されますよ」

はあ、と息を吐き、手をそっと離させる。

逃げようなんて思っていない。こっちだってこんな中途半端なところで今さらやめられない。たとえ腰が引けて逃げたくなっても、逃げたりしたらよけい大変な目に遭うに決まっている。

だいたい、痛かったり苦しかったりするのは自分ではない。千堂の方だ。挿入するといつも真っ青になってかたかた震えているし、形と大きさに慣れるまでは指一本動かせず、まるで人形のようになっている。

これだけ屈強で繊細でも何でもなさそうな千堂でもこうなのだから、世間の普通の人が相手だったら殺しかねないのではないか。「これ」は本当は怖い行為なのではないか。そう思うとますます収まりがつかなくなって、さっき射精し損ねた体がじわりと熱くなってくる。しかしまだ重大な問題が残っている。

「すみません、千堂さん。その、コンドームのことなんですけど、持っていないんです」

「何で持っとらんのや。男の義務やろが」

「義務って言っても、そもそも相手がいないので持ち歩く必要がないんですよ。千堂さんが今日こっちに來てゐるってことも知りませんでしたし……」

とはいえ、もし知っていてもたぶん持っていない。

持ってきているということは、少なくとも欲望を抱いているということ、あわよくばと狙っているということで、そういうのはたぶん自分には無理だ。今日だって、そのことが頭をよぎったのは公道でいきなり首すじに噛みつかれたときで……いや、もっと前の、イタズラのシールの話をしていたときで、いや、もっと前の、自分のコートを羽織っているのを見たときで、いや、そんなじゃなくて、背中 of 傷を手当てしていたとき？ ジャケットを破ってしまったとき？ あるいは一番最初の、ガムテープが背中にくっついていてのを見たとき？ 熱が暴走して酔いになる。酔いは頭に回り、正気とそれつを怪しくさせる。

「あ、あの、すみません。本当にすみません。持ってくるべきだったのは間違いないです。でもないものはないので、このまま入れさせてください。痛くしませんから。中にも出しませんから。約束しますから」

もし他人に聞かれていたら通報されかねない言葉がすらすらと口をついて出る。片膝をつかんで脚を開かせ、足の間に下腹部を押しつける。たったそれだけでぞくぞくと震え上がるほど気持ちよくて、あえぎが止められなくなった。

拒絶されないことは分かっていた。彼の性格を熟知していなかったらそもそも言っていない。自分の卑怯さに、頭がぐらぐらする。

「った！」

急に股間に鈍い痛みが走った。

おそるおそる見下ろすと、性器が太ももの間に思い切り挟まれていた。

「ちょ、待、痛いんですけど、急に何なんですか？」

力が強すぎて千切れそうだった。千堂は真顔のまま、煽るでもあざ笑うでも怒るでもない無感情な低い声でこう言った。

「何や、キサマもちんぽでもの考えるふつつうの男やったんやな」

「……へっ!? そ、そんなんじゃないですよ！ ぜんぜんぜんぜんそんなつもりじゃ、」

「せやかてゴムはいつもきっちり用意しておかなあかんで。キサマもワイも、その辺のコンビニに売っとる普通のゴムには入らへんさかいな」

ふ、と力が抜け、股間が解放されたと同時にこそごと音がし始める。ほどなくして破れた上着の内ポケットから銀色の小さいものが出てきて、シーツの上にばらばらと落ちた。全部コンドームだ。十個はある。

「いつも持つてるなとは思ってましたけど、こんなにあったんですね」

「残さず使えとは言うとらん」

そういうことじゃなくて、と言いかけてやめた。頭が限界まで熱くなったまま戻らない状態で会話するのは無理がある。

「ふつつうの男」。

普通であることにかけては自信のある自分だが、そんな普通は想定していなかったから

恥ずかしくてたまらない。

顔の赤さをごまかすように銀色の袋を一つ手に取り、中身を出そうと切り口に手をかけると、中からはコンドームではなくどろっとしたものがあふれ出てきた。うわ、と小さく叫ぶと同時にもう片方の手で受け止める。透明で細かな気泡が入った粘性の高い液体。これは、つまり。

「こ、こんなのも持ち歩いてるんですか、と、というか携帯用サイズ売ってるんですか。は、初めて知りました」

「くだらんことでいちいちビックリすな。早よやらんとほんまに終電なくなんで」

向かい合わせになって両脚を開き、触りやすい姿勢になってくれる。ねとねとした液体を絡ませた指でかたくこわばったそこに触れると、肩に乗った手がびくと力が入った。周囲をそっと何度も押して指の存在に慣れさせ、熱くなってきたころにようやく肉をかき分けるようにして少しずつ中に侵入させていく。奥へ進むたびにおびえているかのように太ももが細かく震え、そのくせもつと奥へ誘い込もうとして腰がうねる。少し硬いところをかすめるたびに指が食いちぎられそうなほど絞られ、頭の中身がぐつぐつと煮立ってくる。早くここに入りたい。めちゃくちゃにしたいしめちゃくちゃにしてほしい。下半身でものを考える色狂いと何の違いもない、

自分の中の「ふつつうの男」の部分が胸の裂け目からぬらりと顔を出し、指をさっさと

引き抜いて千堂の体を突き飛ばしてベッドに倒して思い切り体重をかけて覆いかぶさる。「そろそろ入れます。最初はあんまりもたないかもしれませんが、これならたぶん何回かできると思うので」

千堂の頭のあたりに散らばっているコンドームの袋を破いて本体を取り出し、馬乗りになったまま見せつけるように自分の性器に装着する。

なんていやらしいことを、と思うがやめられない。己の欲望を恥じず、何も隠さない彼のようにはなれなくても、こういう人の前でくらは自分が浅ましい普通の男であることを許してもいいような気がする。いつもは無理だが、ときどきなら。

脚をぐ、と開かせて膝の裏に手を当て、腰を押しつけながら挿入していく。潤滑剤のおかげかだいぶ慣れたからなのか、記憶にあるよりはずっとスムーズだ。それでもたびたび止まって大きさに慣れさせ、呼吸が落ち着いてからでないと奥へ進めなくなる。

時間をかけてだいたい全部を収めてしまうと、千堂はさっきまでの様子が嘘のようにおとなしくなり、筋肉をこわばらせて息を止めていた。目は何か恐ろしいものでも見ているかのように限界まで見開かれ、あさっての方向を見つめている。その青ざめた顔は「被害者」という表現がぴったりで、少し興奮すると同時に申し訳ない気持ちになった。

そんなに苦しいなら何でこんなことをわざわざしたがるのだろうか。暴力や痛みが性欲や快楽に転化されるなんて、そんなことが本当にありうるのだろうか。

「痛くないですか？　これからちょっとずつ動かしますけど、無理そうならやめますからすぐ言ってください」

かすれた声でそう言うと、千堂は目を閉じて細く長く息を吐いた。それを承諾の合図と受け取り、わずかに体を起こして恥骨を擦りつけるようにしてさらに奥へとねじ込む。

ぐ、とえづくような声がしてあごが上がり、胸が大げさなほど上下する。

ボディを打たれているときみたいな反応だ。苦しみから逃がれようとして徐々にずり上がっていく体を腕をつかんで引き戻し、がっしりした手首をベッドに強く押しつけて固定する。そのまま何度となく最奥を突くついに手足から力が抜けてだらりとシーツに沈んでしまう。もう声もない。すうすうという静かで切迫した呼吸だけが聞こえる。

たぶん、かなり辛いのだと思う。脱力するのは痛みを最小限にしようとする体の防衛反応なのだろうから、もう少し気遣った動きをした方がいいのだと思う。そのくらいことは分かるのに、どうしてもやめられない。ぎゅうぎゅうと締めつけてくる熱い粘膜が気持ちよくておかしくなりそうだ。開きっぱなしの口の端から涎が糸を引いて落ちている。目の前のものを貪りたくてたまらなくて、もうぜんぜん余裕がない。

知らず知らずのうちに目の色を変えて腰を振っている自分に気づいてはっと我に返り、しばらく動かずにいると物足りなくなつてまた腰を動かしていて、何度かそれを繰り返すころにはもう限界を超えていた。

顔を思い切りゆがめ、低くあえぎながら射精してしまふ。するとようやく頭が少し冷え、たちまち自己嫌悪で息苦しくなつた。挿入して繋がるたびにこうだ。思考も感覚もぐちゃぐちゃでわけが分からなくなつて、自分が気持ちよく出すことしか考えられなくなる。

今さら何を、と思いつつも身を乗り出し、ぐったりしている千堂の顔色をうかがう。

「すみ、ません。大丈夫ですか。怪我させてませんか。もしかまだ痛かったらこれ以上は、」
「自分だけスッカリして終わる気かいな」

その恨みがましい声にはほとんど力がなかった。胸にもものどにも力が入らないのだろう。「い、いえ、そういうわけじゃないですよ。でも辛そうじゃないですか。特にここが……」一度射精したくらいでは萎えない生殖器に貫かれたままの下腹をそつと撫でる。ふ、と鋭く息を吐く音がし、千堂は繋がったままのろのろと体を起こして噛みつくようにキスをしてきた。いまやほとんど体温の差のない粘膜同士が触れ合い、冷めかけた熱が蘇ってくる。向かい合ったままだと角度がつかなくて挿入感が浅い。

ゆるく腰を前後させながら夢中でキスを続け、ただでさえ吸い跡や噛み跡だらけの口元にさらに模様をつけ合っていく。顔などという隠せないところにこんなものをつけて生活して、人にどう思われるかなんてことはもはや頭から吹っ飛んでいる。

「……やっぱり、もう一回していいですか。今度はできるだけわけ分からなくならないように気をつけますから」

だんだん我慢できなくなってきたが、しりした腰を抱き寄せ、首すじにきつく吸いつきながらささやき声で懇願する。答えがぞっとするほど乱暴なキスで返ってくることはもう分かっていて、舌を噛まれながらも急いでコンドームを着け替える。押し倒して体を返してうつ伏せにしようとするとなぜだか激しい抵抗が返ってきたが、性欲と対抗心のせいかわきになってほとんど無理やり背を向けさせる。

血のにじんだガーゼの周囲と、背中と腰と尻に点々と飛んだ吸い跡。

たぶん数日は人前で着替えられない。自分と違って彼はそんなことを気にしないかもしれないが、少なくとも何事かと思われはするだろう。まだ何もしていないのに大げさなあえぎが漏れる。ぞくぞくする。何だろうこれ、と思う。

いてもたってもいられなくなって腰を上げさせ、力を込めて中に埋めていく。だいぶ馴染んで柔らかくなっているからさつきよりもずっと楽だ。全部収まってもしばらく動かずにいると焦れたように背中が反ったり丸くなったりを繰り返し、やがて発情中の猫のような声が聞こえてくる。いやらしさも可愛さも媚態もない、命の危険すら感じさせる獣の声。だがどこか弱さが混じった、人間らしい声。

「千堂さん、声大きいですよ。聞かれちゃいますよ。もうちょっと我慢してください」
そうは言いながら自分も声を抑えられない。

とうとうこらえられなくなって腰を動かし始め、すぐに思考がぐずぐずにとろけ出す。

熱くてきつくてうねる肉の間に挟まれていること自体に興奮して、その自意識を追いかけるようにやってきた本物の快楽に打ちのめされる。気を抜くとすぐにでもやってきそうな射精欲に耐えることに精一杯で、周囲に気を配る余裕などない。このままだと「今度はできるだけわけ分からなくならないように気をつけますから」というさっきの言葉が、ただやりたいがためについた大嘘になってしまう。

腰を振りながらも必死に正気を保ち、体の下にいる千堂に注意を移す。コンドームが散らばったシートに顔を伏せ、喉が痛みそうなほどひっきりなしにあえいでいる。うなじにも背中にもびしょりと汗をかいていて、腰を打ちつけるたびに肩甲骨が寄るから汗が川になって背すじを伝っている。右手がときどき自分の性器に伸びるがすぐに力が入らなくなってシートに落ちる。

んん、という甲高いうめき声が漏れ、深々と挿入したまま精液を迸らせる。我に返る間もなく素早く中から引き抜き、コンドームを替えてから一気に貫く。

その瞬間千堂は腕と背中にざあっと鳥肌を浮かべたが、声も出さずに耐えていた。それでも本格的に体に力が入らなくなったのか姿勢が崩れ、腰が落ちてきて、いつの間にか完全のしかかるような格好になっている。降参するように頭の上でまとまっている片腕を引っ張って姿勢を戻してから思い切り突くと、苦しそうな声とともに腰が震える。

そのときぎゅうう、と切なげに中が締まったから分かった。いっ、てる。たぶん。そう

思うが早いか急に腰の奥がざわざわし、まるで搾り取られるように吐精した。その瞬間体内をすさまじい力が通り抜けていくような激烈な快楽を感じ、つい泣きそうな声でわけの分らない言葉を口走ってしまう。

射精にともなう虚脱感と荒くなりすぎた呼吸がだいぶ収まってきたところで中から性器を引き抜き、ぴくりとも動かない千堂の隣に倒れ込む。そのついでに横顔をのぞき見るといきなり目が合って悲鳴が漏れそうになった。

「やっぱりお前の方がやかましいやないかい」

うう、とうなって両手で真っ赤な顔を隠す。やっぱり言われると思った。恥ずかしくて仕方ない。

「そつ、それはともかくですね、あの、体は大丈夫ですか？ いつも加減できなくてすみません。特にさつき無理に引っ張った腕、痛みませんか」

しかもつかんだのは背中の怪我のせいで動かしにくそうにしていた方の腕だ。

肩から腕にかけてそつと撫でると、千堂はその気遣わしげな愛撫を面倒くさそうに受け流しながらため息をついた。

「終わってからもいちいちしつこいうやっちゃん。どこも何ともあらへんわ」

「そ、そうですか。よかったです。だったらボクはそろそろ……」

と、そこまで言って凍りついた。

千堂の目が怖い。しかし視線は一步の方を向いてはいなくて、頭上の一点を見ている。「……? どうしました?」

ワンポが何も無い空間を見つめているとき、たいていこんな風に目が怖くなっている。うー、とうなる直前くらいの真剣な顔だ。ホテルや旅館には怪談が付きものだし、もしかしたら本当にそういう……?

「千、堂さん? 何見てるんですか。まさか幽、」

「見てみい」

彼が視線とあごで指した先には、サイドテーブルに置かれたデジタル時計があった。午前0時半。最寄り行きの最終電車は午前0時すぎ。

「うっわああああああ!」

ベッドから飛び起きてデジタル時計をつかみ、かくかくと揺らす。

どうしよう。本当にどうしよう。終電行っちゃったししょうがないかあ、今日はここに泊まるっ、では済まないのだ。明日は大口の団体予約が入っているから何が何でも戻っていないとならない。そう、何が何でも。

決意を固めてデジタル時計をそっと戻し、セックスの後始末をして下着を着始める。千堂は何が何やら、というあきれ顔でその様子を眺めていたが特に何も言っていない。さまざまな体液にまみれた裸体を拭われながらおとなしく寝をべっているだけだ。何ひとつ隠

さないその優雅さはさすがと言ってもいいほどで、もはやうらやましくもならない。

「では、ボクは帰ります。あわただしくてすみません」

「おう。せやけど電車どないすんねや。なくなっとんのやろ、終電」

「はい。でも、絶対朝までに戻らきゃならないので歩いて帰ります。タクシーに乗ればいいんですけど、終電行っただばかりの時間じゃつかまらないでしょうから」

「そやろな」

千堂はぼつりとそう言い、寝転がったまま一步の全身を上から下までじろじろと眺め回した。

「これから帰るんやったら何発かどついたらろか？」

「は？ 何言ってるんですか？ ボク何か気に障ることもしましたか？ というか、ボクらプロボクサーなんだからそういうのダメだって前から言ってるじゃないですか」

「アホか。そないなことでちやうわ。キサマの顔、おもしろい柄ついてるで。そのまま人前に出たら引かれんで」

すぐ隣にある鏡で自分の顔を確認する。

確かにこれは、面白い。吸い跡と歯型が芸術的な模様を作り出している。

「な？ どついた方がええやろ？」

「……もしかして、顔を殴って真っ赤に腫らせばごまかせるみたいなこと言ってるんです

か？　さすがにちょっとそれはバカじゃないかと……。だいいち千堂さんもひどいですよ、ボクと同じくらい」

「せやったら存分にどつき合うしかないわな」

「そ、そんなバカすぎることできませんよ！　幸いお互い齒型の方は薄いですから、一晩で消えると思います。問題はこの……あの……」

「キスマークいうんや」

「そ、そうですそうですそれです。それさえごまかせれば何とか。それも口元に集中してるわけですし何とかマスクで隠せるんじゃないかと思うんですが」

普通に会話しているだけに妙に息が乱れる。恥ずかしいからだ。顔にキスマークなんてそんな、遊び慣れている男だってしない。たぶん。

「なので、そういうわけで、ボクはこのまま帰ります。また試合見ます。応援してますから、頑張ってください。それじゃ」

「ちよう待て」

「今度は何ですか？」

若干うんざりした口調でそう答えると、コートの裾をつかまれていた。その手の甲も手首も腕もキスマークでいっぱい、申し訳なくて顔が赤らむ。

「脱げや」

「は？ いやいや、もう無理ですよ。そんなにしたら歩いて帰る元気なくなっちゃいます。千堂さんもさすがに限界でしょう？ 最後の方力入らなくなってたじゃないですか」

「上だけでええ。脱げ。やり残したことがあんねん」

欲情しすぎて苛立った声を間近でさんざん聞いたからこそ分かる。いまの彼は冷静だ。というより疲れている。

わけが分からないままコートとセーターを脱ぎ、ベッドに腰掛ける。裸の上半身は自分たちにとってはもはや商品であり道具だから、人目にさらすことにためらいはない。だが背中を向けさせられ、何をされるでもなくただじっと見つめられるのは、何だか少し落着かない。

「ま、まだですか？」

「おう。決めたで」

「決めた？ 何を？」

きゅぽ、と音がした。吸いついた状態から離れる音。少しだけエッチな音。しかし背を向けているから何が起きているのかは分からない。自分の指に吸いついて離れたにしては音が鋭すぎるから無機物だろう。変な性具が出てきたらどうしよう。

空気が動く。背後で千堂が身じろぎする気配がする。何か一点を狙う、猫のような視線を感じる。もう想像が追いつかなくてたまらなくなつて暴れ出しそうになったとき、背中

に冷たい感触が走った。すーっとする何かで濡れた先端が皮膚を滑っている。

「でけたで」

「……へっ?」

「さすがやな。キサマの背中中の筋肉、広うて描きやすいで」

「へっ? 何の話ですか?」

「鏡で見てみい」

おそるおそる鏡に背中を向け、おそるおそる振り返ってみる。するとそこには、十センチ四方ほどの入れ墨……ではなく、マジックで描かれた猫の顔があった。なかなか上手いし可愛い、そういう問題ではない。

「なっ、何ですかこれ!? やめてくださいよ人の体に落書きするの!」

「それはこっちのセリフや。キサマはもっとやったやろが!」

苦々しい顔で後ろを向き、まだら模様の背中を見せてきた。整然としているぶん、顔よりひどい。

「これじゃヒョウ柄やで。人に見られたら浪速の虎辞めなあかんやないか」

「す、すみません」

柄の問題ではないような気もするが、確かにヒョウ柄に似てはいる。

「キサマにも同じだけつけ返したる思たんやけどな、しつこいキサマと違ってこんなん、途

中で面倒になるやろ？　せやったら描いた方が早いと思てな」

「だからって背中に描くことないじゃないですか。油性マジックじゃしばらくジムで着替えられませんよ」

「それもこっちのセリフやがな」

「そ、そうですね。とりあえず、お互い試合近くなってよかったですね」

「そやな」

「というか、お互い試合近くないの分かってたからわざとガムテープ貼ったりして誘ってたんですね。でももうちょっとストレートに言ってもらえたら上着ダメにしなくてよかったですんじゃないかと思うんですけど」

服を着ながら独り言のようにそうつぶやいたとき、千堂はひどく不機嫌そうな様子で息を吐いた。

「……そやったな。それ言わなあかんと思とったわ」

「な、何です？」

すう、と軽く息を吸い込んだ音がするやいなや、いきなり胸ぐらをつかまれた。

「ひとつ言うておくで。アホか。わざととちゃうわ。何で一発やる程度のことですワイが気に入っとる上着にわざわざガムテープ貼らなあかんねん。急いでふすま直したときについてもうただけや」

「え、違うんですか？　じゃあ付箋は？」

「そないなもん買うたこともないで」

「じゃ、じゃあ途中で帰ろうとしたのは？　あれも違ったんですか？」

あわててそう言うとし少し気まずそうな顔になり、ぱっと手を離される。

「すみません、分かってなくて。駆け引きなんだと思ってました」

あさっての方向を向いたまま何も答えない千堂のその反応で何となく分かる。ガムテープと付箋はわざとではない。が、途中で帰ろうとしたのは、まあ、彼なりの駆け引きだったのだろう。

「あの、千堂さん？」

「何や」

千堂は無表情のままだ。以前だったら機嫌をそこねたかと思ってあたふたしていただろうが、ただ居心地が悪くてふてくされているだけだと分かっている。何とも思わない。

「次から何かこう……約束事項みたいなのを決めておきませんか。何をどうやっても結局こうなるなら時間を無駄にしちゃいますし、またお互い終電逃すことになるので」

返事がないので少しだけ焦る。

「もちろんこんなのダメだって分かっているんですよ？　だいたいボクらそういう関係ではないですし、お互いの家族にも紹介してませんし、あ、いや、してるけどこういうこ

としてるとは言っていないですし、あ、でも、付き合ってる人がいたとしても普通は家族にそこまで言わないのですか？　ボクには縁のない世界のことなのでよく分からないんですけど」

「どうでもええわそんなん。早よ先言わんかい」

ごほ、とわざとらしく咳をし、赤面をごまかす。

「そ、それでその……ダメだと分かっているのにも最後にはこうなっちゃうなら、あらかじめちゃんと色々決めておいた方がいいと思うんです。誘い方とか、断り方とか、いつも用意しておくものとか、やったらダメなこととか」

「ほんま真面目なやつちゃん、キサマは」

はああ、とだるそうにため息をつき、千堂はベッドにごろりと寝転がってヒョウ柄の胸を搔いた。

「そんなん全部その場の雰囲気でええやろが。いつでもでけるようにゴムだけ持ち歩いとったらええんや」

「それは、そうします。次からはお財布の中とかに入れておきます。でも全部その場の雰囲気なんてちょっといい加減すぎますよ。そういう生き方してるんですか」

むきになって振り向いたとたん、勢いがつきすぎて体の上に倒れ込んでしまう。あたたかい肌に顔が近づくと、汗と精液と自分の唾液の匂いがむっと漂ってくる。背すじに熱い

悪寒が走る。

「……あ、あの」

「な？」

「は？」

「その場の雰囲気であえやろ？」

服の上からきゅ、と硬くなりかけている股間をつかまれる。

彼は笑っていない。かといって怒っているのでもない。威圧しているのでもない。ほんの少し、やけばちなだけだ。

こっちももう色々とあきらめて着たばかりの服を脱ぎ、千堂の体をごろりと返してうつ伏せにし、背中全体にさらに濃くキスマークをつけていく。しばらく経ったらもっとまだらなヒョウ柄になることだろう。

肌に唇をつけるたびに千堂はああ、と低くあえぎ、もどかしげに背中をうねらせる。自分では見られない場所。ケアすることもできない場所。何かついていても気づかない場所。なのに雄弁に欲望を語るところ。そこにガムテープがついていたのを見たときから、結局こうなる気はしていた。

「あの、ひとつ提案があるんですが」

言葉を失っている最中だからもう返事がないのは分かっている。千堂は湿った枕に額を

くっつけ、獣欲に踊らされて素直にあえいでいる。

「これから先、どこかで偶然会ったりとかして、その……もし何かそういう気持ちになつてたら、背中に何かくっつけておくことにしませんか。お互いそれを見つけたらとりあえず無視はしないようにして、嫌なときは普通に拒んで、もしそういう感じになりそうなら、」
跳ね飛ばすようにして体を押し返され、無理やり後ろに倒されて首すじに噛みつかれる。とたんに突き抜けるような快楽と染み渡るような親しみが同時にわいてきて、甘ったれた悲鳴が漏れる。

「……そ、それじゃダメですよ。人前でそんなことして見られたら大変じゃないですか。そういうのじゃなくて、服着てるときくらいちゃんと言葉でやり取りしましょうってことです。ボクら人間同士なんですから」

そんなお行儀のいい当たり前のことを言いながらもぞくぞくするのが止められない。

もちろんこんなのダメだって分かってはいるんですよ？

分かってなどいない。

ぜんぜん分かっていない。こんなのただ欲望と快楽に流されているだけで何も生み出さない行為だと分かっているはずなのに何ひとつ分かっていないふりをして、人間同士がす

るには乱暴すぎるキスに喜んで応え続けている。

浅慮で暴力的で普通なところを、その自分の一番嫌いな部分を、誰かに引きずり出されなければ表になど出てこないはずの裏側を、自分では認識することすらできないのにいつも欲望をささやく半身を、彼にさらけ出して優しく激しく情け容赦なく受け入れてもらうために。

あとがき

最後まで読んでくださってありがとうございました。

原作が百巻まで無料公開していたときに沼落ちし、そのまま全巻購入に至ったのが二〇二一年八月のなかばでした。

千堂さんはララパルーザ後、お助けキャラ的なポジションに落ち着くのかと思いきや、友達として一步とものすごく仲良くなったり、ときにびっくりするような巨大感情をあらわにしたり、かといって敵対するなどの厄介な立ち位置にはならず、一步を観察する役割と自ら行動して一步を引っ張る役割を兼ねていたりして、初読のときはこの二人の関係をどう捉えていいのか分からなくて混乱したことをおぼえています。

読み返すたび、お互いに抱く関係性や感情が巻を重ねるごとに変わっていくことに感動し、その中でも最初からまったく変わらないものに触れるとワー！とし……というループにはまってしまい抜け出せなくなりました。読み返すのも毎週本誌を追うのも本当に楽しいです。

最初の話は一千というカップリングについて思ったことを全部ぶつける！くらいの気持ちで書いたのですが、原作を一卷から丁寧に読み返しているうちに色んな読み方ができると気づいて、その後は秘伝のタレのごとくあらたな解釈と幻覚を継ぎ足しつつ続きを書いていったらまるで一貫性のない話になってしまいました。これだけ書いても解釈が定まっていのですが、原作はまだまだ続くので楽しく追いかけてつじつくり考えていこうと思っています。

概要欄にも書きましたが、同じアース(?)であと一作書きたいのでこの書き下ろしとともに夏ぐらいに P i x i v にアップできたらなと思っています。メキシコ編で見た幻覚を自分なりに掘り下げてみたいので……。

新参者ゆえ原作やジャンルの歴史、ボクシングへの理解が浅かったり、つたなかったりしてお見苦しい点多かったと思いますが、お付き合いくださって大変感謝しております。機会があったらまた書きたいです。

ご縁があればまたいつか。

5.5. 2022 木曜日
twitter @ei_wk8
pixiv 2658206

よろしければ感想ください（お題箱に繋がります）

